

活動報告 2014

2015 年 8 月 31 日

東北大学東北アジア研究センター

活動報告 2014

2015年8月31日

巻頭言	1
2014 年度行事表	2
総合的自己評価	3
(1) 理念と目的	4
(2) 概念図	9
(3) 東北アジア研究センターの組織構成と運営	10
(4) 研究活動	17
(5) 教育活動	26
(6) 社会貢献活動	28
組織運営活動	33
(1) 人員配置と業務分担	34
(A) 教員等の配置、研究組織構成状況 (2014 年 3 月現在)	34
(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況	35
(C) 専任教員の最終出身大学院 (2014 年 3 月現在)	35
(D) 研究支援組織の整備・機能状況 (2014 年 3 月現在)	36
(E) 教育研究支援者受け入れ状況	36
(F) 客員教授 (海外) 受け入れ状況	36
(G) 兼務教員受け入れ状況 (2014 年 3 月現在)	43
(H) 非常勤講師受け入れ状況 (2014 年 3 月現在)	43
(I) 東北アジア研究センターフェロー	43
(J) その他研究員	44
(K) センター内委員会構成図	45
(L) 委員会名簿 (2013 年度)	46
(2) 研究資金	51
(A) 経費総額	51
(B) 歳出決算額	52
(C) 科研費の申請・採択状況	53
(D) 外部資金受入状況	54
研究活動	61
(1) プロジェクト研究ユニット	62
(A) 2014 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧	62
21 世紀における東アジア地域像の創出に関する研究ユニット	63
現代中国社会の変容に関わる文化人類学研究ユニット	66
20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	70
減災をめざした電波科学研究ユニット	73
東北アジア言語文化遺産研究ユニット	76
出版文化資料データベース研究ユニット	79
災害と地域文化遺産に関する応用人文科学研究ユニット	82
東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	85

(2) 共同研究	92
(A) 2014 年度センター共同研究課題一覧	92
中国における石炭消費削減対策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握 ...	93
PM2.5 を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略に関する研究 ...	97
東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究 ..	101
伝統的モンゴル語辞書の研究	105
華人の移動ととの「故郷」についての民族誌的研究—華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて ..	108
震災復興のための地中レーダーによる遺跡探査推進	113
新疆、満洲をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策	116
現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—「宗族」を通じた検証 ...	121
江戸時代から現代に通じる東北の歴史	125
日本列島の文化交渉史—経済と外交	130
東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用 ..	135
典籍文化遺産の研究	141
近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究 ...	146
東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究 ...	155
(B) 過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧	168
(3) 研究紹介発表	174
(4) 学術協定	177
(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化	177
(B) 共同ラボによる国際的研究支援	177
(5) 研究成果公開	179
(A) 既刊の刊行物	179
(B) 2014 年度に実施された公開講演、共同研究会等	189
(C) センターが作成し公開中または公開予定のデータベース	204
教員の研究活動	205
ロシア・シベリア研究分野	
寺山 恭輔	206
高倉 浩樹	211
塩谷 昌史	219
モンゴル・中央アジア研究分野	
栗林 均	223
岡 洋樹	227
柳田 賢二	233
中国研究分野	
磯部 彰	237
瀬川 昌久	242
明日香 壽川 (張 壽川)	247
上野 稔弘	251

日本・朝鮮半島研究分野	
石井 敦	254
地域生態系研究分野	
千葉 聡	259
鹿野 秀一	265
地球化学研究分野	
石渡 明	269
平野 直人	273
後藤 章夫	277
宮本 毅	281
環境情報科学研究分野	
工藤 純一	284
資源環境科学研究分野	
佐藤 源之	287
高橋 一徳	298
上廣歴史資料学研究部門	
荒武 賢一朗	304
高橋 陽一	309
友田 昌宏	314
研究支援部門	
金 賢貞	318
前田 しほ	321
町 澄秋	325
専属教員以外の研究者の研究活動	329
及川 高	330
麻田 雅文	330
ハイ セチンゴアー	331
ツォグバダラフ ガンツェツェグ	331
佐藤 憲行	332
稲澤 努	332
岡本 哲明	333
盧 向春	333
李善姫	333
佐々木 聡	334
トゥルムンフ オドントヤ	335
木村 一輝	335
飯塚 泰	336
コヤマ クリスチャン ナオヒデ	336

巻頭言

1996年5月に設立された東北アジア研究センターは、今年が20年目になる。当初の目的は、東北アジア地域に関する学際的な研究を実施するとともに、国際的な研究者ネットワークの構築、研究交流の推進、そして研究成果の社会への還元であった。

20年を振り返る時、当初我々が捉えたように、東北アジアの世界的な重要性はますます高まっていると言ってよいと思われる。これまで本センターの研究者は、東北アジアの多様な研究課題に対応するために、組織の機動性を増し、外部資金をも導入した多様な研究活動を実施してきている。プロジェクト研究ユニットは、そのような機動的な研究活動を展開する組織的基盤として設けられたもので、学外の研究者の参加による共同研究を実施して新規性の高いユニークな研究成果が上がっている。

学際的研究に関して言えば、研究ユニットの研究の多くが、何らかの形で異分野連携の形をとっており、文系・理系などの分野を超えた研究プロジェクトの組み立ては日常化している。毎月のセンター全体会議後に行われる談話会や年度末の研究発表会での研究紹介・成果報告を通じて、異分野の研究はすでに耳慣れたものとなっている。

研究交流においても、個々の教員が国際的な活動を展開するだけでなく、センターとしても、とくに東北アジア諸国の研究機関・研究者との協力を進めてきた。創設時に比べる時、国際的ネットワークの構築は着実に進展している。とくに研究対象である東北アジア諸国の研究者との連携を積極的に進めてきたことは、本センターの設立趣旨に沿うものであるが、今後はこれを基盤としたさらなるグローバルな展開が求められる。また国内で東北アジアの研究を進める組織や研究者との連携による拠点的功能の強化が求められている。

本センターが当初から課題としてきた社会貢献については、毎年の公開講演会やシンポジウムの一般公開などのアウトリーチ活動だけでなく、より直接的な社会貢献を目的とした研究プロジェクトが進められている。とくに東日本大震災からの復興に関わっては、被災地域によりそい、地方自治体などとも連携した活動を行った。上廣歴史資料学研究部門は、宮城県の地域住民の中で資料保全、講演、セミナーなど活発な活動を行った。これらも本センターのユニークな特色と言える。

毎年刊行される活動報告を読むと、センター教員の多様な研究活動が毎年活発化し、多くの成果が出ていることが知られよう。教員諸氏のさらなる活躍を期待したい。

2015年8月
センター長 岡 洋樹

2014 年度行事表

期 日	行 事
2014 年 4 月 28 日	センター運営会議
2014 年 5 月 26 日	センター運営会議
2014 年 6 月 30 日	センター運営会議
2014 年 7 月 28 日	センター運営会議
2014 年 9 月 29 日	センター運営会議
2014 年 10 月 23 日	部局評価総長ヒアリング
2014 年 10 月 27 日	センター運営会議
2014 年 11 月 7 日	第 7 回学生研究交流会
2014 年 11 月 25 日	センター運営会議
2014 年 12 月 6 日	センター公開講演会「『東北アジアの自然誌』- 地球・自然のダイナミクス -」
2014 年 12 月 22 日	センター運営会議
2015 年 1 月 26 日	センター運営会議
2015 年 2 月 14 日	センターシンポジウム「東アジアの世界遺産と文化資源」
2015 年 2 月 23 日	センター運営会議
2015 年 3 月 23 日	センター運営会議
2015 年 3 月 24 日	センター 2014 年度研究成果報告会

総合的自己評価

(1) 理念と目的

東北アジア研究センターは、ロシアのアジア部分（シベリア・極東）、中国、モンゴル、朝鮮半島、日本を「東北アジア地域」として捉え、文系・理系の諸分野の連携による学際的な地域研究を行うことを目的として設立された地域研究のセンターである。

昨年度、東北大学はグローバル・ビジョンを策定した。これに含まれる東北アジア研究センターは以下のようなビジョンを掲げている。

【部局のミッション（基本理念・使命）】

○東北アジア研究センターは、文系・理系の研究者を擁する地域研究のセンターとして、ロシアのシベリア・極東、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本からなる東北アジアに関する世界最高水準の研究を東北アジア地域諸国との国際的連携の下に創造し、これを通じて地域理解の増進と課題の解決に貢献します。

20 世紀末葉における冷戦終了後の国際情勢の展開は、東北アジア研究の重要性を示している。ソ連の解体による社会主義圏の消滅と、中国の改革・開放政策の進展により、世界はアメリカを一極とするグローバル化に向かうと考えられた。日本と中国との経済関係の深まりと、ロシアとの関係改善への期待は、わが国が直接隣接するこの地域が、近い将来においてわが国にとって重要なものになるであろうことを示していた。しかし日・中・韓の関係が必ずしも良好ではなく、ロシアとの国境問題の解決の見通しも立たない現状は、この期待を裏切ると同時に、東北アジアを繞る課題が、わが国にとって引き続き重要なものであることをも示すことになった。特に中国の台頭は、21 世紀における国際環境に大きな再編をもたらす可能性をもち、かつそれが中露の安定した地政学的関係の上に成り立っていることを考える時、ユーラシア東部の大陸部の動向と事態を理解することが、21 世紀のわが国の進路に本質的な意味をもつことが明らかになりつつある。とくに西側先進国＝The West を中心とする世界の秩序再編をめざすかに見える中国の戦略的アプローチは、事態がすでに東北アジアという空間に収まらない広がりを持つことを示している。明治以来「西側」の一員たることを国家目標としたわが国は、敗戦を越えて冷戦構造の中で「先進国」としての地位を再び獲得する一方で、「東アジア共同体」論に見られるように、「アジア」へのこだわりをも保ち続けてきた。このようなわが国が持つ「両属性」の意識が、一方で「西側」からの新たな「開国」を求めるグローバル化の要求と、中露による地域秩序の構築と世界秩序再編への挑戦という事態に直面しつつある現在、将来像の獲得を容易ならざるものとしているように思われる。わが国が東北アジアで直面している歴史認識・北朝鮮・拉致問題・国境問題などの課題は、ここに至ってローカルな枠を越えた全球的な課題の一部となりつつあるのであり、構造変動の震源は中露を中心とし、わが国が隣接する東北アジアなのである。この変動を東

北アジア的課題として捉えれば、わが国はその課題の一部を構成している。

東北アジア研究センターは、伝統的に「環日本海」問題を指す北東アジア地域問題を、ユーラシア大陸の東半を含むより広い視野の中で位置づけ、あらたな地域概念としての「東北アジア」に関する研究の必要性を主張してきた。その課題としての意義は、今日ますます増大しているといえるのではないだろうか。

学術的な面を見ると、中国やロシアはかつてのイデオロギーの拘束を解き、膨大な資本を投入しながら地域に関わる研究を進めるアカデミアを構築してきた。いまや東北アジア地域に関する研究は、「先進国」たる日本の一方的な「途上国」研究ではありえず、東北アジア諸国に育つ研究者との対話や協働による地域理解の醸成が必須の課題である。それゆえ東北アジア研究センターは、地域の研究者たちとの研究協力の態勢を構築しながら、地域の新たな諸課題に関する理解の共有を図らなければならないのである。

しかし地域が共有すべき課題は多岐にわたり、個別の部局のみが全ての課題に対応することができないことは明らかである。ここに国内の研究機関との連携をも確保した、全国的な東北アジア研究の拠点として機能することが求められるのである。

【機能強化に向けた取組方針（～ 2017 年度）】

○私たちは、文理連携などの学際的研究による東北アジアの総合的理解という部局の基本理念を更に継承・発展させるため、国内や東北アジア諸国の研究機関・研究者と一層の連携をしつつ、文理諸分野の研究成果を踏まえた東北アジア地域理解を獲得するための研究を追求することを目指します。

○私たちは、「ワールドクラスへの飛躍」に不可欠な国際的研究協力の環境整備と諸言語による研究成果発信を可能とする支援体制の確立に取り組むとともに、東北アジア地域研究という特色ある分野において、研究の国際化への支援を強力に推進します。

地域研究が追求するのは、物理学や哲学のような普遍的な知の獲得でもないし、工学のような汎用性のある技術の発明でもない。それは、対象とする地域がもつ特殊性・個性への現代的関心であり、地域理解への実用的な知見の獲得である。そこでは諸学は、地域の特殊性を理解するための方法として用いられるのである。ここに地域研究の応用研究としての本質がある。一方で地域の課題は多様であり、学術研究の様々な分野の連携・協力を必要とする。それが地域研究が必然的に学際的たるべき理由である。

同時に、現代の地域研究は、かつての植民地研究や敵国研究とは異なり、地域社会との協働による地域理解の獲得をめざす。協働すべきは、地域住民のコミュニティーであり、また地域で活動する現地研究者たちである。だから地域研究に従事する研究者は、地域の中でフィールド調査を行うばかりでなく、その知見を地域住民や地域の研究者に還元し、対話を行うことによって、その地域に関わる理解を紡ぎ出していく。

東北アジア地域研究においても、第一に要請されるのは、東北アジア諸国の現地研究

者との研究協力ネットワークの構築と、これを通じた研究交流の推進である。東北アジア研究センターが、これまでロシア、モンゴル、中国、韓国の現地研究機関との協定締結、学術交流を積極的に推進してきたのは、このような地域研究がもつ関心の在り方に基づいている。特に東北アジアの諸国は、優れた研究能力をもつ研究者・研究機関を有しており、現地での研究協力を通じて、豊かで双方向的な地域理解の獲得が期待される。ロシアは、伝統的に世界的な東洋研究の中心地の一つであるとともに、シベリア・極東に関する研究も、自国研究として膨大な蓄積をもつ。中国も、文化大革命による損失を克服し、世界トップクラスの研究を生み出しており、東北アジアに関する研究も例外ではない。韓国においてもアジア研究と自国の研究は多くの成果を生み出している。現地研究機関との協力は、わが国も含めて、外国研究としてのアジア研究ばかりでなく、各国の自国研究の諸領域をも包括した研究成果の活用が可能であるという意味で、膨大な研究資源を有している。

一方で、国内においても、東北アジア研究に従事する研究機関・研究者との連携が追求されなければならない。現在国内には、富山大学極東地域研究センターや島根県立大学北東アジア地域研究センターなど、東北アジアを研究対象とする組織が活動を展開している。東北アジア研究センターは、これらの研究組織と学術交流協定を締結し、研究協力を進めてきた。今後国内での研究協力態勢の拡充は重要な課題となるであろう。

また欧米においても、中国の台頭やロシアの問題が、東北アジアへの関心を集めている。欧米における東北アジア研究は、現在なお必ずしも極東研究を枠を脱することができていないように思われるが、今後研究交流を構築する必要は明らかである。

東北アジア地域の研究資源は、それぞれの国の言語によって蓄積されており、英語のような国際言語の役割はいまだ限定的である。それゆえ東北アジア研究を現地研究者との協働によって遂行するためには、言語的多性の確保が必要となる。このことは、東北アジア研究が、現地においては自国研究にほかならないことの必然的な結果でもある。東北アジア研究センターのスタッフは、英語ばかりでなく、ロシア語・中国語・韓国語・モンゴル語などの現地言語に通じることが求められる。言語的多性の確保は、現地研究者との日常的な交流に大きな力を発揮している。

【重点戦略・展開施策】

1. 基礎研究及び異分野連携による東北アジア研究の推進と新たな研究フロンティア開拓

諸学の基礎研究を踏まえた異分野の連携による東北アジア地域研究の国際的展開と学術研究を通じた社会貢献の推進により、東北アジア地域研究から新たな研究フロンティアを開拓します。

上述したように、地域研究は、諸学の基礎研究の成果を、分野横断的に動員しつつ、

現地研究者や地域社会との協働により地域理解の獲得を目指す学の在り方である。東北アジア地域研究は、東北アジア諸国の研究機関との協働によって得られた学知を社会に還元することを通じて社会に貢献したいと考えている。

東北アジア地域は、自然環境・社会文化・歴史にわたる多様な課題を有している。このような地域研究課題の多様性は、個々の課題に応じた多様な学術分野の知見の動員と、その総合を要請する。基礎研究と呼ばれる諸学問領域は、確立された方法論と視圏を有するがゆえに、方法論のレベルでの融合の可能性は限られている。しかし自然生態の在り方が地域の人間社会の生活に対応した様態を生み出すように、個々の学術分野が研究する対象は相互に深く関わりあうものである。それゆえ、理系・文系の個別基礎研究領域における知見は、一段高いところで総合されることによってはじめて文理連携的な地域理解を導出することを可能にするのである。地域研究は、著しい学術の専門化を直ちに排するのではなく、その知見を統合することによって新たな地域理解を生み出そうとするものである。地域研究の拠点とは、これを可能にする場でなければならないと考える。

地域研究が求める国際的な学術連携においては、地域の現地研究者の存在が重視されなければならない。地域研究が学の普遍性においてではなく、地域の特殊性にその根拠を置く以上、地域諸国の研究成果の活用や研究者との対話は不可欠の要素である。東北アジア地域の研究者が地域に対してもつ理解は、欧米の研究者とは異なる視点からなされる。東北アジア研究センターは、地域の研究機関・研究者との研究交流を通じて単なる「外国研究」とは異なる地域研究の実践を行う場を共有しつつ、さらには欧米の研究者との協力も確保したい。それは東北アジア研究の新たなフロンティアを構築する作業である。

東北アジア研究センターは、スタッフによる機動的な研究展開を可能とするデバイスとして、プロジェクト研究部門を設置している。これは基礎研究部門に所属するスタッフがプロジェクト研究ユニットを組織し、外部資金を用いた時限的研究プロジェクトを推進するための組織的媒体である。各ユニットはセンター外の実証研究の参加による共同研究を実施することで、学際的な、あるいは国際的な研究を遂行するしかけとなっている。

2. 東北アジア研究における国際的な頭脳循環のハブとしての活動

東北アジア地域の研究機関・研究者との学術ネットワークの拡充による研究連携と成果の発信を通じて、開かれた国際的共同研究・研究交流を推進します。

3. 国・地方自治体との連携協力による社会貢献的研究の推進

歴史資料保全活動やレーダ技術を用いた遺跡探査・防災研究、東日本大震災後の無形

文化財の調査研究等を「遺産研究 (Heritage studies)」として位置付け、社会貢献的研究の一層の推進を図ります。

地域を研究しようとする我々は、海外においては地域の研究者との協働を目指すのと同様に、国内を対象とした場合には、地域住民のコミュニティーとの協働による研究や、成果の還元に向かう。東北アジア研究センターが掲げる社会貢献的研究とは、研究成果の社会還元のためのアウトリーチ活動にとどまらず、研究自体を地域との協働において遂行することを意味しており、一般の地域研究機関に見られない、東日本大震災被災地仙台に所在する本センターの特色となっている。現在センターでは、宮城県内の地域との協力による歴史資料保全活動や、レーダ技術を用いた減災研究、被災地の無形文化財調査に取り組んでいるが、これらはその例である。これらの研究は、地域の文化遺産の保全継承を目的とすることから、「遺産研究」と呼ぶ研究領域となっている。社会貢献的研究に注力するのは、地域との協働という意味においてばかりでなく、地域研究本来の実用的性格を模索する意味も有している。また東北アジア諸国の文化遺産の研究においても、成果のデータベース化とその公開による社会への還元を行っている。

4. 東北アジア研究を通じた知縁コミュニティ形成・展開

公開講演会やリベラルアーツ・サロン、東北アジア学術交流懇話会等を通じて、東北アジア研究の知縁コミュニティの形成・拡大を進め、学内でも特色ある社会連携の領域を創出します。

東北アジア研究センターは、研究活動の成果をアウトリーチ活動によって社会に還元し、知縁コミュニティを形成することも注力している。5月と12月に東北アジア学術交流懇話会との共催による公開講演会を開催するとともに、毎年春には東北アジア研究センター・シンポジウムを開催して市民にも公開で学術的課題を討論している。東北アジアは、今日極めて関心を集めている地域であり、市民にこの地域に関する正確な理解を提供することは、本センターの役割である。また歴史資料保全活動や地域での古文書セミナーなどの活動は、日本をテーマとした地域への学術的知の還元活動である。

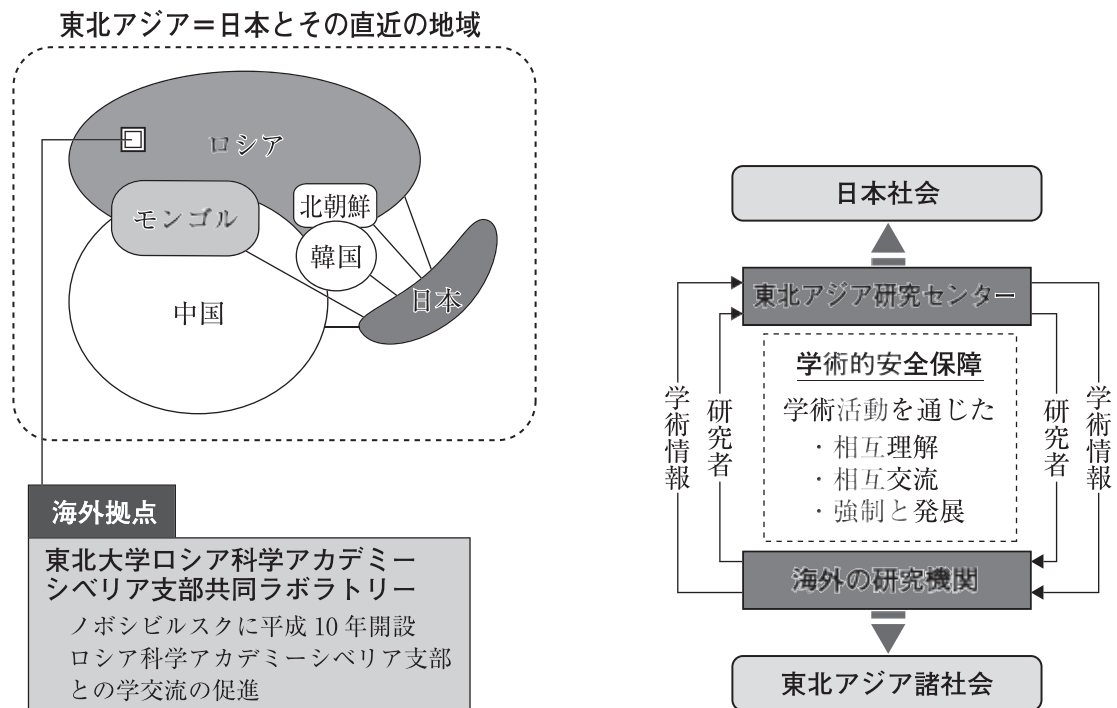
5. 国際発進力の強化

機関誌『東北アジア研究』や専書、読本などの刊行、ホームページでの研究情報の多言語による発信を通じて、東北アジア研究センターの国際発進力の強化を進めます。

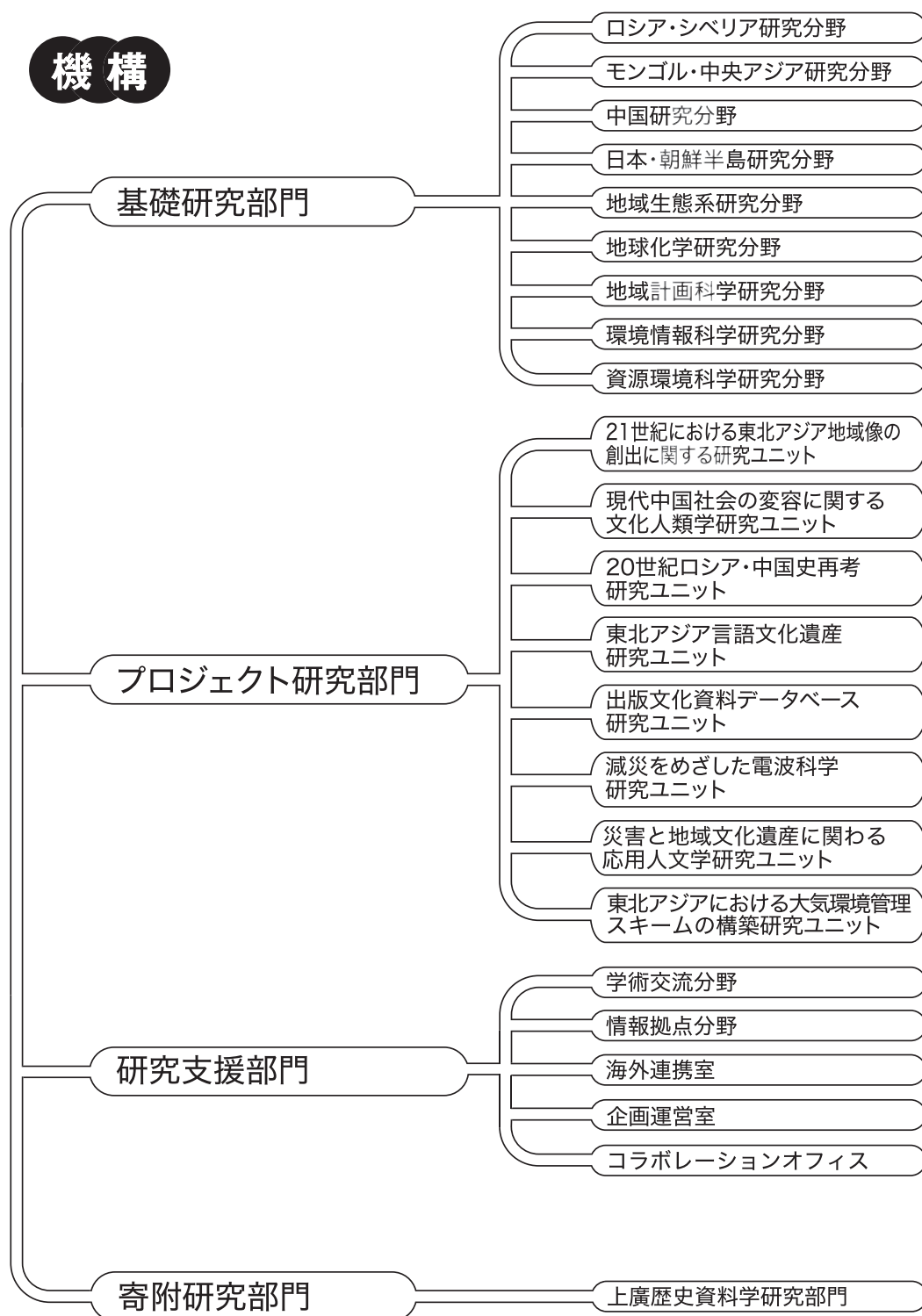
東北アジア研究センターは、研究活動の状況や成果を、英語を含む多言語を媒体として発信することを目指す。成果の発信において英語は不可欠のツールであるが、同時に東北アジア地域との交流の推進において、地域の諸言語による発信も重要な役割を果たしている。特に東北アジア諸国は、ロシア語を共通語とした旧ソ連圏や、膨大な話者人口を有する中国語を大言語としているばかりでなく、中国や韓国・モンゴルはわが国

と深い交流を持つ国である。我々は、研究の成果の刊行や、インターネット上での発信に当たって、英語とともに、これら東北アジア言語の活用を考えたい。

(2) 概念図



(3) 東北アジア研究センターの組織構成と運営



組織構成

東北アジア研究センターは、9つの分野からなる基礎研究部門と、センターのスタッフが組織する時限的な研究組織としてのプロジェクト研究部門、外国人研究員（客員教授・准教授）ポストと研究支援に関わるセクションを置いた研究支援部門、寄附研究部門である上廣歴史資料学研究部門（上廣倫理財団）が設置されている。

基礎研究部門は、「ロシア・シベリア」「モンゴル・中央アジア」「中国」「日本・朝鮮半島」の四つの分野に文系の教員が配置されており、「地域生態系」「地球化学」「地域計画科学」「環境情報科学」「資源環境科学」の5分野に理系分野の教員が配置されている。

2006年に設置されたプロジェクト研究部門は、東北アジアに関わる多様な研究を、内外の研究者との共同研究によって遂行する組織的デバイスとして機能している。各ユニットは、科研費などの外部資金を獲得しながら、学内外の研究者を組織した共同研究を実施することで、個別テーマでの研究拠点機能を果たしている。平成26年度には、9ユニットが活動を行っている（1ユニットは研究代表者の転出による廃止）。ユニットを立ち上げた場合、スタッフの研究は主にユニットで展開されるが、ユニットを持たないスタッフは、基礎研究部門の各分野で研究を展開している。

各ユニットでは、ユニットの目的に即した研究プロジェクトを組織し、センター外の研究者との共同研究を行っている。これらの共同研究のあるものは、科研費などの外部資金によって運営されており、ユニットの研究成果を具体化していると言える。平成26年度中に実施された14件の共同研究へのセンター外からの参加者は65人となり、本センターの拠点機能を示している。

平成26年度に活動を展開したプロジェクト研究ユニット及びユニットが実施している共同研究は以下のごとくである。

21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット（代表：岡洋樹教授）

「東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」（2011-2014年度）

現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット（代表：瀬川昌久教授）

「現代中国社会の返要とその研究視座の変遷——「宗族」を通じた検証」（2013-2014年度）

20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット（代表：寺山恭輔教授）

「新疆、満洲をめぐる20世紀前半のソ連、中国の政策」（2013-2015年度）

減災をめざした電波科学研究ユニット（代表：佐藤源之教授）

「震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進」（2013-2015年度）

東北アジア言語文化遺産研究ユニット（代表：栗林均教授）

「伝統的モンゴル語辞書の研究」（2014-2016年度）

出版文化資料データベース研究ユニット（代表：磯部彰教授）

「典籍文化遺産の研究」(2013-2015 年度)

災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット (代表: 高倉浩樹教授)

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」(2013-2015 年度)

「東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究」(2014-2016 年度)

東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット (代表: 明日香壽川教授)

「中国における石炭消費削減策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性」(2014-2019 年度)

「PM2.5 を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略に関する研究」(2014-2016 年度)

東北アジアにおけるジオパークの可能性の研究ユニット (代表: 石渡明教授) (代表の退職により廃止)

その他の共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」(2013-2015 年度) (モンゴル・中央アジア研究分野)

「日本列島の文化交渉史——経済と外交」(2013-2014 年度) (上廣歴史資料学研究部門)

「江戸時代から現代に通じる東北の歴史」(2013-2014 年度) (上廣歴史資料学研究部門)

センター内部で分配される研究経費は、教員個々に配分される研究費とユニット・共同研究への傾斜配分経費から成る。また教育研究支援者や RA 経費の支給も、ユニットを対象としており、基礎研究部門の分野を単位とした研究費や支援人員の配分は行っていない。このことは、基礎研究部門の分野の教員がユニットや共同研究を組織して研究を行う上で槓桿となっている。この結果センターの教員の活動の重心は、次第にプロジェクト研究部門の諸ユニットに移りつつあり、その分基礎研究部門の各分野はバーチャルなものとなる傾向があるように思われる。研究がユニットを場として行われることは、センターのスタッフによる研究の固定化を防ぎ、研究期間の終了により新たな課題設定を行うことで研究の流動化・機動性を高める効果を生み出している。

センター長裁量経費によるユニットへの教育研究支援者や RA の配属、支援では、平成 26 年度は、教育研究支援者 7 名を雇用した。これらの措置は、学際的・国際的な機動的活動を行い、拠点機能を果たす仕掛けとしてのユニットの構築を進めるための傾斜的予算措置にほかならない。

各ユニットは中間年度と最終年度に外部評価を受けることとしており、一方共同研究

についても、センター全体で外部の研究者に共同研究モニターを依頼し、評価を受けている。評価結果はセンターの運営を検討する材料となっている。

また上廣歴史資料学研究部門は、上廣倫理財団の寄附により、5年間の期間で設置された寄附研究部門である。教授（兼務）1、准教授1、助教2から成る。この部門は、「歴史研究に関する学識や技能を活かし、歴史資料保全・地域協力・学術研究を柱とした各種事業を展開」することをミッションとして設置されたものである。本部門は学内諸部局や地域住民との協力を基盤として、講演会やセミナーなどの活動を積極的に展開しており、本センターの特色ある研究ユニットとなっている。

他部局に所属する研究者との協力のために、兼務教員を採用している。平成26年度は、文学研究科3名、教育学研究科1名、理学研究科1名、災害科学国際研究所1名の兼務教員が在籍した。

研究支援部門には、外国人研究員のポスト「学術交流分野」が配置されている。このポストには、海外から指導的研究者が招聘され、1ヶ月から4ヶ月間滞在して研究協力を行う、滞在型の制度である。平成26年度は、モンゴル(1名)、ロシア(4名)、中国(1名)、シンガポール(1名)の七名の研究者が招聘されている。センター創設以来外国人研究員として招聘された海外の研究者は104名にのぼる。

またセンターに在籍する研究員として、日本学術振興会特別研究員と専門研究員がある。平成26年度には学振特別研究員2名が在籍した。ポスドクを対象とした専門研究員の制度を設けている。平成26年度には、4名が在籍した。

また海外連携室が併設され、国際交流委員長の下に外国人助教1名が配置され、外国人研究員招聘手続きや滞在情報の英語での提供、センター内の外国人留学生（研究所等研究生）への英語による情報提供を担っている。

平成26年度には、研究支援部門の企画運営室が設置され、総務担当副センター長の下で特任助教(URA)2名を雇用し、センターの記念企画などの実施に当たっている。

寄附部門である上廣歴史資料学研究部門は、2012年4月に5年間の期間で設置されたもので、昨年度は3年目であった。上廣倫理財団からは中間評価を受け、良好な評価をいただいている。本部門は、教授1（非常勤・客員教授）、准教授（専任）1、助教2（専任）の4人で構成されている。運営は、東北アジア研究センター長を委員長とする運営委員会によって行われているが、日条の活動について意見交換をする場として諮問委員会を設置している。これには、文学研究科・災害科学国際研究所・仙台市博物館など活動に協力している組織から委員が参加している。同部門は、歴史資料保全活動や地域での講演・ワークショップの開催、海外の大学でのくずし字ワークショップの開催など、活発な活動を行っている。

東北アジア研究の拠点的功能：公募型共同研究

センターの各分野・ユニットでは共同研究が組織され、研究活動が行われている。

東北アジアに関する多様な課題に対応し、かつ全国的な拠点としての機能を果たすために、本センターでは共同研究の公募を行っている。この公募は、センター外の研究者がチームを組んで申請し、センター内のスタッフを世話教員として実施されるもので、「(A) 環境問題と自然災害」「(B) 資源・エネルギーと国際関係」「(C) 移民・物流・文化交流の動態」「(D) 自然・文化遺産の保全と継承」「(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治」の五つの研究領域を設定して募集される。平成 25 年度までに 12 件の採択実績があり、平成 26 年度は 4 件が採択されている。公募型共同研究企画に対しては、1 件 30 万円の研究資金が支給される。各企画は研究会を開催するとともに、年度末のセンター研究成果報告会で研究成果の報告を行うことが義務づけられている。その成果の一部は、東北アジア研究センターの刊行物としても出版されている。公募共同研究は、センター外の研究者による東北アジア研究を推進するものであり、本センターの研究領域の多様化・拡大という点で意義がある。平成 26 年度に実施された公募型共同研究は以下の通り。

「日本と韓国における村落の歴史と景観」（類型 D：渡辺尚志一橋大学教授）

「家・空間における食実践に関する文化人類学的研究——社会関係を開閉するという視点から」（類型 C：三浦哲也育英短期大学准教授）

「聖書翻訳を通して見るモンゴル宗教文化交流史」（類型 C：滝澤克彦長崎大学准教授）

「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」（類型 C：風戸真理北星学園大学短期大学部専任講師）

コラボレーション・オフィス

コラボレーション・オフィスは、平成 21 年に設置された、文系部局が行う研究活動支援のための組織である。文系七部局（文学研究科・経済学研究科・法学研究科・教育学研究科・国際文化研究科・東北アジア研究センター・教育情報学研究部・教育部）が組織する文系部局長協議会の下に設置されたコラボレーション・オフィス運営委員会によって運営されている。オフィスの経費は、理事提案による総長裁量経費と東北アジア研究センターの経費でまかなわれている。リベラルアーツ・サロンの開催支援、文系諸部局の学術企画の支援、東北アジア研究センターの広報、出版への支援を主業務としており、職員 2 名が雇用されている。

運営体制

センターの運営は、センター長を長として、2 名の副センター長、2 名の総務委員、事務長から成る執行会議が日常的な運営を行っている。執行会議委員は、それぞれセン

ター内の委員会を所掌することによって、さまざまな分野の業務の円滑な遂行を図っている。各委員会の所掌状況は、毎月開催される執行会議において担当の総務委員から報告がなされ、運営状況や、問題点の確認を行っている。また教育研究支援者、専門研究員の人事や研究生の入学・退学についても執行会議で決定が行われる。

【センター全体会議】センター全体会議は、センターの専任教員、教育研究支援者、専門研究員、研究支援部門、コラボレーション・オフィス、図書室のスタッフ全員が出席する会議であり、執行会議の決定事項、センター長報告による部局長連絡会議などの全学情報の周知、外部資金などの受入に関する報告、センター内委員会報告、学内委員会の委員からの報告が行われる。

【運営会議】運営会議は、専任の教授・准教授により構成され、センターの人事、予算などの重要事項に関する審議が行われる。諸事項は、運営会議の議を経て、センター長によって決定される。

【各種委員会】センターには、執行会議メンバーが分掌する各種の委員会が設置されている。この内、総務担当副センター長の下に将来計画委員会・教務委員会、研究戦略担当副センター長の下に研究推進委員会、国際交流委員会が置かれ、情報担当総務委員の下に広報情報委員会、評価データ委員会、研究支援担当総務委員の下に編集出版委員会、図書資料委員会が設置されている。センター長直轄の委員会として、コンプライアンス委員会、ハラスメント防止対策委員会、ネットワーク委員会、片平まつり実行委員会、地域研究コンソーシアム委員会、北東アジア研究交流ネットワーク委員会、公開講演会・シンポジウム企画委員会が置かれている。また文学研究科等安全衛生委員会が機能している。上廣歴史資料学研究部門の運営のために、センター長を委員長とする同部門委員会が設置されているほか、同部門の日常的な活動について意見交換を行う運営諮問委員会が活動している。各委員会は、必要に応じて毎月の執行会議に活動を報告するとともに、センター全体会議でセンター内に報告・周知している。

東北アジア研究センターの専任教員は 23 名であるが、その内訳は東北大学大学院出身者 7 名、国内外の大学院出身者 16 名となっている。

東北アジア研究センターの資金

東北アジア研究センターの平成 26 年度の経費は、大学運営資金 4 億 7 百万円、外部資金 1 億 1 千 3 百万円で、競争的資金の絞める割合は 22% である。外部資金の獲得に当たっては、センターの教員に対して科研費への応募を求めている。平成 26 年度の科研費申請率は 209% となっている。採択実績は 54.2% で、一人当たりの獲得額は 186 万円である。申請率・採択率はほぼ横ばいであるが、獲得額は減少している。科研費以外の外部資金では民間等との共同研究・受託研究・受託事業・寄附金・学術指導合わせて 7209 万円となっている。

研究協力態勢

国際的交流

東北アジア研究センターは国内外の研究組織と学術交流協定を締結している。全学協定では、ロシア科学アカデミーシベリア支部、モンゴル科学アカデミー、中国吉林大学、モンゴル科学技術大学、ロシア・ノボシビルスク大学、イタリア・フィレンツェ大学との大学間学術交流協定の世話部局である。部局としては、モンゴル科学技術大学ジオサイエンス・センター、中国広東省民族宗教研究院、ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所、同極東支部経済研究所、中国内蒙古師範大学蒙古学学院、同旅游学院、内蒙古大学蒙古学学院、中央民族大学蒙古語文学系と部局間学術交流協定を締結して交流を行っている。

ロシアに関しては、全学のロシア交流推進室に副室長と委員を出し、同室との連携でロシアとの交流事業を行っている。とくにノボシビルスク大学人文学部との間では 2009 年から日本アジア講座を実施し、本センター教員を含む本学の日本関係の研究者を同大に派遣して、日本語・日本文化を学ぶ学生を対象とするレクチャーを実施している。またロシア交流推進室と連携して平成 25 年からノボシビルスク大学教員を招聘し、本学で日露ワークショップを開催している。平成 26 年 11 月に開かれた日露ワークショップは、「日本文化を教える：ロシアと日本の日本研究者の対話」と題するものであった。また平成 27 年 3 月に開催された人文フォーラムの企画運営にも協力している。

国内交流

国内では、伊達市噴火湾文化研究所、北海道立北方民族博物館、島根県立大学北東アジア地域研究センター、富山大学極東地域研究センター、宮城県栗原市と部局間学術交流協定を締結して共同研究などの研究協力を行っている。これらの研究機関とは、科研費などによる共同研究の実施、講演会の相互開催などによる交流を行っている。

全国的組織協力

本センターは、全国附置研究所・センター長会議第 3 部会に所属しているほか、全国的な研究コンソーシアムとして、2004 年に設立され、全国の 99 組織が加盟する地域研究コンソーシアム（JCAS）は設立当初から幹事組織に名を列ね、センター長は理事となり、センター内では地域研究コンソーシアム委員会を設置して対応している。JCAS の部会では、平成 26 年度は研究企画部会に部会長を出している。また北東アジア研究交流ネットワーク（NEASE-Net）では、センター長が副代表幹事を務め、本センターは広報委員会を担当しており、センターでは北東アジア研究交流ネットワーク委員会を設置して対応している。

研究活動の発信・広報

本センターの活動は、随時ホームページ (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp>) 上で発信している。毎年度の『活動報告』や『外部評価報告書』、センター『要覧』はホームページ上で全文が閲覧可能となっている。

広報情報委員会が編集を担当する『東北アジア研究センター・ニューズレター』は、平成 26 年度に 61、62、63、64 号が刊行され、やはりホームページ上で公開している (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/handbook.html#02>)。

センターや各スタッフが開催する研究集会・講演会・シンポジウムに関する情報も、随時ホームページ上で発信されている。

機関誌「東北アジア研究」では、本年度第 19 号が刊行され、論文 6 件、書評 10 件が掲載された。論文 6 件は、センター教員 1 人、学内 1 人、学外 4 人からの投稿で、この内外国人は 4 名である。掲載論文は、ネット上で公開している (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/publication01.html>)。

また東北アジア学術交流懇話会では、ニューズレター「うしとら」を刊行し、会員へのセンターのスタッフの活動の発信、会員の投稿による交流の場としている。平成 26 年度には、61、62、63、64 号が刊行されている。

(4) 研究活動

研究の理念・目標実現のための研究推進企画・立案の組織的な取り組みとして、本センターの目標とする学際的研究を推進するために、総務担当副センター長のほかに研究戦略担当の副センター長を置いている。同副センター長は研究推進委員会と国際交流委員会の委員長を兼務し、国内外に目配りをした研究を推進する体制を構築している。また、将来計画委員会等、将来的な研究展開のあり方に関する検討も行っている。

センターの研究活動は、スタッフがそれぞれの研究分野で個別に実施する研究と、研究グループを組織して実行する共同研究、プロジェクトユニットがある。特に後者では、成果および進捗状況報告を行う場として、年一回の発表会を実施し、研究の推進を図っている。プロジェクトユニットの活動はすべてが十分な研究資金獲得に成功しているわけでは無いものの、それぞれ国際的・学際的な研究協力体制の構築を進め、更に多くの共同研究を誕生させるという重要な役割もあり、研究成果にも現れている。

研究推進委員会は、これらセンター教員・研究員等の研究を相互に理解し、関連する情報を交換するため、毎月一回 1 人ずつ（持ち時間 20 分）、センター全体会議（構成員：教授・准教授・助教・教育研究支援者など）後に研究紹介を行っている。

〔東北アジア地域全体にわたる研究〕

センターでは、例年春に東北アジア研究センター・シンポジウムを実施し、東北アジアの全体に関わるようなテーマで議論を行ってきた。これは、平成 14 年度から 18 年度にわたり実施した共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」(研究代表山田勝芳教授)の枠で企画した一連のシンポジウムを引き継いだものである。この共同研究では、以下のシンポジウムを開催している。

平成 13 年度「東北アジア地域論の可能性：歴史学・言語学・人類学・政治経済学の視座」

平成 14 年度「東北アジアにおける民族と政治」

平成 15 年度「『中国研究』の可能性と課題」

平成 16 年度「開国以前の日露関係」

平成 17 年度「地域協力から見えてくる地球温暖化」

平成 18 年度「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの『中国』—モンゴルと華南の視座から」

共同研究終了後の平成 19 年度には、有志により次のシンポジウムが開催された。

平成 19 年度「帝国の貿易 — 18 ～ 19 世紀ユーラシアの流通とキャフタ」

平成 20 年度以降は、新たに設置された公開講演会・シンポジウム企画委員会がシンポジウム企画業務を継承し、以下のシンポジウムを開催している。

平成 20 年度「ノマド化する宗教 浮遊する共同性 現代東北アジアにおける『救い』の位相」

平成 21 年度「歴史の再定義 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育」

平成 22 年度「歴史遺産を未来へ」

平成 23 年度「聖典とチベット 仏のこゝろを求めて」

平成 24 年度「民俗芸能と祭礼からみた地域復興 — 東日本大震災にともなう被災した無形の民族文化財調査から」

平成 25 年度「ヴェールの向こう側から — 北朝鮮民衆の文化人類学的分析」

平成 26 年度「東アジアの世界遺産と文化資源」

これらのシンポジウムは、いずれも歴史学（東洋史・西洋史・日本史）、文化人類学、宗教学、民俗学、環境研究などの複数の学問領域や複数の国・民族にまたがる問題を、それぞれの分野のスタッフと国内外の研究者の講演・報告を通じて議論したものであり、分野横断的研究関心の創出と東北アジア地域概念の構築に大きく寄与するものと考えている。

平成 24 年度のシンポジウム「民俗芸能と祭礼からみた地域復興—東日本大震災にともなう被災した無形の民族文化財調査から」は、東日本大震災によって被災した地域の無形文化財の現状調査プロジェクトにかかわるものであり、震災復興を意識した企画であった。これは大学院文学研究科に加えて東北学院大学の共催を得て開催された。また、

平成 26 年度のシンポジウム「東アジアの世界遺産と文化資源」では、東アジア諸地域の世界文化遺産についての専門研究者を招き、各国政府の戦略の相違や文化的背景の違いなどを比較しつつ、東アジアにおける文化の資源化の動向とその社会的インパクトについて学際的に考察したものであった。これまでのシンポジウムの成果は論文集として刊行されており、平成 26 年度シンポジウムの成果についても本年 12 月には刊行の予定である。

〔ロシア・シベリア研究〕

寺山恭輔教授は、スターリン体制に関する研究会をモスクワで開催し、その成果「スターリニズム史の政治的・社会的側面。新しい事実と解釈」がロシアの人文系大手出版社ロススペン社より刊行された。この刊行物は東北大学のロゴをつけてロシアで刊行されたおそらく最初の出版物としても位置づけられる。また、年間通じてロシアからの客員教授（三名）を受け入れており、東北アジアの研究拠点としての役割が大きい。

鹿野秀一准教授（生態学）は、日本学術振興会・二国間交流事業「西シベリア河口域生態系における食物網内の寄生虫類の摂食リンク」より、西シベリア河口域において、ロシア研究者グループとの共同研究を行ってきた。巻き貝に寄生する吸虫類セルカリア幼生の放出速度と捕食者による摂食速度の実験的データを炭素量換算することにより、食物網内での吸虫類幼生を介したリンクの見積もりができた。これまでの研究活動で得た知見を盛り込んで、食物網に寄生関係を組み込むことに関し、平成 27 年度～平成 28 年度日本学術振興会・二国間交流事業「西シベリアにおける寄生虫を組み込んだ湿地食物網の栄養構造」のロシアとの共同研究を応募したところ、採択を得た。

柳田賢二准教授は、科研費（基盤研究 (C)）「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」について、数度にわたるウズベキスタンの現地研究により近年のロシア若年層の言語の変化や訛り、およびそれらの許容性について興味深い結果を出している。山形大学で開催された日本ロシア文学会東北支部 2014 年度研究発表会において前年までの現地調査において知り得た同国の民族間公用語（リングァフランカ）としての口語ロシア語の特徴について発表を行った。

塩谷昌史助教は、科研費「帝政ロシアの統治構造—情報収集・管理の観点から—」の研究テーマを探究する過程において、国家の統治機構で国民を掌握する制度として近代統計制度を挙げた。

前田しほ特任助教は、ロシア語圏の戦争表象の一端を明らかにすることを目的とし、第二次大戦の独ソ戦に関する文学・映画・新聞・プロパガンダポスター、戦争記念碑の調査、資料収集と戦争記念碑や博物館の展示など現地調査により、データベースを作成した。このようなフィールドワークによって、地域性を加味しながら歴史的に戦争記憶がどのように変化してきたのか、全体像を把握する試みを行っている。また、第二次大

戦およびそれ以降のロシア文学中でのセクシュアリティの取り扱いの変化についても研究を進めている。

工藤純一教授は、本センターが開設以来関わってきたロシアとの研究交流に関し、本学ロシア交流推進室メンバーとして世界展開力事業（ロシア）を行った。詳細は「社会貢献活動」で述べる。

〔モンゴル・中央アジア研究〕

モンゴル・中央アジア研究分野では、栗林均教授が「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」で清代のモンゴル語・満洲語言語史料や、辞書資料のデータベース化を進めてきたが、その成果として、「言語資料検索システム」を構築し、ホームページ上で公開した (<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/ftsdata/list?groupId=5>)。これは、言語資料のテキストデータを検索する全文検索システム（K-Search）と、辞書データを検索する辞書検索システム（K-Dic）から成り、同ユニットがこれまで刊行してきたインデックスを電子化したものである。検索システムには、モンゴル語系のドンシャン語・ダグール語・モンゴル語の語彙も含まれている。また出版物として、栗林均、斯欽巴図編『『初学指南』の研究－18世紀の口語モンゴル語－』、栗林均・斯欽巴図編『蒙文倒綱－モンゴル語ローマ字転写配列－』、栗林均、海蘭編『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』、栗林均編『蒙漢字典－資料編・原本影印－』、栗林均『孝経－モンゴル語古訳本－』を刊行している。

岡洋樹教授は、プロジェクト研究ユニット「21世紀東北アジア地域像の創出に関する研究」で、科研費基盤(A)による共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」を実施し、平成27年3月8日に東北大学東京分室において国際シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催している。

また岡教授は、共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」においてモンゴル国ウランバートル市で国際シンポジウムを開催した。岡教授は、2003年からモンゴル科学アカデミー、内蒙古師範大学との国際シンポジウムを共催してきたが、本共同研究による今年のシンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」は、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院、さらにロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方少数民族研究所が加わり、本センターと四組織で共催したものである。また2012年にウランバートルでモンゴル科学アカデミー歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院と共催した国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」の報告論文集をモンゴル文で刊行した。

また柳田賢二准教授は、科研費基盤(C)「現在の中央アジアにおけるリングアフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」により、ウズベキスタンでの言語調査を実施

している。平成 26 年 7 月 5 日に山形大学で開催された日本ロシア文学会東北支部 2014 年度研究発表会では前年までに同科研費による現地調査において得た知見を基に口頭発表「ウズベキスタンにおけるロシア人のディアスポラ化とそのロシア語の特徴について」を行った。

〔中国研究〕

中国分野に関してはプロジェクトや個人の研究活動を通じて様々な成果が収められた。磯部彰教授(中国文学、東アジア文化史)は漢籍などの原本の公開に取り組んでおり、東北アジア研究センターの共同研究プロジェクト「出版文化データベース研究ユニット」を拠点としてデータベースの作成を進めており、科研費研究成果公開促進費「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の研究助成により東アジア出版文化に関する典籍文化財を資料映像の形で公開し、東アジア出版文化研究拠点の構築を進めた。また科研費(基盤研究(C))「明清教派系宝卷盛衰の研究―武神と母神信仰をめぐる―」により西大乘教の教派系宝卷の北京・山東省方面の地域文化との関係性や、教派系宝卷と故事系宝卷が明代にはすでに存在していたことなどを解明した。また 中国人民大学で 11 月に開催された学術シンポジウム「清代戯曲與宮廷文化学術検討会」に出席し口頭発表を行っている。

瀬川昌久教授(文化人類学)は中国の宗族についての研究を科研費(基盤研究(C))「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―宗族を通じた検証」および東北アジア研究センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―『宗族』を通じた検証」において進めているが、その成果として 5 月に開催された日本文化人類学会第 48 回研究大会において宗族研究についての分科会「宗族研究展望―古典的研究対象の現在を再考する」を組織しており、その成果論文集の編集を行った。この中で 1990 年代以降の中国における宗族の再生という社会現象が宗族研究に対する新たな可能性を示すとともに、現代中国の国家・地域社会と個人との関係を理解する上での文化人類学アプローチの可能性を示すものとなっていることを明らかにした。

上野稔弘准教授(中国近現代史、中国民族関係史)は 20 世紀前半の中国边疆民族問題視に関する文献調査を継続し、英国・米国・台湾の公文書所蔵機関や研究機関を訪問し、一次史料の検索・収集を進めている。その成果の一つとして本センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」の研究會において、「20 世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」と題する報告を行い、1944 年と 1947 年に起こった北塔山事件およびモンゴル独立承認をめぐる交渉を取り上げた。また 8 月に行われた霞山会中国学術研究大会において「『第二代民族政策』の提起から読み解く中国民族問題の現状」と題する報告を行い、中国の民族問題をめぐる最新の動向についても分析を行っている。

寺山恭輔教授（ロシア・ソ連史）は上野准教授と共に東北アジア研究センター共同研究プロジェクト「20世紀ロシア・中国史再考ユニット」を展開しているが、その成果としてセンター専書『スターリンと新疆：1931－1949年』（社会評論社）を刊行した。1931年の満州事変から1949年の中華人民共和国の成立に至るまでの約20年にわたるソ連の対新疆政策について、一次史料に基づく研究がこれまでほとんど存在しなかった状況において、対中関係に絡む微妙な問題をはらむゆえアクセスが制限される史料も多い中、モスクワに存在する軍、政府、経済等の諸史料館の史料を広範に使用し、新疆に対するソ連の関与の実態、特徴を可能な限り明らかにしたものである。

岡洋樹教授（東洋史・モンゴル史）はモンゴルと中国の双方にまたがる清代モンゴル史の研究を精力的に進めているが、科研費（基盤研究（A））「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」の最終年度として国際シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催した。9月には中国の中央民族大学での招待講演「海外知名学者民大講壇」に出席し、清代モンゴル史の再検討を要する問題について中国の学生・教員と意見交換を行っている。

栗林均教授（モンゴル語学）は9月に中国・内蒙古大学蒙古学院において講演を行ったほか、東北アジア研究センターの共同研究プロジェクト「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動成果として清代モンゴル語に関する編著『蒙漢字典－資料編 原本影印－』（東北アジア研究センター報告第14号）、『「満文原檔」所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター報告第17号）、『初学指南の研究－18世紀のモンゴル語』（東北アジア研究センター叢書55号）の3編を著し、清代のモンゴル語文献あるいはそれを底本として後年刊行された資料を基に内容の分析を行っている。また共著論文「《初学指南》与《三合语录》中以满文字母书写的蒙古语的特征」1編を中国の学術雑誌において発表している。

明日香寿川教授（環境エネルギー政策論）は特に大気汚染問題が社会的にクローズアップされた中国の環境問題について、講演や雑誌への寄稿を行った。詳細は「社会貢献活動」で述べる。

〔日本・朝鮮半島研究〕

後藤章夫助教（火山学）は、雲仙普賢岳平成溶岩の粘性係数測定と、蔵王火山の活動状況調査を行った。雲仙普賢岳における平成噴火時のローブ溶岩の運動メカニズムを解明するため、溶岩の粘性係数を測定する研究を行ってきたが、当初予想していなかった新たな問題を解明するため、26年度は普賢岳の溶岩から空隙率の異なる岩塊を選び粘性係数の測定を行った。その結果、火山弾の空隙率の違いによって、時間に対する粘性変化のメカニズムは異なることが推定された。蔵王火山では、山頂火口湖と山腹噴気地熱地帯の現地調査と過去の活動についての文献調査を行った結果、今後噴火が起こる場

合は、火口湖ではなく山腹噴気地熱帯である可能性が高いことが示唆された。

宮本毅助教（火山地質学）は、宮城県内の南三陸と蔵王の2つのジオパークの実現にむけて、それぞれでの推進のための活動を行った。松島湾周辺域についてのジオサイト設定とジオツアーの企画案作りを担当した。松島湾周辺域に分布する中新世の地層群について地質調査を行い、火山性堆積物から松島湾地域を一体とした地質的な共通性を提供することができた。蔵王ジオパークでは、ジオパーク認定後必要となるガイド養成のための資料をいままで公表されている文献を基に作成した。また、十和田火山の平安噴火について研究では、活動推移と噴火前の火口域の状況復元から、十和田湖の活動では、湖水が潤沢にある状況でマグマ噴火を行った可能性が高いことが判明した。

千葉聡教授（進化生態学）は、琉球列島や小笠原を中心に、外来ウズムシ類の侵入を早期に発見、検出する技術を開発し、小笠原における環境省および東京都の外来種対策や希少種保全対策立案に直接貢献し、事業化された。また国内の貝類の現況調査をもとに、環境省国内希少野生動物種（貝類）の選定に貢献した。

鹿野秀一准教授（生態学）は、宮城県北部の伊豆沼において、昨年度に引き続き26年度も科学研究費補助金・基盤研究(C)「浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響」の経費を用いて、ハス群落内外のメタン濃度測定と安定同位体比による食物網とメタン酸化細菌群集の解析を行った。その結果、ハス群落の拡大は、水中におけるメタン量を増加させるだけでなく、メタン酸化細菌群集の組成に影響を与え、伊豆沼の食物網におけるメタン食物連鎖の寄与にも影響していることが示唆された。近年侵入・定着したブルーギルのエサ資源解析から、ブルーギルは動物プランクトンよりハスやヨシなどに付着する藻類や付着ユスリカを多くエサ資源としていることが判明し、ハス群落の拡大が食性に影響していることが示唆された。また、カラスガイの安定同位体比の分析から、殻長の小さい貝は主に植物プランクトンを食べているが、殻長が大きい貝は動物プランクトンを食べるように栄養段階が変化することが判明し、その内容は *Fundam. Appl Limnol.* 誌 (2014) に掲載された。

上廣歴史資料科学研究部門の荒武賢一朗准教授は、「屎尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市—」の出版を通じ、江戸時代に40万人規模の都市であった大坂とその周辺農村の屎尿流通を取り上げ、農村と都市の取引構造や組織の形成、そして具体的な売買の実態を解き明かした。明治時代に移行するなかで屎尿の肥料的活用は次第に減少するが、それには伝染病の流行や西洋式の衛生観念が登場するなど、多くの社会的背景が重なっていたことに注目した。都市の社会環境史であり、当時の人々はどのような意識のもと、「清潔」を目指して変貌していった社会の変化を明らかにする研究として東北アジア地域研究の重要な成果として挙げられる。

石井敦准教授は、社会が認識する環境問題について大きく左右するマスメディアに関し、日本の環境メディア研究について積極的に取り組んだ。詳細は「社会貢献活動」で

述べる。

上廣歴史資料科学研究部門の高橋陽一助教は、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークによる企画シリーズにおいて「湯けむり復興計画 江戸時代の飢饉を乗り越える」出版を通じ、飢饉からの復興事業として温泉を活用しようと試みる人々の動きを描き出している。また、「よみがえる江戸時代の村田一山田家文書からのメッセージ」では、震災後の資料レスキュー活動によって、従来知られていなかった古文書が確認された成果を報告したとおり、歴史資料保全活動の成果を示した。更に「石碑のある風景―近世の旅行者と松島―」、「一八世紀の検見制度改革と藩領社会―仙台藩を事例に―」、「天保飢饉における村の負担―仙台藩領村落を事例に―」、「旅先地域と客引き―近世後期の上野国吾妻郡草津村を事例に―」、および「近世後期における災害と資源利用―飢饉と温泉―」と、精力的な研究成果を挙げている。

上廣歴史資料科学研究部門の友田昌宏助教は、「幕末期における草莽と諸藩―大野俊次郎とその周辺―」、「岩出山伊達家の戊辰戦争―吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む―」など、これら叢書は部門の活動の大きな柱をなす地域連携事業の成果を示した。吾妻家文書にはこのほか岩出山伊達家の北海道開拓移住関係の史料も数多く含まれており学術的価値のある研究成果と言える。

研究支援部門の金賢貞助教は、現代韓国社会における日本植民地時代の建築物や景観を文化資源として保存・活用する観光まちづくりの実践を全羅北道群山市を事例に明らかにした。韓国国立ソウル大学校奎章閣韓国学研究院が主催した国際シンポジウムや、中国華東師範大学で開催された国際シンポジウムにおいて研究成果が公開され、更にレフエリー付き国際学術雑誌へ研究論文の掲載が認められた。現代韓国社会における反日ナショナリズムの現状を理解するうえで極めて示唆的な論点を提示した研究であった。

〔より広い地域にかかわる研究〕

平野直人准教授（地球宇宙化学）は、Hirano et al. (2006) によって発見された新型火山・プチスポット火山の存在が、太平洋プレートの変形構造に沿うように配列していることから、これら変形構造とプチスポット火山の活動時期との関連を調べるため、26年度4月に平野准教授が首席研究員となり航海が施行された。航海で得られた溶岩試料の解析から、今回確認された10のプチスポット火山は活動時期と地理的分布に関連性がみられた。これらの成果について、地球惑星科学連合大会（5月千葉）および米国地質学会（10月バンクーバー）において講演を行った。プチスポット火山からは二酸化炭素が放出されているが、今回の航海からも高濃度の二酸化炭素が含有されている得意なマグマがあることが確認された。海洋研究開発機構および京都大学との共同研究の溶融実験より、いままで直接データが無かった沈み込むプレートの温度圧力構造を見積もることができ、この成果は国際学術誌 *Geology* から論文が報告された（Yamamoto et

al., 2014)。

千葉聡教授（進化生態学）は、中国、朝鮮半島、極東ロシア、台湾、日本の地域で著しく多様化を遂げた陸貝や淡水貝類をモデルとした多様性形成過程についての研究を行った。陸貝のオナジマイマイ科の進化史を解明するため、核とミトコンドリアの遺伝子解析により、分子系統解析を行った結果、従来の形態形質に基づく多様性の評価は、遺伝的ないし系統的な多様性を全く反映していないことが判明し、その再評価を行った。これらの成果は3編の海外学術誌に公表したほか、軟体動物に関する国際会議（ロシア・ウラジオストク）にて報告した。また、オナジマイマイ科の高い多様性は繁殖行動に起因するか調べるため生理学的、行動学的実験を行った結果、繁殖には雌雄の利益の対立があり、それが多様化の駆動力であることが示された。この研究成果は、3編の海外学術誌に公表したほか、英国エコノミスト誌、米国 National Geographic 誌など、海外の多くの主要メディアに取り上げられた。淡水貝類ヒラマキガイ類の多様性の形成は、分子系統学の手法からバイカルからウスリーにいたる地域からユーラシア地域一帯に拡散した可能性が示された。

佐藤源之教授は、防災・減災に資する科学技術開発を進め、カンボジアでの地雷除去活動の展開、被災木造建造物の非破壊検査技術、地中レーダによる震災復興の促進は被災地を中心とした遺跡調査など実施する実践的な研究活動を展開した。詳細は「社会貢献活動」で述べる。

高橋一徳助教は地雷検知に関する研究を進める中で、地雷除去手法として用いられている金属探知機に関する研究を行った。また、災害対策活動についての警察等への協力にも努めている。詳細は「社会貢献活動」で述べる。

(5) 教育活動

〔大学院教育・研究生〕

本センターは部局として学生定員を持たず、教育は学内の大学院に設置された協力講座と、全学教育において行っている。本センターの教員による協力講座は、下表のように大学院環境科学研究科、理学研究科、情報科学研究科、生命科学研究科、文学研究科および工学研究科に設置されている。本センター教員を指導教員とするこれらの研究科の大学院生（および学部学生）、学術振興会特別研究員、研究所等研究生は本センターを拠点として研究活動を行っている。全学教育については、平成 26 年度は 20 コマの負担原則に対して 25 コマを提供した。

各研究科の大学院学生（および学部学生）のうち本センターを研究拠点とする者は、平成 26 年度は 62 名おり、文系の学生に関しては合同棟内の 3 室を合同研究室として提供しているほか、理系の学生は各教員の実験室・学生室を利用し、指導を受けている。

生活支援等に関する学生のニーズの把握に関しては、文系学生合同研究室を担当する教員を 1 名配置するとともに、学生側には各室 1 名の連絡係を設置し、随時そのニーズが教員側に伝わる態勢をとることで、ニーズ把握に万全を期している。

大学院生の履修指導や生活相談は、基本的に所属各研究科において個別的行っている。また本センター教員の研究室ならびに実験設備等は、基本的には指導大学院生等が随時出入りできる体制をとっており、学習相談も適切に行われている。

日本学術振興会特別研究員（DC、PD）の受け入れに関しては、平成 26 年度は 2 名受け入れており、居室を提供している。これらの学生・研究員は本センターの教員が開催する共同研究やセミナー、シンポジウムに参加することで、専門的な研究環境に接することが可能となっている。一方、平成 26 年度は研究所等研究生 4 名を受け入れた。受け入れ教員は、それぞれの専攻分野に関するきめ細かい指導を行っている。

平成 26 年 11 月 7 日に毎年恒例の東北大学東北アジア研究センター学生研究交流会が開催された。今回は第 7 回目に当たり、川内北キャンパス講義棟 A-401 室において口頭発表 7 件、川北合同研究棟 4 階大会議室においてポスター発表 17 件を行い、その後同室にて懇親会を行った。学生・教員計 50 名の参加を得て活発な討論が行われた。

東北アジア研究センター教員の協力研究科・専攻・講座

氏名	職名	担当開始日	研究科名	専攻名	講座名
寺山恭輔	教授	H12.4.1	文学研究科	歴史科学	比較文化史学
磯部彰	教授	H9.4.1	文学研究科	歴史科学	比較文化史学
平野直人	准教授	H21.6.1	理学研究科	地学	岩石地質学
後藤章夫	助教	H11.8.1	理学研究科	地学	岩石地質学
宮本毅	助教	H12.4.1	理学研究科	地学	岩石地質学
工藤純一	教授	H8.4.1	情報科学研究科	情報基礎科学	広域情報処理論
千葉聡	教授	H25.4.1	生命科学研究科	生態システム 生命科学	地域生態学
鹿野秀一	准教授	H13.4.1	生命科学研究科	生態システム 生命科学	地域生態学
佐藤源之	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	地殻環境システム創成学
高橋一徳	助教	H25.4.1	環境科学研究科	環境科学	地殻環境システム創成学
高倉浩樹	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域社会論
瀬川昌久	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域社会論
上野稔弘	准教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域社会論
明日香壽川	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域社会論
石井敦	准教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域社会論
栗林均	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域文化論
岡洋樹	教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域文化論
柳田賢二	准教授	H15.4.1	環境科学研究科	環境科学	東北アジア地域文化論

〔全学教育〕

全学教育では、学務審議会より 20 コマを東北アジア研究センターの担当原則として求められている。これに対して、平成 26 年度は本センターから基幹科目 1 コマ、展開科目 6 コマ、共通科目 18 コマ、合計 25 コマを担当した。いずれの講義でも担当教員は自分の専門分野をテーマとする講義を行うが、これを通じて東北アジアに関わる内容が全学教育の場で学生に教授されている。また、本センターの教員は、全学教育において東北アジア言語の講義を提供しており、現在は中国語・ロシア語・モンゴル語の講義を担当し、本学における言語教育の多様化に貢献している。また基礎ゼミとして平成 26 年度は 1 コマ提供した。

(6) 社会貢献活動

研究内容の社会への還元は大学の果たすべき重要な使命の一つである。これに加え、研究の社会還元を通じて「東北アジア」という地域概念の普及と定着をはかり、同地域に対する認識の向上や人的交流の拡大の実現が、本センターの第一義的な社会貢献であると考えている。また、国際的な学術交流活動の促進を通じ、相互理解を深めることは、我が国の安定した発展には不可欠であるとの立場から、ロシア、モンゴルなどと大学間交流協定・部局間交流協定を活用しつつ、学術交流を積極的に展開してきた。

本センターは、創設当初から、社会貢献を意識した活動を行っているが、学術成果の実践的社会還元という立場からプロジェクト研究部門に設置されたユニット等を通じた研究活動を展開している。

〔社会貢献を目指す研究活動〕

2011 年 3 月の東日本大震災に関しては、本学中期目標においても「東日本大震災による被災からの復旧・復興支援の取組に努める」ことが唱われており、本センターではこれに即した多くの研究活動が社会実践を伴い行われた。高倉浩樹准教授は「災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット」を運営し、被災地での調査研究は従来の宮城県沿岸部の無形民俗文化財の担い手である農業の調査をおこない、また福島県相馬市・二本松市・いわき市における予備調査もおこなっている。被災地調査の成果については、これを国際的に発信し、関係する研究者とのネットワークを構築を進めている。

佐藤源之教授とその研究室は、防災・減災に資する科学技術開発を進めている。これまで継続して行ってきたカンボジアでの地雷除去活動の展開と被災木造建造物の非破壊検査技術などはレーダ装置の開発と利用手法に関する研究であるのに対して、地中レー

ダによる震災復興の促進は被災地を中心とした遺跡調査を実施する実践的な研究活動を展開している。この研究は、将来的に東北アジア研究センターが文化財の保護ならびに活用を軸とした研究を展開することを期待している。総長裁量経費による遺跡調査推進に加え、プロジェクト研究ユニット「減災をめざした電波科学研究ユニット」を組織し、奈良文化財研究所などとの連携を強めると共に、宮城県文化財保護課などを通じた被災地での活動を展開した。更に平成 26 年度は宮城県、福島県、岩手県の各県警と協力した津波被災地域の搜索活動を実施し、今後の搜索の可能性を広げられることを実証した。高橋一徳助教は科研費による「土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用」において地雷検知に関する研究を進める中で、地雷除去手法として用いられている金属探知機に関する研究も行ってきた。9 月に噴火した御嶽山では多数の行方不明者の搜索のため、警察が金属探知機を用いた搜索活動を実施した際、長野県警に金属探知機を貸与するとともにその使用方法などの指導を行った。このような災害対策活動についての警察等への協力をこれからも継続し、研究成果の社会還元へ努めている。

一方で、本センターは東北アジアを広範な地域と捉え、そこでの自然環境と人間社会の関わりという観点からの研究を進めている。明日香壽川教授は中国の環境問題、特に大気汚染問題また、日本および世界における原発問題、地球温暖化問題、エネルギー問題を巡る現状と課題に関して様々なメディアを通して発言をしている。石井敦准教授は環境問題では、社会が当該問題についてどのように認識するかを大きく左右するのがマスメディアであるが、日本で環境メディア研究について積極的に取り組んでいる。

一方、本センターが開設以来関わってきたロシアとの研究交流に関して、工藤純一教授が本学ロシア交流推進室メンバーとして世界展開力事業（ロシア）を支援し、モスクワ大学で数学ジョイントセミナー、および、本学で IT ジョイントセミナーを開催しその主催運営にあたった。

〔公開講演会など〕

東北アジア研究センターでは、毎年 12 月に公開講演会を開催し、広く一般市民に対し東北アジア地域への関心の喚起に努めている。平成 26 年度は、12 月 6 日に TKP ガーデンシティ仙台（AER オフィス棟 30 階ホール）において、公開講演会「東北アジアの自然－地球・自然のダイナミクス－」と題して、平野直人氏（本センター准教授）、千葉聡氏（本センター教授）の各氏による「東北アジア地域の地殻変動と太平洋」と「東北アジア地域の生物とその起源」の講演がそれぞれ行われ、会場には 90 名以上の参加があり盛況であった。

また本センターでは、毎年冬に東北アジア研究センターシンポジウムも開催している。平成 26 年度は、2 月 14 日に東北大学片平さくらホールを会場に、シンポジウム「東アジアの世界遺産と文化資源」が開催され、日本、韓国、中国、台湾などの東アジア諸地

域の世界文化遺産についての専門研究者を招き、各国の文化的背景の違いや資源化の動向などについて学際的な報告と討論がなされた。

さらに本センターは、みやぎ県民大学（大学開放講座）「江戸時代の宮城県を知ろう－仙台藩の歴史と文化－」を9月25日、10月2日、10月16日、10月30日に宮城県利府町生涯学習センターで開催し、4名の講師によるオムニバス講義が行われた。

本センターは学内外の諸機関・組織とも連携しつつ講演会等を開催し、本センター教員も講演を行っている。本センター上廣歴史資料科学研究部門は、10月26日に東北大学片平キャンパスさくらホールを会場として、公開シンポジウム「宮城県発・自由民権運動再考」を主催した。また、川崎町教育委員会、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークとの共催で7月5日に公開講演会「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」を川崎町で開催した。さらに、11月30日に岩出山古文書を読む会と共催で平成24年度から続く「講座：地域の歴史を学ぶ ◎岩出山 III 城－その知られざる歴史－」を大崎市で開催し、9月20日には交通史学会シンポジウム「東北の名所－松島・塩釜のあゆみ－」を東北大学川内北キャンパスで共催した。また上廣歴史資料科学研究部門では日本の歴史資料の国際的普及に向けて、3月2日から7日にかけてドイツ・ベルリン自由大学で「日本－ドイツくずし字ワークショップ」と国際シンポジウムを開催した。また、荒武賢一郎准教授はアメリカ・シカゴ大学歴史学部において6月16日から20日に開催された「THE UNIVERSITY OF CHICAGO 2014 Reading Kuzushiji Workshop」で基調講演を行った。東北アジア研究センタープロジェクト研究ユニット「出版文化資料データベース研究ユニット」・共同研究「典籍文化遺産の研究」では、書道博物館との共同企画展「中村不折 ―僕歩いた道― 〈後編〉森鷗外、夏目漱石たちとの交流」における東北大学所蔵資料の展示、並びに、ギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」を台東区立書道博物館において2月10日から3月15日の期間開催した。また、21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニットは、1月31日に特別講演会「シベリア抑留からシベリア民族学史の研究へ」を本センターで開催した。さらに東北大学東京分室において、2月28日には本センターの麻田雅文研究支援者によって「ソ連とモンゴルから見た「ノモンハン事件」(1939年)」が、3月8日には共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」による「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」の各シンポジウムが開催された。このように本センターは共同研究や研究部門による学外でのワークショップは一般向け講演会等の開催をも通じて、研究成果の社会への還元を積極的に行っている。

本センターは覚え書きに基づき平成20年度よりロシア・ノボシビルスク大学で5年間にわたる訪問講座を実施し、同時にこれを契機に本学の他部局とノボシビルスクの学術研究機関との交流を促進するなど、本学とシベリアの学術交流の触媒的役割を果たしてきた。11月29日には本学ロシア交流推進室主催による日露ワークショップ「日本文

化を教える II：ロシアと日本の日本研究者の対話」が本学附属図書館で開催され、本センターは共催部局の一つとして積極的に参加し、岡洋樹センター長が趣旨説明を行い、ファシリテーターも務めた。

3月に仙台市で開催された国連防災会議（仙台）にあわせてふたつのパブリック・フォーラム「電波科学による防災・減災と地方自治体との連携」と「無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学」とそれぞれの関連展示が本学川内キャンパスで行われた。

また平成 21 年度以来、学内文系七学部局と連携して企画・実施している文系版サイエンスカフェ「東北大学リベラルアーツサロン」では、本年度第 28 回から第 33 回までの 6 回が開催された。第 28 回が 4 月 18 日、第 29 回が 7 月 11 日、第 30 回が 8 月 1 日、第 31 回が 10 月 10 日、第 32 回が 11 月 7 日、第 33 回が 3 月 6 日にそれぞれ開催された。リベラルアーツサロンの準備・運営は、東北アジア研究センターに設置されたコラボレーション・オフィスが大学広報課と連携しながら行っている。

〔行政への貢献〕

本センターの教員も国や地方公共団体の審議会などへの参加を積極的に行っている。この中には、環境省中央環境審議会（明日香教授）、環境省小笠原世界遺産候補地科学委員会、環境省プラナリア対策陸産貝類保全検討会、小笠原諸島ネズミ類対策検討会、小笠原諸島修復事業検討委員会、小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会、小笠原諸島科学委員会、小笠原諸島生態系保全アクションプラン改定 WG、新たな外来種の侵入拡散防止 WG、グリーンアノール対策 WG、国内希少野生動植物種・新規指定検討会（以上千葉教授）、宮城県伊豆沼内沼自然再生協議会（鹿野准教授）、環境省国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会、宮城県自然環境保全審議会、（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源探査技術開発研究会（以上佐藤教授）が含まれる。

〔公益財団法人への貢献〕

本センター教員も公益財団法人の次に挙げる委員会などへ参加している。地球環境センター JCM 支援委員会（以上明日香教授）、原子力環境整備促進・資金管理センター地層処分モニタリングシステム検討委員会（佐藤教授）。

〔東北アジア学術交流懇話会〕

本センターの研究を社会に還元するための外部組織として、「東北アジア学術交流懇話会」が活動している。本センターは、懇話会ニューズレター「うしとら」を編集し（年 4 回刊行）の近刊の出版物とともに会員に配布することで、東北アジアに関する情報提供を行っている。本年度は、「うしとら」61 ～ 64 号を刊行し会員に配布した。毎号多様な視点から東北アジアを見る冒頭の「論点」や「東北アジア通信」は、様々な研究のきっ

かけを提示し、シンポジウム報告等活発な東北アジア研究活動を報告することによって、国内多くの東北アジア研究の輪を広げる手段として、大きな役割を果たした。報告今年度は5月30日に学術交流懇話会公開講演会・総会を東京の東北大学東京分室会議室で開催した。講演会では、本センター明日香壽川氏、および永島 達也氏（独立行政法人国立環境研究所地域環境研究センター）による公開講演会「PM2.5問題は東北アジアにおける緊張緩和のきっかけとなるか？－越境大気汚染の現状と課題－」を開催した。

組織運営活動

(1) 人員配置と業務分担

(A) 教員等の配置、研究組織構成状況（2015 年 3 月現在）

部門	分野	職位／在職期間	氏 名	専 門 領 域
基礎 研 究 部 門	ロシア・シベリア研究	教 授 2013.4-	寺山 恭輔	ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史
		教 授 2013.4-	高倉 浩樹	社会人類学、シベリア民族誌
		助 教 1999.2-	塩谷 昌史	ロシア経済史、ロシアとアジアとの経済関係
	モンゴル・中央アジア研究	教 授 1999.10-	栗林 均	言語学・音声学、モンゴル語学
		教 授 2006.4-	岡 洋樹	東洋史、モンゴル史
		准教授 1997.4-	柳田 賢二	言語学、ロシア語学、言語接触の研究
	中国研究	教 授 1996.10-	磯部 彰	中国文学、東アジア文化史
		教 授 1996.5-	瀬川 昌久	文化人類学、華南地域研究
		教 授 2004.4-	明日香 壽川	環境政策論
		准教授 2001.4-	上野 稔弘	中国現代史、中国民族学
	日本・朝鮮半島研究	准教授 2004.10-	石井 敦	国際関係論、科学技術社会学
	地域生態系研究	教 授 2013.4-	千葉 聡	生態学、保全生物学、進化生物学
		准教授 1997.4-	鹿野 秀一	微生物生態学、システム生態学
	地球化学研究	教 授 2008.4-2014.9	石渡 明	岩石学、地質学
		准教授 2013.4-	平野 直人	地質学、岩石・鉱物・鉱床学、地球宇宙科学
		助 教 1999.2-	後藤 章夫	火山物理学、マグマ物性
		助 教 1997.5-	宮本 毅	火山岩岩石学、火山地質学
	地域計画科学研究			
	環境情報科学研究	教 授 2001.4-	工藤 純一	環境情報学、デジタル画像理解学
	資源環境科学研究	教 授 1997.4-	佐藤 源之	電磁波応用工学
		助 教 2013.4-	高橋 一徳	電磁波計測、応用地球物理学

プ ロ ジ ェ ク ト 研 究	ユ ニ ッ ト 名	代 表 者	備 考
	21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット	岡 洋樹	
	現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット	瀬川 昌久	
	20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	寺山 恭輔 上野 稔弘	
	東北アジア言語文化遺産研究ユニット	栗林 均	
	出版文化資料データベース研究ユニット	磯部 彰	
	減災をめざした電波科学研究ユニット	佐藤 源之	
	災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット	高倉 浩樹	
	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	明日香 壽川	
	東北アジアにおけるジオパークの可能性の研究ユニット	2014.9.18 まで 石渡 明 2017.09.19 から 平野 直人	2014.12.10 廃止

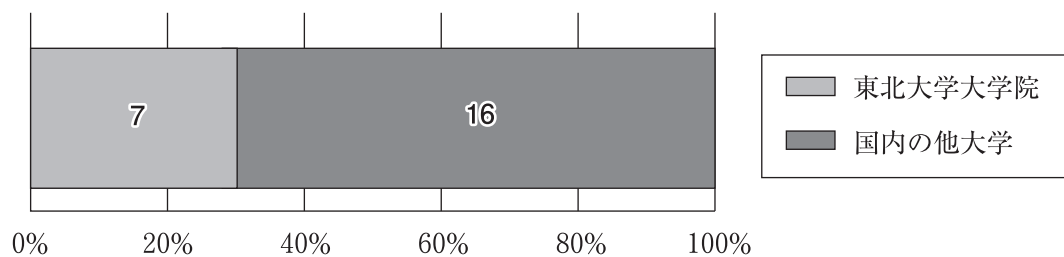
部門	分野	職位／在職期間		氏 名	専 門 領 域
研究支援部門	学術交流	教 授		外国人研究員 (客員教授)	→ 別表参照
		助 教	2012.5-	金 賢貞	民俗学、日韓比較社会・文化論
	情報拠点 (海外連携室)	国際交流委員長		高倉 浩樹	国際的学術交流推進
		助 教		金 賢貞	
	企画運営室	総務担当副センター長		千葉 聡	研究推進事業の企画・立案、国内外の研究者との研究連携支援
		助 教		金 賢貞	
		特任助教 (研究支援担当) 2014.7-		前田 しほ	ロシア文学・文化学
		特任助教 (研究支援担当) 2014.9-		町 澄秋	岩石学、地質学

部門	分野	職位／在職期間		氏 名	専 門 領 域
寄附 部門研	上廣歴史資料学 研究部門	准教授	2012.4-	荒武賢一朗	日本近世・近代史
		助 教	2012.4-	高橋 陽一	日本史、近世旅行史
		助 教	2013.10-	友田 昌宏	日本近代政治史

(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況

区 分		教 授	准 教 授	助教・助手
教員の平均年齢	(2015 年 3 月現在)	56.8 歳	48.3 歳	41.6 歳
教員の平均勤続年数	(”)	11 年 1 ヶ月	10 年 11 ヶ月	8 年 6 ヶ月
博士号取得者数	(”)	9 人	3 人	7 人

(C) 専任教員の最終出身大学院 (2014 年 3 月現在)



(D) 研究支援組織の整備・機能状況（2015年3月現在）

所 属	職 名	氏 名
事 務 室	文学部・文学研究科事務長	佐藤 吉和
	専 門 員	高谷 敏晶
	主 任	高橋 篤志
	主 任	高橋 千秋
	事務補佐員	前川 順子
	事務補佐員	及川 二美
	事務補佐員	阿部由比子
	事務補佐員	高橋 麻希
図 書 室	事務補佐員	佐々木理都子
	事務補佐員	海口 織江
コラボレーション・オフィス	事務補佐員	畠山 瑞
	派遣職員	熊谷 香

(E) 教育研究支援者受け入れ状況

氏 名	期 間	受入プロジェクトユニット名	受入教員
Tsogbadrakh Gantsetseg	2013.7.1～ 2014.6.27	東北アジア言語文化遺産研究ユニット	栗林 均
稲澤 努	2012.4.1～ 2015.3.31	現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット	瀬川 昌久
麻田 雅文	2013.10.1～ 2015.3.31	20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	寺山 恭輔
盧 向春	2014.4.1～ 2015.3.31	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	明日香 壽川
岡本 哲明	2014.4.1～ 2015.3.31	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	明日香 壽川
及川 高	2014.4.1～ 2015.3.31	災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット	高倉 浩樹
海 斯琴高娃	2014.11.1～ 2015.3.31	東北アジア言語文化遺産研究ユニット	栗林 均

(F) 客員教授（海外）受け入れ状況

※太字が本年度招聘者

〔氏名／在任期間：所属〕

カザンツェフ、セルゲイ・V.／1996.10.1～1996.12.31

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 経済産業技術研究所副所長

石 昌渝（セキ ショウユ）／1997.1.1～1997.6.30

：中国、中国社会科学院大学院教授

オチル, アユーダイ／1997.10.1～1998.3.31
 ：モンゴル、モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長
 李 仁遠 (リ インウォン)／1997.12.1～1998.3.31
 ：韓国、韓国弘益大学校都市土木工学科教授
 セリベルストフ, ビャチェスラフ／1998.4.1～1998.6.30
 ：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部経済・産業管理技術研究所副所長
 スミルノワ, タマラ／1998.5.1～1998.8.31
 ：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所主任研究員
 許 志宏 (キョ シコウ)／1998.8.1～1998.11.30
 ：中国、中国科学院冶金研究所 上級教授
 ゲレル, オチル／1998.9.1～1998.12.25
 ：モンゴル、モンゴル技術大学教授
 朴 星來 (パク ソンネ)／1999.1.1～1999.3.31
 ：韓国、韓国外国語大学校人文大学史学科教授
 クズネツォフ, フョードル, A.／1999.1.1～1999.3.31
 ：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所長
 劉 世徳 (リュウ セトク)／1999.4.10～1999.7.9
 ：中国、中国社会科学院文学研究所教授
 イワノフ, ヴィクトル／1999.5.1～1999.8.31
 ：ロシア、ロシア科学アカデミー極東支部 火山研究所教授
 朝 克 (チョウ コク)／1999.8.1～1999.10.31
 ：中国、中国社会科学院民族研究所教授
 セナラス, ユダヤ ガミニ／1999.9.1～1999.11.30
 ：スリランカ、モラツワ大学上級講師
 鄭 在貞 (チョン ジェジョン)／1999.12.2～2000.3.5
 ：韓国、ソウル市立大学校教授
 ブラック, ジョン アンドルー／1999.12.1～2000.3.31
 ：オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学教授
 キム・レチュン／2000.4.1～2000.6.30
 ：ロシア、ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員
 モシキン, ミハイル／2000.4.1～2000.7.31
 ：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 動物分類・生態学研究所教授
 李淵昊 (ソ ヨノ)／2000.7.1～2000.9.30
 ：韓国高麗大学教授
 イローヒン, ゲナディ／2000.8.1～2000.11.30
 ：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部
 確精扎布 (チョイジンジャブ)／2000.10.1～2001.1.15
 ：中国内蒙古大学教授

高 哲煥 (コー チュルワン)／2000.12.1～2001.2.28
 ：韓国、ソウル大学校海洋学部教授

馬 建釗 (マー チエンチャオ)／2001.2.10～2001.5.31
 ：中国広東省民族研究所所長

劉嘉麒 (リユー ジャーチ)／2001.4.1～2001.6.30
 ：中国科学院地質学地球物理学研究所所長

タマーラ エセノヴァ／2001.6.1～2001.9.15
 ：ロシアカルムイク国立大学

ミカエル エポフ／2001.7.1～2001.10.31
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部地球物理科学研究所副所長

恩和巴図／2001.9.16～2002.2.28
 ：内蒙古大学蒙古語文研

Dendevin Badarch／2001.11.1～2002.2.14
 ：モンゴル科学技術大学学長

Victor Okurgin／2002.2.15～2002.6.14
 ：ロシア科学アカデミー極東支部 火山学研究所

鄭 永振／2002.3.31～2002.8.31
 ：中国延辺大学・渤海史研究所教授

Fan-Niang Kong／2002.6.15～2002.10.14
 ：ノルウエー土木研究所

アレクセイ A. キリチェンコ／2002.9. 1～2003.1.10
 ：ロシア科学アカデミー東洋学研究所

ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2002.10.15～2003.2.14
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所教授

王満特嘎／2003.1.11～2003.5.14
 ：モンゴル中央民族大学言語学院 蒙古語文学部

Wolfgang-Martin Boerner／2003.2.17～2003.6.14
 ：イリノイ大学シカゴ校教授

ツイムジト プルブエワ ワンチコワ／2003.5.16～2003.9.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学チベット学仏教学研究

金 旭／2003.6.15～2003.10.14
 ：中国吉林大学・地球探測科学興技術学院教授

朴 承憲／2003.10.1～2004.1.31
 ：中国・延辺大学東北亜研究院院長

レオポルド イサク チェルニャフスキー／2003.11.10～2004.2.29
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所情報研究部部長

ネリー レシチェンコ／2004.2.2～2004.5.31
 ：ロシア科学アカデミー東洋学研究所・上級研究員

サンドラ ジェロニモ カテーン／2004.3.7～2004.6.30
 ：フィリピン大学国立地質学研究所助教授
 S. V. Rasskazov／2004.7.1～2004.10.31
 ：イルクーツク州立大学教授
 尹 豪／2004.6.1～2004.9.30
 ：吉林大学東北亜研究院・副院長
 ミン・ビョンウク／2004.10.1～2005.2.10
 ：釜山大学校師範大学国語教育科教授
 ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2004.11.1～2005.2.28
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所固体統計熱力学研究部門教授
 フグジルト／2005.2.11～2005.5.31
 ：内蒙古大学教授 兼副学長
 A. Yurlov／2005.3.1～2005.6.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所主任研究員
 銭 杭 (チェン・ハン)／2005.6.1～2005.9.30
 ：中国 上海社会科学院歴史研究所研究員
 金 喜俊／2005.7.1～2005.10.31
 ：釜山大学教授
 S. A. Papkov／2005.10.1～2006.1.31
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所上級研究員
 金 亜秋／2005.11.1～2006.2.28
 ：中国 復旦大学教授
 S. Bouterey／2006.2.13～2006.6.30
 ：カンタベリー大学言語文化学部助教授・学部長
 N. Yurlova／2006.3.1～2006.6.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員
 魏 海泉／2006.7.1～2006.10.31
 ：中国 地震局地質研究所副研究員
 S. Formanek／2006.7.17～2006.11.30
 ：オーストリア国立学術アカデミーアジア文化・思想史研究所上級研究員
 劉 財／2006.11.3～2007.2.28
 ：中国 吉林大学教授・地球探測科学与技術学院長、地球物理研究所長
 ダシダワー, チョローン／2006.12.2～2007.3.15
 ：モンゴル科学アカデミー歴史研究所長
 L. Kondrashov／2007.3.13～2007.6.30
 ：ロシア ハバロフスク州立自然環境管理訓練所長
 ツオルモン, ソドノム／2007.3.16～2007.6.30
 ：モンゴル科学アカデミー歴史研究所 シニア・サイエンティスト

Ignatyeva Vanda / 2007.7.1 ~ 2007.9.30
 : ロシア サハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門部長

Belosludov Vladimir / 2007.7.2 ~ 2007.10.31
 : ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授

特木爾巴根 / 2007.10.1 ~ 2008.1.15
 : 中国 内蒙古師範大学蒙古語文学研究所教授

Voytishkek Elena / 2007.11.5 ~ 2008.2.29
 : ロシア ノボシビルスク国立大学准教授

Yadrenkina Elena / 2008.1.16 ~ 2008.5.15
 : ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員

白音門徳 / 2008.3.1 ~ 2008.6.30
 : 中国 内蒙古大学蒙古言語研究所教授

Jan Olof Svantesson / 2008.5.19 ~ 2008.8.31
 : スウェーデン ルンド大学教授

飯坂 譲二 / 2008.7.1 ~ 2008.10.31
 : カナダ ビクトリア大学地理学科教授

布仁巴図 / 2008.9.1 ~ 2009.1.15
 : 中国 内蒙古大学蒙古学学院教授

Black John Andrew / 2008.11.1 ~ 2009.3.31
 : オーストラリア シドニー大学建築、設計計画学部教授

Stammeler Florian / 2009.1.16 ~ 2009.7.15
 : フィンランド ラップランド大学北極センター上級研究員

Dubinina Nina / 2009.4.1 ~ 2009.6.30
 : ロシア ハバロフスク国立教育大学教授

Dashi D. Darizhapov / 2009.7.1 ~ 2009.12.31
 : ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート科学センター物理学部リモートセンシング研究室長

Erdene Purevjav / 2009.8.1 ~ 2009.11.30
 : モンゴル科学アカデミー言語文化研究所言語研究部門主任

嘎日迪 / 2009.12.1 ~ 2010.3.31
 : 内蒙古師範大学蒙古学学院教授

曹三相 / 2010.1.1 ~ 2010.5.31
 : 韓国 釜山大学韓国研究所 研究員

Boyakova Sardana / 2010.4.11 ~ 2010.7.15
 : ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所
 20-21 世紀歴史学部門部長

朴慶洙 / 2010.6.1 ~ 2010.8.30
 : 韓国 江陵大学校人文大学日本学科教授

那順烏日図／2010.8.1～2010.11.30

：中国 内蒙古大学蒙古学学院教授

李晶／2010.9.1～2011.1.31

：中国 広東海洋大学外国語学院教授

ウラジミール・ヤクボフ／2010.12.1～2011.3.31

：ロシア トムスク国立大学教授

セルゲイ・ソコロフ／2011.2.1～2011.2.28

：ロシア科学アカデミー地質研究所教授・所長代理

金 旭／2011.3.1～2011.6.30

：中国 吉林大学教授

哈琴巴特爾／2011.6.11～2011.9.30

：中国 黒竜江大学・教授

Boerner Wolfgang-Martin／2011.7.1～2011.9.29

：アメリカ イリノイ大学シカゴ校・名誉教授

斯琴巴特爾（スチンバートル）／2011.10.1～2012.1.31

：中国 内蒙古大学・教授

敖 特根／2012.2.1～2012.5.31

：中国 西北民族大学・教授

Sereenen JARGALAN／2012.2.1～2012.4.30

：モンゴル モンゴル科学技術大学・教授

Gavrilyeva Tuyara／2012.5.1～2012.8.31

：ロシア サハ共和国北方地域経済研究所・主任研究員

烏力吉巴雅爾／2012.6.1～2012.8.31

：中国 中央民族大学・教授

Koch Magaly／2012.9.1～2012.11.30

：アメリカ ボストン大学リモートセンシングセンター・研究准教授

陳 正宏／2012.10.1～2012.11.30

：中国 復旦大学・古籍整理研究所・教授

Borisov Andrian／2012.12.1～2013.3.31

：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・人文学北方先住民研究所・上席研究員

Chimitdorzhiev Tumen／2013.1.1～2013.1.31

：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部・ブリアート科学センター・物理物質研究所副所長

Laikhansuren Altanzaya／2013.4.1～2013.7.31

：モンゴル モンゴル国立教育大学・歴史・社会科学部・教授

潘 建国／2013.9.1～2013.11.30

：中国 北京市北京大学・中文系・教授

巴雅爾／2013.9.2～2013.12.31

：中国 内蒙古師範大学・旅游学院・教授

Ligthart Leonardus Petrus／2014.2.1～2014.3.14

：オランダ デルフト工科大学・名誉教授

Sampildondov Chuluun Khar Aduutan/2014.4.1～2014.7.31

：モンゴル モンゴル科学アカデミー・歴史研究所長

Prozorova Larisa/2014.4.18～2014.6.16

：ロシア ロシア科学アカデミー極東支部・生物・土壌科学部門・主席研究員

Kulinich Natalia/2014.5.1～2014.8.31

：ロシア 太平洋国立大学・哲学文化学科・副学科長

Chernolutckaia Elena/2014.9.1～2014.11.30

：ロシア ロシア科学アカデミー極東支部・歴史・考古学・極東諸民族人類学研究所・主任上級研究員

巴達瑪敖德斯爾 /2014.10.1～2015.1.31

：中国 内蒙古大学・教授

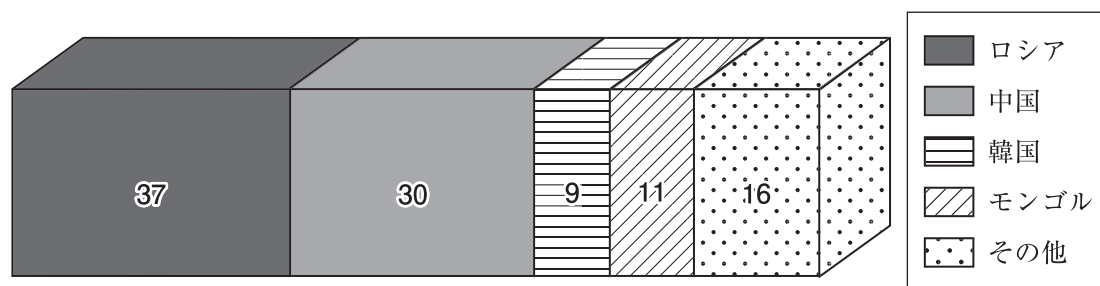
Kondrashin Viktor/2015.1.20～2015.4.19

：ロシア ベリンスキー名称国立ペンザ教育大学ロシア史・歴史教授法学科長・教授

Chen Zhining/2015.3.13～2015.4.23

：シンガポール シンガポール国立大学・教授

〔客員教授の出身国（1996年度～2014年度）〕



(G) 兼務教員受け入れ状況（2015 年 3 月現在）

阿子島 香	文学研究科 教授（考古学、先史学）
李 仁子	教育学研究科 准教授（文化人類学、在日移民研究）
大谷 栄治	理学研究科 教授（実験岩石学、高压地球物理学）
奥村 誠	災害科学国際研究所 教授（土木計画学、交通計画）
川口 幸大	文学研究科 准教授（文化人類学）
木村 敏明	文学研究科 教授（宗教人類学、インドネシアの社会と宗教）

(H) 非常勤講師受け入れ状況（2015 年 3 月現在）

柳澤 文孝	山形大学理学部（地球環境学）
河野 公一	東北工業大学（衛星画像処理、リモートセンシング）
伊藤 正直	(株)ミツバ（ロシア政策論）
園田 潤	仙台高等専門学校（計算電磁気学）
永谷 泉	日本船用エレクトロニクス（株）（農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所出向）（衛星画像処理、リモートセンシング）
平川 新	宮城学院女子大学（日本近世政治経済史）

(I) 東北アジア研究センターフェロー

氏 名	所 属
和田 春樹	東京大学名誉教授
渡辺 之	元日本鋼管取締役・技監、元東北アジア研究センター環境技術移転寄附研究部門教授

客員教授

氏 名	期 間	所属部門名
平川 新	2014.4.1 ～ 2015.3.31	寄附研究部門

(J) その他研究員

客員研究員

※太字は現職

氏 名	期 間	研 究 課 題
劉 四新	2007.7.5 - 2007.10.1	ボアホールレーダの数値計算並びに実験
キム デョンホ	2007.7.25 - 2007.8.25	近世韓日の科学技術史と科学技術政策の政治思想的特性に関する比較研究
包 聯群	2007.4.1 - 2010.3.31	モンゴル語と周辺言語との言語接触の研究
ハーリッド フォウド アブド エルワケール	2007.5.1 - 2010.3.31	陸域生態系の物質循環における土壌動物の役割に関する研究
アンナ ステムラー ゴスマン	2009.1.16 - 2009.7.15	北方におけるコミュニティ適応・脆弱性とレジリアンス、境界領域の関係と交易に関する比較研究
王 三 慶	2009.5.27 - 2009.8.26	日本の漢文小説研究
ハタンバーナル ナツァグ ドルジ	2009.6.10 - 2009.8.29	エルデニ・ゾー寺院の歴史
ダリチャポフ ブラット	2009.9.18 - 2009.12.31	日本企業のシベリアへの投資に関する研究
カジ エ カレポマ	2009.11.1 - 2011.3.31	人工衛星の画像処理とデータベース構築
恩 和	2010.6.1 - 2010.6.30	福沢諭吉にみる民族主義思想の形成
チョローン ダシダワー	2011.8.23 - 2012.6.30	モンゴルにおける日本人抑留兵（1945-1947 年）
シャルグラノワ オリガ	2012.3.15 - 2013.3.14	東北アジアにおけるモンゴル系移民の民族的統合の構築：民族社会学と宗教の諸要素
Chen Jie	2012.11.16 - 2013.1.14	環境リモートセンシング
Yu Quan	2013.10.1 - 2014.10.31	中世モンゴル語の研究
Webster Sophie	2015.3.28 - 2015.5.27	東アジアの陸生貝類の生物地理学研究

フルブライト米国人招聘講師・研究員

氏 名	期 間	研 究 課 題
Koch Magaly	2014.9.1 - 2015.7.31	乾燥地域におけるリモートセンシングによる環境計測

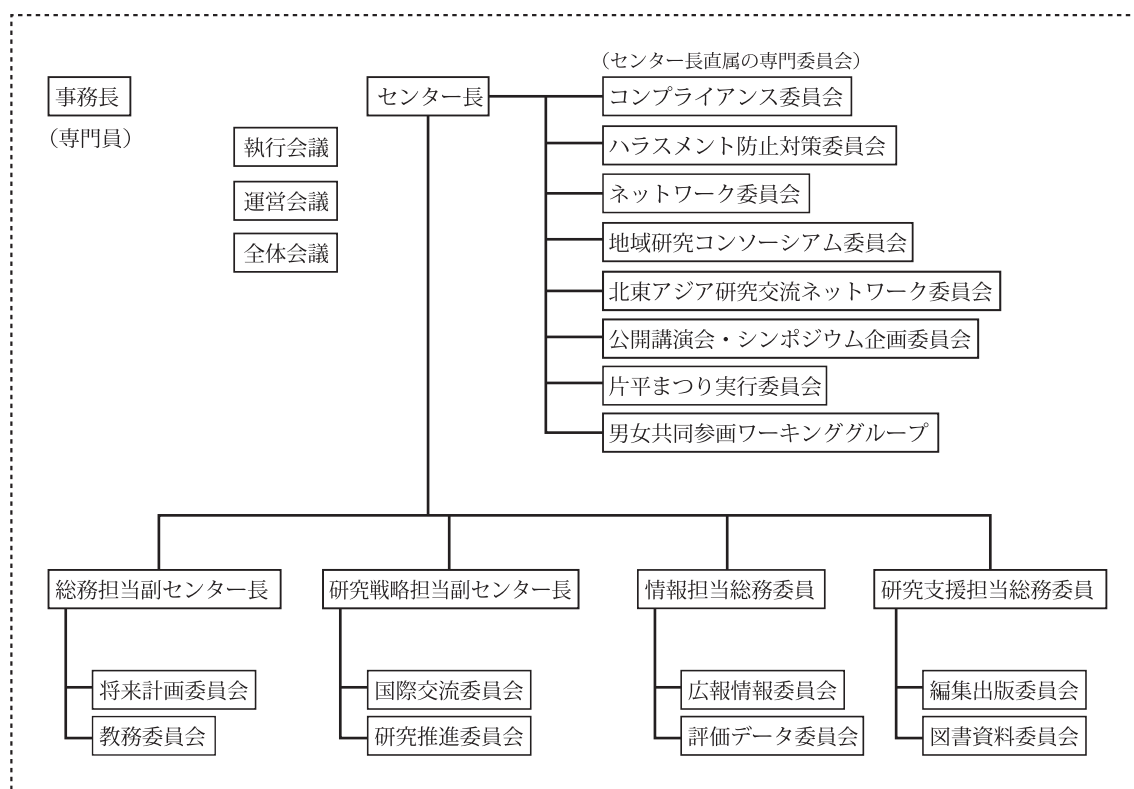
専門研究員

氏 名	期 間	専 門 分 野
トゥルムンフ オドントヤ	2011.4.1 – 2015.3.31	文化人類学・モンゴル研究
佐藤 憲行	2012.7.17 – 2014.5.30	東洋史・清代モンゴル史
佐々木 聡	2013.4.1 – 2015.3.31	宗教文化史・術数文献の書誌研究
李 善姫	2013.4.1 – 2015.3.31	文化人類学・ジェンダー研究

日本学術振興会特別研究員

氏 名	期 間	受 入 教 員	資格
小林 宏至	2013.4.1 – 2016.3.31	瀬川 昌久 教授	PD
鈴木 紀之	2012.4.1 – 2015.3.31	千葉 聡 教授	PD

(K) センター内委員会構成図 (2014 年 7 月 28 日現在)



(L) 委員会名簿 (2014 年度)

< 学内各種委員会 >

平成 27 年 1 月 16 日現在

委 員 会 名	委員氏名	任 期	備 考
教育研究評議会	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	評議員
部局長連絡会議	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	部局長
研究所長会議	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	部局長
入学試験審議会			研究所長会議代表
国立大学附置研究所・センター長会議	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	通称「全国研究所長会議」
教養教育改革会議	センター長	2007.10.16 ～	
文系部局長連絡協議会	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	部局長
総長特任補佐			
基金企画推進室員	岡 洋樹	2009.4.1 ～	(本部推薦)
キャンパス将来計画委員会	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	
広域交通計画等検討委員会			(本部推薦)
研究推進審議会	千葉 聡	2013.4.1 ～2015.3.31	教授 (石渡教授残任期間)
研究倫理専門委員会	千葉 聡	2013.4.1 ～2015.3.31	(石渡教授残任期間)
評価分析室	工藤純一	2013.4.1 ～2016.3.31	(本部推薦)
広報連絡員	柳田賢二	2013.4.1 ～2015.3.31	
ロシア交流推進室員	センター長	2013.4.1 ～	(室員)
	工藤純一	2013.4.1 ～2015.3.31	(副室長)
	高倉浩樹	2009.12.1 ～	
	塩谷昌史	2009.12.1 ～	
	徳田由佳子	2009.12.1 ～	
	柳田賢二	2014.3.1 ～	2014.2.4 依頼
学生生活協議会	明日香壽川	2014.4.1	協議員
	平野直人	～2015.3.31	予備協議員
学務審議会	瀬川昌久	2014.4.1 ～2015.3.31	

全学教育科目委員会			
社会科学、総合科目、外国語			
外国語（ロシア語）	柳田賢二		
外国語（中国語）	上野稔弘		
広報編集委員会			
片平まつり実行委員会	岡 洋樹	2013.4.1 ～2015.3.31	5 研究所と東北アジア の開催
コラボレーション・オフィス運営委員会	瀬川昌久	2013.4.1 ～2015.3.31	人文社会系諸部局
情報シナジー機構情報システム利用連絡会議			
（部局実施責任者）	栗林 均	2012.4.1 ～	
（部局技術担当者）	後藤章夫	2013.4.1 ～	
国際高等研究教育機構運営審議会	センター長		部局長
学際科学国際高等研究センター運営専門委員会			2014 年度から廃止
附属図書館商議会	寺山恭輔	2014.4.1 ～2016.3.31	
貴重図書等委員会	栗林 均	2013.4.1 ～2015.3.31	
東北大学出版会評議員会	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	
学友会全学協議会	明日香壽川	2014.4.1 ～2015.3.31	
運輸交通専門委員会			（本部推薦）
入試実施委員会	千葉 聡	2014.4.1 ～2015.3.31	研究所群から 2 人 （本年度割当て有）
男女共同参画委員会	寺山恭輔	2013.4.1 ～2015.3.31	
情報公開・個人情報開示等審査委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
情報公開・個人情報開示等委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
環境保全センター運営専門委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
ハラスメント全学防止対策委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
大学情報データベース委員会	千葉 聡 高倉浩樹 寺山恭輔 宮本 毅		（評価責任者）千葉教授 （運用責任者）高倉教授 高橋篤志（事務室）
研究教育基盤技術センター運営専門委員会	千葉 聡	2014.4.1 ～2016.3.31	
研究教育基盤技術センターワーキンググループ	千葉 聡		運営専門委員会から

埋蔵文化財調査室運営委員会	佐藤源之	2014.4.1 ～2016.3.31	教授・准教授
埋蔵文化財調査室運営専門委員会			川内キャンパス整備委員会推薦
埋蔵文化財調査室運営専門委員会調査部会			
研究所連携プロジェクト GL 会議	平野直人	2013.4.1 ～	第 4 期プロジェクト 2012 ～
六カ所村センター検討委員会（仮称）	佐藤源之	2013.4.1 ～2015.3.31	
学術資源研究公開センター運営専門委員会	千葉 聡	2014.4.1 ～2016.3.31	
川内キャンパス環境整備委員会	センター長	2014.4.1 ～2015.3.31	
川内北キャンパス協議会	センター長	2014.4.1 ～2015.3.31	
川北合同研究棟管理委員会	岡 洋樹	任期なし	センター長
安全保障輸出管理アドバイザー	佐藤源之	2012.4.1 ～	※年度当初佐藤教授と していたが、高橋助教 継続（発足当初から佐 藤教授、佐藤研助教が 担当（2013.6.3 補足））
安全保障輸出管理アドバイザー 兼安全保障輸出管理委員会	高橋一徳	2012.4.1 ～	
安全保障輸出管理担当者	高橋篤志	2013.4.1 ～	
産学連携推進会議	高倉浩樹	2013.4.1 ～	副センター長 （研究戦略担当）
文系サマープログラム実施 WG 委員	高倉浩樹	2013.4.1 ～	
「東北大学サイエンスカフェ」WG 委員	岡 洋樹		
	瀬川昌久		
環境・安全委員会安全管理専門委員会危険 物質総合管理システム専門部会専門部員	鹿野秀一 （管理責任者）	2013.4.1 ～2015.3.31	日野専門員 （運用担当者）
リーディングプログラム推進機構運営会議	センター長	2013.4.1 ～2015.3.31	
（研究用微生物安全管理規定） 微生物安全主任者	千葉 聡	2013.4.1 ～	微生物取扱責任者：鹿 野秀一（2014.3.20 ～）
U R A 連携協議会（仮称）	町 澄秋	2014.9.1 ～	2014.6 制定
国際連携推進機構国際交流委員会	高倉浩樹	2014.10.1 ～2015.3.31	教授又は准教授から 1 名
研究所長会議「研究所連携若手交流会」 WG 委員	金 賢貞	2015.2.17 ～2016.3.31	

<センター内各種委員会>

委 員 会 名	委員氏名	任 期	備 考
センター長	岡 洋樹		
副センター長			
副センター長（総務担当）	千葉 聡		
副センター長（研究戦略担当）	高倉浩樹		
執行会議	センター長		
	副センター長 2 名		
	総務委員 2 名		
	事 務 長		
執行会議の参議	専門員及び関係教員が必要に応じて参加		
総務委員			
研究支援担当総務委員	瀬川昌久		
情報担当総務委員	柳田賢二		
総務担当副センター長（千葉）が担当して、委員長を兼任する委員会			
将来計画委員会	佐藤源之		副委員長
	磯部 彰		
	高倉浩樹		
	平野直人		
教務委員会	明日香寿川		留学生・学生発表会担当
	柳田賢二		
	研究戦略担当副センター長（高倉）が担当して、委員長を兼任する委員会		
国際交流委員会	柳田賢二		
	寺山恭輔		
	工藤純一		
	塩谷昌史		
	金 賢貞		
研究推進委員会	千葉 聡		
	工藤純一		
	石井 敦		
	後藤章夫		
	友田昌宏		
情報担当総務委員（柳田）が担当して、委員長を兼任する委員会			
広報情報委員会	栗林 均		
	高倉浩樹		
	平野直人		
	宮本 毅		
	高橋陽一		
評価データ委員会	佐藤源之		（部局評価責任者）千葉教授
	鹿野秀一		
	上野稔弘		

研究支援担当総務委員（瀬川）が担当して、委員長を兼任する委員会			
編集出版委員会	寺山恭輔		
	荒武賢一郎		
	明日香寿川		
	石井 敦		
	金 賢貞		
	高橋一徳		
図書資料委員会	寺山恭輔		
	上野稔弘		
センター長直属の専門委員会			
コンプライアンス委員会	センター長		コンプライアンス推進 責任者
	副センター長 (総務担当)		コンプライアンス推進 担当者
	副センター長 (研究戦略担当)		
	事務長		
ハラスメント防止対策委員会	センター長		
	副センター長 2 名		
	事務長		
ネットワーク委員会	栗林 均		委員長
	平野直人		
	後藤章夫		
片平まつり実行委員会			委員長
地域研究コンソーシアム委員会	上野稔弘		委員長
	瀬川昌久		
	塩谷昌史		
北東アジア研究交流 ネットワーク委員会	岡 洋樹		委員長
	石井 敦		
公開講演会・シンポジウム 企画委員会	瀬川昌久		委員長
	鹿野秀一		
	金 賢貞		
文学研究科等安全衛生委員会	柳田賢二		
その他			
ハラスメント相談窓口	石井 敦		
	金 賢貞		
	高橋千秋		
親睦会	平野直人		
	塩谷昌史		
	高橋陽一		

上廣歴史資料学研究部門委員会	平川新		
	荒武賢一朗		
	岡洋 樹（執行会議）		
	千葉聡（執行会議）		
	高倉浩樹（執行会議）		
	瀬川昌久（執行会議）		
	柳田賢二（執行会議）		

上廣歴史資料学研究部門運営諮問委員会委員（2014年7月1日から設置）			
委員長	岡 洋樹		センター長
学内	柳原敏昭		文学研究科 歴史科学 専攻 日本史専攻分野 教授
学内	佐藤 大介		災害科学国際研究所 人間・社会対応研究部 門 歴史資料保存研究 分野 准教授
学外	菅野正道		仙台市博物館
部門	平川 新		上廣歴史資料学研究部 門 客員教授

研究不正部局通報窓口担当	千葉 聡		
--------------	------	--	--

(2) 研究資金

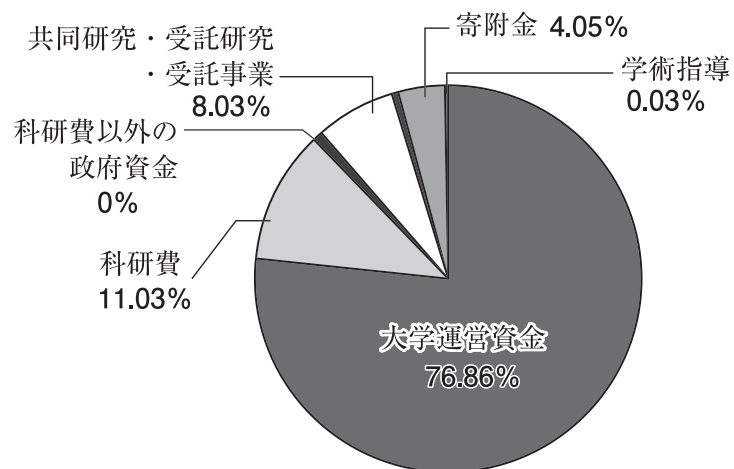
(A) 経費総額

※ 2014（平成 26）年度は見込額（単位：百万円）

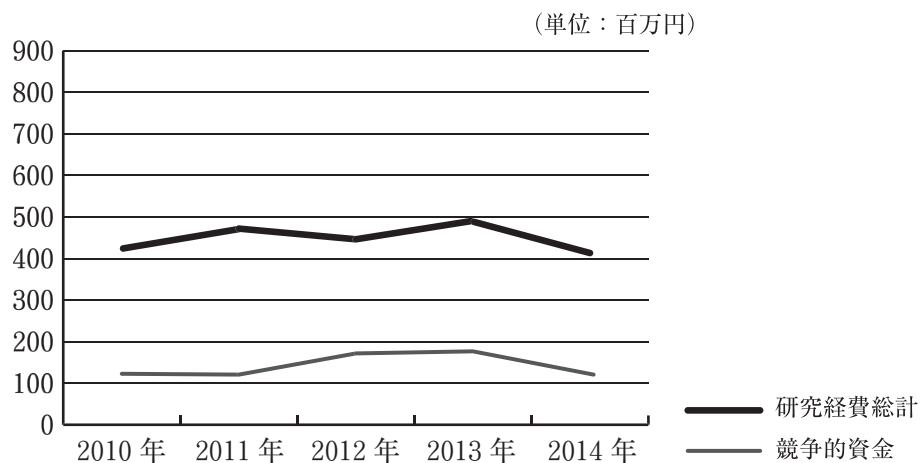
区 分		2010	2011	2012	2013	2014
大学運営資金		432	476	464	499	407
競争的資金	科学研究費補助金	78	77	68	64	40
	科学研究費補助金以外の政府資金	0	0	0	0	0
	民間等との共同研究	16	8	0	0	0
	受託研究	17	30	51	64	39
	受託事業	5	0	3	4	1
	寄附金	1	1	45	40	33
	学術指導	1	0	0	0	0
総 計		550	592	631	671	520
総計に占める競争的資金の割合		21%	20%	26%	26%	22%

※競争的資金の各区分ごとの 100 万円未満の額は 50 万円以上切り上げ、50 万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

研究活動関連経費の構成（2010～2014年度の平均）



経費総額と競争的資金の推移



(B) 歳出決算額（国立学校特別会計／大学運営資金・寄附金）

(単位：百万円)

区 分		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
人件費	運営費交付金	279	292	236	250	258
	物件費	134	160	144	151	84
	その他	19	24	84	98	65
計		432	476	464	499	407

(C) 科研費の申請・採択状況

＜種目別実績＞

(単位：百万円)

研究種目	2010 年度		2011 年度		2012 年度		2013 年度		2014 年度		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進	(2) 1	28	(2) 1	28	(2) 1	22	(1) 0		(1) 0	0	(8) 3	78
新学術領域 (総括班)												
新学術領域 (計画)									(2) 0	0	(2) 0	0
新学術領域 (公募)	(1) 1	1	(1) 1	1							(2) 2	2
基盤 (S)	(1) 1	16			(1) 0						(2) 1	16
基盤 (A)	(1) 0		(2) 2	19	(3) 2	19	(2) 2	15	(3) 2	13	(11) 8	66
基盤 (B)	(7) 6	20	(8) 5	15	(10) 4	11	(7) 5	15	(7) 2	7	(39) 22	68
基盤 (C)	(13) 7	6	(11) 5	5	(10) 5	4	(11) 11	13	(11) 8	7	(56) 36	35
萌芽 (2008年度まで) 挑戦的萌芽 (2009年度から)	(7) 1	0	(3) 2	2	(6) 4	4	(5) 3	2	(6) 3	2	(27) 13	10
若手 (S)											(0) 0	0
若手 (A)					(1) 0						(1) 0	0
若手 (B)	(15) 5	5	(18) 6	6	(9) 5	3	(9) 4	3	(11) 6	7	(62) 26	24
若手研究 スタートアップ (2009年度まで) 活動スタート 支援 (2009年度から)	(4) 0				(2) 1	1	(4) 2	2	(2) 1	1	(12) 4	4
特別研究 員推奨費	(3) 3	2	(2) 2	1	(3) 3	2	(3) 7	6	(2) 2	2	(13) 17	13
研究成果 公開促進 (学術図書)	(4) 0		(2) 1	1	(1) 1	2	(2) 2	5	(2) 1	1	(11) 5	9
研究成果 公開促進 (研究データベース)							(1) 1	3	(1) 1	3	(2) 2	6
計	(58) 25	78	(49) 25	78	(48) 26	68	(45) 37	64	(48) 26	43	(248) 139	331

※件数の上段 () 書は申請件数、下段は採択件数。金額は研究代表者として採択された研究課題の直接経費の金額を表す。

※各種目ごとの 100 万円未満の額は 50 万円以上切り上げ、50 万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

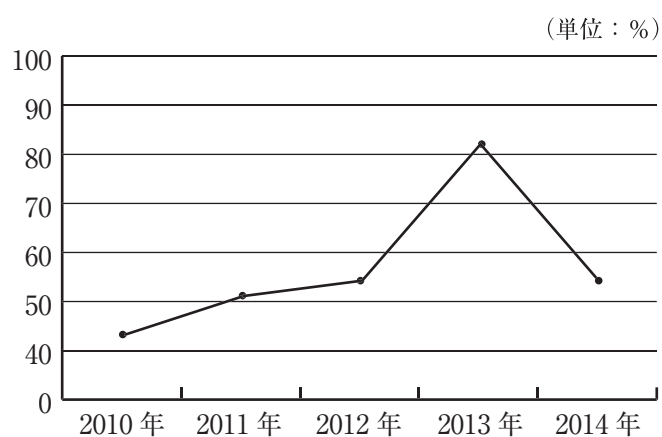
<一人当たりの申請率（申請件数／教員数）>

2010 年度 (教員数 24 名)	2011 年度 (教員数 24 名)	2012 年度 (教員数 22 名)	2013 年度 (教員数 25 名)	2014 年度 (教員数 23 名)	平均
2.42	2.04	2.18	1.80	1.86	2.80

<一人当たりの獲得額（採択金額／教員数）>（単位：百万円）

2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	平均
3.25	3.25	3.09	2.54	1.86	2.80

<科研費採択率実績（2010 年度～ 2014 年度）>



(D) 外部資金受入状況

<民間等との共同研究、受託研究、奨学寄付金受け入れ状況>

（金額単位：千円）

区 分		2010 年	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年
民間等との共同研究	件数	2	2	0	3	3
	金額	15,352	7,100	0	0	0
受 託 研 究	件数	7	8	6	5	5
	金額	16,748	29,085	50,372	63,367	38,616
受 託 事 業	件数	2	0	1	3	1
	金額	4,260	0	2,480	3,454	54
寄 附 金	件数	1	1	4	4	4
	金額	1,000	300	44,280	39,810	33,420
学 術 指 導	件数	1	0	0	0	0
	金額	500	0	0	0	0
計	件数	13	11	11	15	13
	金額	37,860	36,485	97,132	106,631	72,631

＜科研費以外の外部資金明細＞

(金額単位：千円)

区分	2009 年度		2010 年度		2011 年度	
	金額	受 入 先	金額	受 入 先	金額	受 入 先
共同研究	12,052	東北電力(株)研究開発センター	14,252	東北電力(株)研究開発センター	6,000	東北電力(株)研究開発センター
	1,100	三菱電機特機システム(株)	1,100	三菱電機特機システム(株)	1,100	三菱電機特機システム(株)
受託研究	5,900	科学技術振興機構	2,200	科学技術振興機構	1,300	科学技術振興機構
	7,865	金沢大学	1,300	科学技術振興機構	760	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
	1,300	埼玉大学	7,099	金沢大学	6,744	金沢大学
	4,264	福島大学	1,199	埼玉大学	3,215	福島大学
	1,000	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	950	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	6,500	科学技術振興機構
			3,500	福島大学	3,800	栗原市
受託事業			500	三菱電機(株)	500	三菱電機
					6,266	宮城県
寄 附 金	5,500	日本学術振興会	2,010	日本学術振興会		
	280	日本学術振興会	2,250	日本学術振興会		
寄 附 金	1,000	カシオ科学振興財団	1,000	稲森財団	300	公益財団法人野村財団
	182	日本科学協会				
学術指導	1,000	鹿島建設(株)土木設計本部	500	鹿島建設(株)土木設計本部		
	210	日本ガス協会				

区分	2012 年度		2013 年度		2014 年度	
	金額	受 入 先	金額	受 入 先	金額	受 入 先
共同研究						
受託研究	4,264	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	6,500	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	30,631	独立行政法人情報通信研究機構
	2,080	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	5,967	金沢大学	6,264	独立行政法人森林総合研究所
	6,070	金沢大学	13,750	独立行政法人情報通信研究機構	1,000	独立行政法人新エネルギー産業技術総合開発機構
	14,960	独立行政法人情報通信研究機構	34,210	独立行政法人情報通信研究機構	243	蔵王町長
	22,473	独立行政法人情報通信研究機構	2,940	独立行政法人土木研究所	479	独立行政法人科学技術振興機構
	525	鹿島建設株式会社				
受託事業	2,480	日本学術振興会	2,460	日本学術振興会	54	宮城県知事
			74	宮城県知事		
寄 附 金			920	日本学術振興会		
	24,000	特例民法法人上廣倫理財団	28,000	公益財団法人上廣倫理財団	30,000	公益財団法人上廣倫理財団
	4,990	三井物産株式会社	11,440	公益財団法人東レ科学振興会	1,430	公益財団法人東レ科学振興会
	15,130	公益財団法人東レ科学振興会	100	財団法人東北開発記念財団	490	公益財団法人東京地学協会
寄 附 金	160	公益財団法人日本科学協会	270	公益法人トヨタ財団	1,500	公益財団法人 JFE 21 世紀財団
学術指導						

< 科研費以外の外部資金一覧 (2014 年度) >

(金額単位：円)

名 称 ・ 題 目	研究者	相手方・委託者・寄附者	金 額
民間等との共同研究			
Pi-SAR2 公募研究：自然災害の状況把握のためのレーダポーラリメトリ・インターフェロメトリ応用研究	佐藤源之	独立行政法人情報通信研究機構	0
偏波校正と東北アジア地域におけるレーダポーラリメトリを利用した環境計測	佐藤源之	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	0
多時間偏波 SAR データを利用した自然災害被害の被災状況把握	佐藤源之	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	0
受託研究			
電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発	佐藤源之	独立行政法人情報通信研究機構	30,630,580
環境研究総合推進費「小笠原諸島の自然再生における絶滅危惧種の域内域外統合的保全手法の開発」	千葉 聡	独立行政法人森林総合研究所	6,264,000
S I P (戦略的イノベーション創造プログラム) インフラ維持管理・更新・マネジメント技術／モニタリングシステムの現場実証／地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング	佐藤源之	独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	1,000,000
蔵王町ジオガイド養成のための蔵王地域地質の基礎資料の作成	宮本 毅	蔵王町長	243,000
JST フューチャー・アース (気候工学) (ステークホルダー)	石井 敦	独立行政法人科学技術振興機構	478,500
受託事業			
みやぎ県民大学「大学開放講座」	センター長	宮城県知事	54,000
寄附金			
上廣歴史資料学研究部門 (寄附研究部門)	平川新	公益財団法人上廣倫理財団	30,000,000
東レ科学技術研究助成	平野直人	公益財団法人東レ科学振興会 (平野直人)	1,430,000
公益財団法人東京地学協会 研究・調査助成金	平野直人	公益財団法人東京地学協会 (平野直人)	490,000
公益財団法人 JFE21 世紀財団 研究助成金	寺山恭輔	公益財団法人 JFE21 世紀財団	1,500,000
学術指導			

<補助金間接経費>

(金額単位：百万円)

区 分		2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度
補助金間接 経 費	件 数	22	22	27	26
	金 額 (百万円)	12	8	8	6
受入該当費目		特別推進、 基盤研究 A、B、C 若手 B 挑戦的萌芽	特別推進、 基盤研究 A、B、C 若手 B 挑戦的萌芽	基盤研究 A、B、C 挑戦的萌芽 若手 B 研究活動スタート 支援	基盤研究 A、B、C 挑戦的萌芽 若手 B 研究活動スタート 支援 特別研究員奨励費

< 2014 年度獲得科研費一覧 >

(金額単位：千円)

No.	研究 種目	代表者氏名 研究者番号	区 分	研究 期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接 経費
1	基盤 A	岡 洋樹 00223991	海外	2011- 2014	東北アジアにおける辺境地域社会再編と 共生様態に関する歴史的・現的研究 (23251003)	6,200	1,860
2	基盤 A	佐藤源之 40178778	一般	2014- 2018	圧縮センシングと最適空間サンプリングに よる地雷検知用レーダ・イメージングの効 率化 (26249058)	6,700	2,010
3	基盤 B	谷口宏充 70125251	一般	2012- 2015	東日本大震災からの復興を支援する科 学コミュニケータ養成プログラムの開 発と実践 (24300262)	3,700	1,100
4	基盤 B	千葉 聡 10236812	一般	2012- 2014	過去で未来を守る：保全古生物学の確立に 向けて (24340128)	3,300	990
5	基盤 C	瀬川昌久 '00187832	一般	2012- 2014	現代中国社会の変容とその研究視座の 変遷—宗族を通じた検証 (24520907)	300	90
6	基盤 C	李 善姫 30546627	一般	2012- 2014	震災後の東北における地域再編と結婚 移民女性の社会参画に関する文化人類 学的考察 (24520908)	900	270
7	基盤 C	高橋一徳 60431475	一般	2012- 2014	土壌特性の解析による地雷検知センサ 性能評価とその応用 (24612001)	700	210
8	基盤 C	明日香壽川 90291955	一般	2013- 2015	経済モデル分析を中心とした炭素制約 が国際競争力に与える影響の学際的分 析 (25340135)	1,100	330
9	基盤 C	石井 敦 30391064	一般	2013- 2015	炭素隔離技術のデモンストレーション プロジェクト：マスメディアと意思決 定要因分析 (25340136)	1,000	300
10	基盤 C	磯部 彰 90143841	一般	2013- 2016	明清教派系宝巻盛衰の研究—武神と聖 母神信仰をめぐって— (25370040)	1,000	300
11	基盤 C	柳田賢二 90241562	一般	2013- 2015	現在の中央アジアにおけるリングア ランカとしてのロシア語の特徴と変容 の研究 (25370458)	800	240
12	基盤 C	鹿野秀一 70154185	一般	2013- 2015	浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタ ン食物網へあたえる影響 (25440232)	1,000	300
13	挑戦的 萌芽	高倉浩樹 00305400		2013- 2015	東日本大震災後の民俗文化にかかわる 災害民族誌研究の国際的ネットワーク 構築 (25580179)	1,200	360

No.	研究 種目	代表者氏名 研究者番号	区分	研究 期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接 経費
14	挑戦的 萌芽	塩谷昌史 70312684		2014- 2015	帝政ロシアの統治構造－情報収集・管理の観点から－ (26590054)	600	180
15	若手 B	稲澤 努 30632228		2013- 2015	中国における定住政策とエスニックカテゴリーの変遷－山地民、水上居民を対象として (25770302)	500	150
16	若手 B	高橋陽一 40568466		2014- 2016	日本近世における旅の歴史的特質の解明 (26770213)	1,400	420
17	若手 B	金 賢貞 20638853		2014- 2016	韓国地域社会における社会関係資本の生成・変化とローカリティ構築に関する実証的研究 (26870037)	1,200	360
18	若手 B	麻田雅文 30626205		2014- 2015	スターリンの「満蒙問題」、1921-1931年 (26870055)	1,400	420
19	若手 B	前田しほ 70455616		2012- 2014	20世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究 (24720145)	1,100	330
20	特別研究員奨励費	小林宏至 00187832		2013- 2015	ポスト近代社会における中間集団としての宗族組織の社会人類学的研究 (25・6576)	1,100	330
21	研究成果公開促進費 (学術図書)	高倉浩樹 00305400		2013- 2014	(刊行物名) Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia (256002)	1,200	0
22	研究成果公開促進費 (データベース)	磯部 彰 90143841		2013- 2014	(データベース名) 東アジア出版文化研究資料画像データベース (257001)	2,900	0
23	研究活動スタート支援	佐々木 聡 60704963		2013- 2014	祥瑞災異思想の六朝以降の展開と社会受容－天文五行占を中心として－ (25884003)	900	270
24	特別研究員奨励費	鈴木紀之 00724965		2012- 2014	繁殖形態の多様性と熱帯における多種共存メカニズム (24・3112) [転出]	1,100	330
25	若手 B	鈴木紀之 00724965		2014- 2015	同種精子優先の進化的・生態的帰結 (26840137) [転出]	900	270
26	挑戦的 萌芽	徳田由佳子 00375213		2012- 2014	ロシア新聞データベースの構築と日露報道の比較研究 (24653112) [廃止]	500	150
研究者代表分 小計						42,700	11,580

No.	研究 種目	代表者氏名 研究者番号	区分		研究課題名（課題番号）	交付額	間接 経費
	基盤 S	佐藤源之 40178778	一般	分担金	乾燥地災害学の体系化（鳥取大学・篠田教授）(25220201)	1,000	300
	基盤 A	石井 敦 30391064	一般	分担金	レジームコンプレックスとしての国際漁業資源管理：意思決定要因と有効性分析（早稲田大学・太田教授）(23243031)	808	242
	基盤 B	高倉浩樹 00305400	一般	分担金	震災復興の公共人類学：福島県を中心とした創造的開発実践（東京大学・関谷准教授）(26284136)	760	228
	基盤 B	佐藤源之 40178778	一般	分担金	貯水施設および基礎の可視化型健全性監視技術の開発（農業・食品産業技術総合研究機構・黒田主任研究員）(25292147)	300	90
	基盤 B	荒武賢一朗 90581140	一般	分担金	近世・近代移行期における公共財供給と『地域社会』：比較史の視点から（東京大学・谷本教授）(25285104)	250	75
	基盤 B	前田しほ 70455616	一般	分担金	社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究—旧ソ連・中国・ベトナム（北海道大学・越野准教授）(25283001)	300	90
	基盤 B	麻田雅文 30626205	一般	分担金	ソ連軍接収関東軍文書に関する日露共同研究（国文学研究資料館・加藤助教）(26284103)	300	90
	基盤 C	岡 洋樹 00223991	一般	分担金	聖書翻訳史から見るモンゴルのキリスト教思想（清泉女学院大学・芝山教授）(26370088)	100	30
	基盤 C	李 善姫 30546627	一般	分担金	「表現の自由」とヘイト・スピーチ法規制をめぐる社会学的研究（大妻女子大学・鄭教授）(26380696)	140	42
研究分担者分 小計						3,958	1,187
合 計						46,658	12,767

研究活動

(1) プロジェクト研究ユニット

東北アジア研究センターは、平成 19 年度の組織改編によって、新たに基礎研究部門とプロジェクト研究部門を設置した。プロジェクト研究部門は、センター専任・兼務教員によって構成されるプロジェクト・ベースの組織であり、これにより大規模研究プロジェクトを立ち上げるとともに、外部資金獲得の受け皿とすることを目的としたものである。

本年度は、以下の 9 研究ユニットが活動した。

(A) 2014 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧

〔ユニット名（研究年度・代表者）〕

- 21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット
(2009 年度～2015 年度・岡 洋樹)
- 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット
(2012 年度～2015 年度・瀬川昌久)
- 20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット
(2012 年度～2016 年度・寺山恭輔)
- 減災をめざした電波科学研究ユニット
(2013 年度～2015 年度・佐藤源之)
- 東北アジア言語文化遺産研究ユニット
(2013 年度～2016 年度・栗林 均)
- 出版文化資料データベース研究ユニット
(2013 年度～2015 年度・磯部 彰)
- 災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット
(2014 年度～2016 年度・高倉浩樹)
- 東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット
(2014 年度～2019 年度・明日香壽川)
- 東北アジアにおけるジオパークの可能性の研究ユニット
(2014 年 12 月 10 日廃止)

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット			
研究期間	2009（平成 21）年度 ～ 2015（平成 27）年度（7 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	岡 洋樹	東北アジア研究センター	工藤純一	東北アジア研究センター
	佐藤源之	東北アジア研究センター	鹿野秀一	東北アジア研究センター
	石渡明	東北アジア研究センター	高倉浩樹	東北アジア研究センター
	瀬川昌久	東北アジア研究センター		
外部評価者	氏 名	所 属		職 名
	林 裕明	島根県立大学総合政策学部		准教授
	華 立	大阪経済法科大学		教授
	下倉 渉	東北学院大学文学部		教授
	外部評価会の 実施		(中間・最終) 年月日 参加者：ユニット組織〔 〕 名、モニター〔 〕 名	
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔6,200,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	6,500,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究			
ユニットが 主催した 研究集会・企画	研究会〔1 回〕 加藤九祚氏特別講演会「シベリア抑留からシベリア民族学史の研究へ」			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	本プロジェクトは、東北アジア研究センター及び内外の研究者・機関が展開する個別課題に関わる共同研究やプロジェクトの成果を統合し、「東北アジアとは何か」という問いに対する回答を準備し、当該地域像を研究者コミュニティや社会に向けて発信することをミッションとする。具体的には、東北アジアを視座として分野横断的に個別研究成果を組み合わせながら、統合的地域像を創出するために一連の研究集会やシンポジウムを企画・運営する。同時に地域研究が不可欠の要素として要求する研究対象地域の研究者コミュニティとの国際的連携を確保しながら、地域理解・地域像の共有を目指す。 今年度は、以下の活動を行った。 1. 部局間学術交流協定に基づく共同研究の実施 2011 年に富山大学極東地域研究センター及び島根県立大学北東アジア地域研究センターとの間に締結した学術交流協定に基づき、共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」(2011（平			

	成 23) ～2014 (平成 26) 年度) を運営し、平成 27 年 3 月 8 日、東北大学東京分室において国際シンポジウム「越境する東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催した。共同研究の実施により、部局間協定組織間での実質的な研究を推進することができ、これをベースとした将来的な研究展開の展望を得ることができた。 2. 国際的学術交流と研究協力体制の構築 国際的学術交流体制のよりいっそうの整備を目指して、韓国国際財団、ソウル大学アジア研究センターと研究協力に関する意見交換を行った。 また富山・島根との協力の実績をベースとして、さらに北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターを加え、人間文化研究機構による地域研究として「北東アジア研究」を展開することについて、協議を行っている。 これにより、国内・国際的研究交流態勢の拡充への展望を得た。 また東北アジア研究センターの東北アジア研究成果の発信とさらなる展開を目指して、平成 27 年 12 月に開催予定の東北アジア研究センター創設 20 周年記念シンポジウムの企画・準備を研究企画室との連携で進めた。 3. その他 平成 27 年 1 月 31 日に開催した特別講演会では、東北アジア研究センターの泰斗加藤九祚氏から「シベリア抑留からシベリア民族学史の研究へ」と題する講演を受けた。 研究代表者岡は、平成 26 年 9 月 22～25 日、中国中央民族大学の招聘により、同大蒙古語文学系が実施した「海外知名学者民大論壇」において講演を行い、同大の研究者と交流を行った。
成果公開状況 計画	

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

東北アジア研究の遂行にあたっては、国内外の研究者・研究機関との連携・協力が不可欠である。本ユニットでは、富山大学極東地域研究センター・島根県立大学北東アジア地域研究センターとの協定に基づく共同研究を実施しているが、最終年度の国際シンポジウムを開催して成果の報告を行った。共同研究の実施にあたっては、調査の実施やシンポジウム開催にあたりロシア、モンゴル、中国の協定締結機関及び研究者の実質的協力を得ることができた。

さらにこれをベースとして、一層の国内機関協力を進めるため、人間文化研究機構を通じた研究連携について、現在協議を進めているところである。

また本年度は、韓国国際財団、ソウル大学アジア研究センターとの交流を行い、今後の研究協力について意見交換を行っている。

また研究代表者岡は、2014 年 9 月 22～25 日、中国中央民族大学蒙古語文学系が主催する「海外知名学者民大論壇」に講師として招聘され、講演を行った。

センター長裁量経費配分の支出概要

配分額：300,000 円

特別講演会開催経費：52,640 円

残額：247,360 円

残額が生じた理由：国内関連機関との研究連携のための出張費用について、外部組織及び他の費目からの支出が確保されたため。

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉 歴史学、経済学、人口学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

〈特筆事項〉センターの各ユニットとの連携により、文系・理系を含めた研究協力態勢の構築に努めている。

国際連携

〈連携機関名〉モンゴル科学アカデミー歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院

〈連携の形態〉部局間学術交流協定

国内連携

〈連携機関名〉富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、一橋大学経済研究所、早稲田大学文学学術院、山形大学人文学部、名古屋大学大学院国際開発研究科、青山学院大学国際政治経済学部、立命館大学経済学部

〈連携の形態〉協定に基づく共同研究の実施、国際シンポジウムへの研究者の参加・報告

〈連携機関数〉8

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉大学院環境科学研究科

〈ポスドクの活用形態〉RA としてシンポジウム開催補助業務に従事

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本年度は、ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」の最終年度にあたり、国際シンポジウムを開催して成果の報告を行った。本ユニットが課題とする国内外の研究機関との組織的研究協力態勢の構築の面では、韓国国際財団やソウル大学アジア研究センターと研究交流に関する意見交換を行った。今後具体的な協力の展開が課題となる。

また東北アジア研究センター20周年記念行事として平成27年度に開催する記念行事・国際シンポジウムの企画立案と準備を行った。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット			
研究期間	2012（平成 24）年度 ～ 2015（平成 27）年度（4 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	瀬川昌久 川口幸大	東北アジア研究センター 文学研究科（本センター兼 務教員）		
	稲澤 努	東北アジア研究センター		
外部評価者	氏 名	所 属	職 名	
	西澤治彦 曾士才 塚田誠之	武蔵大学人文学部 法政大額国際文化学部 国立民族学博物館	教授 教授 教授	
	外部評価会の 実施	（中間）2014 年 3 月 31 日 参加者：ユニット組織〔〕名、モニター〔〕名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔500,000 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	500,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	（1）現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証 （2）華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究—華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて			
ユニットが 主催した 研究集会・企画	研究会等は全て傘下の共同研究主催のものとして実施、本ユニットはその支援を行った。			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	本ユニットは、近年の経済発展、グローバル化、文化の資源化などの諸変化を背景に、親族・家族、民族・地方アイデンティティ、信仰・習俗等従来の文化人類学が主要な研究テーマとして扱ってきた対象がどのような変化を経験しつつあるのか、そしてまたそれに連動して、研究者の問題意識や研究手法がどのように変遷しつつあるのかを、主に日本に在住している文化人類学的中国研究者たちとの連携のもとに総括を行い、今後の中国研究についての新たな展望を開くことを目的としている。 本年度は本センター共同研究 2 件の運営と、同公募研究 1 件の運営支援を行った。センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証」については、昨年度までの研究成果を踏まえ、5 月 16 日に東京で成果とりまとめのための研究会を、また 5 月 17 日には幕張メッセにおいて日本文化人類学会第 48 会研究大会の分科会発表を行った。さらにそれらを取りまとめ、研究成果出版のための編集作業を行った。本ユニットはこれらの活			

	動のための旅費・会場費の支援や各種連絡事務などのサポートを行った。なお、既に脱稿した同共同研究の成果報告は、年度内の出版の予定であったが、出版社の都合で遅延しており平成 27 年度前半には出版される予定である。 もう一つのセンター共同研究「華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究―華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて」については、8 月 2 日に日中両国の文化人類学者を招聘し研究会を開催した他、その成果に基づいて報告書の出版を企画した。本ユニットはこれらの活動のための旅費の支援、事務連絡等のサポートを行った。 これらの活動に加え、本年度センターの公募型共同研究として採択された「家・空間における食実践に関する文化人類学的研究―社会関係を開閉するという視座から」（代表者・三浦 哲也、育英短期大学）についても、研究内容が本ユニットの趣旨と深く関わり、またメンバーとして瀬川、稲澤の両名が参加していることから、研究連絡や研究会会場準備など、運営に関するサポートを行った。さらに、2 月 14 日開催の東北アジア研究センターシンポジウム「東アジアの世界遺産と文化資源」も、その内容において本ユニットに深く関わるものであることから、その企画段階から本ユニットは積極的な支援を行い、講師・コメンテーター等との研究連絡ならびに広報活動などにおいて重要なサポートを実施した。
成果公開状況 計画	・『宗族と中国社会の現在―対象変化と研究視座の変遷をめぐる考察』風響社から 2015 年度前半出版予定 ・「僑郷―華僑のふるさとの表象と実像」引路社(予定)から出版準備中 ・「〈食べる〉の人類学―社会関係を開閉する食実践」時潮社(予定)から出版準備中。

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

今日の経済次元でのグローバリゼーションの進展から一見普遍的なものに見える社会の近代化のプロセスも、より深い質的な観察を踏まえると、決して同一のプロセスではなく、各社会の独自性が厳然として存在する。東アジアの親族・家族理念に基づく諸社会規範は、確かに現代社会の中で大きな変容にさらされつつあるが、逆にそうした前世代の社会規範を客体化し、それを文化的な資源とする動きも存在しはじめている。中国の宗族再生現象はまさにその代表的なものであり、その動向をつぶさに分析することは、欧米社会のみを唯一のモデルとしては語ることはできない人類全体にとっての「近代」の新たな展開の方向性を予見する上で、極めて重要な手がかりである。同様に、出稼ぎや移民活動も、決して近代社会特有の普遍的な経済活動の一部としてのみ語るべきではない。そこには地域社会ごと個人ごとの特殊要因が潜んでおり、従来のマクロで俯瞰的な視野からの考察のみに終始することなく、より文化的背景まで踏み込んだ理解が求められる。中国の既に豊かになりつつある地方からも依然として移民が途絶えない現象なども、そうした視点からでなければ説明がつかない。

センター長裁量経費配分の支出概要

主として本ユニット傘下の共同研究『華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究―華僑華人研究

の新たなパラダイムに向けて』が主催した、日中両国の文化人類学者を招聘しての研究会の開催費用を支出した他、同共同研究ならびに他の本ユニット傘下の共同研究の研究会実施準備のための文献複写等に支出を行った。

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 2 〈分野名称〉 文化人類学、地域研究

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉研究成果の刊行（現在3冊の編集が進行中）、公開シンポジウムにおける成果の公開

国際連携

〈連携機関名（連携の形態）〉

広東省民族宗教研究院（本センターとの部局間協定）

玉林師範大学、延辺大学

（研究者個人ベースでの研究会参加（各所属大学はそれをサポートしてくれているという意味での協力））

国内連携

〈連携機関名〉東京女子大学、神戸外国語大学、京都文教大学、鹿児島大学、首都大学東京

〈連携の形態〉研究者個人ベースでの研究会参加

（各所属大学はそれをサポートしてくれているという意味での協力）

〈連携機関数〉5

学内連携

〈連携部局名〉文学研究科、教育学研究科

〈連携の形態〉兼務教員派遣

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

環境科学研究科での指導学生の研究会参加

〈ポスドクの活用形態〉学振研究員の研究会への参加、HP作成など

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

4年刊のうちの3年目であり、本年度までの成果をまとめて成果出版などのアウトプットを見据えてその準備を行った。きわめて順調に推移している。唯一制度的課題といえば、教育研究支援者

の継続雇用年限が 3 年であり、本ユニットのような 4 年を継続期間とするものの場合、最終年度を 1 年間残して交代を余儀なくされるという問題がある。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット			
研究期間	2012（平成 24）年度 ～ 2016（平成 28）年度（5 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	寺山恭輔	東北アジア研究センター		
	上野稔弘	東北アジア研究センター		
	麻田雅文	東北アジア研究センター		
外部評価者	氏 名	所 属	職 名	
	王柯	神戸大学	教授	
	家近亮子	敬愛大学	教授	
	浅岡善治	東北大学文学部	准教授	
	外部評価会の 実施	（中間）2015 年 2 月 28 日 参加者：ユニット組織 2 名、モニター 3 名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔500,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔500,000 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成（JFE21 世紀財団／2015 年 1 月～）〔1,500,000 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	800,000 円		
	ユニットが 主催した 共同研究	新疆、満洲をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策		
ユニットが 主催した 研究集会・企 画	国内会議〔1 回〕／国際会議〔1 回〕			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	日本、ロシア、中国の三大国を中心とする『東北アジア』地域では、20 世紀初めのロシア革命、辛亥革命によりロシア帝国、清朝が崩壊し、ロシアではソ連が 1992 年の崩壊まで存在し、中国では中華民国との内戦に勝利した中国共産党が現在に至るまで中華人民共和国を統治している。本研究ユニットでは、革命、内戦、対外戦争など動乱の 20 世紀を経過した中露両大国の歴史について、そのどちらとも密接に関係した歴史を有する日本人の視点から、積極的に史料を発掘することと、それらの新史料をもとに新たな歴史像を構築することを目指している。本ユニットではスターリン時代のソ連に関心を持つ寺山と、蒋介石の統治した中華民国時代に関心を持つ上野がそれぞれロシア、中国史を担当している。関心を抱く時代がほぼ重なり、それら関係した事件、事象から 70 年以上経過しているため、比較的一次史料の入手が容易になりつつあるという想定のもとでユニットを立ち上げた。お互いに両国の国境隣接地域に対する政策に関心を抱いているため、ここ数年は中国の新疆地域を研究対象とし、自			

	国史ばかりでなく隣接国の状況について、それぞれの知識を提供しあう形で研究を進めてきた。また教育研究支援者として中東鉄道史の専門家でスターリンの満洲政策に関心を有する麻田が教育研究者として研究を進めた。これまで受け取っていた科研費（2009 年～2013 年）に続いて、 今年度も採択を目指したが残念ながら今年度は採択されなかったため、現地における史料収集作業には困難をきたした。ユニットとしては昨年度に引き続き、共同研究「新疆、満洲をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策」を立ち上げ、センター経費による専書『スターリンと新疆』を刊行することができた。
成果公開状況 計画	

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

両国にまたがる地域、及び両国が接する地域（すなわち満洲、沿海州、モンゴル、新疆、中央アジアなど）を主なターゲットにしている。本共同研究ではこれらの地域に対する両国の政策を比較検証するとともに、両国が共同で対処した問題（対日政策など）に関して、共同でアプローチすることで、一国史研究が陥りがちな限界の打破も目指している。本年度は特にソ連の新疆政策について専書を刊行したが、新疆ウイグル自治区では 21 世紀に入っても中華人民共和国からの独立を目指す運動が収まっておらず、しばしばニュースで取り上げられている。歴史に遡って本地域の騒乱の歴史を跡付ける本書の刊行は、ロシアや中央アジアとの関係を改めて考察し、東北アジア地域の複雑な構造を理解するための一助となる。

センター長裁量経費配分の支出概要

2014 年度 12 月にモスクワで開催した日露歴史セミナーにおける発表論文を集めた論文集の刊行に経費を充当したほか、外部資金獲得、次年度の科研費獲得のための準備作業として支出した。

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔無〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

〈特筆事項〉特になし

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉ロシア語、日本語による学術成果の市販

学内連携

〈連携部局名〉東北大学文学研究科

〈連携の形態〉外部評価委員として参加

〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東北アジア研究センター

〈ポスドクの活用形態〉該当せず

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本年度は当プロジェクト研究期間の中間にあたり、各研究分担者が研究を推進するとともに、後半に向けてこれまでの進行状況を精査する時期でもある。その意味において、寺山が単著『スターリンと新疆』を上梓したことは本プロジェクトのメルクマールと位置づけられる。また2月28日には外部審査員による中間評価を実施し、中国近現代史、中国民族関係史、ロシア近現代史の専門家を招いて本プロジェクト立ち上げの経緯および発足後の活動状況を報告し、これについて忌憚のない意見を賜った。外部審査員の評価はおおむね良好であったが、本プロジェクトが持つロシア史や中国史といった「一国史」のからを打ち破った歴史理解の視角を提示するという点に大きな期待を寄せつつ、この方面に向けての成果発信に注力するよう意見が寄せられた。研究期間後半の活動は外部資金獲得の状況により左右されるが、今年度の成果および中間審査の意見を踏まえつつ、次年度以降の活動を調整するとともに最終年度に向けての成果とりまとめについても検討を進める必要がある。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	減災をめざした電波科学研究ユニット			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2018（平成 30）年度（5 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	佐藤源之 高橋一徳 Christian Koyama	東北アジア研究センター 東北アジア研究センター 東北アジア研究センター	藤沢 敦 金田明大	東北大学埋蔵文化財調査 室・特任准教授 奈良文化財研究所・主任研究員
外部評価者	氏 名	所 属		職 名
	金田明大 佐久間光平 菊地芳朗	奈良文化財研究所 宮城県教育委員会文化財保護課 福島大学行政政策学類		主任研究員 技術副参事兼技術補佐 教授
	外部評価会の 実施	無し		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（災害研特別プロジェクト）〔1,000,000 円〕 総長裁量経費〔6,000,000 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔5,000,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	12,000,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進			
ユニットが 主催した 研究集会・企画	国内会議〔1 回〕 国連防災世界会議 パブリック・フォーラム 電波科学による防災・減災と地方自治体との連携（2015 年 3 月 15 日）			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	具体的な活動として平成 26 年度は宮城県ならびに福島県の文化財保護課と協力し、松島市瑞巖寺などでの遺跡調査を実施した。加えて平成 26 年度は宮城県、福島県、岩手県の各県警と協力した津波被災地域の搜索活動を実施した。これまでの警察やボランティアによる砂浜搜索は砂浜表面を目視で搜索するにとどまっていたが、地中レーダ(GPR)を使用することで、深さ 50cm から 1m 程度に、津波によって堆積した遺留物が非常に多く残っていることが確認でき、今後の搜索の可能性を広げられることを実証した。 震災復興に直接関わらない遺跡調査についても、技術開発の観点から有用と判断した場合、積極的に協力している。 本ユニットでは、こうした活動を、大学が地方自治体に対して技術指導を行う体制に移行していきたいと考えており、そのために「特別プロジェクト経費」を大学に対して概算要求している。			

	さらにこうした活動を広く周知するために、国連防災世界会議 パブリック・フォーラム「電波科学による防災・減災と地方自治体との連携」を企画した。
成果公開状況 計画	

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

中国での土砂災害などへの対策としての研究活動紹介を、中国の大学における集中講義などで行っている。

センター長裁量経費配分の支出概要

人件費のみ

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉 考古学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

〈特筆事項〉 遺跡調査への協力

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉 宮城、岩手、福島県警と協力した搜索活動

国内連携

〈連携機関名〉 奈良文化財研究所

〈連携の形態〉 情報交換

〈連携機関数〉 1

学内連携

〈連携部局名〉 埋蔵文化財調査室

〈連携の形態〉 情報交換

〈連携部局数〉 1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉 環境科学研究科

第三者による評価・受賞・報道など

新聞、テレビ、ラジオ報道多数

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

奈良文化財研究所、宮城県文化財保護課などと連携した、地方自治体に対する技術支援活動を継続する。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	東北アジア言語文化遺産研究ユニット			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2017（平成 29）年度（5 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	栗林均	東北アジア研究センター	ハイ・セチンゴ	東北アジア研究センター
	岡洋樹	東北アジア研究センター	アー	
	斯欽巴図	東北アジア研究センター	アルタンザヤー	東北アジア研究センター
	ツォグバドラ フ・ガンツェツ ェグ	東北アジア研究センター	ユー・チュアン バドマオッサル	東北アジア研究センター
外部評価者	氏 名	所 属		職 名
	橋本勝 二木博史 フフバートル	大阪外国語大学 東京外国語大学 昭和女子大学		名誉教授 教授 教授
	外部評価会の 実施	(中間) 2015 年 2 月 13 日 参加者：ユニット組織 2 名、モニター 3 名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔500,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔500,000 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	1,000,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	伝統的モンゴル語辞書の研究（2014 年度）			
ユニットが 主催した 研究集会・企画	研究会〔回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	本ユニットの設置目的はユーラシア大陸に大帝国を建設したモンゴル族と満洲族の文字・言語で記録された多種多様な言語文化遺産を調査・整理・研究・再評価して、公開・保存する活動を行うことである。 2014 年度に、本ユニットは次のような研究事業成果の公開を行った。 1. 刊行物 (1)『蒙漢字典－資料編・原本影印－』（報告第 14 号、2014） 伝統的モンゴル文字による初めての活版印刷辞書。内容は 19 世紀に木版で出版された辞書に基づく。 (2)『「満文原档」所収モンゴル語文書の研究』（報告第 17 号、2015） 17 世紀前半の満洲国とモンゴルとの外交文書 47 点の影印とローマ字転写、訳、索引。			

	(3)『「初学指南」の研究－18世紀の口語モンゴル語－』（叢書第55号、2015） 18世紀末に満洲文字で表記されたモンゴル語の会話学習書のローマ字転写と訳、索引。 2.インターネットによる辞書検索システム 共同研究「伝統的モンゴル語辞書の研究」で制作された、清朝時代のモンゴル語辞書を中心に、インターネットでこれらの資料を利用できる検索システムを公開している。
成果公開状況 計画	刊行物（著書）3点は2014年11月に1点、2015年2月に2点公刊した。 ホームページ（辞書検索システム）は2014年12月より公開している。

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

2014年度において本ユニットは、主に研究成果公開の活動を行った。

研究成果公開は、刊行物を媒介にしたものと、インターネットを媒介にしたものがある。

刊行物では、次の3点を刊行した：

(1)『孝経－モンゴル語古訳本－』（2014）

(2)『「満文原档」所収モンゴル語文書の研究』（報告第17号、2015）

(3)『「初学指南」の研究－18世紀の口語モンゴル語－』（叢書第55号、2015）

それぞれ、14世紀、17世紀、20世紀のモンゴルにおける言語文化遺産を取り上げている。

インターネットでは、清朝時代に編纂されたモンゴル語と満洲語の辞書および文献史料である。

テーマ、および取り扱う対象は東北アジア地域のものであり、言語文化遺産を再評価して、現代に利用することのできる資料として提供している。

センター長裁量経費配分の支出概要

研究成果公開用ホームページの開発（80%）

研究支援者用プリンター、データ入力支援謝金、外部評価委員旅費（20%）

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

〈特筆事項〉

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉研究成果を3種類の刊行物として交換した。

ホームページに、資料検索、辞書検索システムを構築して30種類以上の資料をインターネットで
利用できるようにした。

国際連携

〈連携機関名〉 内蒙古大学蒙古学学院、内蒙古師範大学蒙古学学院、中央民族大学蒙古語文学系
〈連携の形態〉 部局間協力協定

国内連携

〈連携機関名〉 東京外国語大学 AA 研 IRC
〈連携の形態〉 共同研究
〈連携機関数〉 1

学内連携

〈連携部局名〉 無し
〈連携の形態〉 無し
〈連携部局数〉 0

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉 環境科学研究科
〈ポスドクの活用形態〉 RA 雇用

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本ユニットは、東北アジア地域におけるモンゴル語と満洲語の言語文化遺産を研究の対象としている。

モンゴル語の文字資料としては、伝統的モンゴル文字、パスパ文字、漢字、アラビア文字、トド文字、ソヨンボ文字、ワギンダラー文字、キリル文字、満洲文字等々、多様かつ大量の文献が残されている。2014 年度には、伝統的モンゴル文字と満洲文字、キリル文字の文献資料の成果物を公開することが出来た。今後は他種の文献資料に範囲を拡大していく。

研究ネットワークの形成としては、2014 年度に中国の内蒙古大学、内蒙古師範大学、中央民族大学との交流（部局間協力協定の延長、締結）が行われ、内蒙古大学蒙古学学院との間には『蒙漢詞典』の電子化公開に関する覚書を交わした。今後は、協力の内容をより具体的に実現することと、モンゴル国における研究機関との協力を進めていく。さらに国際シンポジウム、セミナー等によるネットワーク形成活動を積極的に進めて行くことが課題である。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	出版文化資料データベース研究ユニット			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	磯部 彰 佐々木聡	東北大学東北アジア研究センター 東北大学東北アジア研究センター		
外部評価者	氏 名	所 属	職 名	
	外部評価会の 実施	(中間・最終) 年月日 参加者：ユニット組織 [] 名、モニター [] 名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費 [1,500,000 円] 運営交付金（個人研究費）[0 円] 総長裁量経費 [0 円]		
	外部資金	科研費他政府資金 [2,900,000 円] 民間の研究助成 [0 円] 寄附など [0 円]		
	合 計	4,400,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	典籍文化遺産の研究			
ユニットが 主催した 研究集会・企画	その他 [1 回] 書道博物館との共同企画展「中村不折一僕の歩いた道—〈後編〉森鷗外、夏目漱石たちとの交流」における東北大学所蔵資料の展示(2015 年 2 月 10 日～3 月 15 日)、並びに、ギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」(2015 年 2 月 15 日)の開催			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	アジアの文化や歴史環境などを研究する上で、出版文化を主とする典籍資料は重要な役割を果たす。10 世紀に始まった木版印刷による資料は多岐に亘り、研究文献資料であるとともに、それ自体が文化遺産としての性格を持つ。本研究ユニットでは、特定領域研究、及び日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業による拠点形成、そして、特別推進研究を進める中で蒐集した東アジアの典籍の研究と、その文化財としての性格を明らかにし、その成果に基づいたデータベースを作成して一般に公表する。 同時に蒐集した出版関連の資料を共同利用して、近世から近現代の東アジア世界の構造及び出版物や写本の性格を明らかにするための共同研究を設置する。 当ユニットは科研費によるデータベース作成を中心としている。本年度は、中国説唱コレクション(清・民国)のアップ、及び明絵画資料、奉天勅命やヨーロ			

	ッパ文書など、元刻明印『北史』や明刻『元史』などの典籍を含む多様な文化財をデータベースにアップし、国際的に活用できる資料集成とし、逐次拡充を図っている。 その一方、原点や実物の展示についても考慮し、上野の台東区立書道博物館と共催した展覧会にて、東北大学附属図書館の協力も得て夏目漱石や中村不折の資料を公開し、一般市民へも資料を広く公開する一方、近代日本文化関係の研究活動とデータベース作成とを統合させる方向性を模索した。また、この共同企画展を研究の広報媒体としても 利用し、展覧会やそのチラシ作成を通して、東北アジア研究センターの活動を広く紹介することもできた。 また、共同研究では上山市立図書館で所蔵する上山藩明新館文庫の目録とその研究について今年度のセンター叢書を発行することで公表したが、来年度には共同研究で取り扱った広島市立中央図書館所蔵浅野文庫の目録関連資料を来年度のセンター叢書にて発行することが決定し、こちらも当ユニットの成果とするとともに、広報媒体として活用する予定である。
成果公開状況 計画	出版文化資料データベース研究ユニット http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/db-unit/ 東アジア出版文化研究資料画像データベース http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/eapub-db/ 東アジアの出版と文化 http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

典籍文化遺産の研究のため、元刻本や明清刊本、中国風物を描いた絵画資料、そして清朝口唱文芸本など、所蔵する貴重文献を多数アップした。その中でも、データベースで取り込んだ『北史』は東北アジア研究の根本資料であり、百衲本収録本と近似する版本で、劃期的なデータであると言える。また、『奉天勅命』は清朝が功臣に与えた五色写本文書で、東北のみならず江南織造府の活動を窺い知ることにも出来る史料である。

一方、中村不折は日清戦争の時、東北アジアへ向かった。そこで、旅順、金州などをスケッチし、『遼左画稿乙集』に収めた。従来は画家、そして中国の書法（六朝時代）研究者として知られているが、中村不折と東北アジアとは深い関係にあった点も、共同企画展を通して広報することが出来たのではないと思われる。明治・大正期の日本研究文献として、中村不折関連の資料もデータベース関連資料に組み入れたことは、従来の視点ではないことである。

センター長裁量経費配分の支出概要

本年度の予算は、ユニット経費 50 万の他、シンポジウム経費 100 万を得たので、東京の台東区立書道博物館にて実施した共催展覧会及びギャラリートークに係わる費用は、主にシンポジウム経費から充当した。

ユニット経費は、主に科研費（研究成果公開促進費(データベース)）ではまかなえないデータベース関連の費用に使用するとともに、上記共催展示会に関して、相手方との準備や総括で必要となる招聘、打ち合わせに係る出張旅費等にも充当した。

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 5 〈分野名称〉 博物館、美術史、日本文学、比較文化史学、中国文学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉上野の台東区立書道博物館での展覧会共催、及びギャラリートークの実施・運営、出版物配布等により、一般の人々に広くユニット活動を周知した。また、典籍を中心としたデータベースを逐次拡充して公開している。

国内連携

〈連携機関名〉台東区立書道博物館

〈連携の形態〉共催展覧会

〈連携機関数〉1

学内連携

〈連携部局名〉学術資源研究公開センター史料館、附属図書館

〈連携の形態〉協力

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東北大学東北アジア研究センター・文学研究科

〈ポスドクの活用形態〉専門研究員

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

データベースはユニット研究の主要な眼目でもあり、科研費研究成果公開促進費の助成を受けているため、本年度もデータベースに漢籍四部各種及び和書、絵画、ヨーロッパ文書などの資料画像データをアップした。今年度をもって科研費によるデータベース作成は終了することになるが、来年度もユニットによって、東北アジア関係の彫像や口唱文芸コレクションを含め日本中国及びヨーロッパの典籍文化財の画像データを引き続きアップし、データベースの充実を図って行く。同時に、文献批判のために、共同研究を進展させ、実りある成果を目指して相互を結びつけて推進させる予定である。

最終年度 該当〔有〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット			
研究期間	2014（平成 26）年度 ～ 2016（平成 28）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	高倉浩樹 金賢貞	東北アジア研究センター 東北アジア研究センター	及川高 木村敏明	東北アジア研究センター 文学研究科
外部評価者	氏 名	所 属	職 名	
	高桑史子 玉置泰明 松尾恒一	首都大学東京人文学部 静岡県立大学国際関係学部 国立歴史民俗博物館	教授 教授 教授	
外部評価会の 実施		(中間・最終) 年月日 参加者：ユニット組織〔 〕名、モニター〔 〕名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔500,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金 ※共同研究に記載 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	500,000 円		
ユニットが 主催した 共同研究	東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用 東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究			
ユニットが 主催した 研究集会・ 企画	研究会〔回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	東日本大震災によって東北地方を中心とする農村部においては民俗芸能・祭礼・生業などの地域に継承されてきた文化遺産が大きな被害を受けた。このユニットは、指定・登録（民俗）文化財を含む、より幅広い意味での文化遺産を地域社会がどのように継承・発展させていくのか調査研究を運営するとともに、その支援や地域開発に人文学がどのように貢献できるのか実践的取り組みを行いながら、災害に関わる応用人文学の方法の開発を設置目的とする。文化人類学・民俗学・宗教学などの質的社会調査を行う研究分野の共同によって現状分析を行う共同研究を運営するとともに、情報科学・教育学・博物館学などとも協力することで、被災した当該地域社会の文化遺産に関わる地域支援及び文化財行政支援に関わる実践と理論開発を行う。これらを通して、災害対応に関わる人類学・民俗学・宗教学などの人文学の牽引的組織・拠点組織となることを目指す。 本年度はユニットを立ち上げ研究体制を整えた。具体的には上記に示した二本の共同研究を組織し、一方は高倉が代表であるが、またもう一方は兼務教員			

	の木村敏明氏に組織してもらう体制を構築した。教育研究支援者には及川高に着任してもらい、ユニット及び共同研究の運営について補佐してもらう体制を整えた。二つの共同研究の活動を通して、東日本大震災に関わる社会文化研究の成果をニュージーランドとインドネシアで発表する会合を主催したのは大きな成果である。 また研究所等連携プロジェクト経費を用いて、学内の災害科学国際研究所の歴史学分野の研究者が主催する津波被災地の古映像復元と社会還元に関わるプロジェクトに関わり、災害に関わる応用人文の具体的なあり方について新しい知見を得た。また学内のボランティア支援室の教員とも交流し、学内のボランティアと災害に関わる人文の共同の可能性について検討した。こうしたことで学内の関係研究者・機関との本格的な連携体制を構築したことも重要な成果である。さらに2015年3月15日から仙台で開催される国連防災会議には、Disaster Risk Reduction Anthropology for the Local Intangible Cultural Heritageと題する展示を行い、ユニットの活動について紹介した。 その他として「アンドレア・ヒラタ氏を招いての意見交換会」(2014年11月12日)を行ったが、これはインドネシアの作家でスマトラ沖地震の経験として作品化した同氏が本学を訪問したことに伴い交流したものである。この活動によって学内のインドネシア留学生に対しても本ユニットの活動と目的を伝えることが出来た。
成果公開状況 計画	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/takakura26/index.html

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本ユニットは、日本研究組織としての側面ももっており、災害に際して日本社会・文化がどのような対応をするのかについての人類学・民俗学研究の点において成果を上げている。また激甚災害時に人類学・民俗学分野が行うべき調査研究支援に関わる内容についても明示しており、この点については応用地域研究としての意義も認められる。また海外の日本研究者との接点をつくりだしたという点でも重要な意義があった。

センター長裁量経費配分の支出概要

ユニットの活動に必要なPC器材の購入、研究成果のための旅費、研究ネットワーク拡張のための招聘旅費等

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉 文化人類学、民俗学、宗教学

文理連携性

文理連携性の有無〔有・無〕

〈特筆事項〉

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉災害民族誌の防災対策に向けた活動

学内連携

〈連携部局名〉災害科学国際研究所、ボランティア支援室

〈連携の形態〉研究交流

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉

〈ポスドクの活用形態〉

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本年度は初年度であり、ユニットとしての体制構築に尽力した。次年度では応用に関連して、より実質的な取り組みをおこなうとともに、研究面については日本国内内で国際会議を開催することなどを行う。

最終年度 該当〔無〕

東北アジア研究センター・プロジェクトユニット成果報告書 2014

研究題目	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築			
研究期間	2014（平成 26）年度 ～ 2019（平成 31）年度（6 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	明日香壽川	東北大学	岡本哲明	東北大学
	盧向春	東北大学	宮後裕充	東北大学
	石井敦	東北大学	毛昕平	東北大学
外部評価者	氏 名	所 属		職 名
	大原利廣	国立環境研究所		
	鈴木克典	金沢大学		
	増井利彦	国立環境研究所		
	外部評価会の実施	（中間・最終）年月日 参加者：ユニット組織〔 〕名、モニター〔 〕名		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔円〕 運営交付金（個人研究費）〔円〕 総長裁量経費〔円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔円〕 民間の研究助成〔円〕 寄附など〔円〕		
	合 計	円		
	ユニットが 主催した 共同研究			
ユニットが 主催した 研究集会・ 企画	国内会議〔1 回〕／2015 年に、エネルギー・ミックスや温暖化政策を専門とする実務者および研究者と中国などの温暖化政策の現状について知見を交換した。 国際会議〔1 回〕／2015 年 3 月に、中国の研究者 3 人を招待し、日本の大気汚染および温暖化政策の研究者および行政担当者と共に議論した。			
ユニット組織 設置目的 本年度の 研究事業成果 重要性の概要	周知のように中国は PM 2.5（微小粒子状物質）などによる大気汚染に悩まされており、日本への越境汚染も懸念されている。一方、中国でも日本でも温暖化対策は喫緊の課題である。このような状況のもと、本研究は、東アジアにおける統合的な大気環境管理に向けた汚染物質排出削減戦略の合意に資する研究を、コベネフィット・アプローチ（温室効果を持つ大気汚染物質を削減することにより、温暖化と大気汚染の対策を同時並行で行うアプローチ）に着目して行う。具体的には、PM2.5、オゾン、エアロゾルなどの大気汚染物質であると同時に温室効果も持ち合わせる物質による健康被害コストなどを定量化し、すでに研究従事者である盧と明日香が構築した温暖化政策評価経済モデル（Asia MERGE）に導入する。同時に、大気汚染物質の広域輸送（越境汚染）も、国立環境研究所などの研究成果を用いて定式化する。さらに本研究では、大気汚染			

	対策および温暖化対策の分野での国際協力の枠組みに関して国際関係論的視点を含む政治経済学的な観点から検討する。 本年度は、大気汚染による被害を含めた温暖化政策評価経済モデルの開発を進めるための基礎的なデータ収集および解析を行い、これからのモデル計算に必要なデータベースを構築した。また、これまで日本政府が行ってきたアジアでの環境協力の枠組みである東アジア酸性雨モニタリングネットワーク（EANET）に関して、その課題や今後のあるべき姿を明らかにするために関係者へのインタビューを行った。特に、欧州での酸性雨に関する国際条約締結において重要な役割を担った「臨海負荷量」という概念について、欧州の研究者の認識と日本の研究者の認識の違いを明らかにし、それがアジアでの環境協力枠組み構築が進展していないことの大きな理由の一つである可能性を明らかにした。同時に、越境大気汚染の条約形成に必要となる科学的知見の類型を、科学論や国際法などの観点から考案し、この類型を欧州や北米などの事例をもちいて検証した。
成果公開状況 計画	環境経済・政策学会、科学社会学会、日本国際政治学会などで研究成果を発表した。また、研究代表者の明日香が海外での発表を数回行った。

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

中国におけるPM2.5（微小粒子状物質）問題は、日本での報道は減ったものの中国では依然深刻な問題となっている。また、中国でも日本でも温室効果ガスの排出削減対策は喫緊の課題であり、今年末にはパリにおいて今後10年の道筋が決定する気候変動枠組条約締約国会議が開催される。本研究は、このように現在の地球環境問題およびエネルギー問題として最も注目される中国の大気汚染対策および温暖化政策に関して、その現状および今後の課題について研究するものである。特に、モデル計算だけではなく、日本として現状改善のためにどのような対応あるいは地域間協力の枠組み構築が可能かについても明らかにする。それらによって環境協力が日中間の政治的な摩擦を解消する可能性も探っていく。

センター長裁量経費配分の支出概要

主に、資料などを保管するネット上のデータベース（ドロップボックス）契約、研究従事者のヒアリング調査や東京での研究会参加のための交通費、ヒアリングの際の録音テープの原稿化（テープ起こし）などに支出した。

共同研究での活動とは別にユニットとして行った研究事業企画について

学際性

学際性の有無（有）

〈参加した専門分野数〉 3 〈分野名称〉 大気汚染科学、環境エネルギー、国際政治

文理連携性

文理連携性の有無（有）

〈特筆事項〉越境汚染などの大気科学分野と国際協力という国際政治分野との融合を目指している

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉日本の環境分野における国際貢献に対する具体的な提言を行う

国際連携

〈連携機関名〉国際応用システム解析研究所（IIASA）

〈連携の形態〉共同研究

国内連携

〈連携機関名〉国立環境研究所、九州大学、地球環境研究戦略機関

〈連携の形態〉研究へのアドバイスや資料の提供

〈連携機関数〉3

学内連携

〈連携部局名〉環境科学研究科、経済学研究科

〈連携の形態〉研究へのアドバイスや資料の提供

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉環境科学研究科

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本年度は、モデルの構築を継続した。また、国際協力の枠組み構築に関する歴史・政治的な背景を明らかにするために内外の関係者へのインタビューを行った。今後は、日本や中国の現状を反映したモデル計算を行うと同時に、国際協力の枠組み構築に関して、韓国との協力など具体的な提言を行っていきたい。

最終年度 該当〔無〕

2014（平成 26）年度 東北アジア研究センタープロジェクトユニット
研究成果モニター報告

評価者 氏名 本多俊和
所属 放送大学（客員教授）
報告日 2015 年 7 月 6 日

1. 対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

前年度よりも、発表の内容と意図が概して充実かつ明確になった印象を持った。例外はあるがプレゼンテーション媒体（PowerPoint など）使い方も向上したように思える。

2. 対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

比較的な視点——地域間、学生、国際——をとり入れたユニット（U4、5、7）の内容が、発表の地域や研究分野以外の研究者にとって、有意義であった。

3. 対象年度のプロジェクトユニット成果の中で改善を要すると思われる点

何のための研究なのか、誰を対象（研究の利益を得る対象）としているのか、研究成果の明確な目的が発表の最後になってものみ込めなかった発表数点があった。外部評価報告を読んでようやく納得がいった発表もあった。それに、プレゼンテーションは思い出話が中心になり、発表の目的は要領を得なかった発表もあった。

4. 今後センターが網羅すべき研究内容を踏まえた上で新たに設立が望まれるプロジェクトユニットの研究分野

恐縮ですが、去年と似たような提案を今年も行なう。それは、北極海域とその周辺地域をめぐる情勢を学際的に取りくむ下記の提案は、総合的・学際的な組織である東北アジア研究センターにふさわしい課題と思う。

具体的に、①公海なのか、航行の自由などに関する国際法学、国際政治学的な考察、②資源開発をめぐる経済学的側面、③資源開発の影響を被る周辺の民族に対する人類学的、社会学的な考察、④資源探査に関わる地質学的な研究、⑤気候変動に関連する雪氷学や気象学、⑥陸・海の生物におよぶ資源開発の影響や気候変動の影響に関する生物学的な研究を含む、文理融合の学際的なプロジェクトを提案する。

以上のすべてを網羅することは困難かもしれないが、パイロット的な研究とすれば、センターで管理・運営が可能ではないかと推定する次第である。

5. その他/ 備考

特になし

2014（平成 26）年度 東北アジア研究センタープロジェクトユニット
研究成果モニター報告

評価者 氏名 小嶋 智
所属 岐阜大学 工学部 社会基盤工学科
報告日 2015 年 4 月 2 日

1. 対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

本センターの研究活動を推進する組織であるプロジェクトユニットは、共同研究を行なうための期限付き研究基盤と理解される。この研究基盤を利用して、各研究者が学外研究者を取り込みながら自由に共同研究を実施しているが、（少なくとも今回の発表会では）プロジェクトユニットの活動報告と共同研究の成果報告に大きな差はなく、発表会で 1.5 時間という時間を割いてプロジェクトユニット事業報告を行なう意義は見いだせなかった。

本センター所属の教員には文系のみならず、生態学、地球化学、環境情報科学、資源環境科学などの教員が含まれている。しかし、プロジェクトユニットは文系教員を主体として組織されている。文系のプロジェクトユニットには理系教員も参画しているが、理系教員がリーダーシップをとるプロジェクトユニットがもっとあっても良いのではないかと感じた。

本センターは研究センターなので教育より研究に重点が置かれるのは当然であるが、研究成果報告会や懇親会に参加すると、大学院生やポストドク学生の指導も少なからず行われていることがわかった。報告会参加だけではその詳細はつかめなかったが、研究者同様、様々なバックグラウンドをもった大学院生が同じ組織で教育を受けている強みを生かし、学際的教育が行われることが期待される（既に行なわれているのであればご容赦下さい）。

2. 対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

本センターが、富山大学極東地域研究センターや島根県立大学北東アジア地域研究センターなど、国内外の様々な研究機関と連携を行ない、限られたリソースの中で大きな成果を挙げている点は高く評価できる。また、研究成果を論文やセンター発行の「叢書」、「報告」といった出版物として、あるいはホームページ上の WEB 資料として積極的に公表している点も高く評価できる。個別の成果の評価は、共同研究の成果として別途記述した。

3. 対象年度のプロジェクトユニット成果の中で改善を要すると思われる点

報告会の質疑応答の中で、ホームページ上のデータベース資料に、著作権法上問題のあるものがないことの確認が必要ではないかと感じた（質問に対して、明確に問題無しと回答できていなかった）。

4. 今後センターが網羅すべき研究内容を踏まえた上で新たに設立が望まれるプロジェクトユニットの研究分野

上述のように、本センター所属の生態学、地球化学、環境情報科学、資源環境科学分野の教員がリーダーシップをとり、文系教員が加わった、学際的プロジェクトユニットが形成されることが期待される。

5. その他／備考

特になし

2014（平成 26）年度 東北アジア研究センタープロジェクトユニット
研究成果モニター報告

評価者 氏名 村上 信明

所属 創価大学文学部

報告日 2015 年 6 月 30 日

1. 対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

2014 年度のプロジェクトユニット研究では、データベースの作成と公開、著書の刊行（予定も含む）、シンポジウム・フォーラム・講演会の開催などの形で、これまでの研究成果の対外的公開や国内外の学術機関との連携が着実に進んでいる点が高く評価される。とくにデータベースの作成・公開は、長期的かつ組織的に進めなければなかなか進まない作業で、個人研究で行うには難しいだけに、ユニット研究でこれらの事業を推進する意義は大きい。またシンポジウム等の開催も活発であったが、これらの活動はたんにユニット研究の課題の解明にとどまらず、国内外の研究者の交流や研究成果の交換の「場」を作りだし、学界全体を活性化させることにも寄与している。2014 年度のユニット研究からは、専門性と国際性・学際性をまじえた形での研究交流を推進しながら研究課題を究明し、その過程であられる想定外の事柄をも取り込みながら柔軟な研究活動をするという姿勢がうかがえ、各ユニットからは今後も創造的な研究成果が生み出されることが期待される。

2. 対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

「東北アジア言語文化遺産ユニット」が進めたモンゴル語・満洲語の辞書検索システムの構築と公開は、評者の専門分野である清朝史や、モンゴル・満洲の言語・文化研究に裨益するところが非常に大きい。同システムにて検索可能なモンゴル語・満洲語の辞書・著述の多くは未刊行で、手軽に利用できる状態にはない。そのような中であって、これらの辞書・著述の分析を行ったうえで、その中の語句の解説や用例を瞬時に知ることができるシステムが構築されたことの意義は非常に大きい。今後、この検索システムは国内外の研究者により利用されるようになると思われる。残り 2 年の研究期間において、同システムの情報量と機能性がより一層高まることを期待したい。

また評者は、「21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」が進めている国際学術交流上述と研究協力体制の構築に向けての活動についても高く評価する。昨年度のモニター報告でも述べたように、東北アジアの地域研究が中国・ロシア・モンゴル・朝鮮半島などの地域ごと（厳密に言えば言語ごと）に細分化されがちになってしまう中で、本ユニット研究はそうした地域・言語の障壁を超える活動を継続的に展開している。2014 年度においても、韓国のソウル大学アジア研究センターや韓国国際財団との研究交流を開始し、研究協力体制の一層の充実を図っている。本ユニット研究において、このような活発な国際学術交流と、個別研究や共同研究の成果を結びつくことで、国家や文化圏の枠組みを越えた、相互理解の基盤となるような東北アジア地域像が創出されることが期待できる。

3. プロジェクトユニット事業に関して改善を要すると思われる点

プロジェクトユニット事業の意義は、共同研究やその基盤となる個別研究への支援と、国際的・学際的な学術環境の創出を通じて、東北アジア地域に関する創造的な知の枠組みを示していくことにありと評者は理解している。そのような視点に立つならば、同事業の評価は、研究計画に沿って結果を出せたか否かということ以上に、当初計画では想定しえなかった創造的結果が生み出されるような支援・活動を行えたか否かという点で決まってくることになる。しかし報告会や報告書の内

容からは、そうした評価基準が存在しているようには見受けられない。報告書の形式は共同研究のものとほぼ同じで、当初計画に基づいて研究活動が実行されているか否かを評価基準とする形になっているが、これではユニット研究の成果はたんに共同研究の焼き直しにしか見えない（それゆえに、外部者からはユニット研究と共同研究の相違が非常にわかりにくい）。プロジェクトユニット事業の独自性を発揮し、アピールするうえでは、創造的な知やその枠組みを生み出す「場」としてユニットが機能しているか否かという点を評価基準に導入したほうがよいと評者は考える。

現今の学術をめぐる環境は、確実な成果が見込まれ、かつ成果の効用が明らかであるものに予算の集中配分が行われる傾向にあるが、それでは創造性のある研究は生まれにくい。人間社会が直面する諸問題は、複合的要因により発生するもので、単一の解決策を提示できるようなものではない。そうであるがゆえに、国際的・学際的研究を通じて相互の成果を参照しあい、そこから問題解決のための知恵を生み出していかなければならないが、そのためには研究プロジェクトの柔軟性と可変性が不可欠で、一つの結論を出すことに必ずしも拘らない、という姿勢が必要となる。プロジェクトユニット事業は、直接的に外部資金を獲得しなくてもよいがゆえに、通常の共同研究では行えないような野心的・挑戦的なプロジェクトを展開することが可能なのではないだろうか。

(2) 共同研究

プロジェクト研究ユニットとともに従来型の共同研究も展開されている。本年度は、14 件の共同研究が進行中である。

(A) 2014 年度センター・共同研究課題一覧

〔課題名（研究年度・代表者）〕

- 中国における石炭消費削減策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性
(2014 年度～2019 年度・明日香壽川)
- PM2.5 を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための
外交戦略に関する研究 (2014 年度～2016 年度・石井 敦)
- 東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究
(2014 年度～2016 年度・木村敏明)
- 伝統的モンゴル語辞書の研究
(2014 年度～2016 年度・栗林 均)
- 華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究—華僑華人研究の新たな
パラダイムに向けて (2014 年度～2014 年度・川口幸大)
- 震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進
(2013 年度～2015 年度・佐藤源之)
- 新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策
(2013 年度～2015 年度・寺山恭輔)
- 現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—「宗族」を通じた検証
(2013 年度～2014 年度・瀬川昌久)
- 江戸時代から現代に通じる東北の歴史
(2013 年度～2014 年度・荒武賢一郎)
- 日本列島の文化交渉史 —経済と外交
(2013 年度～2014 年度・荒武賢一郎)
- 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用
(2013 年度～2015 年度・高倉浩樹)
- 典籍文化遺産の研究
(2013 年度～2015 年度・磯部 彰)
- 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究
(2013 年度～2015 年度・岡 洋樹)
- 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究
(2011 年度～2014 年度・岡 洋樹)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握			
研究期間	2014（平成 26）年度 ～ 2019（平成 31）年度（6 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所 属 ・ 職 名	氏 名	所 属 ・ 職 名
	<u>明日香壽川</u>	東北大学 教授	毛昕平	東北大学 博士課程前期学生
	盧向春	東北大学 教育研究支援者	金振	科学技術振興機構 研究員
	石井敦	東北大学 教育研究支援者		
	宮後裕充	東北大学 博士課程後期学生		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔1,200,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	1,200,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔2 回〕／国内会議〔1 回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔0 回〕 第一回会議（国内会議：2015 年 1 月）では、エネルギー・ミックスや温暖化政策を専門とする実務者および研究者と中国などの諸外国の温暖化政策の現状について知見を交換した。第二回会議（国際会議：2015 年 3 月）では、中国の研究者 3 人を招待し、日本の大気汚染および温暖化政策の研究者および行政担当者と共に、中国における大気汚染対策が石炭消費量、温室効果ガス排出量、エネルギー・ミックス、エネルギー・レイアウトなどに与える影響について議論した。			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	本研究では、中国における石炭政策の具体的な現状と課題を明らかにすると同時に、中国において石炭を代替するエネルギーが持つ個別の課題を調査する。そして、中国の石炭政策が中国における大気汚染物質および温暖化ガスの排出に与える影響を、エネルギー経済モデルなどによって定性的かつ定量的に明らかにする。また、このような政策が気候変動枠組条約の下での国際交渉を進展させる可能性について検討し、米国と中国、日本と中国、EU（欧州連合）と中国といった 2 国間での協力の現状および将来についても展望する。さらに、アジア地域の国際協力の枠組み作りについても、既存の仕組みの有効性を検証しながら将来的あるべき姿について検討する。 本年度は、主に以下の研究を実施した。第 1 に、中国における PM2.5 による健康被害、経済成長率、エネルギー政策などに関する論文レビューを行うと同時に、中国の 31 地域の大気汚染、経済成長率、エネルギー産業の生産量などの相関関係を回帰分析で明らかにした。その結果、例えば、エネルギー消費水準と地域発展水準が大気汚染の社会的損失に影響しており、中国の発展地域（沿海部）における大気汚染の社会的損失が相対的に小さいことがわかった。第 2 に、石炭代替発電技術として、中国における原子力発電の役割について、特にその推進理由や反対運動の可能性について調査した。その結果、中国特有の推進理由として、1) 石炭火力発電による事故・健康被害および放射能汚染と比較した場合の優位性、2) 水不足に悩む淡水資源の節約、などが明らかになった。			

	ただし、温暖化対策という理由に関しては、総発電量に占める原子力発電の割合の想定値が2020年で4%であり、日本政府が2010年エネルギー基本計画で目指していた「事故前の約30%から2030年に約50%」を考慮すると、仮にリスクやコスト競争力を考えずに計画通りに建設が実施されたとしても、発電技術および温暖化対策として中国における原子力発電が持つ役割はそれほど大きくなりえないこともわかった。さらに、健康被害と実利的な理由からの環境被害関連の抗議運動の増加が予想され、原子力発電がそれらの抗議運動の中でどのように位置づけになるかが注目されることも明らかになった。第3に、日本および中国の温室効果ガス排出削減数値目標の策定および評価に関して現状と課題を分析した。
成果公開状況 計画	これまで環境経済・政策学会、科学・社会学会、国際政治学会などで研究従事者が数回の学会発表を行った。また、研究代表者の明日香が海外での発表を数回行った。さらに、2015年3月に開催される日本科学者会議のシンポジウムにおいて、明日香が「福島原発事故の中国における原子力発電」というテーマで発表する予定である。そして、中国のエネルギー・温暖化政策の評価を含む「2015年パリ合意の行方:温室効果ガス排出削減数値目標の策定および評価に関する議論の全体像および今後の展開」というタイトルのペーパーも本研究が属するユニット（東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築）のワーキング・ペーパーとして2014年3月23日に発表する予定である。
研究領域	(B)資源・エネルギーと国際関係

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

周知のように中国はPM 2.5（微小粒子状物質）などによる大気汚染に悩まされており、偏西風に乗っての日本への越境汚染も懸念されている。一方、中国でも日本でも温室効果ガスの排出削減対策は喫緊の課題である。しかし、例えば石炭発電の代替としての原子力発電に関しては、世界への影響という意味でも、そのリスクやコストが検証される必要がある。本研究は、このように現在の地球環境問題およびエネルギー問題として最も注目される中国の大気汚染対策および温暖化政策に関して、中国におけるエネルギー・ミックスを構成する石炭などの化石燃料、再生可能エネルギー、原子力発電などに注目して、現状および今後の課題について研究するものである。同時に、日本として現状改善のためにどのような対応あるいは地域間協力の枠組み構築が可能かについても明らかにする。

センター長裁量経費配分の支出概要

主に、研究従事者のヒアリング調査および学会・研究会参加のための交通費や学会参加費などに支出した。

専門分野での意義

エネルギー・環境政策

〈内容〉環境問題およびエネルギー問題を検討する際に、中国の石炭政策は最も重要な論点の一つである。

本研究は、中国の石炭政策の現状について、他のエネルギー資源と比較しながら詳細に調

査分析

する。また、中国の石炭政策が中国および世界の温暖化政策などに対する影響を定性的・定量的に

明らかにする。さらに、地域間のエネルギー環境分野での協力枠組みのあり方についても検討する。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 3 〈分野名称〉 環境経済・政策 大気環境科学 国際政治

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉日本のエネルギー・環境分野における国際貢献に対する具体的な提言を行う。また、日本や中国などの温室効果ガス排出削減や大気汚染物質排出削減の数値目標の策定プロセスや公平性・野心度などの定性的・定量的な評価を行うことによって日本での数値目標策定プロセスや国際交渉へのインプットを行う。

国際連携

〈連携機関名〉清華大学エネルギー環境経済研究所

〈連携の形態〉共同研究

国内連携

〈連携機関名〉国立環境研究所、九州大学、地球環境研究戦略機関

〈連携機関数〉3

学内連携

〈連携部局名〉環境科学研究科、経済学研究科

〈連携の形態〉研究へのアドバイスや資料の提供

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉環境科学研究科

第三者による評価・受賞・報道など

研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

今年度は、主に中国におけるエネルギー・環境政策の分析および既存の地域間協力の枠組み（例：東アジア酸性雨モニタリングネットワーク）の現状と課題を把握することに努めた。今後は、より複雑な経済モデルなどを用いた分析を行うことによって、大気汚染物質や温室効果ガスの排出およ

び広域輸送などに関する被害や対策コストの経済評価を行う。また、2015 年 12 月のパリでの気候変動枠組条約での合意に向けた中国の温室効果ガス排出削減数値目標の評価なども行う。さらに、特に東アジア地域における有効な地域間協力の枠組みのあり方について具体的に提言していく。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔論文〕計 (2) 件

- ・明日香壽川「福島原発事故後の温暖化問題を考える」(人権と部落問題 No.863、査読なし、2014 年)
- ・明日香壽川「2015 年パリ合意の行方：温室効果ガス排出削減数値目標の策定および評価に関する議論の全体像および今後の展開」(東北大学東北アジア研究センター東アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット Working paper2015-1、査読なし、2015 年 3 月)

〔図書〕計 (0) 件

〔学会発表〕計 (12) 件

- ・明日香壽川「福島原発事故後の中国における原子力発電」(日本科学者会議国際シンポジウム、2015 年 3 月 27 日、於横浜国立大学キャンパス)
- ・明日香壽川「日本および世界のエネルギー・環境対策」(CIGS 地球温暖化シンポジウム 2014 「地球温暖化抑制に向けて世界で共有できる中長期ビジョン」－AR5 とエネルギー基本計画を踏まえた「あるべき姿」の提言－、2014 年 7 月 24 日、於大手町スカイホール)
- ・明日香壽川「これからの日中環境協力」(「日中環境協力について語り、考える」、2014 年 11 月 29 日、於立教大学池袋キャンパス)
- ・明日香壽川「Issues and opprtunities of the energy and enviromment in the East Asia」(Energy-safe Cities Expert Symposium、2014 年 10 月 28 日、於中国北京)
- ・明日香壽川「アジア各国の再生可能エネルギー政策」(経済系学会合同研究発表会、2015 年 2 年 25 日、於韓国ソウル)
- ・岡本哲明「越境大気汚染の条約形成に必要な科学的知見の類型」(STSNj 夏の学校、2014 年 9 月 5 日、於名古屋大学東山キャンパス)
- ・岡本哲明「越境大気汚染の大気環境管理枠組み形成に資する科学アセスメントの必要条件」(環境経済・政策学会、2014 年 9 月 13 日、於法政大学多摩キャンパス)
- ・岡本哲明「越境大気汚染問題の必要条件と問題対処のための国際枠組み形成の関係」(科学社会学会、2014 年 9 月 27 日、於東京大学本郷キャンパス)
- ・岡本哲明「東北アジアにおける大気環境管理枠組み形成の停滞要因－越境大気汚染の科学評価の観点から－」(日本国際政治学会、2014 年 11 月 15 日、於福岡国際会議場)
- ・宮後裕充、石井敦「日本の越境大気汚染外交と科学－臨界負荷量研究を事例に」(環境経済・政策学会、2014 年 9 月 13 日、於法政大学多摩キャンパス)
- ・宮後裕充、石井敦「日本の越境大気汚染外交と科学－臨界負荷量研究を事例に」(科学社会学会、2014 年 9 月 27 日、於東京大学本郷キャンパス)
- ・宮後裕充「日本の越境大気汚染外交と科学－臨界負荷量研究を事例に」(日本国際政治学会、2014 年 11 月 15 日、於福岡国際会議場)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	PM2.5を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略に関する研究			
研究期間	2014（平成26）年度 ～ 2016（平成28）年度（3年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	石井敦 岡本哲明	東北大学東北アジア研究センター 東北大学東北アジア研究センター		
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	300,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕 ＜該当なし＞			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	中国や韓国からの越境大気汚染として飛来する、あるいは国内の汚染源から排出される PM2.5 問題に対する関心は非常に高い。それにもかかわらず、越境大気汚染への対処を可能にする外交戦略を提示するための研究は行われていないと言ってよい。事実、環境省が 2013 年 12 月に発表した「PM2.5 に関する総合的な取組（政策パッケージ）」では外交戦略にはほとんど触れておらず、技術協力、地方自治体間の協力と、東アジア酸性雨モニタリングネットワーク（EANET）の活用が謳われているだけである。関連研究も基本的に大気科学による現象解明、そして工学的な排出量推計や対策技術の開発にとどまっている。その、EANET はその設立への議論が開始されてから 20 年以上が経つが、関連諸国の信頼を獲得するには至らず、その目標としていた東アジアにおける大気汚染対策の地域枠組みもその端緒を開くことすらままならない状況が続いている。 こうした認識に基づき、下記の研究を行っている。 1)EANET の効果性評価 EANET は基本的に越境大気汚染を直接扱えない組織であり、そういう意味で、越境大気汚染の改善への直接的効果はない。しかし、効果性評価はそれだけでなく、間接的な効果をも対象としなければならないが、これについてはまだ研究の途上である。その間接的な効果の一つに次の制度間相互連関がある。要因分析としては科学者の外交的有用性のある概念への取り組み方に注目して言説分析を行っている最中である。 2)越境大気汚染に係る国際環境協力制度間の相互連関の解明 越境大気汚染に係る国際環境協力制度は EANET だけでなく、他にも北東アジア環境協力プログラム（NEASPEC）、日中韓大気汚染物質長距離越境移動研究プロジェクト（LTP）などが存在する。PM2.5 に対処するためには、こうした関連組織間の制度間相互連関を同定・分析し、現状の相乗効果と悪影響を明			

	らかにすることで、これから相乗効果を高め、悪影響を排すことができるのかを提言することができるようになる。研究の結果、LTP、NEASPEC、EANETはそれぞれ相互補完的に相乗効果を生み出すことができる可能性があることが分かった。 3)越境大気汚染に対処するために設立された欧州や他組織における教訓の抽出 越境大気汚染への取り組みの先進事例として名高いのは、欧州越境大気汚染条約の経験である。その経験を東アジアに当てはめる場合、関連文脈が異なるという理由で棄却される場合が非常に多いが、アジアにおける関連文脈が教訓の有効性を低減させている事に関する精緻な分析は皆無である。研究の結果、科学研究を越境移動と影響研究を分けることが外交上重要である可能性があることが判明した。
成果公開状況 計画	現在は学会発表を行っているが、計画として、研究に基づいた政策提言を記者会見やウェブ、一般誌に論文を掲載することで社会に還元することを考えている。
研究領域	(A)環境問題と自然災害

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本研究では、日本の東アジアにおける越境大気汚染外交の停滞要因を明らかにすることが一つの研究目的である。現代の国際政治は、グローバルな相互依存、グローバリゼーションの潮流にあり、地域研究といえども、国際社会の文脈から切り離して研究することはますます困難になってきている。外交は、その地域社会と国際社会とを結びつけるものであり、非常に重要であることは論を俟たない。ましてや東アジアでは領土問題、歴史認識問題、経済的相互依存関係、冷戦の残滓などがある。本研究は、日本における大気環境の科学者が、外交のツールになる可能性のある臨界負荷量という概念に対してどのような言説を構築したのかを明らかにすることによって、科学者というアクターが越境大気汚染外交にどのように関わっていたのかを推論するものである。こうした研究は、東アジアで多くの国際環境問題が山積しているにもかかわらず、国際レジームが構築されないのか、という一大研究テーマに応えることも構想している。

センター長裁量経費配分の支出概要

当初は政策提言のアニメーションを作成する予定だったが、その目処が立たなかったため、学会発表の旅費などに用いた

専門分野での意義

国際政治学、科学技術社会学

〈内容〉

バウンダリーワークの概念は、関連アクターがどのように科学と非科学とを言説的に区分するのか、ということ明らかにするための分析概念であり、科学技術社会学の標準的な分析の一つである。しかし、今までのバウンダリーワークを用いた分析は、区分を明らかにし、その含意を推論することにとどまっている。本研究では、含意を推論するだけでなく、バウンダリーワーク自体を外交の阻害要因とすることを構想しているという意味で、斬新な研究となっている。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 2 〈分野名称〉 国際政治学、科学技術社会学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

〈内容〉岡本哲明の研究は、理系の知見である大気科学を直接、条約成立の仮説の中に取り込んでおり、その意味において、文理連携がある。

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉日本の東アジアにおける越境大気汚染の停滞要因を明らかにすることは直接、日本の越境大気汚染をどのように改善しなければいけないのか、という政策的含意を導くことを可能にする。

国際連携〔無〕

国内連携〔無〕

学内連携〔無〕

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉環境科学研究科

第三者による評価・受賞・報道など〔無〕

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

バウンダリーワークの言説データは収集と分析がほぼ終了した。今後は関連既存研究の中にどのように位置づけるのか、を明らかにした後、論文を執筆する。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計 (0) 件

〔図書〕計 (0) 件

〔学会発表〕計 (6) 件

- ・宮後裕充、石井敦「日本の越境大気汚染外交と科学：臨界負荷量研究を事例に」（環境経済・政策学会、2014年9月13日、於東京）
- ・宮後裕充、石井敦「日本の環境外交と科学－臨界負荷量研究を事例に」（科学社会学会、2014年9月27日、於東京）
- ・岡本哲明「越境大気汚染問題の必要条件と問題対処のための国際枠組み形成の関係」（科学社会学会、2014年9月27日、於東京）

- ・岡本哲明「越境大気汚染の大気環境管理枠組み形成に資する科学アセスメントの必要条件」(環境経済・政策学会、2014年9月14日、於東京)
- ・岡本哲明「東北アジアにおける大気環境管理枠組み形成の停滞要因——越境大気汚染の科学評価の観点から」(日本国際政治学会、2014年11月15日、於福岡)
- ・岡本哲明「越境大気汚染の条約形成に必要な科学的知見の類型」(STSNj 夏の学校、2014年9月5日、於名古屋)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究			
研究期間	2014（平成26）年度 ～ 2016（平成28）年度（3年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	木村敏明 高倉浩樹	文学研究科・教授 東北アジア研・教授	佐島隆 何燕生	大阪国際大学・教授 郡山女子大学・教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金 〔2,700,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	3,000,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔3 回〕／国内会議〔2 回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔0 回〕 1.研究会 2014 年 6 月 28 日 報告 木村敏明 アチェ地震・ジョグジャカルタ地震と宗教、何燕生 四川地震と宗教、西川慧 西スマトラ地震と宗教、佐島隆（代読）トルコ地震と宗教 2.国際シンポジウム特別セッション 2014 年 11 月 19 日 “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster” The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, Speaker; Hiroki Takakura, Samsul Maarif, Katsuhiko Takizawa, Toshiaki Kimura, Wawan 3.研究会（共催） 2015 年 2 月 15 日 発表者 佐島隆「震災後のギョルジュクおよびイズミットー——共同墓地・宗教間関係」コメンテータ 木村敏明			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	本共同研究は、震災による被害を受けた地域における宗教的マイノリティの動向に関する国際比較研究（インドネシア・中国・トルコ）を背景としながら、東日本大震災の被災地において同様の問題の調査、検討をおこなうことを目指すものである。東日本大震災後の被災地では今日に至るまで大小の教団あるいは様々な背景をもった宗教者による援助、また民俗行事や芸能など、様々なレベルでの宗教的活動がくりひろげられている。本共同研究では、これらの諸宗教の活動が被災社会の宗教的マイノリティにおよぼした影響について、特に被災社会の「多様性」に注目しながら調査研究をおこない、ポスト災害社会を共生社会とするため望ましい宗教のあり方を探求する。また、海外の諸機関や研究者と協力しながら、このような問題について国際的な比較研究を可能にする枠組みと体制作りを目指す。 初年度である本年度はまず研究会を通して研究体制を整えることにつとめ、これまでもおこなってきた海外での調査を日本の事例をふまえながらいかにして比較研究の俎上に載せていくかを議論した。また、インドネシアのガジ			

	ヤマダ大学大学院宗教学文化間研究センターと研究協議を行うとともに、副センター長の Samsul 氏を交え上記の国際シンポジウムの特別セッションを開催して議論を深めることができた。日本国内での調査については、東日本震災後における宗教的マイノリティの動向について、外部から研究会に研究者を招聘するとともに、茨城県大洗に教会をもつ東京インドネシア福音教会にて在日インドネシア人クリスチャンコミュニティの調査をおこなうことで情報を収集することができた。これらを海外での研究成果とどのように結び付けていくかが今後の課題である。
成果公開状況 計画	
研究領域	(A)環境問題と自然災害

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本研究は国際比較研究を背景とした日本研究であり、震災に対する反応における日本社会の特徴や他地域との共通性を示すことができる。また、海外機関との協力体制構築によって、日本研究の成果をそれらの地域の研究者が利用できる枠組みをつくることができる。

センター長裁量経費配分の支出概要

消耗品、メンバー外の研究者の招聘旅費、メンバーによる調査のための旅費

専門分野での意義

宗教学

〈内容〉宗教学分野では、震災と宗教に関するテーマにおける国際的比較研究の取り組みは他になく、高い意義をもつ。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 2 〈分野名称〉 社会人類学・民俗学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔無〕

国際連携

〈連携機関名〉 ガジャマダ大学大学院宗教学・文化間研究センター
(Center for the Religious and Cross-cultural Studies)

〈連携の形態〉 国際シンポジウム・特別セッションの共同開催

国内連携

〈連携機関名〉 郡山女子大学、大阪国際大学

〈連携の形態〉共同研究メンバー
〈連携機関数〉3

学内連携

〈連携部局名〉文学研究科
〈連携の形態〉共同研究メンバー
〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉文学研究科

第三者による評価・受賞・報道など

新聞紹介 インドネシア・コンパス紙（2014年10月10日）「文化を基盤にした災害理解の必要性」

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

今年度は体制作りに力点をおいたが、来年度は比較の枠組みをつくりあげることが課題となる。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計（4）件

- ・木村敏明「他宗教と共に生きる」（『国際学入門』、査読あり、印刷中）
- ・佐島隆「言語の使用とアレヴィー認識をめぐるコンフリクト（Sprachgebrauch und Konflikt in Bezug auf das Verständnis der Aleviten）」（『言語と人間性—コンフリクト社会に見る言語行為と多言語』、査読あり、2015年）
- ・何燕生「ポスト災害社会における宗教の役割と死生観のゆくえ」（『法然仏教の諸相—藤本浄彦先生古稀記念論文集』、査読あり、2014年）
- ・高倉浩樹「宮城県における民俗文化財現況調査について」（311復興支援 無形文化遺産情報ネットワーク報告書2013 東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興、査読なし、2014年）

〔図書〕計（0）件

〔学会発表〕計（14）件

- ・木村敏明「ジャワ島ムラピ山噴火災害と宗教」（日本宗教学会第73回学術大会、2014年9月13日、於同志社大学）
- ・木村敏明「Religious Conditions in Japanese Society after 3.11 Earthquake」（International Conference on Natural Disaster Theological and Cultural Perspective、2014年10月8日、於国立イスラーム大学（インドネシア））
- ・木村敏明「Lost Community Ritual and its Revival after Tohoku Earthquake」（東北大学カンタベリー大学ワークショップ、2014年10月30日、於カンタベリー大学（ニュージーランド））
- ・木村敏明「Reevaluating Religious Role as a Social Resilience in post 3.11 Japan」（The

6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia、SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”、2014 年 11 月 19 日、於ガジャマダ大学（インドネシア）

- ・高倉浩樹「Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects」(International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014、2014/5/16、於千葉・幕張メッセ)
- ・高倉浩樹「被災後の無形民俗文化財調査から学んだこと」(現代民俗学会第 24 回研究会「何ができる、何ができないのかー『無形民俗文化財が被災すること』からつかみとる課題」、2014 年 7 月 26 日、於東京大学・東洋文化研究所)
- ・高倉浩樹「The Intangible Cultural Heritage Survey after 3.11 Tohoku Earthquake and the role anthropology」(The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia、SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”、2014 年 11 月 19 日、於ガジャマダ大学（インドネシア）)
- ・高倉浩樹・及川高「東日本大震災後の無形文化遺産調査と日本研究」(日露ワークショップ「日本文化を教えるⅡ：ロシアと日本の日本研究者の対話」、2014 年 11 月 29 日、於東北大学)
- ・何燕生「生活禅は日本にも適応できるかー『宗教学』授業のアンケートから」(印度学宗教学会第 56 回学術大会、2014 年 6 月 1 日、於種智院大学)
- ・何燕生「中国における社会参加仏教ー「生活禅」を中心にー」(日本宗教学会第 73 回学術大会、2014 年 9 月 13 日、於同志社大学)
- ・何燕生「対佛光山人間佛教理論と実践的建議」(第二届人間仏教座談会、2014 年 12 月 14 日、於台湾佛光山)
- ・佐島隆「現代トルコにおけるアレヴィー・エスニシティの継承と変化」(日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 18 日、於首都大学東京)
- ・佐島隆「トルコの「聖所」と「参詣」」(日本宗教学会第 73 回学術大会、2014 年 9 月 13 日、於同志社大学)
- ・佐島隆「震災後のギョルジュクおよびイズミットー共同墓地・宗教間関係ー」(アレヴィー／ベクタシ研究会、2015 年 2 月 15 日、中部大学)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	伝統的モンゴル語辞書の研究			
研究期間	2014（平成 26）年度 ～ 2016（平成 28）年度（3 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	栗林均 斯欽巴図 Ts.シャグ ダルスレ ン	東北アジア研究センター・教授 内蒙古大学蒙古学学院・研究員 モンゴル国立大学・教授	ヒ.ブルブジャブ 松川節	モンゴル国科学アカデミ ー・研究書記 大谷大学・教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔200,000 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	500,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	「伝統的モンゴル語」は、13 世紀以来モンゴル族が使用してきた書き言葉を目指す。本研究では、主に清朝時代に編纂された各種の伝統的モンゴル語の辞書について、それらの書誌学的な情報を整理し、個々の「伝統的モンゴル語辞書」の特徴を明らかにし、それぞれの辞書の相互関係を研究することを第 1 の目的としている。 さらに、第 2 の目的は、それらの「伝統的モンゴル語辞書」という言語文化遺産を再評価して、現代のモンゴル研究者の利用に供することを目的としている。清朝時代に編纂された伝統的モンゴル語の辞書は、これまで研究がほとんど行われず、内容も整理されていない。本研究では、これらの辞書の内容を電子化して、コンピュータおよびインターネットで利用できるシステムを開発し、提供することをめざしている。 2014 年度の研究では、1928 年に北京蒙文書社から出版された『蒙漢字典』の内容が、1894 年に木版で公刊されたモンゴル語・漢語・満洲語対訳辞典である『欽定蒙文彙書』の中からモンゴル語と漢語を抽出して作られたことを明らかにし、『蒙漢字典』を復刻・再版した。 また、東北アジア研究センターのドメインの中のホームページに、『五体清文鑑』『蒙文総彙』『蒙文倒綱』『蒙漢字典』『満蒙文鑑』の辞書検索のページを設けて、インターネットで伝統的モンゴル語の辞書が利用できるシステムを開発して、試験的に公開している。 (http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/kdic/list?groupId=17)			
成果公開状況 計画				

研究領域	(D)自然・文化遺産の保全と継承
------	------------------

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本共同研究が研究の対象としているのは 「伝統的モンゴル語辞書」である。「伝統的モンゴル語」は 13 世紀以来モンゴル族が使用してきた書き言葉を指す。13～14 世紀にモンゴル高原を中心に活動して世界的な規模の「モンゴル帝国」を建国したモンゴル族の言語の研究は東北アジア地域研究の中核のひとつをなすものである。

本研究では、主に清朝時代に編纂された各種の伝統的モンゴル語の辞書について、それらの書誌学的な情報を整理し、個々の「伝統的モンゴル語辞書」の特徴を明らかにし、それぞれの辞書の相互関係を明らかにすることをめざしている。

2014 年度の活動では、これら文献資料の電子化（テキスト、画像）を進めるとともに、著書 3 点を刊行して、さらにインターネットにおける資料公開を進めた（下記の社会還元の項を参照）。

センター長裁量経費配分の支出概要

伝統的モンゴル語文献資料の電子化（テキスト）	50%
伝統的モンゴル語文献資料の電子化(画像)	30%
旅費	20%

専門分野での意義

モンゴル学

〈内容〉清朝時代に編纂された各種の伝統的モンゴル語の辞書について、これまで研究がほとんど行われていない。本研究は、書誌学的文献学的な観点から「伝統的モンゴル語辞書」の特徴を明らかにし、それぞれの辞書の相互関係を明らかにすることによって斯学の発展に寄与している。

学際性

学際性の有無〔無〕

〈参加した専門分野数〉 〈分野名称〉

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉東北アジア研究センターのドメインのホームページに、『五体清文鑑』『蒙文総彙』『蒙文倒網』『蒙漢字典』『満蒙文鑑』の辞書検索のページを設けて、インターネットで伝統的モンゴル語の辞書が利用できるシステムを提供している。
(<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/kdic/list?groupId=17>)

国際連携

〈連携機関名〉 内蒙古大学蒙古学学院、内蒙古師範大学蒙古学学院、中央民族大学蒙古語文学系

〈連携の形態〉 部局間協力協定

国内連携

〈連携機関名〉 東京外国語大学 AA 研 IRC

〈連携の形態〉 共同研究

〈連携機関数〉 1

学内連携

〈連携部局数〉 0

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉 環境科学研究科

〈ポスドクの活用形態〉

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

「伝統的モンゴル語の辞書」としては、主なものとして

(1)清朝期に作られた満洲語の辞書（清文鑑）の伝統を引き継ぐもの

(2)清朝期に作られた仏教用語辞書

(3)19世紀以来ロシア・ヨーロッパ・日本で編纂された辞書

を挙げることができる。そのいずれをとっても種類と分量が多い。

2014年度では(1)を取り上げたが、今後は(1)と同時に(2)(3)の辞書に関しても研究を広げる。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔論文〕 計 (0) 件

〔図書〕 計 (3) 件

・栗林均「蒙漢字典－資料編・原本影印－」（東北アジア研究センター、2014年）

・栗林均「『満文老檔』所収モンゴル語文書の研究」（東北アジア研究センター、2015年）

・栗林均「『初学指南の研究』－18世紀の口語モンゴル語－」（東北アジア研究センター、2015年）

〔学会発表〕 計 (0) 件

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究—華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて			
研究期間	2014（平成 26）年度 ～ 2014（平成 26）年度（1 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	川口幸大	東北大学大学院・准教授	李華	延辺大学人文社会科学学院・副教授
	瀬川昌久	東北大学東北アジア研究センター・教授	河合洋尚	国立民族学博物館・助教
	稲澤努	東北大学東北アジア研究センター・教育研究支援者	陳碧	玉林師範大学・副教授
	市川哲	立教大学観光学部・助教	奈倉京子	静岡県立大学 国際関係学部・准教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	300,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔1 回〕／国内会議〔0 回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔0 回〕 日時：8 月 2 日(土)13 時～ 会場：東京大学駒場キャンパス 18 号館 趣旨説明:川口幸大（東北大学） 発表 1：李華（延辺大学 人文社会科学学院） 「朝鮮族の移住者たちにとっての『僑郷』—延辺朝鮮族自治州の事例から(仮)」 発表 2:河合洋尚（国立民族学博物館）・阿部朋恒（雲南大学） 「雲南省における『僑郷』景観の創出—紅河県を事例として(仮)」 発表 3：陳碧（玉林師範大学）、通訳：兼城糸絵(鹿児島大学） 『侨乡"再认识：一个情感的视角——基于马来西亚广西籍华人吕先生的侨乡活动分析(仮)』 （「感情という視点からみる『僑郷』の再認識—マレーシアの広西籍華人・呂氏の僑郷での活動に関する分析をもとに」） コメント:瀬川昌久(東北大学) 総合討論			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	本研究の目的は、僑郷、すなわち華僑華人の故郷をめぐる新たな政治経済的な動態を、文化人類学的な視点から考察することである。これまで僑郷と言え、福建・広東など中国東南部が対象とされ、そこから海外へ渡った移民が苦勞して金を稼ぎ、故郷の家族やコミュニティを支えるという図式が繰り返し描かれてきた。しかし、ここ数年の間に、雲南や広西など西南部のコミュニティが僑郷としての自己表象をしたり、朝鮮族自治区から韓国への移民が故郷の家族を支えるようになったりという新たな展開を迎えている。そこで本研究会では中国から招聘した 2 名のスピーカーも交えて議論を行い、僑郷の新たな動態について考察を試みた。それによる知見は以下の通りにまとめられる。 雲南においては、20 世紀初頭まで盛んだった（しかし今日ではすでに見られない）ミャンマーへのキャラバン交易隊の歴史が、数年前に政府によって「登			

	見」され、観光資源としての「華僑の故郷」開発が進められている。一方、従来は僑郷として扱われることの少なかった広西省では、現地で成功したインドネシア華人が里帰りし、故郷の建設に貢献するなど、遅まきながら「華僑—僑郷神話」が実現されている。延辺朝鮮族自治区では、韓国への出稼ぎ者が急増し、家族は潤うが村はさびれるという、これまでの定石とは異なった僑郷の姿がある。 このように、中国国内および移住先の政治経済な環境のもとで、華僑の故郷は新たに見いだされ、対象化され、あるいは流用されている。本研究によって明らかになったのは、僑郷と華人の関係が実態としては決して本源的なものではなく、しかし、その表象としての本源性を巧みに操作しながら、歴史的に構築されてゆく動態である。この成果は、華人研究はもとより、人類学・地理学における移民研究とホームの研究にも寄与しうるものである。
成果公開状況 計画	研究成果は、他の企画ですでに実施したシンポジウムと研究会の発表と併せて、先日採択が決定された東北アジア研究センターの出版助成により、2015年10月に行路社から論集『僑郷—華僑のふるさとをめぐる表象と実像』としての刊行を予定している。
研究領域	(C)移民・物流・文化交流の動態

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」と連携を取りつつ、中国から韓国やマレーシア、ベトナムといった国々へ移動した人々の故郷に焦点をあてて研究を行った。その結果、東北アジアおよびその周辺におけるヒト・モノ・カネのダイナミズムの一端を解明する研究を行うことができた。また、その際に、韓国との関連の深い吉林省の延辺大学や、ベトナムやマレーシアと関連の深い広西チワン族自治区の玉林師範大学から研究者を招聘することで、今後の東北アジア研究を担うネットワーク形成を行うことができた。

センター長裁量経費配分の支出概要

研究会への招へい派遣のための国内旅費

専門分野での意義

文化人類学

〈内容〉文化人類学においては移動、移民、ホームについての研究は盛んであるが、それぞれが個別的に捕捉される傾向にある。本研究はこの状況を乗り越えるために、移民の出郷と帰郷、ホームにとっての移民、移民の表象するホームを連関的に捉えて分析した点が特色である。それによって、ホームが政治的に対象化され構築されてゆく動態を明らかにしたという意義がある。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 3 〈分野名称〉 文化人類学・民俗学・歴史学

文理連携性

文理連携性の有無〔有・無〕

〈特筆事項〉会の発表者は文化人類学者のみだが、華人研究は歴史学等と学際的になされており、本研究会も学際的に行われた。

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉グローバル化に直面する現代日本において、人の移動が引き起こす諸現象についての深い考察は必要不可欠であり、研究成果は市販の図書として広く社会に公開される予定である。

国際連携

〈連携機関名〉延辺大学、玉林師範大学

〈連携の形態〉研究者個人ベースでの研究会参加

（各所属大学はそれをサポートしてくれているという意味での協力）

国内連携

〈連携機関名〉東京大学、国立民族学博物館、鹿児島大学

〈連携の形態〉研究者個人ベースでの研究会参加および会場提供

（各所属大学はそれをサポートしてくれているという意味での協力）

〈連携機関数〉3

学内連携

〈連携部局名〉文学研究科

〈連携の形態〉研究者個人ベースでの研究会参加

〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東京大学、首都大学東京などの大学院生が積極的に質疑応答に参加した。

〈ポスドクの活用形態〉学振研究員の研究会への参加

最終年度 該当〔有 無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計（12）件

- ・川口幸大（曾士才他との共著）「日本華僑華人学会設立10周年記念シンポジウム「華僑華人研究の回顧と展望」」（華僑華人研究11、2014年）
- ・河合洋尚・呉雲霞「ベトナム客家の移住とアイデンティティ——ンガイ人に関する覚書」（客家與多元文化9巻、2014年）
- ・河合洋尚・呉雲霞「ベトナムの客家に関する覚書——移動・社会組織・文化創造」（日本華僑華人学会11号、2014年）

- ・河合洋尚「族群話語与社会空間——四川成都、広西玉林客家空間的建構」(中国社会与民族的話語分析——人類学的理框架論及個案研究、2014 年)
- ・河合洋尚「对于日本客家民間信仰以及風水研究的個人見解——从空間一場所論的觀點来看」(客家民間信仰和地域社会研究、2014 年)
- ・李華「中国朝鮮族家族の文化的持続性と変容：国境を跨る子どもの養育を中心に」(中央史論第 39 輯〔韓国〕、2014 年)
- ・李華「老親扶養に見る中国朝鮮族家族の現在——国外移住に伴う変化を中心に」(東北アジア研究 19 号、2015 年)
- ・李華「離郷と守土：朝鮮族村落の人口移動に関する事例研究」(女性研究第 6 集〔中国〕、2014 年)
- ・陳碧「广西客家研究二十年」(广西社会科学第 5 期、2014 年)
- ・陳碧「超越边缘：一个东南侨乡回族社区文化建设的人类学考察」(八桂侨刊第 2 期、2014 年)
- ・市川哲「マレーシア、サラワク州の観光と手工芸品」(文化交流 15、2014 年)
- ・市川哲「マレーシア、サラワク州における手工芸品研究のための覚書」(立教大学観光学部紀要 16、2014 年)

〔図書〕計 (0) 件

〔学会発表〕計 (12) 件

- ・川口幸大「国家と宗族——親族研究の新たな可能性に向けて」(日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日、於幕張メッセ)
- ・河合洋尚「華僑と宗教復興——華南客家地区的客家景觀和靈性」(国際シンポジウム「宗教与文化」、2014 年 4 月 26 日、於南京大学(中国))
- ・河合洋尚「構造色としての景觀——中国客家地区における文化的景觀の競合と整合」(日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 18 日、於幕張メッセ)
- ・河合洋尚・阿部朋恒「中国雲南省における〈僑郷空間〉の創出」(東北アジア研究センター共同研究：〈華人の移動とその「故郷」〉についての民族誌的研究——華僑華人研究の新たなパラダイムにむけて〉研究会、2014 年 8 月 2 日、於東京大学)
- ・河合洋尚「日本の財神信仰と徐福信仰——新宮市地方団体と華僑(客家)団体的信仰実践」(国際シンポジウム「第三回財神信仰研討会」、2014 年 9 月 13 日、於遼寧省本溪県(中国))
- ・稲澤 努「「後改革開放」時期的小城市寺廟：以広東省汕尾為例」(国際シンポジウム「宗教与文化」、2014 年 4 月 26 日、於南京大学(中国))
- ・稲澤 努「現代中国の「漁民」と宗族——広東省東部汕尾の事例から」(日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日、於幕張メッセ)
- ・李華「朝鮮族の移住者たちにとっての「僑郷」——延辺朝鮮族自治州の事例から」(東北アジア研究センター共同研究：〈華人の移動とその「故郷」〉についての民族誌的研究——華僑華人研究の新たなパラダイムにむけて〉研究会、2014 年 8 月 2 日、於東京大学)
- ・李華「延辺地域における婚姻儀礼と祖先祭祀」(延辺地域に保存された朝鮮民族の伝統文化、2014 年 11 月 22 日、於延辺大学(中国))
- ・李華「中国朝鮮族の民族アイデンティティ研究——民族表象としての「孝」文化の再構築を中心に」(人文統一学世界フォーラム、2014 年 11 月 30 日、於東京 朝鮮大学校)
- ・兼城糸絵「宗族であり続けることの意味——福建省福州市郊外の移民母村の事例から——」(日本文化人類学会第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日、於幕張メッセ)
- ・陳碧「侨乡」再认识：一个情感的视角——基于马来西亚广西籍华人吕先生的侨乡活动分析（「感情という視点からみる『僑郷』の再認識——マレーシアの広西籍華人・呂氏の僑郷での活動に関

する分析をもとに」)」（東北アジア研究センター共同研究：＜華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究－華僑華人研究の新たなパラダイムにむけて＞ 研究会、2014 年 8 月 2 日、於東京大学）

最終年度研究成果

単年度であり、最終総括は年度報告にあるとおり

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2018（平成 30）年度（5 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	佐藤源之 高橋一徳 Christian Koyama	東北アジア研究センター 東北アジア研究センター 東北アジア研究センター	藤沢敦 金田明大	東北大学埋蔵文化財調査室・特任准教授 奈良文化財研究所・主任研究員
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（個人研究費）〔1,000,000 円〕 総長裁量経費〔6,000,000 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔5,000,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	12,000,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔回〕／国内会議〔1 回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕 東北大学における電波技術の防災・減災への利用 佐藤源之（東北大学 東北アジア研究センター教授） 平成 20 年岩手・宮城内陸地震と栗原市の対応 佐藤喜久男（栗原市総務部 次長兼危機管理監） 荒砥沢崩落地における東北森林管理局の取組み 飯島康夫（東北森林管理局宮城北部森林管理署 宮城山地災害復旧対策室室長） 東日本大震災と宮城県における遺跡調査 佐久間光平（宮城県教育庁文化財保護課 技術副参事兼技術補佐） 東日本大震災における行方不明者の搜索活動 渡邊嘉則（福島県警察本部警備部警備監）			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	平成 26 年度は宮城県ならびに福島県の文化財保護課と協力し、松島市瑞巖寺などでの遺跡調査を実施した。加えて平成 26 年度は宮城県、福島県、岩手県の各県警と協力した津波被災地域の搜索活動を実施した。これまでの警察やボランティアによる砂浜搜索は砂浜表面を目視で搜索するにとどまっていたが、地中レーダ(GPR)を使用することで、深さ 50cm から 1m 程度に、津波によって堆積した遺留物が非常に多く残っていることが確認でき、今後の搜索の可能性を広げられることを実証した。 以下に、本活動に関する平成 26 年度の出張実績を掲げる。震災復興に直接関わらない遺跡調査についても、技術開発の観点から有用と判断した場合、積極的に協力している。 2014 年度活動実績(抜粋) 2014 年 4 月 30 日 瑞巖寺参道津被災地域遺跡計測現地打ち合わせ 5 月 14 日 南相馬市教育委員会 遺跡調査現地打ち合わせ			

	5月15日 瑞巖寺参道 GPR 遺跡計測 6月10-11日 岩手県二戸町九戸城址 GPR 計測 8月6日 南蒲生津波被災者 GPR 搜索打ち合わせ 8月10-11日 南蒲生津波被災者 GPR 搜索 9月10-11日 釜石市片岸海岸津波被災者 GPR 搜索 10月1日 福島県警津波被災者搜索現地打ち合わせ 10月11日 相馬市原釜海岸津波被災者 GPR 搜索 10月23-24日 弘前城 GPR 計測 11月11日 新地町大戸浜津波被災者 GPR 搜索 12月11日 名取市閑上津波被災者 GPR 搜索 2015年 2月11日 福島県浪江町 津波被災者 GPR 搜索 3月11日 石巻市、宮古市、浪江町などでの搜索予定
成果公開状況 計画	http://magnet.cneas.tohoku.ac.jp/satolab/researchunit/
研究領域	(D)自然・文化遺産の保全と継承

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール
中国での土砂災害などへの対策としての研究活動紹介を、中国の大学における集中講義などで行っている。

センター長裁量経費配分の支出概要
該当せず

専門分野での意義

〈内容〉地中レーダを遺跡探査ならびに行方不明者搜索に利用するために、計測の立案、実行、自治体への情報提供などを実践を通じて開発した。また地中レーダの各種土壌に対する適応性を評価した。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 1 〈分野名称〉 考古学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

〈内容〉地方自治体職員を対象に想定した著書執筆

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉地方自治体、警察、消防などとの連携

国内連携

〈連携機関名〉奈良文化財研究所

〈連携の形態〉情報交換

〈連携機関数〉1

学内連携

〈連携部局名〉埋蔵文化財調査室

〈連携の形態〉情報交換

〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉環境科学研究科

第三者による評価・受賞・報道など

新聞、テレビ、ラジオ報道多数

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

今後も奈良文化財研究所と連携した活動を継続する。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計（）件

〔図書〕計（）件

〔学会発表〕計（1）件

- ・Motoyuki Sato, Hai Liu, Tomohiro Komagino and Kazunori Takahashi 「Archaeological survey by GPR for recovery from」 (GPR2014、2014年6月30日、於 Brussels)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	新疆、満洲をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 28）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	寺山恭輔 上野稔弘	東北アジア研究センター教授 東北アジア研究センター准教授	麻田雅文	東北アジア研究センター 教育研究支援者
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔500,000 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔1,500,000 円〕 （JFE21 世紀財団、ただし 2015 年 1 月～） 寄附など〔0 円〕		
	合 計	800,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔2 回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔回〕 ○2014 年 7 月 28 日ロシア極東現代史研究会： 講師ナタリア・クリニチ「1920－30 年代ソ連極東都市住民の日常文化の歴史」 ○日露シンポジウム «スターリニズムの政治的・日常的側面新しい事実と解釈» モスクワ 2014 年 12 月 22 日 ロシア連邦国立史料館附属ホテル 10 時 開始 1. グセフ、アレクセイ・ヴィクトロヴィチ(モスクワ国立大学、モスクワ) トロツキー主義者からみたスターリニズム：1920 末から 30 年代にかけての 左翼共産主義反対派の中でのスターリン体制の性格についての論争 2. 寺山恭輔(東北大学東北アジア研究センター、日本) 1930 年代の極東におけるソ連の鉄道政策 3. ハウストフ、ヴラディーミル・ニコラエヴィチ(ロシア連邦保安庁アカデミ ー、モスクワ) ソ連内務人民委員部の「日本作戦」：前提と実行 4. パプコフ、セルゲイ・アンドレーヴィチ(ロシア科学アカデミーシベリア支 部歴史研究所、ノヴォシビルスク) 1937 年の密告 5. レオンティエフ、ヤロスラフ・ヴィクトロヴィチ(モスクワ国立大学、ロシア 国立社会政治史史料館、モスクワ)全連邦エスエルセンター 6. ドロズドフ、コンスタンティン・セルゲーヴィチ(ロシア科学アカデミーロ シア史研究所、モスクワ) 地区規模の«大テロル»:クルスク州ベルゴロド市と ベルゴロド地区における 1937－1938 年の政治弾圧史について(ベルゴロド 州現代史国立史料館史料をもとに) 7. コスティルチェンコ、ゲンナディ・ヴァシリエヴィチ(ロシア科学アカデミ ーロシア史研究所、モスクワ) 国家的反ユダヤ政策の観点からみたソ連にお ける戦後の弾圧 8. ペトロフ、ニキータ・ヴァシリエヴィチ(メモリアル、モスクワ)			

	年老いた暴君:スターリン晩年の政治弾圧 9. 立石洋子(日本学術振興会特別研究員) 現代ロシアの歴史教科書へのスターリン時代の反映：第二次世界大戦期 ○日時 2015年3月21日(土) 13:00～17:00 場所 早稲田大学 26号館 1202教室(大隈講堂横の「大隈記念タワー」12階) 司会 鈴木健夫(早稲田大学名誉教授) 開会の挨拶 ロシア研究所所長 長與 進(早稲田大学政治経済学術院教授) I「第一次世界大戦へ向かうロシア：東西の港から考える」(13:10) 左近幸村(新潟大学准教授) II「第一次世界大戦におけるロシア帝国の避難民：「福祉」の観点から」(14:10) 広岡直子(東京外国語大学講師(非)) 休憩 III「第一次世界大戦とロシアの地方」(15:20) 通訳付 ヴィクトル・コンドラシン(ペンザ教育大学教授) 討論 閉会の挨拶 伊東孝之(早稲田大学名誉教授)
研究の目的と 本年度の 成果の概要	本年度は、あてにしていた外部研究活動資金の獲得が不調だったために、スタッフによる海外への調査に困難が伴った。寺山は一年を通じてアウトプット作業に専念し、年度末に数年来の懸案であった『スターリンと新疆』の刊行にこぎつけることができた。ロシアと中国を研究対象とする歴史研究者が、一国史の枠組みを越えて対象とする地域を異なる角度から考察するという本共同研究設置本来の目的達成のための成果の一部である。また2014年度国際シンポジウム企画に応募し、2014年12月22日モスクワにて日露歴史セミナーを開催し、その論文集をユニットの予算により刊行することができた。2014年度は3人のロシア人教授を客員教授として招聘し、関連した研究会を組織、後援するとともに、論文集にこれらの先生方の論文を掲載することができた。上野は引き続き文献の調査収集を進めるとともにそれらの整理・分析も着実に進めている。10月に短期間ではあるが米国スタンフォード大学フーヴァー研究所を訪問し『蒋介石日記』を閲覧し、2015年3月中旬に英国立公文書館および大英図書館での史料閲覧を行う予定である。また本センターの他共同研究企画の研究集会や学外での研究集会で報告を行ったが、扱った題材は本共同研究につながるものであり、本共同研究の活動の延長に位置づけることができる。2015年2月28日に開催した外部評価委員との会合においても、今後の共同研究の展開につながる有益な情報交換を行うことができた。教育研究支援者麻田も研究集会のパネルを組織し、自身の科研費で資料収集をおこなった。
成果公開状況 計画	本共同研究の成果公開状況は以下の通りである。 ・ 寺山恭輔『スターリンと新疆』社会評論社、2015年3月、638頁。 С.А.Папков, К.Тэраяма ед., Политические и социальные аспекты истории сталинизма. Новые факты и интерпретации, Москва, РОССПЭН, 2015. ・ К.Тэраяма, «Советская политика по развитию сети железных

	дорог на Дальнем Востоке в 1930-е гг.: военизация, политотделы, строительство вторых путей», там же, ・寺山恭輔「書評 Е.Н.Чернолуцкая, Принудительные миграции на советском Дальнем Востоке в 1920-1950-е гг., Владивосток: Дальнаука. 2011. 512с.」『東北アジア研究』第19号、2015年3月、219－226頁. ・寺山恭輔「書評 Н.Г.Кулинич, Повседневная культура горожан советского Дальнего Востока в 1920-1930-е годы, Хабаровск: Издательство Тихоокеанского государственного университета, 2010. 375с.」『東北アジア研究』第19号、2015年3月、227－237頁. ・上野稔弘「20世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」(東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成26年度第1回研究会)2014年6月14日 ・上野稔弘「『第二代中国民族政策』の提起から読み解く中国民族問題の現状」(霞山中国学術研究大会、東京)2014年8月4日 このほか、本共同研究と「20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」合同のWebページを開設し、東北アジア研究センターホームページのプロジェクト研究紹介ページにリンクを貼った。 (http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/terayama24/) 今後はこれまでの活動内容に関する情報を充実させ整備を図ってゆく予定である。
研究領域	(E)紛争と共生をめぐる歴史と政治

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

東北アジア地域の専門家が集まっているという本センターの特色を生かし、本共同研究ではロシア、中国を研究対象とする歴史研究者が、両国間の関係の深い地域を対象にそれぞれの国に保管されている一次史料をもとに、一国史の枠組みを超えて新たな歴史像を構築することを本来の目的としている。その一国史の枠組みを飛び越える試みが少なからぬ成果を挙げている点でユニークである。

センター長裁量経費配分の支出概要

科研費が採択されなかったため、外国出張旅費として使用。

学際性

学際性の有無〔無〕

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉日本及びロシアにおける著作の発表

国際連携

〈連携機関名〉ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所、ロシア科学アカデミー極東支部考古学、民族学、極東諸民族研究所、モスクワ大学、ロシア科学アカデミーロシア史研究所、モスクワ大学、ロシア国立社会政治史史料館、メモリアル

〈連携の形態〉日露歴史セミナーの開催

国内連携

〈連携機関名〉早稲田大学

〈連携の形態〉講演会、研究会への参加、協力

〈連携機関数〉1

学内連携

〈連携部局名〉東北大学文学部

〈連携の形態〉外部評価委員としての参加

〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東北アジア研究センター／研究会への参加

〈ポスドクの活用形態〉該当なし

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

今年度はロシアから見た中国の新疆について考察した専書を刊行することができた。より困難が伴う中国からの考察について鋭意、史料収集と刊行に向けた作業を継続中である。また新疆の次のターゲットにもとりかかると準備を行っている。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計（3）件

- ・ К.Тэраяма 「Советская политика по развитию сети железных дорог н」 (Политические и социальные аспекты истории сталинизма: Новые факты и интерпретации, 2015)
- ・ 寺山恭輔 「書評 Е.Н.Чернолуцкая, Принудительные миграции на советском Дальнем Востоке в 1920-1950-е гг., Владивосток: Дальнаука. 2011. 512с.」 (東北アジア研究 19 号、2015 年)
- ・ 寺山恭輔 「書評 Н.Г.Кулинич, Повседневная культура горожан советского Дальнего Востока в 1920-1930-е годы, Хабаровск: Издательство Тихоокеанского государственного университета, 2010. 375с.」 (東北アジア研究 19 号、2015 年)

〔図書〕計（2）件

- ・ 寺山恭輔 「スターリンと新疆：1931－1949 年」 (社会評論社、2015 年)

- ・ С.А.Папков, К.Тэраяма 「Политические и социальные аспекты истории сталинизма: Новые факты и интерпретации,」 (РОССПЭН、2015)

〔学会発表〕計（3）件

- ・ 寺山恭輔「1930年代を中心とするソ連の対モンゴル、新疆政策の類似点と相違点」（近現代東北アジア地域史研究会、2014年12月6日、於立命館大学草津キャンパス）
- ・ 上野稔弘「20世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」（東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成26年度第1回研究会、2014年6月14日、於東北大学東北アジア研究センター）
- ・ 上野稔弘「『第二代中国民族政策』の提起から読み解く中国民族問題の現状」（霞山中国学術研究大会、2014年8月4日、於霞山会館（東京））

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通じた検証			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（2 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	瀬川昌久	東北アジア研究センター	轟莉莉	東京女子大学
	川口幸大	東北大学文学研究科	秦兆雄	神戸市外国語大学
	稲澤努	東北アジア研究センター	長沼さやか	静岡大学
	小林宏至	学振特別研究員（PD）	兼城糸絵	鹿児島大学
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔200,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	200,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔2 回〕／国内会議〔1 回〕／国際会議〔回〕／その他〔1 回〕 宗族研究展望―古典的研究対象の現在を再考する * 全体趣旨説明／瀬川昌久 * 客家土楼から宗族を再考する―「分裂」か、あるいは「複製」か／小林宏至 * 現代中国の「漁民」と宗族―広東省東部汕尾の事例から／稲澤努 * 宗族であり続けることと海外移民―福建省福州市のある移民母村の事例から ／兼城糸絵 * 国家と宗族―親族研究の新たな可能性に向けて／川口幸大 * コメント：長沼さやか、末成道男 中国の親族組織・宗族は、文化人類学的な中国研究の古典的な研究トピックである。その後、文化大革命等の急進的改革により中国本土では一旦姿を消したが、1990 年代以降の社会変化の中で、宗族は中国の東南部を中心に目覚ましい再生をみせている。そこで、宗族研究をめぐる 2 つの変化、宗族自体の変化と研究者のパラダイム変化について再確認する必要がある。その上で、1990 年代からの宗族再生現象とその研究意義について考察する。特に 2000 年紀現代中国でフィールドワークを行っている若手研究者からの視点を重視する。親族関係を「親密圏」内部で完結するものとせず、それが地域社会や国家社会といったより広い公的領域にかかわる言説や価値規範に結びついて行く現象を再考すること、すなわち親族関係というものについて 20 世紀後半期以降の人類学が等閑視し続けてきた側面に再び光を当てるためには、中国の宗族という事例が貢献し得る点は非常に大きい。			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	中国の父系親族組織である「宗族」をテーマとし、それが中国の改革開放政策、経済発展等によってどのような変容を経験しているのかを跡づけるとともに、研究する側の視点、すなわち文化人類学的にこの「宗族」を研究しようとしてきた研究者の視点が、近 30 年間の研究者内部の意識的・無意識的なパラ			

	ダイムシフトにともなう、どのように変遷してきたかを問うことを目的とする。かつて中国の社会の人間関係の基本モデルをなすものとして注目を集めた宗族の組織原理やその倫理規範は、今日復興を遂げた宗族の一部においては、伝統文化の資源化や商品化と連動して再活性化されているように見える。これら研究対象と研究主体のダブルな変化の間の相関について、当該分野における主要な研究者の参加を仰いで討論を重ね、われわれ研究者の現在の立ち位置についての客観的理解と今後の研究展望について、一定の共通認識を確立することを目指す。本年度は、昨年度までの研究成果を踏まえ、5月16日に東京で成果とりまとめのための研究会を、また5月17日には幕張メッセにおいて日本文化人類学会第48回研究大会の分科会発表を行った。さらにそれらを取りまとめ、研究成果出版のための編集作業を行った。なお、既に脱稿した同共同研究の成果報告は、年度内の出版の予定であったが、出版社の都合で遅延しており、平成27年度前半には出版される予定である。
成果公開状況 計画	研究成果の最終報告として、論文集『宗族と中国社会の現在——対象変化と研究視座の変遷をめぐる考察』（風響社）の出版を企画し、すでに全ての脱稿を終えている。本年度中の出版の予定であったが、出版社の都合により出版は平成27年度前半にずれ込む見込み。
研究領域	(C)移民・物流・文化交流の動態

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

東北アジア、特にその中国文化圏からなる東アジア地域において、親族・家族の理念が歴史的に重要性をもってきたが、それらの地域の現代社会を考える上でもそうした文化的背景に注目することは大きな意義がある。すなわち、今日の経済次元でのグローバリゼーションの進展から一見普遍的なものに見える社会の近代化のプロセスも、より深い質的な観察を踏まえると、決して同一のプロセスではなく、各社会の独自性が厳然として存在する。東アジアの親族・家族理念に基づく諸社会規範は、確かに現代社会の中で大きな変容にさらされつつあるが、逆にそうした前世代の社会規範を客体化し、文化的な資源とする動きも存在しはじめている。中国の宗族再生現象はまさにその代表的なものであり、その動向をつぶさに分析することは、欧米社会のみを唯一のモデルとして語ることはできない人類の「近代」の新たな展開の方向性を予見する上で、極めて重要な手がかりである。さらにいえば、それは個人の史的な人間関係の領域を超え、同地域におけるナショナリズムや公共性の認識、社会的絆やアイデンティティーなど極めて普遍的な問題を理解する上での欠かせない前提となるものである。

センター長裁量経費配分の支出概要

センター長裁量経費はいただいておりません。

専門分野での意義

文化人類学

〈内容〉宗族は文化人類学的中国研究にとって古典的テーマであるが、1990年代以降の中国本土に於ける宗族再生現象を受け、あらためてその現代的な存在理由と親族研究再興に対してそれがもつ意義を考察しようという点に著しい独創性があり、これまでの先行研究には見られない視点を有している。

学際性

学際性の有無〔無〕

〈参加した専門分野数〉 1 〈分野名称〉 文化人類学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉研究成果を市販図書として公開し、広く一般読者に公表する予定。

国際連携

〈連携機関名〉 広東省民族宗教研究院

〈連携の形態〉 本センターとの部局間協定

国内連携

〈連携機関名〉 東京女子大学、神戸外国語大学、京都文教大学、鹿児島大学、静岡大学

〈連携の形態〉 研究者個人ベースでの研究会参加

(各所属大学はそれをサポートしてくれているという意味での協力)

〈連携機関数〉 5

学内連携

〈連携部局名〉 文学研究科

〈連携の形態〉 兼務教員派遣

〈連携部局数〉 1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉 環境科学研究科での指導学生の研究会参加

〈ポスドクの活用形態〉 学振研究員の研究会への参加

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

順調に推移し、研究成果の最終的なとりまとめまで完了した。既に脱稿した同共同研究の成果報告は、年度内の出版の予定であったが、出版社の都合で遅延しており、平成 27 年度前半には出版される予定である。

最終年度 該当〔有〕

論文・著書

〔雑誌論文〕 計 (1) 件

・瀬川昌久「現代中国における宗族の再生と文化資源化」(東北アジア研究 18 号、2014 年 2 月 19 日)

〔図書〕計（0）件（成果論文集発刊準備中）

〔学会発表〕計（5）件

- ・瀬川昌久「宗族研究展望―古典的研究対象の現在を再考する：全体趣旨説明」（日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、於幕張メッセ）
- ・小林宏至「現代中国の「漁民」と宗族―広東省東部汕尾の事例から」（日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、於幕張メッセ）
- ・稲澤努「現代中国の「漁民」と宗族―広東省東部汕尾の事例から」（日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、於幕張メッセ）
- ・兼城糸絵「宗族であり続けることと海外移民―福建省福州市のある移民母村の事例から」（日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、於幕張メッセ）
- ・川口幸大「国家と宗族―親族研究の新たな可能性に向けて」（日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、於幕張メッセ）

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	江戸時代から現代に通じる東北の歴史			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（2 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	荒武賢一郎	東北大学東北アジア研究センター・准教授	杉本寛郎	所沢市生涯学習センター・専門員
	加藤 諭	東北大学学術資源研究公開センター史料館・教育研究支援者	宮田直樹	米沢市教育委員会・職員
	兼平賢治 佐藤和賀子	東北大学大学院文学研究科・助教 山形県立米沢女子短期大学・非常勤講師	三ツ松 誠 野本禎司 松岡弘之	佐賀大学地域学歴史文化研究センター・専任講師 公益財団法人徳川記念財団・専任研究員 大阪市史料調査会・調査員
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕		
	外部資金	上廣歴史資料学研究部門予算〔100,000 万円〕		
	合 計	400,000 円		
研究会等の内 容	研究会〔1 回〕／国内会議〔0 回〕／国際会議〔0 回〕／その他〔0 回〕 「江戸時代から現代に通じる東北の歴史」 第 3 回会議（2014 年 7 月 26・27 日） 会場：東北大学川内北キャンパス 川内合同棟 3 階 301 会議室 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/access.html ◎7/26（土）13:00～18:00 研究報告会Ⅰ ①13:10～14:10 野本 禎司「近世後期出羽幕領の代官支配行政―中央と地方の視点から―」 ②14:15～15:15 佐藤 和賀子「軍医坂琢治と妻しまの社会事業―「宮城授産場」と「宮城幼稚園」―」 ③15:20～16:20 加藤 諭「戦前期東北の百貨店業形成～藤崎を事例に～」 ④16:25～17:25 松岡 弘之「高度成長期の本吉郡唐桑町」 ＊17:30～18:00 1 日目総合討論 ◎7/27（日）9:30～15:00 研究報告会Ⅱ ⑤9:30～10:30 兼平 賢治「近世東北における馬の流通と馬皮・馬尾需要の展開―南部馬・仙台馬を中心に―」 ⑥10:35～11:35 宮田 直樹「嘉永期の米沢藩における織物流通と専売制」 ⑦11:40～12:40 三ツ松 誠「平田篤胤の「大東亜戦争」」 ⑧13:15～14:15 荒武 賢一郎「総論：江戸時代から現代に通じる東北の歴史」 ＊14:15～15:00 2 日目総合討論、研究打ち合わせ			
研究の目的と本年度の成果の概要	本共同研究は、17 世紀から 20 世紀の約 300 年間を対象として、東北地方における歴史研究の発展を目指すものである。歴史学では古代・中世・近世・近現代といったような時期区分をおこない、それぞれの時代の特徴を語る手法が一般的だといえよう。しかし本研究では、そのうち近世と近現代を包摂して、江戸時代から現代へつながる地域史の議論を想定し、東北地方の歴史研究に精			

	通するメンバーでこの課題に取り組んできた。また、総合的な歴史分析よりも、メンバー各位が関心を持つ課題をより一層進展させることを前提に、①領主と民衆の交差、②物流と商工業の変化、③東北の人物・思想、という大きな論題を設定した。この論題に基づき、研究の深化と、地域社会への貢献を視野に入れた活動を目指し、かつて東北に住み暮らした人々の足跡を実証していく狙いを持っている。 第一に、領主と民衆の関係を取り上げた。江戸時代の支配は必ずしも強固なものではなく、領主・領民は「持ちつ、持たれつ」の状況を作り、年貢輸送や財政運営において協調する姿勢を持っていた。第二は、東北地方における経済史を明らかにする。江戸時代の交通を担う馬の生産と流通、米沢の特産品である織物生産、そして近代大衆消費社会の象徴といえる百貨店について、それぞれの特質を論じた。さらに第三では、人物や思想に注目し、当地における社会構造や地域の意識を詳しく明らかにした。 冒頭で述べたように、本研究は通史を語るのではなく、メンバー各自が深めている論点を共有し、「東北の歴史」に新たな知見を加えることに努めた。さまざまな歴史の見方を提示し、各論の深化を達成できたように考えている。
成果公開状況 計画	研究成果は、荒武賢一郎編『東北から見える近世・近現代—さまざまな視点から豊かな歴史像へ—』（東北アジア研究専書へ申請、岩田書院より刊行予定）として論文集を出版する予定である。
研究領域	(D)自然・文化遺産の保全と継承

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本年度は最終年度ということで各自の研究テーマをまとめ、共同研究全体の総括をおこなった。まず重要な点としては、当該研究に関する歴史資料の保全を実施したことにある。たとえば、松岡弘之が進めている宮城県唐桑町、佐藤和賀子が調査を実施した仙台市内の歴史資料は、本共同研究が重点的に取り組んだもので、この成果を今後も広く公開できるよう努める予定である。また、秋田（三ツ松誠）、米沢（宮田直樹）、山形（野本禎司）のように、地方自治体の公文書館・図書館に所蔵される歴史資料の内実を明らかにする作業、あるいは東北地方以外に所蔵される文書（北海道立図書館、三重県総合博物館＝荒武賢一郎）のデータをメンバーにおいて情報を共有し、相互の研究に有益な総合化を図ることができた。これらの作業は、東北アジア研究の構成要素である日本の歴史研究および資料保全の一環にもつながり、今後センターが推進する地域研究のモデルケースとなるであろう。

センター長裁量経費配分の支出概要

【国内旅費】

7/26～7/27	佐賀-仙台（三ツ松誠）	79,320	
7/26～7/27	米沢-仙台（宮田直樹）	23,700	
7/26～7/27	大阪-仙台（松岡弘之）	55,840	
7/26～7/27	桶川 - 仙台（野本禎司）	36,440	
11/21～11/22	仙台 - 札幌（荒武賢一郎）	53,190	
2/21～2/22	仙台-津（荒武賢一郎）	51,510	合計 300,000

専門分野での意義

歴史学

〈内容〉資料保全活動とその活用を意識して、近世から近現代にかけての東北地方の歴史を明らかにした。

学際性

学際性の有無〔無〕

〈参加した専門分野数〉 1 〈分野名称〉 歴史学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉研究成果について、市民講座など地域連携事業で発信をする。

第三者による評価・受賞・報道など

なし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本共同研究は、2013・2014年度の2年間を予定し、考察を進めてきた。初年度には基礎作りとメンバーの情報共有を中心としたが、今年度は成果報告(論文集作成)に向けた各テーマの集約と、共同研究全体の総括をおこなった。今後の課題は、メンバーが執筆済みの草稿を修正することと、地域連携を意識した歴史講演会などを実施することである。

最終年度 該当〔有〕

最終年度報告

〈最終年度研究成果〉

本共同研究は、17世紀から20世紀の約300年間を対象として、東北地方における歴史研究の発展を目指してきた。私たち共同研究のメンバーは、歴史学を専攻し、日本近世・近現代史の専門分野で活動している。そのなかでも、経済や社会の歴史を主題とし、本共同研究でもこの「個性」を存分に発揮し、東北地方の地域史研究を深化させることを課題としてきた。また、「江戸時代から現代に通じる」と銘打った理由としては、歴史の事象を過去の動向に閉じ込めるのではなく、現代社会にも強く関わりを持つ制度・活動・思想があることを実証すべきだという姿勢を強調してきた。その目的に対しては総合的な歴史把握よりも、①領主と民衆の交差、②物流と商工業の変化、③東北の人物・思想、という具体的論題を追究することを重視した。

領主と民衆を頑強な主従の状況を述べるのではなく、江戸時代の流動的かつ柔軟性を有した領主・領民のありようを示した。支配機構のない現代社会との対比をするならば、行政と税制の問題はひとつ重要な論点となるだろう。歴史的に東北地方の経済的後進性は先行研究で縷々述べられてきたが、当地の持つ特徴をふまえて、馬の生産と流通、織物生産と全国的物流、そして近代大衆消

費社会の象徴といえる百貨店について、それぞれの特質を論じた。生産から流通・消費というセオリーを意識しながら発展形態のみではない東北の経済を見つめ直す成果を提示できた。さらに東北で生きた人物や思想に注目し、当地における社会構造や地域の意識を詳しく明らかにした。思想を把握することは地域を把握することにもつながるが、これらの素材から社会福祉や民衆の生活の具体相を示している。「個」から「社会」へという現代社会の諸課題とも共通する論点として深めた。

本研究は過去の話として通史を語るのではなく、メンバー各自が深めている論点を共有し、「東北の歴史」に新たな知見を加えることに努めた。さまざまな歴史の見方を提示し、歴史学以外の隣接諸科学と議論をできる素地を提供できたと考えている。

〈東北アジア地域研究としての意義についてアピール〉

本共同研究のメンバーはいずれも地域の歴史資料に精通し、そのノウハウを活かしながら資料保全とその内実を明らかにすることを意識してきた。宮城県下のほか、秋田・山形など東北地方の各地についてそれぞれが丹念な調査を実施し、その内容を共同研究で確認し、情報を共有しながら研究を進めている。これらの作業は、東北アジア研究の構成要素である日本の歴史研究および資料保全の一環にもつながり、今後センターが推進する地域研究のモデルケースとなるであろう。センターでは文理を問わず、これまで地域社会との共同作業を展開してきたが、本研究をその一つに加えることができるだろう。また、日本の事例研究を総合化する作業は、東北アジア地域の歴史・文化研究への応用も可能であり、他の研究グループとの対話によってさらに大きな地域研究の枠組みを構築できる可能性を持つ。そのひとつの基礎研究であることを含めておきたい。

論文・著書

〔雑誌論文〕計（4）件

- ・荒武賢一郎「日本列島市場論の提起と近世の特質」（「通説を見直す—16世紀から19世紀の日本—」清文堂出版、2015年）
- ・加藤諭「戦前期に東北における百貨店の展開過程—岩手・宮城・山形・福島を中心に—」（「講座東北の歴史第2巻 都市と村」清文堂出版、2014年）
- ・三ツ松誠「宗教—平田篤胤の弟子とライバルたち—」（「近代日本政治思想史—荻生徂徠から網野善彦まで—」ナカニシヤ出版、2014年）
- ・三ツ松誠「南里有隣研究の回顧と展望」（「佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要」9号、2015年）

〔図書〕計（0）件

〔学会発表〕計（7）件

- ・荒武賢一郎「Regional Societies Domain Finances in Early Modern Japan」（国際ワークショップ“Public Goods Provision in the Early Modern Economy” 2015年3月21日、於東京大学）
- ・加藤諭「満園勇『日本型大衆消費社会への胎動』（東京大学出版会、2014年刊）をめぐって」（産業化と生活環境研究会 2014年8月合評会、2014年8月11日、於愛知大学）
- ・加藤諭「小売業から見た近代日本の老いの概念の変遷」（日中二国間学術交流セミナー、2014年11月2日、於南開大学（中国天津））
- ・加藤諭「戦前期における百貨店の店舗展開—高島屋の均一店事業をめぐって—」（産業化と生活環境研究会 2014年12月例会、2014年12月6日、於慶應義塾大学）
- ・三ツ松誠「禍津日神論争再考」（日本宗教学会第73回学術大会、2014年9月13日、於同志社大学）

- ・三ツ松誠「『決戦下における平田学』－『秋田魁新報』の紙面から－」（日本思想史学会 2014 年度大会、2014 年 10 月 25 日、於愛知学院大学）
- ・三ツ松誠「林崎文庫碑文一件再考－宣長の『御民』称をめぐって－」（日本近世文学会平成 26 年度秋季大会、2014 年 11 月 23 日、於日本大学文理学部）

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	日本列島の文化交渉史—経済と外交			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（2 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	<u>荒武賢一郎</u>	東北大学東北アジア研究センター・ 准教授	古川祐貴	長崎県立対馬歴史民俗資料館・学 芸員
	小林延人	秀明大学学校教師学部・専任 講師	ル・ルー ブ レンダン	帝京大学外国語学部・専任講師
	下向井紀彦 チョン・ ヨンシル （鄭英實）	公益財団法人三井文庫・研究員 韓国・慶尚大学校慶南文化研究 院・専任講師	麻生伸一	沖縄県立芸術大学音楽学部・専任 講師
	中山 圭	天草市役所観光文化部・学芸員	宮坂 新	館山市立博物館・学芸員
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕		
	外部資金	上廣歴史資料学研究部門予算〔300,000 円〕		
	合 計	600,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔2 回〕／国内会議〔0 回〕／国際会議〔0 回〕／その他〔0 回〕 1.「日本列島の文化交渉史—経済と外交」第 3 回会議（2014 年 7 月 5・6 日） 会場：三井記念美術館レクチャールーム ◎7/5（土）13:00～17:00 ①13:00～13:55 小林 延人「内国勧業博覧会に見る文化の流入と技術の移転」 ②13:55～14:50 鄭 英實「通信使と日本文士の交際に関する一考察」 ③14:50～15:45 中山 圭「中世前期における天草の地域性—浜崎遺跡出土遺 物の分析を通じて—」 ④16:00～16:55 麻生 伸一「冊封使帰国後の王府儀礼について—一八三八年 の冠船を中心に—」 ◎7/6（日）10:00～15:00 ⑤10:10～11:05 古川 祐貴「18 世紀前後の対馬宗家の「御用頼」と幕府役人」 ⑥11:05～12:00 ル・ルー ブレンダン「仏領グアドループ島への移民政策の 背景について—県議会における議論を中心に—」 ⑦12:30～13:25 宮坂 新「近世関東における干鰯流通の展開と安房」 ⑧13:25～14:20 下向井 紀彦「鳥取藩の流通統制と三井越後屋の交渉」 ⑨14:20～15:00 荒武 賢一郎「総論：日本列島の文化交渉史—経済と外交」 2.「日本列島の文化交渉史—経済と外交」第 4 回会議（2014 年 11 月 15・16 日） 会場：三井記念美術館レクチャールーム ◎11/15（土）13:00～17:00 ①13:00～13:55 小林 延人「内国勧業博覧会における展示技法と技術移転」 ②14:00～14:55 宮坂 新「近世関東における干鰯流通の展開と安房」 ③15:00～15:55 古川 祐貴「正徳度信使費用拝借をめぐる対馬宗家の「御用頼」」			

	④16:00～16:55 荒武 賢一朗「日記から読み解く大坂商人と大名家」 ◎11/16 (日) 10:10～13:00 ⑤10:10～11:05 麻生 伸一「戌冠船からみた琉球の外交―財政と儀礼を通して―」 ⑥11:05～12:00 下向井 紀彦「文政年間における鳥取藩の木綿流通統制と三井越後屋の対応」 ⑦12:05～13:00 ル・ルー ブレンダン「望まれざる移民―フランス領グアドループ島における日本人出稼ぎ移民―」
研究の目的と 本年度の 成果の概要	近年の歴史学では、グローバル・ヒストリーをはじめ、一国史的研究を克服し、複数の国・地域にまたがる考察が深められている。また、さまざまな専門家が事例を持ち寄り、学際的に分析を深めていこうとする傾向も増えてきた。私たちの共同研究では、このような研究の潮流に刺激を受けながら、東北アジア地域における日本列島の歴史的な位置付けをおこないたい。今回の分析対象として取り上げたのは、経済と外交に関する諸問題である。この二つの問題から、「日本列島の文化交渉史」を明らかにしていく。 日本列島を中心としているが、中国や朝鮮半島との関係史について具体的事例を用いながら明らかにする。また東北アジア地域を軸としながら広く国際関係史の視座を持ち、多角的な文化交渉のあり方を実証したのが今年度の成果といえよう。 経済に関しては、江戸時代の大名（藩）財政、関東地方の肥料（干鰯＝魚肥）生産と流通、経済界をリードした三井越後屋の木綿取引などを、各地域の特性を深めながら考察した。とくに藩財政では支出に関するデータ、肥料流通では通説とは異なる新しい理解、三井の経営史と地域社会の連関といった、これまで注目されなかった成果を得ることができた。 外交分野では、日韓双方の学界、近年では中国の研究者も注目する朝鮮通信使の分析をおこなった。ここでは外交使節と地域文化の接触を取り上げている。また琉球使節の儀礼については18世紀の日本と中国、そして琉球の諸関係を詳しく分析した。その他、移民政策や国際的な技術伝播など、ヒト・モノの国際的交流について新たな知識を獲得したといえよう。
成果公開状況・計画	研究成果は、荒武賢一朗編『起点としての日本列島史』（東北アジア研究専書へ申請、清文堂出版より刊行予定）として論文集を出版する予定である。
研究領域	(C)移民・物流・文化交流の動態

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本年度は成果の集大成を目指し、調査資料の整理と研究をまとめ、共同研究全体の総括をおこなった。研究題目の「日本列島の文化交渉史」を換言すれば、「列島の内部と外部」に関する歴史分析の深化を目的としている。日本史研究で内部の研究は進められているが、ここでは経済と外交をキーワードにして、江戸時代から明治時代にかけての専論を構築した。内部の充実を図る一方で、外部との交流を同時に議論することで、日本を起点とした東北アジア地域の交流について歴史的分析をおこなった。特筆すべき点としては、たとえば江戸時代の日朝関係史を、日本と朝鮮それぞれの視点から分析し、その突き合わせによって内実を明らかにした点である。江戸幕府の対朝鮮外交政策という政治史的文脈と、朝鮮通信使の文化史的特質や両国文学の到達点を探る作業は、従来の歴史学では政治史、文化史という区別をして進められたが、一緒に議論を深めることで17世紀の地域がみえてきたのである。また、歴史概念のなかでは日本列島の周縁と位置づけられる沖縄（琉

球) や、人々やモノ・技術の移動をつなぎ合わせることで、東北アジアにおける日本列島を論議できたと自負している。

センター長裁量経費配分の支出概要

【国内旅費】

11/15～11/16 館山 - 東京(宮坂新) 9,220

11/14～11/17 巖原-東京(古川祐貴) 118,080

11/15～11/16 仙台 - 東京(荒武賢一朗) 40,000

1/30～2/2 仙台-東京(荒武賢一朗) 73,120

【複写費】

2/1 京都府立総合資料館所蔵資料(荒武賢一朗) 7,380

専門分野での意義

〈分野名〉 歴史学

〈内 容〉日本の歴史を起点としながら、朝鮮半島など東北アジア地域、世界との関係を明らかにする。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 3 〈分野名称〉 歴史学、考古学、文学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉共同研究の成果を通じて、博物館展示や市民講演会の企画を予定している。

第三者による評価・受賞・報道など

なし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本共同研究は、2013・2014年度の2年間を予定し、調査と研究を進めてきた。初年度には基礎作りとメンバーの情報共有を中心としたが、今年度は成果報告(論文集作成)に向けた各テーマの集約と、共同研究全体の総括をおこなった。今後の課題は、メンバーが執筆済みの草稿を修正することと、その他社会への成果発信について検討することである。

最終年度 該当〔有〕

最終年度報告

〈最終年度研究成果〉

諸学問全般においてグローバル化が進められてきた。歴史学においてもグローバル・ヒストリー

に注目が集まり、一国史的研究（日本であれば日本史研究）を克服し、複数の国・地域にまたがる考察が深められている。私たちの共同研究では、文献史学・考古学・文学を専門とする研究者が、このような潮流に刺激を受けながら、東北アジア地域における日本列島の歴史的位置付けをおこなってきた。歴史には多様な意味が含まれているが、本共同研究では、日本列島を取り巻く人々やモノの移動に注目し、内部と外部それぞれの内容の充実に努めている。課題に名付けたように日本列島を起点とし、東北アジア地域を軸としながら広く国際関係史の視座を持ち、多角的な文化交渉のあり方を実証した。

経済に関しては、江戸時代の大名（藩）財政、関東地方の肥料（干鰯＝魚肥）生産と流通、経済界をリードした三井越後屋の木綿取引などを主題に議論を重ねた。つまり、ここでは列島内部のあり方を検討し、各地域や人物の特性を深めながら考察することができた。とくに藩財政では支出に関するデータ、肥料流通では通説とは異なる新しい理解、三井の経営史と地域社会の連関といった、これまで注目されなかった成果を得ることができた。

外交を含む文化交流の側面では、日韓双方の学界、近年では中国の研究者も注目する朝鮮通信使の分析をおこなったことが大きい。ここでは朝鮮から派遣される外交使節と日本の地域文化の接触を取り上げ、文学史における当時の到達点と、文化の「相乗効果」に力点を置いた。また、同じ日朝関係を政治史の視角からも検討し、人々の交流を双方向で確認している。琉球使節の儀礼については18世紀の日本と中国、そして琉球の諸関係を詳しく分析した。その他、移民政策や国際的な技術伝播など、ヒト・モノの国際的交流について新たな知識を獲得したといえよう。近年の人文科学系の議論で「越境する文化」はひとつのキーワードになっていて、たくさんの成果が世に送られている。本共同研究では、日本列島に軸足を置きつつ、アジアや世界との関係を具体的実証から明らかにしたといえよう。

〈東北アジア地域研究としての意義についてアピール〉

この共同研究では、一国史的研究の蓄積した成果を活用しながら、東北アジア地域における歴史研究の方法を模索した。日本列島の経済史、交流史としているのは、通来の「日本史研究」とは異なり、アジアや世界との関係を含めて論点の再構築を目的にしているからである。また、近年の新たな資料公開にも呼応しながら、日本から朝鮮半島、中国を意識したもの、また朝鮮半島から日本の地域社会をみる視点など、いくつかの切り込み方を勘案した。その一方で、「日本史研究」では周縁と称された対馬や沖縄などを中心的分析対象にして、そこからみられる東北アジア地域のイメージも新しい意義づけがなされるだろう。複層的な構造理解と、東北アジアを分析する視角を相互連関させることで、新たな歴史分析の方法が期待できると考えている。また、日本列島以外の東北アジア史の成果と議論を重ねることで、さらなる学術的飛躍を目指したい。

論文・著書

〔雑誌論文〕計（7）件

- ・荒武賢一郎「商人と権力が交差する都市—近世後期の大坂を事例として—」（「日本史学のフロンティア 2—列島の社会を問い直す—」法政大学出版局、2015年）
- ・麻生伸一「一八世紀中期における琉球の漢字・漢文および書札札の学習について」（「沖縄芸術の科学」25号、2015年）
- ・下向井紀彦「三井越後屋による自他店比較に関する一考察—寛政年間を事例に—」（「三井文庫論叢」48号、2014年）
- ・鄭英實、張源哲「兵使公—韓範錫の対日本認識—」（「南冥学の研究」43集、2014年）
- ・中山圭「離島の織豊系城郭群」（「東アジア古文化論攷 2」中国書店、2014年）

- ・古川祐貴「朝鮮史編纂委員・栢原昌三の「宗家文庫」調査」(「アジア遊学『中世の対馬ーヒト・モノ・文化の描き出す日朝交流史ー』」177号、勉誠出版、2014年)
- ・ル・ルー ブレンダン「フランス人宣教師メルメ・カシヨンの「日本のヒエラルヒーに関する研究」について」(「帝京大学外国語外国文化」8号、2015年)

〔図書〕計(3)件

- ・荒武賢一朗「屎尿をめぐる近世社会ー大坂地域の農村と都市ー」(清文堂出版、2015年)
- ・小林延人「明治維新期の貨幣経済」(東京大学出版会、2015年)
- ・瀧井一博(著)、張源哲・鄭英實(訳)「이토 히로부미(伊藤博文)」(「한길사(Hangilsa)」、2014年)
※瀧井著『伊藤博文』(中公新書)の韓国語版

〔学会発表〕計(5)件

- ・荒武賢一朗「商人の日記から社会を読むー地域史と「日本史」をつなぐー」(シカゴ大学歴史学部・東アジア研究所主催シンポジウム、2014年6月21日、於シカゴ大学(アメリカ))
- ・荒武賢一朗「日記からみた幕末維新期の日本ー人々はなぜ記録を残すのかー」(ベルリン自由大学日本学研究所主催シンポジウム「くずし字の学習と日本文化の理解・研究」、2015年3月8日、於ベルリン自由大学(ドイツ))
- ・鄭英實「兵使公ー韓範錫の対日本認識ー」(2014年南冥学研究所第2次学術大会、2014年5月23日、於慶尚大学校(韓国))
- ・古川祐貴「歴史資料の「価値」をめぐる問題ー対馬宗家文書の場合ー」(史学会125周年事業リレーシンポジウム2014「過去を伝える、今を遺すー歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものかー」、2014/12/13、於九州大学)
- ・宮坂新「安房の干鰯」(日本福祉大学知多半島総合研究所第27回歴史・民俗部研究集会、2014年11月1日、於日本福祉大学)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	高倉浩樹	東北アジア研・教授	小谷竜介	東北歴史博物館・学芸員
	金賢貞	東北アジア研・助教	植田今日子	東北学院大学・准教授
	及川高	東北アジア研・教育研究支援者	酒井朋子	東北学院大学・准教授
	稲澤努	東北アジア研・教育研究支援者	岡田浩樹	神戸大学・教授
	川島秀一	災害科学国際研究所・教授	梅屋潔	神戸大学・准教授
	木村敏明	文学研究科・教授	兼城糸絵	鹿児島大学・准教授
	滝澤克彦	長崎大学・准教授	山口未花子	岐阜大学・助教
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 研究所等連携プロジェクト軽費〔800,000 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔1,950,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕		
	合 計	3,050,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔6 回〕／国内会議〔4 回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔0 回〕 第 1 回 2014 年 5 月 28 日 報告 1 来住者を閉ざした津波常襲集落一津波で解散する気仙沼市唐桑町の一 集落から 植田今日子/報告 2 被災地の民俗社会像を点検する ― 伝承母体・類型・応用― 及川高 第 2 回 2014 年 7 月 5 日 1.ブレインストーミング「みやしんぶんデータベースの活用と展開」高倉浩樹、 山口未花子、滝澤克彦、及川高/ 2.研究報告 「The ethnographer in the hinanjo -Yamada-machi, Iwate 2011」ブリギッテ・シテーガ氏（ケンブリッ ジ大学／慶應義塾大学訪問教授） 第 3 回 2014 年 9 月 25 日 チェルノブイリと福島原発災害比較調査について 話題提供家田修氏（北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター）・岩本由輝 氏（東北学院大学名誉教授）・小澤祥司氏（環境ジャーナリスト）・家田裕子氏 （チェコスロバキア史） 第 4 回 2015 年 1 月 10 日 年度研究報告会：メンバー全員による発表と以下のゲスト研究者の報告、総合 討論 大友和佳子+堀川直子 国際会議 ワークショップ「Tohoku/ Christchurch: Reflections on the Socio- cultural Impacts of the Quakes」			

	日時；2014年10月30日（木）～31日（金）会場；カンタベリー大学（ニュージーランド・クライストチャーチ市） 詳細は http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/takakura26/workshop.html
研究の目的と 本年度の 成果の概要	本共同研究は、東日本大震災後の地域社会における復興過程を民族誌的に解明しつつ、それらを比較総合化することで全体像の解明を試みるものである。と同時にそこで収集された民族誌資料の実践的な取り組みをおこなう。このことを通して、人類学・民俗学・宗教学等（以下、「人類学等」）の分野によるフィールドワークにもとづく震災復興過程のデータ蓄積と理論的探求をおこないつつ、民族誌情報を社会にむけて発信していく体制を構築することを目指す。 もう一つの課題は、調査によって蓄積されてきた民族誌情報の社会的活用を行うことである。電子データベース化の構築や被調査地域社会間の連携交流、さらに防災人類学的なワークショップもおこないつつ、人類学等によるフィールドワークにもとづく民族誌資料を学術情報として地域社会や地方行政への支援に役立てる方途について実践をふまえつつ探求する。 本年度は初年度として共同研究実施体制を整えると共に、震災直後の緊急調査からいかに次のステップとしての調査研究を行うか、さらに国際的な連携について模索をおこなうことを目的とした。実際にプログラムに示したように、4回の国内研究会と1回の国際会議などを実施することで、メンバーの東日本大震災の復興過程に関わる民族誌研究の進展について相互に研究交流をすることが出来た。ニュージーランドでワークショップを開催することで、同じ被災地での後の人文系研究の実践的活動について相互に知見を紹介し議論することができた。またこれまで宮城の津波被災が中心だった民族誌研究について、福島県原発災害の民族誌研究についても調査しはじめる体制を構築することが出来た。 民族誌情報の社会的活用についても研究会や交流、国際ワークショップを通して検討を重ねた。この点については東北大災害研の柴山明寛准教授主催の東日本大震災アーカイブプロジェクトとの連携も行いつつ、宮城県内の図書館関係者などと交流をもつことができたが、具体的な成果は今後の課題である。
成果公開状況 計画	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/takakura26/index.html
研究領域	(A) 環境問題と自然災害

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

本共同研究は、日本研究としての側面ももっており、災害に際して日本社会・文化がどのような対応をするのかについての人類学・民俗学研究の点において成果を上げている。また激甚災害時に人類学・民俗学分野が行うべき調査研究支援に関わる内容についても明示しており、この点については応用地域研究としての意義も認められる。また海外の日本研究者との接点をつくりだしたという点でも重要な意義があった。

センター長裁量経費配分の支出概要

メンバーの研究会への招聘旅費

専門分野での意義

〈分野名〉文化人類学、民俗学

〈内容〉災害の人類学、民俗学については本共同研究のメンバーは専門家として高く評価されている。特に代表の高倉浩樹は、現代民俗学会第24回において、その編著『無形民俗文化財が被災するということ』が書評会に取り上げられ招へいされたほか、東京文化財研究所の無形民俗文化遺産部主催のシンポジウム（2014/12/5）においてもコメンテーターとして招へいされている。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 3 〈分野名称〉 文化人類学、民俗学、環境社会学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

〈内容〉東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用

社会還元性

社会還元性の有無〔無〕

国際連携

〈連携機関名〉カンタベリー大学日本学研究室

〈連携の形態〉ワークショップの共同開催

国内連携

〈連携機関名〉東北学院大学、東北歴史博物館、神戸大学、岐阜大学、長崎大学、鹿児島大学

〈連携の形態〉共同研究メンバー

〈連携機関数〉6

学内連携

〈連携部局名〉文学研究科、災害科学国際研究所

〈連携の形態〉共同研究メンバー

〈連携部局数〉2

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉文学研究科

〈ポスドクの活用形態〉特になし

第三者による評価・受賞・報道など

- ・新聞紹介 読売新聞（2014/10/10）キャンパス発 無形文化財震災後の歩み
- ・新聞紹介 河北新報夕刊（2014/12/20）「再生 せんだい ひと模様 地区復興への大きな力に「みやしんぶん」プロジェクト代表 高倉浩樹さん」
- ・ラジオ出演 J-WAVE（2015/1/9）Jam the world, Hear to Heart

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

被災民族誌情報の応用、社会的活用について来年度は検討して行きたい

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計 (12) 件

・高倉浩樹「宮城県における民俗文化財現況調査について」(「3.11復興支援 無形文化遺産情報ネット

ワーク報告書2013 東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興」2014年)

・高倉浩樹「宮城県津波被災地における無形民俗文化財調査」(「SEEDer: 地球環境情報から考える地球の未来11」昭和堂、2014年)

・高倉浩樹「調査写真・画像から展示をつくるー現地と母国の市民をつなぐ応用映像人類学」(「フィールド映像術」古今書院、2015年)

・高倉浩樹「序 展示する人類学」(「展示する人類学」昭和堂、2015年)

・高倉浩樹「写真資料をめぐる対話」(「展示する人類学」昭和堂、2015年)

・滝澤克彦「民俗文化財復活の意味／東日本大震災 宮城県内の被災地調査／「震災前」を「震災後」につなぐ」(「中外日報」2014年4月2日号)

・川島秀一「災害伝承と自然観」(「口承文芸研究」38、2015年)

・川島秀一「『東北』の過去から未来へ向けてー津波と三陸沿岸をめぐる」(「歴史地理教育」831、2015年)

・川島秀一「三陸沿岸における津波と漁業の伝承」(「水産振興」567、2015年)

・植田今日子「来住者を閉ざした津波常習集落ー津波で解散する気仙沼市唐桑町の一集落から」(「理論と動態」7、2014年)

・小谷竜介「被災地域博物館の実りある連携を目指して」(「季刊民族学」38(2)、2014年)

・小谷竜介「文化財レスキュー活動の3年目」(「宮城考古学」16、2014年)

〔図書〕計 (2) 件

・高倉浩樹「展示する人類学ー日本と異文化をつなぐ対話」(昭和堂、2015年)

・川島秀一「安さんのカツオ漁」(富山房インターナショナル、2015年)

〔学会・会議等発表〕計 (27) 件

・高倉浩樹「Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects」(International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014、2014年5月16日、於千葉・幕張メッセ)

・高倉浩樹「被災後の無形民俗文化財調査から学んだこと」(現代民俗学会第24回研究会「何ができる、何ができないのかー『無形民俗文化財が被災するということ』からつかみとる課題」、2014年7月26日、於東京大学・東洋文化研究所)

・高倉浩樹「The Intangible Cultural Heritage Survey after 3.11 Tohoku Earthquake and the role anthropology」(The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia、SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”、2014年11月19日、於ガジャマダ大学(インドネシア))

- ・高倉浩樹・及川高「東日本大震災後の無形文化遺産調査と日本研究」(日露ワークショップ「日本文化を教えるⅡ：ロシアと日本の日本研究者の対話」、2014年11月29日、於東北大学)
- ・滝澤克彦「東日本大震災における被災した神社祭礼復興の諸相」(「宗教と社会」学会第22回学術大会、2014年6月21日、於天理大学)
- ・滝澤克彦「The Varieties of Restoration of Local Festivals Affected by the 3.11 Tohoku Earthquake」(The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”、2014年11月19日、於ガジャマダ大学(インドネシア))
- ・木村敏明「ジャワ島ムラピ山噴火災害と宗教」(日本宗教学会第73回学術大会、2014年9月13日、於同志社大学)
- ・木村敏明「Religious Conditions in Japanese Society after 3.11 Earthquake」(International Conference on Natural Disaster Theological and Cultural Perspective、2014年10月8日、於国立イスラーム大学(インドネシア))
- ・木村敏明「Lost Community Ritual and its Revival after Tohoku Earthquake」(東北大学カンタベリー大学ワークショップ、2014年10月30日、於カンタベリー大学(ニュージーランド))
- ・木村敏明「Reevaluating Religious Role as a Social Resilience in post 3.11 Japan」(The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”、2014年11月19日、於ガジャマダ大学(インドネシア))
- ・川島秀一「災害伝承と自然観」(日本口承文芸学会第38回年次大会、2014年6月8日、於東北大学)
- ・川島秀一「カツオ漁の風土と災害」(日本カツオ学会 第3回カツオセミナー、2014年6月28日、於高知大学)
- ・川島秀一「自然災害から復興する集落の諸相―東日本大震災と三陸漁村」(日本村落研究学会第62回大会、2014年11月2日、於グリーンピア三陸みやこ)
- ・岡田浩樹「事業代表者による事業内容説明『第14回震災復興支援・災害科学研究推進室会議』」(神戸大学震災復興支援室、2014年4月23日、於神戸大学)
- ・岡田浩樹・梅屋潔「フィールドワークおよび記録・保存のスキルの被災地学生・大学院生に対する移転―震災被害状況の共同フィールドワークと記録・保存作業を通じたコミュニティ再構築のサポート―」(第3回震災復興支援・災害科学研究推進室主催シンポジウム、2015年1月15日、於神戸大学出光佐三記念六甲台講堂)
- ・岡田浩樹・梅屋潔「Fieldwork in Collaboration and Sharing of Knowledge with Disaster Areas ; Hanshin Awaji, Great East Japan, Christchurch」(第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム 被災大学間連携シンポジウム住民主体の災害復興と大学の役割―、2015年3月15日、於仙台市民会館)
- ・梅屋潔「民俗学の論点 2014―いま民俗学が論じ、取り組むべきこと」(現代民俗学会第24回研究会「何ができて、何ができないのか―『無形民俗文化財が被災するということ』からつかみとる課題」、2014年9月28日、於東京大学東洋文化研究所)
- ・梅屋潔「コメント 日本の無形文化遺産(菅豊『無形文化遺産を人はどう受け止めたのか? 制度がずれる／制度をずらす』)」(公開フォーラム「文化遺産の人類学」、2014年11月8日、

於国立民族学博物館)

- ・植田今日子「Why do sufferers of great earthquake conduct the traditional events under evacuation orders? Lessons from」(International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2014 年 5 月 15 日、於幕張メッセ)
- ・小谷竜介「『おらほの祭り』を取り戻すための試み」(国立民族学博物館共同研究「震災復興に於ける在来知」研究会、2014 年 7 月 12 日、於国立民族学博物館)
- ・小谷竜介「志津川湾の暮らし—民具から見えてくるもの、民俗から見えてくるもの—」(公開シンポジウム『海と向き合う人々の民俗学』公益財団法人慶長遣欧使節船協会、2014 年 10 月 25 日、於宮城県慶長使節船ミュージアム)
- ・小谷竜介「地域社会の繋がりを考える—七夕行事から—」(市民向け報告会「歴史・考古・民俗から気仙地域の魅力を語る」、2015 年 2 月 15 日、於横田コミュニティセンター(岩手県陸前高田市))
- ・兼城糸絵「The revitalization of local community after the Great East Japan Earthquake」(The Second East Asian Island and Ocean Forum、2014 年 10 月 9 日、於上海海洋大学)
- ・兼城糸絵「災害後の社会と文化—東日本大震災の津波被災地調査ノートより」(鹿児島大学地域防災教育研究センター・東北大学リーディング大学院合同イベント「歴史・文化・地域から災害を学ぼう」、2014 年 12 月 14 日、於鹿児島大学)
- ・稲澤努「『後改革開放』時期的小城市寺廟：以広東省汕尾為例」(「宗教と文化」国際学術交流研究会、2014 年 4 月 26 日、於南京大学)
- ・稲澤努・金賢貞「復興過程の被災地における民俗芸能とスマートエイジング」(東北大学第 4 期研究所連携プロジェクト 平成 26 年度成果報告会、2015 年 2 月 2 日、於東北大学片平キャンパス)
- ・及川高「この先への葛藤—2014 年陸前高田の「動く七夕」—」(日本民俗学会第 66 回年次大会、2014 年 10 月 12 日、於岩手県立大学)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	典籍文化遺産の研究			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	<u>磯部 彰</u>	東北大学東北アジア研究センター・教授	潘 建国	(中国)北京大学中文系・教授
	佐々木 聡	東北大学東北アジア研究センター・専門研究員	陳 正宏	(中国)復旦大学古籍整理研究所・教授
	高橋 亨	東北大学大学院文学研究科・専門研究員	石 昌渝	(中国)中国社会科学院文学研究所・教授
	羅 莞翎	東北大学大学院文学研究科・大学院生	石 雷	(中国)中国社会科学院文学研究所・副編審
	崔 溶澈	(韓国)高麗大学校中語中文学科・教授	王 三慶	(台湾)国立成功大学中国文学系・特聘教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔300,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔100,000 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔1,000,000 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	1,400,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔回〕／国内会議〔回〕／国際会議〔回〕／その他〔回〕			
研究の目的と 本年度の 成果の概要	東アジア出版文化を中心としたデータベース作成を開始することに伴い、データベースのもととなる古典籍の研究、それより導かれるテキスト批判、系統化が必要となってくる。そのため、共同研究を構築し、中国の宋元明清各刊本、朝鮮本、ベトナム本、和刻本及び日本写本、ヨーロッパ活字本・古文書類について書誌・文献学の立場から印刷物・写本の年代や生産過程について検討を加える。 本年度は、共同研究の個別的成果を主に国際学会で発表することに重点を置き、その成果をデータベース掲載文献に反映した形で利用した。 以下は主な成果であるが、共同研究による具体的な成果は別紙の論文・発表・著書の表に記載した。 【国際学術会議】 ・2014 年 10 月中国江蘇省揚州・揚州大学文学院「中国宝卷国際検討会暨中国俗文学学会 2014 年会」：宝卷に関する国際会議に磯部彰が招待された。こちらは論文参加とし、清代故事系宝卷成立に関する論考を提出した。 ・2014 年 11 月中国北京市・中国人民大学「清代戏曲与宫廷文化学术研讨会」：アメリカコロンビア大学・北京故宮博物院故宮学研究所・中国人民大学文学院で共催する清代戯曲与宮廷文化学研究会で行なった国際学術会議にて、磯部彰が招待発表者として中国社会科学院文学研究所石雷女史と参加し、大戯			

	「昇平宝筏」版本についての研究発表し、清朝宮廷演劇に関する討論を行なった。 ・2014年11月中国安徽省全椒・中国儒林外史学会「2014年中国・全椒呉敬梓逝世260周年国際学術研討会」：呉敬梓学会の招待にて、磯部彰が全椒県で開催された国際学会に中国社会科学院文学研究所石雷女史とともに参加し、日本における儒林外史の受容についての論文を提出し、呉敬梓の史料調査などを行なった。 ・2015年1月京都「敦煌学国際学術研討会」：敦煌出土文献に関する国際学術会議に佐々木聡が参加し、天文五行占書に二系譜があることを発表するとともに、台湾国立成功大学王三慶氏と研究交流も行なった。 【その他（研究分担者との交流）】 ・上海 復旦大学の陳正宏氏及び北京大学の潘建国氏と明刊本の流通史をめぐる共同研究を打診し、両氏の協力を得ることとなった。 ・北京 中国社会科学院石昌渝氏及び石雷氏と、次年度山東省で行なわれる国際会議についての意見交換を実施した。 ・ソウル 高麗大学校崔溶澈氏から、来年度に開催される韓国漢文小説国際学会に参加を求められ、磯部彰が日本漢文小説を題材とする内容の発表をすることを伝え、その要旨を送った。 【出版・社会貢献】 ・『上山市立図書館蔵 上山藩明新館文庫目録と研究』（東北アジア研究センター叢書第54号・磯部彰編著）：山形県上山市にあった藩校明新館旧蔵本の調査・整理を実施し、分類目録・上山藩学史をまとめた。 ・広島市立中央図書館が、同図書館で所蔵される浅野文庫の目録を出版するにあたって、磯部彰がその編集の協力を行なった。また、その一環で実施された、一般市民向けの講演会「浅野文庫本の和書と漢籍」において講演「浅野文庫の漢籍」を行なった。
成果公開状況・計画	・本年度のセンター叢書第54号にて『上山市立図書館蔵 上山藩明新館文庫目録と研究』を発行し、成果公開することができた。 ・広島市立中央図書館での浅野文庫目録の作成に協力したが、その目録は現在編集中で、今年度3月末に刊行され一般公開される予定である。 ・広島市立中央図書館所蔵浅野文庫目録の作成にあたっての研究やその際収集した資料画像をまとめ、来年度のセンター叢書にて発行することとなり、現在その成果公開にあたり準備作業中である。 ・国際学会で発表・投稿した論文は、当日の論文集・予稿集・会議録等への収録や、開催者HP等にて公開されている。
研究領域	(D) 自然・文化遺産の保全と継承

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

清朝宮廷演劇文化は、東北アジアに拠点を置いた大清グルンが政治・文化を結合させた事象であり、東ユーラシア近世史では重要な意味を持つ。日本で開始された清朝宮廷演劇文化に関するプロジェクトは、中国やアメリカでも注目され、中国人民大学とアメリカコロンビア大学の共同研究という形で彼地でも取り組み始められた。本共同研究では、宮廷演劇の資料（写本、版本）研究から参与することとなり、典籍の文化遺産としての清廷劇本をめぐって清朝満州帝国が東北アジア統治

の一環として利用したことについて紹介した。また、明代宝巻は内モンゴル方面とも係わる史料でもあり、『儒林外史』は清朝官僚機構を解明する資料として、それぞれが近世東北アジア社会を研究する有意義な典籍に位置づけられることを呈示した。一方、日本国内の漢籍について、上山市及び広島市の旧藩由来分を整理し、社会的文化財としての性格を明らかにするとともに、江戸時代の日本文化が東アジア世界の漢籍文化圏に組み込まれている点を示した。

センター長裁量経費配分の支出概要

研究旅費	186,560 円	謝金	39,780 円
研究資料費	53,478 円	消耗品費・通信費等	20,182 円

専門分野での意義

〈分野名〉比較文化史学

〈内容〉典籍が単に書誌や文学、歴史の資料であるのみならず、東北アジア全体に相互に影響し合うものであることを示している。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 4 〈分野名称〉 中国文学、中国史、文献学、比較文化史学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有〕

〈内容〉『上山市立図書館蔵 上山藩明新館文庫目録と研究』については上山市教育関係、広島市立中央図書館の浅野文庫還暦については広島市に貢献し、いずれも刊行物の形で公開される。

国際連携

〈連携機関名〉中国社会科学院、復旦大学、北京大学、高麗大学校

〈連携の形態〉研究協力

国内連携

〈連携機関名〉上山市立図書館、広島市立中央図書館

〈連携の形態〉研究協力

〈連携機関数〉2

学内連携

〈連携部局名〉東北大学附属図書館

〈連携の形態〉協力

〈連携部局数〉1

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東北大学、コロンビア大学、中国人民大学
〈ポスドクの活用形態〉専門研究員

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

- ・共同研究では典籍全般を対象としているため、研究参加者が個々の研究に即した版本・文書類を分析し、個別成果として発表している。本共同研究は、ユニットの中心的眼目である「東アジア出版文化資料画像データベース」の作成を確実にすることにあるため、ユニットを通して成果をデータベースに反映できるように努めている。
- ・データベースを更新するために、科研費（研究成果公開促進費(データベース)）を受けていたが、本年度をもって終了する。しかし、今後もユニットの費用でデータベースのアップを続けるため、共同研究での成果は続して掲載される予定である。
- ・広島市立中央図書館蔵浅野文庫の目録が今年度3月末に刊行される予定だが、そこには図版が掲載されされないため、浅野文庫の漢籍の中でも学術的にも文化遺産としても貴重な資料を選出し、その画像と広島藩の漢籍文化史を紹介した論述と併せて、平成27年度のセンター叢書を出版することが決定したので、目下、その作業を共同研究の中で進め、平成27年度中に刊行する予定である。

最終年度 該当〔有〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計（4）件

- ・磯部 彰「日本江戸時代《儒林外史》的传播及其背景」（『儒林外史国际学术研讨会论文集』、中国儒林外史学会編、2014年）
- ・佐々木 聡「《禮緯含文嘉・精魅篇》的辟邪思想与鬼神観」（『復旦学報（社会科学版）』2014年・第5号、2014年）
- ・高橋 亨「明代中国成化年間の「早朝」」（『歴史（東北史学会）』第123輯、2014年）
- ・羅 莞翎「『如意君伝』の内容と特徴—明代中期における艶情小説の出現」（『集刊東洋学（中国文史哲研究会）第112号、』2015年）

〔図書〕計（2）件

- ・磯部 彰(編著)「上山市立図書館蔵 上山藩明新館文庫目録と研究」（『東北アジア研究センター叢書第54号』、東北アジア研究センター、2014年）
- ・陳 正宏「东亚汉籍版本学初探」（中西書局、2014年）

〔学会発表〕計（）件

- ・高橋 亨「明代早朝制度に関する考察」（第63回東北中国学会大会、2014年5月25日、於穴原温泉吉川屋）
- ・羅 莞翎「『如意君伝』の成立とその特徴について—嘉靖期前後の艶情小説の確立の例として」（第63回東北中国学会大会、2014年5月25日、於穴原温泉吉川屋）
- ・佐々木 聡「中国の怪異と社会通念」（研究フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」、2014年10月12日、於国立民族学博物館）
- ・磯部 彰「《升平宝筏》诸版本系统之研究」（清代戏曲与宫廷文化学术研讨会、2014年11月3日、於中国 中国人民大学）

- ・高橋 亨「吉野作造の第一革命観——日本東洋史学者との交流を焦点として——」(近代中日間における知的・文化的共有基盤を再発見する国際シンポジウム、2014年12月20日、於中国南開大学日本研究院)
- ・佐々木 聡「傳世術數文獻と敦煌占書」(敦煌學國際學術研討會・京都 2015、2015年1月29日、於京都大学)
- ・佐々木 聡「災異と怪異をめぐるアプローチの再検討」(東アジア怪異学会第97回定例研究会、2015年3月7日、於園田学園女子大学)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質と その変容に関する研究			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	岡洋樹	東北大学東北アジア研究 センター・教授	小沼孝博	東北学院大学文学部・准教授
	佐藤憲行	復旦大学中国歴史地理研 究所・副教授	中村篤志	山形大学人文学部・准教授
	青木雅浩	早稲田大学第一文学部・ 助教	ボルジギン・ ブレンサイ ン	滋賀県立大学人間文化学 部・教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔100,000 円〕 運営交付金（個人研究費）〔0 円〕 総長裁量経費〔0 円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔0 円〕 民間の研究助成〔0 円〕 寄附など〔0 円〕		
	合 計	100,000 円		
研究会等の 内 容	研究会〔4 回〕／国内会議〔3 回〕／国際会議〔1 回〕／その他〔回〕 平成 26 年度第 1 回研究会 日時 平成 26 年 6 月 14 日(土) 13:30～18:00 会場 東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟 4 階会議室(436) 内容講演：サンピルドンドヴ・チョローン（モンゴル科学アカデミー歴史研究 所） “XVII зууны Оросын эзэн хаан Монгол ноёны харилцаа: Лувсангийн “самуун”- ы учирт (17 世紀におけるロシア皇帝とモンゴル王族の関係：ロヴ サンの「乱」に関して)” 報告 1：上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター） 「20 世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」 報告 2：小沼孝博（東北学院大学文学部） 「清末ホヴド地区における政治と移住:1838 年のカザフ侵入事件とその影響」 報告 3：水盛涼一（東北大学大学院文学研究科） 「嗜好と査定：清朝末期のアヘン吸引と官僚管理」 平成 26 年度第 2 回研究会 日時：平成 26 年 12 月 7 日（日） 13:30～18:00 会場：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟 4 階会議室(436 号室) 講演：鈴木 仁麗（明治大学）「満洲国のモンゴル統治―国際環境と「内政」の 課題―」 報告 1：バトツェンゲル・ナツァグドルジ（モンゴル科学アカデミー歴史研究 所）			

	“Хонгоройн хиргисийн харьяаллын тухай товч өгүүлэх нь (ホンゴロイ・キルギスの所属に関して)” 報告2：包 呼和本其爾（東北大学環境科学研究科）「清代内モンゴル・ハラチン地域における盗賊問題と地域秩序：盗賊バイリング、メイレセンゲの捕縛令を事例に」 報告3：矢口 啓朗（東北大学大学院文学研究科）「1830年代のシリア危機におけるオスマン帝国に対するロシアの関与」 平成26年度第3回研究会 日時：平成27年3月5日(木) 14:30～18:00 会場：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟4階会議室(436号室) 講演：白玉双（内蒙古師範大学歴史文化学院）「中国における清代内モンゴル地域史の諸問題」 報告1：麻田雅文（東北大学東北アジア研究センター）「奉ソ協定（1924年）の再考—張作霖とソ連の「盟約」」 報告2：佐藤憲行（復旦大学中国歴史地理研究所）「復旦大学中国歴史地理研究所の研究概況について」 国際シンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所・内蒙古師範大学旅游学院・ロシア科学アカデミーシベリア支部サハ人文学北方民族問題研究所共催 日時：2014年9月5日 9:00～18:00 会場：モンゴル科学アカデミー会議室（モンゴル国ウランバートル市） 発表者： ・ S. Chuluun (Institute of History, MAS.), “The “Oirad” ayimaG lead by QutuG: Original Habitat, Titles, Recovery” ・ Oka Hiroki (CNEAS.TU), “Rethinking the Historical Reality of Borderline in Qing era Mongolia: the Case of “Willow Wall” as the Eastern Border of “the Outer Mongols” ・ O. Oyunjargal (National University of Mongolia), ““TosGon” of the Qing Era Qalq-a Mongolia” ・ Colmongerel (Kobe University), “Nomadic Situations of Yekešabi Judging from Pasture Conflicts: A Case in Central Right Last Banner of Tusiyetu Qan Ayimay in Outer Mongolia during the Qing Period” ・ Horiuchi Kaori (Tohoku University), “Border Line and Nomadic Pastoralism in Qing dynasty: Examining the Cases of “nutug” between Khalkh and Barga” ・ L. Altanzaya (Mongolian State University of Education), “On the Pastureland of the Shavinar of IlaGuGsan QutuGtu of Qalq-a JasaGtu qaGan ayimaG” ・ Marianna Monge-Baiyrovna Kharunova (Tuvan Institute for the Study of Humanities Republic of Tyva), “Social Changes in Traditional Tuvan Society in Connection with the Passage of Tuvans to Settled Way of Life (1944-1961)” ・ Borisov Andrian Afanasyevich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN), SB RAS), “Ulus as the universal
--	--

	form of economical, social and political organization of Turkic and Mongolian Peoples” • Qau, Zhiceng (Inner Mongolian Normal University), “The Tourist Business in the Pastoral Region and the Development of the Region” • Yang Bayar (Inner Mongolian Normal University), “Migrating Tourism viewed from Nomadic Pastoralism” • B. Natsagdorj (Institute of History, MAS), “The Uriyangqai of Kovsgol: From Reindeer Nomadic Pastoralist to Pastoralist” • D. Erdenebaatar (National University of Mongolia), “Archaeological Study on the Culture of the Bronze and the Iron Age of Mongolia” • Vasilyev Valeriy Egorovich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “Scythian-Siberian roots of graves with horse on the territory of Yakutia (by modern ethnographical dates)” • S. Soronzonbold (University of Culture and Arts), “The Musical Score of Mongolian Nomads” • B. Baatarkhuu (Institute of History, MAS), “The Dwellings of Central Asian Nomads: Tradition and Transformation” • Antonov Egor Petrovich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “Language construction in Yakutia and Buryatia in a context of a revitalization of a political pantyurkizm and a panmonlogizm in the 1920th” • Nasun-Oljei (Inner Mongolian Normal University), “The Mongolian State Rituals Based on the Nomadic Culture” • Kazato Mari (Hokusei Gakuen University Junior College), “Variability of seizures of Ger, Mongolian dwelling through life stages” • M. Urgamal (Institute of Botany, MAS), “The Vegetation of Mongolia and Its Traditional Understandings of Nomadic Peoples” • Ignatyeva Vanda Borisovna (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “North horse-breeding in the context of the global climate change” • Borjigin Burensain (University of Shiga), “The Nature views of Nomadic Pastoralists in the conception of "Gajar-un sudal”” • Takakura Hiroki (CNEAS.TU), “Arctic adaptation reconsidered: Horse-cattle pastoralism in Siberia as exception or legitimate adaptation” • Elena Samrina (Khakas Research Institute of Language, Literature and History), “Ecological conditionality of life activity of nomads traditional cultures (based on the Khakass - Minusinsk region)” • Siye Yungmei (Inner Mongolian Normal University), “The Recovery of Traditional Nomadic Pastoralism in the Agriculturalist Mongolian: The Case of Four Nomadic qosiGus of Kōlūnbuyir” • Mungkebayar (Inner Mongolian Normal University), “Study on the Ethnic Pastoral Economy”
研究の目的と 本年度の 成果の概要	東北アジアは、その内陸部において広大な草原ステップを有するが、この地域は歴史上遊牧民の活躍の舞台となった。近年、東洋史分野においては、特にモンゴル帝国など遊牧民の政治・経済的活動の世界史的意義への関心の高まりが見られる。これに対して、大清国支配下にあった近世や、遊牧民の定着化・近代化が進んだ近代については、十分に研究がなされていない。

	一方脆弱な自然環境を抱える内陸アジアでは、開墾の進展や、過放牧による自然環境の悪化と、これに伴う沙漠化や黄砂問題など、この地域に淵源する環境面での問題に対する関心も高まっている。これは、近代に入って進行した遊牧民の定着化政策や、開発政策と密接に関わる問題である。そこでは、遊牧が自然に調和的な生産であるとする議論と、粗放な放牧こそが環境悪化の原因とする理解が並び立ち、また歴史的経緯に関する理解が共有されていないために、効果的な議論になっていない。かかる議論に歴史学的な基盤を与えるためには、前近代の遊牧民の社会構造や生産形態、20世紀を通じた近代化・開発政策の問題点などに対する実証的な研究に基づき、過去と現代を繋ぎうるような知見を提示する必要があると思われる。 そこで本研究では、豊富な史料が利用可能な近世（清代）及び近代（20世紀前半）に関して、遊牧民の社会構造・牧地利用・環境適応、あるいは19世紀以後定着化した旧遊牧社会の構造や農耕地利用などの特質について、モンゴルや中国に所蔵される膨大な数の文書資料や現地調査による実証的研究を行う。研究に当たっての基本的視角としては、遊牧 vs 農耕、あるいは移動 vs 定着といった文化に関わる二元論的構図を避け、遊牧社会自体のほか、その農耕社会への変化のプロセスや、旧遊牧社会が農耕化することによって現れた農耕社会の特質、19世紀以後本格化した漢人移住民社会とモンゴル人社会の関係と共存の様態などに関する研究を行う。
成果公開状況 計画	
研究領域	(A) 環境問題と自然災害 (B) 資源・エネルギーと国際関係 (C) 移民・物流・文化交流の動態 (D) 自然・文化遺産の保全と継承 (E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治 [以上から最も近い領域を一つ選び、他を削除]

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

内陸アジアの草原ステップ地帯に居住した遊牧民とその国家の歴史的役割の重要性は、従来からつとに指摘されてきたところであり、とくに我が国では、前世紀初頭より、ユーラシアの歴史を北アジアの遊牧民と東アジアの定着農耕文明の関係を軸として説明しようとする試みがなされてきた。しかし遊牧民は文献資料を残すことが少ないことから、その社会構造の歴史的研究には大きな限界があった。このような状況を克服する大きな可能性を秘めているのが、モンゴルや中国所蔵の清代モンゴル文・満文文書史料である。清朝はモンゴルに文書行政システムを導入・整備したことから、モンゴル現地の基層社会レベルに及ぶ膨大な数の公文書が残された。これらの公文書が、冷戦終了後外国人にも公開され、研究に用いられるようになっていく。清代モンゴルの公文書は、清朝中央からモンゴルの盟旗現地に及ぶさまざまなレベルで作成されており、これを用いることによってモンゴルを支配した清朝の統治構造の特色や、その下でのモンゴル社会の様態を詳細に解明することが可能となっている。本共同研究は、このような流れの中で、清代モンゴルの公文書史料を用いることによって、当該時期のモンゴル社会の構造と、これに立脚した行政統治構造の解明を目指す。遊牧民の社会構造を現地レベルで研究することによって、遊牧民が東北アジア史に大きな役割を果たした理由を説明することが可能となるだろう。また本共同研究は、かかる課題を、モンゴル、中国などの東北アジア地域諸国の研究者との協力によって考察していく。

センター長裁量経費配分の支出概要

研究会開催経費

講師旅費(2名) 53,480 円

残額 46,520 円

専門分野での意義

〈分野名〉歴史学

〈内容〉北アジアの遊牧民社会の研究は、とくに我が国において長い歴史と蓄積を有するが、近年の動向として、モンゴルなど現地研究者の研究成果の利用、現地所蔵の文書資料の利用が挙げられる。本研究はかかる動向の中で、モンゴルを中心とする遊牧社会の研究を、現地研究者との交流・討議をも行いながら、現地資料で研究しようとするところに専門分野における意義がある。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 4 〈分野名称〉 東洋史学、文化人類学、人文地理学、政治学

文理連携性

文理連携性の有無〔有〕

社会還元性

社会還元性の有無〔無〕

国際連携

〈連携機関名〉モンゴル国・モンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国・内モンゴル師範大学旅游学院蒙古歴史文化研究所、同蒙古学学院、中国復旦大学中国歴史地理研究所、ロシア科学アカデミーシベリア支部サハ人文学北方民族問題研究所

〈連携の形態〉研究会・シンポジウムでの研究報告及び国際シンポジウム共催

国内連携

〈連携機関名〉東北学院大学、山形大学、滋賀県立大学、早稲田大学

〈連携の形態〉研究会・シンポジウムでの研究報告

〈連携機関数〉4

学内連携

〈連携部局名〉大学院文学研究科・環境科学研究科

〈連携の形態〉教員・学生の研究会・シンポジウムでの研究報告

〈連携部局数〉3

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉東北大学大学院環境科学研究科、同文学研究科

〈ポスドクの活用形態〉

第三者による評価・受賞・報道など
特になし

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本共同研究では、2011 年度に終了した共同研究「北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究」が清朝などの帝国統治の問題を扱ったのに対して、東北アジアの遊牧民に関するより社会的側面からの研究を行おうとしたものである。本年度は 2012 年にウランバートルで開催された国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」の報告論文集を刊行した外、9 月にウランバートル市においてモンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部サハ人文学・北方民族問題研究所との四者による共催で「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」を開催した。会議では中国から 6 名、モンゴルから 1 名、ロシアから 4 名、日本から 6 名による報告が行われた。国内研究会は 3 回開催され、三人の講演と七人による研究報告、1 件の研究動向紹介が行われている。

最終年度 該当〔無〕

論文・著書

〔雑誌論文〕計 (20) 件

- ・ О. Батсайхан 「Манжийн үеийн Монгол дахь Оросын ашиг сонирхол」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Ока Хироки 「Манжийн үеийн хамжлагын үүслийн тухай」 (Чин улс ба монголчууд、東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Боржигин Бүрэнсайн 「Найман хошууны монголчууд хаашаа явсан бэ? Ляодуны газарт суусан баргачуудын жишээгээр」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Н. Хатанбаатар 「Монголын нийгэм дэх тайж лам нар (XVIII-XIX зуун)」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Шиэ Юн Мэй 「Алашаагийн хошууд өөлдийн хошуун дахь иргэдийн хамааралт жич монгол ба иргэн харилцан холбогдох хэрэг зүйлийг хянан шийтгэх асуудал: Алашаагийн хошууд өөлдийн хошууны монгол бичгийн дансын жишээнд」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Л. Алтанзаяа 「Жавзандамба хутагтын шавь нарын нутгийн асуудалд」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Хэрэйджин Де Шилин 「Манж чингийн үеийн Ар Монгол дахь бичээч сургалтын түүхэн ач холбогдол」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ О. Оюунжаргал 「Сум、 хамжлагыг ялгах шаардлага: Сайшаалт ерөөлтийн үеийн Түшээт хан аймгийн жишээн дээр」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Насандалай 「Чин улсын үеийн умард хязгаарын түүхэн газар орны тухай сурвалжисын халгуу тэмдэглэлүүд жич」 (「Чин улс ба монголчууд」 東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- ・ Цолмонгэрэл 「Түшээт хан, Сайн ноён аймгийн хоорондох нутаг бэлчээрийн маргаан: Чин улсын тэнгэрийн тэтгэсэн (1736-1795)-ий дунд үеэс төр гэрэлт (1821-1850)-ийн

- үеийн жишээгээр」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
- Боржигин Хөхмөчир 「Манж Чин улсын үеийн Өвөр Монголын Харчин орны цагдан сэргийлэх байгууламж тай пин шэгийн тухай」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - И. Саруул 「Манжийн эзэн хааны шадар түшмэл. Зүүнгарыг төвшитгөн тогтоох цэргийн жанжин Банди」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Боржигидай Оюунбилэг 「Зургадугаар Далай лам Цанъянжамсын таалал төгссөний учир. Дайчин гүрний хаан ордны нууц дансын баримтаас」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - С. Чулуун 「Алтан хаан хэмээн нэрийдсний учирт」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Хурц 「Чин улсын үеийн Харчин гурван хошууны тамгын газрын данс ба түүнтэй холбогдсон асуудлууд」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Э. Жигмэддорж 「XVII зууны Халхын засаг ноёдын тухай асуудалд」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Насан-Өлзий 「Саган Сэцэний Эрдэнийн товчид бичигдсэн Монголын түүхийн эх сурвалжийн тухай」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Ц. Цэрэндорж 「Манжийн эрхшээлийн үеийн Монголын түүхэнд холбогдох солонгос сурвалжийн зарим мэдээ」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Хөхцахар Эрдэнэчлуу 「Land Tenure in Pre-modern Mongolia: An Approach Based on New Sources from the Qing Era.」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - Чуань Рүн 「Баянбилэгт ба түүний үйл ажиллагаа」(「Чин улс ба монголчууд」東北大学東北アジア研究センター、2014 年)
 - 岡洋树 「清入关前对外藩蒙古所制杀害逃亡者处罚规定杂考」(「纪念王鍾翰先生百年诞辰学术文集」中央民族大学出版社、2013 年)

〔図書〕計 (1) 件

- С. Чулуун, Хурц, Ока Хироки 「Чин улс ба монголчууд」(東北大学東北アジア研究センター、2014 年)

〔学会発表〕計 (26) 件

- S. Chuluun 「“The “Oirad” ayimaG lead by QutuG: Original Habitat, Titles, Recovery”」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Oka Hiroki 「Rethinking the Historical Reality of Borderline in Qing era Mongolia: the Case of “Willow Wall” as the Eastern」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- E. Jigmeddorj 「Some Problems of the Study on the Birch Documents of Qalq-a」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- O. Oyunjargal 「“TosGon” of the Qing Era Qalq-a Mongolia」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Colmongerel 「Nomadic Situations of Yekešabi Judging from Pasture Conflicts: A Case in

Central Right Last Banner of Tusiyetu Qan Ayimay in Outer Mongolia during the Qing Period」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)

- Horiuchi Kaori 「Border Line and Nomadic Pastoralism in Qing dynasty: Examining the Cases of "nutug" between Khalkh and Barga」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- L. Altanzaya 「On the Pastureland of the Shavinar of IlaGuGsan QutuGtu of Qalq-a JasaGtu qaGan ayimaG」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- B. Batsuren 「Problems of the History of Inner Asian Nomads」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Borisov Andrian Afanasyevich 「Ulus as the universal form of economical, social and political organization of Turkic and Mongolian Peoples」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Qurca 「The Nomadic Pastoralism Managed by the Inner Mongolian Buddhist Churches in the Qing Times」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Qau, Zhiceng 「The Tourist Business in the Pastoral Region and the Development of the Region」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Yang Bayar 「Migrating Tourism viewed from Nomadic Pastoralism」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- B. Natsagdorj 「The Uriyangqai of Kovsgol: From Reindeer Nomadic Pastoralist to Pastoralist」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- D. Erdenebaatar 「Archaeological Study on the Culture of the Bronze and the Iron Age of Mongolia」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Vasilyev Valeriy Egorovich 「Scythian-Siberian roots of graves with horse on the territory of Yakutia (by modern ethnographical dates)」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- S. Soronzonbold 「The Musical Score of Mongolian Nomads」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- B. Baatarkhuu 「The Dwellings of Central Asian Nomads: Tradition and Transformation」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Antonov Egor Petrovich 「Language construction in Yakutia and Buryatia in a context of a revitalization of a political pantyurkizm and a panmonlogizm in the 1920th」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Nasun-Oljei 「The Mongolian State Rituals Based on the Nomadic Culture」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- Kazato Mari 「Variability of seizes of Ger, Mongolian dwelling through life stages」(Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment,2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)

- ・ M. Urgamal 「The Vegetation of Mongolia and Its Traditional Understandings of Nomadic Peoples」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ Ignatyeva Vanda Borisovna 「North horse-breeding in the context of the global climate change」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ Borjigin Burensain 「The Nature views of Nomadic Pastoralists in the conception of "Gajar-un sudal」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ Takakura Hiroki 「Arctic adaptation reconsidered: Horse-cattle pastoralism in Siberia as exception or legitimate adaptation」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ Siye Yungmei 「The Recovery of Traditional Nomadic Pastoralism in the Agriculturalist Mongolian: The Case of Four Nomadic」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ Mungkebayar 「Study on the Ethnic Pastoral Economy」 (Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014 年 9 月 5 日、於ウランバートル)
- ・ サンピルドンドヴ・チョローン 「17 世紀におけるロシア皇帝とモンゴル王族の関係：ロヴサンの「乱」に関して」 (共同研究平成 26 年第 1 回研究会、2014 年 6 月 14 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 上野稔弘 「20 世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」 (共同研究平成 26 年第 1 回研究会、2014 年 6 月 14 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 小沼孝博 「清末ホヴド地区における政治と移住：1838 年のカザフ侵入事件とその影響」 (共同研究平成 26 年第 1 回研究会、2014 年 6 月 14 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 水盛涼一 「嗜好と査定：清朝末期のアヘン吸引と官僚管理」 (共同研究平成 26 年第 1 回研究会、2014 年 6 月 14 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 鈴木仁麗 「満洲国のモンゴル統治—国際環境と「内政」の課題—」 (共同研究平成 26 年第 2 回研究会、2014 年 12 月 7 日、於東北アジア研究センター)
- ・ バトツェンゲル・ナツァグドルジ 「ホンゴロイ・キルギスの所属に関して」 (共同研究平成 26 年第 2 回研究会、2014 年 12 月 7 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 包 呼和木其爾 「清代内モンゴル・ハラチン地域における盗賊問題と地域秩序：盗賊バイリンガ、メイレセンゲの捕縛令を事例に」 (共同研究平成 26 年第 2 回研究会、2014 年 12 月 7 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 矢口啓朗 「1830 年代のシリア危機におけるオスマン帝国に対するロシアの関与」 (共同研究平成 26 年第 2 回研究会、2014 年 12 月 7 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 白玉双 「中国における清代内モンゴル地域史の諸問題」 (共同研究平成 26 年第 3 回研究会、2015 年 3 月 5 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 麻田雅文 「奉ソ協定 (1924 年) の再考 —張作霖とソ連の「盟約」」 (共同研究平成 26 年第 3 回研究会、2015 年 3 月 5 日、於東北アジア研究センター)
- ・ 佐藤憲行 「復旦大学中国歴史地理研究所の研究概況について」 (共同研究平成 26 年第 3 回研究会、2015 年 3 月 5 日、於東北アジア研究センター)

東北アジア研究センター・共同研究報告書 2014

研究題目	東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究			
研究期間	2011（平成13）年度 ～ 2014（平成26）年度（4年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏 名	所属・職名	氏 名	所属・職名
	岡洋樹	東北大学東北アジア研究センター・教授	井上治	島根県立大学総合政策学部・教授
	今村弘子	富山大学極東地域研究センター・教授	柳澤明	早稲田大学文学学術院・教授
	堀江典生	富山大学極東地域研究センター・教授	雲和広 中村篤志 佐藤憲行	一橋大学経済研究所・教授 山形大学人文学部・准教授 復旦大学中国歴史地理研究所・副教授
研究経費	学内資金	センター長裁量費〔0円〕 運営交付金（個人研究費）〔0円〕 総長裁量経費〔0円〕		
	外部資金	科研費他政府資金〔6,200,000円〕 民間の研究助成〔0円〕 寄附など〔0円〕		
	合 計	6,200,000円		
研究会等の 内 容	研究会〔回〕／国内会議〔2回〕／国際会議〔1回〕／その他〔回〕 日時：平成27年3月8日（日）10:00-18:00 場所：東北大学東京分室（東京都千代田区丸の内1丁目7番12号サピアタワー10階） 趣旨説明（10:00-10:20）：岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター教授） ・セッション1：越境の様態（10:20-11:40） 報告1：今村弘子（富山大学極東地域研究センター教授）「中朝の経済関係と中朝辺境の変遷」 報告2：雲和広（一橋大学経済研究所教授）「ロシア極東の人口動態とその経済学的展望」 報告3：松野周治（立命館大学経済学部教授）「中国の経済発展と東北アジアの越境—リージョナリズムとグローバリズム」 討論 ・セッション2：移りゆく人々（13:00-14:20） 報告4：サヴェリエフ・イゴリ（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）「移民政策決定過程におけるロシア政府と総督府の役割—沿アムール地方の東アジア移民受入政策を事例に（1884～1916年）」 報告5：中村篤志（山形大学人文学部准教授）「遊牧と移住のあいだ—20世紀前半内モンゴル・フルンボイル社会の動態から」 報告6：ポダルコ・ピョートル（青山学院大学国際政治経済学部教授）「露中関係からみる白系ロシア人」 討論			

	・セッション3：共生の歴史的経験（14:30-16:20） 報告7：白玉双（内蒙古師範大学蒙古歴史文化学院副教授）「内地移民北上与蒙古社会变革—以清代喀喇沁地区为中心」 報告8：柳澤明（早稲田大学文学学術院教授）「八旗」と「民族」の交差—清代旗人のアイデンティティ複合」 報告9：井上治（島根県立大学総合政策学部教授）「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」 報告10：佐藤憲行（復旦大学中国歴史地理研究所副教授）「清朝の「蒙漢通婚禁止例」とその歴史的意義」 討論 ・セッション4：変動と越境の構図（16:30-17:50） 報告11：岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター教授）「モンゴルにおける清朝統治の変動の歴史的意味—人の移動を中心に」 報告12：堀江典生（富山大学極東地域研究センター教授）「中露国境地域の中国人—越境の構図の変容」 総括討論
研究の目的と 本年度の 成果の概要	東北アジアは、その内陸部において広大な草原ステップを有するが、この地域は歴史上遊牧民の活躍の舞台となった。近年、東洋史分野においては、特にモンゴル帝国など遊牧民の政治・経済的活動の世界史的意義への関心の高まりが見られる。これに対して、大清国支配下にあった近世や、遊牧民の定着化・近代化が進んだ近代については、十分に研究がなされていない。 一方脆弱な自然環境を抱える内陸アジアでは、開墾の進展や、過放牧による自然環境の悪化と、これに伴う沙漠化や黄砂問題など、この地域に淵源する環境面での問題に対する関心も高まっている。これは、近代に入って進行した遊牧民の定着化政策や、開発政策と密接に関わる問題である。そこでは、遊牧が自然に調和的な生産であるとする議論と、粗放な放牧こそが環境悪化の原因とする理解が並び立ち、また歴史的経緯に関する理解が共有されていないために、効果的な議論になっていない。かかる議論に歴史学的な基盤を与えるためには、前近代の遊牧民の社会構造や生産形態、20世紀を通じた近代化・開発政策の問題点などに対する実証的な研究に基づき、過去と現代を繋ぎうるような知見を提示する必要があると思われる。 そこで本研究では、豊富な史料が利用可能な近世（清代）及び近代（20世紀前半）に関して、遊牧民の社会構造・牧地利用・環境適応、あるいは19世紀以後定着化した旧遊牧社会の構造や農耕地利用などの特質について、モンゴルや中国に所蔵される膨大な数の文書資料や現地調査による実証的研究を行う。研究に当たっての基本的視角としては、遊牧 vs 農耕、あるいは移動 vs 定着といった文化に関わる二元論的構図を避け、遊牧社会自体のほか、その農耕社会への変化のプロセスや、旧遊牧社会が農耕化することによって現れた農耕社会の特質、19世紀以後本格化した漢人移住民社会とモンゴル人社会の関係と共存の様態などに関する研究を行う。 今年度は、4年間の研究の最終年度であり、研究成果の報告のために国際シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催した。

成果公開状況 計画	
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態 (E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治

本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール

東北アジアを特色づけるのは、大国の統治と文化的な多様性である。このことは、国家間の境である国境だけではなく、個々の国家内部においても様々な文化的・政治的境界が存在し、多様な社会を区分していることを示すとともに、境を越えた越境的活動の存在をも示唆する。今回の共同研究は、このような東北アジアの特徴を研究課題として、とくに清朝とロシアの帝国統治が動揺した19世紀末～20世紀初頭の時期を第一変動期、ソ連社会主義体制の崩壊と中国の開放政策が進んだ20世紀末～21世紀初頭を第二変動期として捉え、二つの変動の歴史的・現在の意味を解明することを目的とした。本年度は、研究の最終年度として国際シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催し、成果報告を行った。その結果、第一変動期に関しては、清朝統治における八旗・外藩モンゴル・内地の統治区分を越えた住民の越境的活動の形態や、これによる民族間関係と清朝の政策対応、帝政末期ロシアの沿アムール総督管区における移民政策とロシア革命期における白系ロシア人の越境活動に関する知見が得られ、第二変動期に関してはロシアにおける中国人労働移民に対するロシアの論調や、ロシアのシベリア・極東における人口動態、中国と北朝鮮の経済関係や、中朝や中国・ラオスなどの国境貿易の状況に関する知見を得ることができた。これにより、東北アジア地域理解において、越境的活動とその結果としての共生社会の形成が重要な意味をもつことが明らかになった。

第一に、東北アジアには、大国統治の下で、国境とともに、国の内部に様々な文化的境界が存在し、それがまた行政統治的な境界をも伴っていた。この境界の存在は、地域の文化的多様性を反映するものであるが、同時に境界を越える越境的な人の移動も看取され、それがさまざまな課題を惹起することによって、東北アジア地域研究の課題群ともなるのである。地域の政治体制の変動は、日常的な越境活動と社会的交流の基礎の上に、交流を活性化するものと考えられる。

第二に、越境活動の結果として辺境において共生社会が生成された。このプロセスは、時に緊張と対立を伴うものであるが、同時に社会的交流を基礎とした様々な共生構造を生み出した。本研究では、21世紀初頭における国境を挟んだ経済関係、とくに国境貿易や国家間の経済開発協力の現状を解明した。また20世紀初頭までには、清朝国内の統治カテゴリー間の境界が乗り越えられ、活発な人の往来が生まれていたこと、とくに漢人の内地から外藩部への移住が現地社会の変容に大きな役割を果たしたこと、さらに中国人のロシア極東・シベリアへの移住の形態、その背景にあるロシアの移民政策などが解明されるなど、越境移動の具体的な形態と、政策への反映・影響の在り方を解明した。

第三に、個別越境事例に焦点を合わせたミクロ的観察を通じて、越境が生み出す社会関係の具体的な解明を行った。これについては、中国東北部からモンゴルへの遊牧民の移動、モンゴル辺境部へのカザフ人や漢人の進入、中国人労働移民の極東への進入、白系ロシア人亡命者の中国領への移住と経済活動などが論じられた。

センター長裁量経費配分の支出概要
なし

専門分野での意義

〈分野名〉歴史学・経済学

〈内容〉本研究は、東北アジアにおける統治の動揺に伴う人の移動を歴史学と経済学の連携により研究するものである。歴史学においては、ロシア、モンゴル、中国を中心として、中央アジアにも目配りしつつ、清朝とロシア帝国の住民構成の多様性や 19 世紀末から 20 世紀初頭の統治の動揺・解体期における人の越境的移動に関する知見を得た。特に、住民のアイデンティティーに関して清代八旗旗人の複合的な自己認識の在り方が具体鄭な事例により明らかにされ、またモンゴル人の越境移動やモンゴルへの漢人の進入に対する清朝の政策の歴史的意義、蒙漢人の関係における「通婚禁止政策」の事例的研究、モンゴルへのカザフ人の進入様態、八旗管轄下のフルンブイルから外モンゴルへのバルガ人の移動の意義について新たな知見を得た。20 世紀末から現在に至る変動については、とくに露中国境地帯や中朝国境地帯における越境的活動の状況に関する研究と、国境地帯の人口学的動態の経済的影響についての研究が行われた。中露については、ロシアにおける中国人労働移民をディアスポラの形成として警戒するロシアの論調と政策転回が明らかにされ、中朝関係においては国境を越えた経済協力の停滞的状況が報告されている。また人口学的観点からは、ロシアのシベリア・極東における人口減少の現状とその意義・合理性の有無に関する知見が示された。19 世紀～20 世紀の時期と、20 世紀末～21 世紀初頭の時期の地域の変動様態の比較の結果として、中国側とロシア・朝鮮側に非対称性が存在し、これが人と物の流れの基底において大きく影響していることが明らかになった。越境に伴い境界地域では、複合的なアイデンティティーと共生の構造が形成されたことが、国境貿易に関する知見から明らかになった。

学際性

学際性の有無〔有〕

〈参加した専門分野数〉 2 〈分野名称〉 歴史学・経済学・人口学

文理連携性

文理連携性の有無〔無〕

社会還元性

社会還元性の有無〔有・無〕

〈内容〉

国際連携

〈連携機関名〉ロシア科学アカデミー、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内蒙古師範大学
中国復旦大学中国歴史地理研究所

〈連携の形態〉共同研究への参加、シンポジウムでの研究報告

国内連携

〈連携機関名〉富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、一橋大学経済研究所、早稲田大学文学学術院、山形大学人文学部、名古屋大学大学院国際開発研究科、青山学院大学国際政治経済学部、立命館大学経済学部

〈連携の形態〉共同研究への参加、シンポジウムでの研究報告

〈連携機関数〉8

学内連携

〈連携部局名〉

〈連携の形態〉

〈連携部局数〉

教育上の効果（研究活動および研究会などの参加）

〈参加学生の所属〉大学院環境科学研究科

〈ポスドクの活用形態〉研究協力者として、現地での資料収集に参加した。

第三者による評価・受賞・報道など

研究事業計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題

本年度は 4 年間の研究期間の最終年度にあたり、研究成果の発表と総括のための国際シンポジウムを開催した。国際シンポジウムには、研究分担者のほかに、4 機関 4 名の研究者が報告を行った。シンポジウム報告を中心とする研究成果は、報告論文集として刊行の予定である。

最終年度 該当〔有〕

最終年度報告

〈最終年度研究成果〉

本共同研究は、19 世紀末～20 世紀初頭を清朝とロシアの帝国統治の崩壊に伴う第一変動期、20 世紀末～21 世紀初頭を冷戦の終了とソ連社会主義体制の解体、中国の改革開放政策の進展に伴う第二変動期として捉え、国境や行政統治上・文化上の境界を越えた人の越境活動の様態とそれが変動に対して持つ意義を、東北アジアの地域課題として考察しようとするものである。本年度は科学研究費補助金基盤研究(A)による四年間の本共同研究の最終年度にあたり、共同研究メンバー及び外部研究者による研究報告会として、シンポジウム「越境する東北アジア：統治の動揺と地域流動化」を開催した。その成果は以下のようにまとめることができる。

まず国家政策レベルの問題として、第一変動期にかかわっては、従来封禁政策と呼ばれてきた清朝の基本政策が、内地・モンゴル間の人の移動を禁止するものではなく、実際に活発な越境移動が存在したこと、ロシア側でも、極東・シベリアの労働人口移入政策をとっていたことが明らかになったことで、帝国統治が越境移動に対して必ずしも阻害的でないばかりか、促進要因ともなっていたことが判明した。第一変動期における交流の活性化は、帝国統治下の越境移動の存在を前提として考える必要がある。一方第二変動期に関しては、国家政策としての中・露・朝の経済協力が停滞的である一方で、国境貿易や、労働移民の移出入が活性化していることが明らかになった。社会レベルにおいては、第一変動期に関して、清朝では八旗所属の辺境居住民のアイデンティティの複合性や文化的多様性が指摘されるとともに、漢人の北上や蒙漢の越境活動、カザフ人のモンゴル進入といった越境移動が見られ、さらに露清国境を越えた労働移民の移住の様態が明らかになった。さらに帝政ロシアの滅亡後、中国に移住した亡命ロシア人の様態についての具体的知見も得られた。第二変動期については、ロシアに入った中国からの労働移民に対する警戒が中国人ディアスポラ論を生み出していること、シベリア・極東におけるロシア人人口の流出・減少の実態と、国境上で展開される貿易の様態が解明された。

本共同研究を通じて、東北アジアでは、前近代から近現代において活発な越境移動が看取され、東北アジアの特徴としての大国統治の持続性や文化的多様性もかかる越境移動とその結果として

の社会的共生構造の形成を前提として理解する必要があることが明らかになった。

〈東北アジア地域研究としての意義についてアピール〉

東北アジア地域の変動期における越境活動について、中国・ロシア・モンゴル・北朝鮮をマクロ的視座として確保した上で、歴史学と経済学、ロシア研究・中国研究・モンゴル研究の学際的協力により、辺境貿易や労働移民、人口動態やアイデンティティの複合性など、現場の社会的構造のミクロ的視座に立った実態解明を行い、越境と共生をキーワードとした東北アジア研究の可能性を示したところに最大の意義がある。

論文・著書

〔雑誌論文〕計 (5) 件

- ・岡洋樹「清代モンゴル人の越旗活動：乾隆 40～50 年代の窃盗案件を事例として」（『中国蒙古学』2014(256)、2014 年）
- ・雲和広「移行経済諸国における所得貧困研究：貧困決定要因変化のメタ分析」（『経済研究』66-1、2015 年）
- ・雲和広「欧州移行経済における社会主義的遺制と人事労務管理：体系的レビュー」（『経済研究』66-1、2013 年）
- ・雲和広「文書館資料とマイクロデータに見るソ連・ロシアの人口」（『Eco-Forum』Vol.30、No.3、2015 年）
- ・堀江典生「ロシア東部地域における中国人市場の進化」（平成 26 年度外務省外交・安全保障調査研究事業（総合事業）『ロシア極東・シベリア地域開発と日本の経済安全保障』、日本国際問題研究所（図書所収論文）、近刊）

〔図書〕計 (0) 件

〔学会発表〕計 (26) 件

- ・今村弘子「中朝の経済関係と中朝辺境の変遷」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・雲和広「ロシア極東の人口動態とその経済学的展望」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・松野周治「中国の経済発展と東北アジアの越境—リージョナリズムとグローバリズム」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・サヴェリエフ・イゴリ「移民政策決定過程におけるロシア政府と総督府の役割—沿アムール地方の東アジア移民受入政策を事例に」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・中村篤志「遊牧と移住のあいだ—20 世紀前半内モンゴル・フルンボイル社会の動態から」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・ポダルコ・ピョートル「露中関係からみる白系ロシア人」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・白玉双「内地移民北上与蒙古社会变革—以清代喀喇沁地区为中心」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）
- ・柳澤明「『八旗』と『民族』の交差—清代旗人のアイデンティティ複合」（シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室）

- ・井上治「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」(シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015年3月8日、於東北大学東京分室)
- ・佐藤憲行「清朝の『蒙漢通婚禁止例』とその歴史的意義」(シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015年3月8日、於東北大学東京分室)
- ・岡洋樹「モンゴルにおける清朝統治の変動の歴史的意味―一人の移動を中心に」(シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015年3月8日、於東北大学東京分室)
- ・堀江典生「中露国境地域の中国人―越境の構図の変容」(シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015年3月8日、於東北大学東京分室)
- ・雲和広「移行経済諸国における所得貧困研究：貧困決定要因変化のメタ分析」(比較経済体制学会秋季大会、2014年10月25日、於西武文理大学(埼玉))
- ・Kumo, K. 「Geography and Trade for Russian Regional Growth: Evidence from Russia, 2000-2011」(Hallym Symposium for Russian Studies (招待講演)、2014年10月2日、於 Hallym University, Chuncheon, South Korea)
- ・Kumo, K. 「Mortality Trends in Russia Revisited: A Systematic Survey」(Bi-annual Conference of the European Association for Comparative Economic Studies, 2014年9月4日、於 Corvinus University of Economics, Budapest, Hungary)
- ・Ока Хироки「Чингийн үеийн Монгол дахь хилийн түүхэн бодит байдлыг дахин шинжих нь」(International Symposium "Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment, 2014年5月14日、Mongolian Academy of Sciences, Ulaanbaatar, Mongolia)
- ・SATO Noriyuki「Ikh Khureenii Damnuurchinuussen uil yavc」(International conference dedicated to 375th anniversary of the capital city Ulaanbaatar, 2014年10月24日、ウランバートル)
- ・堀江典生「Chinese Migration, Chinese Business, and Their Evolution in Siberia and Russian Far East」(慶熙大学国際地域研究院/富山大学極東地域研究センター主催「環日本海/環東海の共生:現状と課題～政治・安保・経済～」、2015年1月21日、於富山大学経済学部)
- ・堀江典生「Central Asian Migrant Workers and Their Vulnerability in Russia」(北カフカス連邦大学主催国際コンファレンス「移民プロセス：移民の適応・統合の諸問題」(招待講演)、2014年12月19日、於北カフカス連邦大学)
- ・堀江典生「ロシア極東国境地帯における中国人移民労働者とその規制」(国際シンポジウム「包摂・排除の歴史と現在―東アジア移民、政策、国境」(招待講演)、2014年11月22日、於名古屋大学国際開発研究科)
- ・堀江典生「Immigrant workers in Russian Far East Agriculture」(VI международная научно-практическая конференция по теме "Роль миграции в социально-экономическом и демографическом развитии посылающих и принимающих стран Евразии: регионы Восточной Европы и Центральной Азии", 2014年11月6日、於エレヴァン(アルメニア))
- ・今村弘子「金正恩時代の北朝鮮～中朝経済関係を中心に～」(富山県日中友好協会、2014年10月2日、於岩瀬浜会館)
- ・今村弘子「日本海学と朝鮮半島」(現代韓国朝鮮学会、2014年11月9日、於新潟国際情報大学サテライト)
- ・今村弘子「環日本海周辺の社会情勢」(富山国際大学、2014年11月13日、於富山国際大学)
- ・今村弘子「The Economic Relationship between China and North Korea--Normal or Cold」(韓国・東北亜経済学会、2015年2月24日)

- ・今村弘子「The Role of Local Governments in Northeast Asia」(Trans-national Cooperation and Role of Local Governments in the East Sea Rim、 2015 年 2 月 26 日、於韓国・浦項)

2014（平成26）年度
東北アジア研究センター共同研究 研究成果モニター報告

評価者 氏名 本多俊和
所属 放送大学（客員教授）
報告日

1. 対象年度の共同研究成果全体についての概評

今年度の共同研究は、前年度に増して社会的な応用、もしくは還元を意図としたセッションはとくに気をひいた。

2. 対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

3. 対象年度共同研究成果の中で改善を要すると思われる点

いくつかのセッションでは、テーマの一貫性や統一性は見えにくかった発表があった。センターは共同研究の申請に際してどのような基準によって採否を決めるか、わからないので誤解しているかもしれないが、「共同研究」と掲げる場合、一つの中心的な課題を多角度に分析する構想と思ってしまう。

また、同じセッションで発表する場合、仲間の研究と自分の研究の関連について一言断わってほしい。ただし、上の私の前提が誤っていれば、このコメントを撤回します。

4. その他／備考

2014（平成 26）年度
東北アジア研究センター共同研究 研究成果モニター報告

評価者 氏名 小嶋 智
所属 岐阜大学 工学部 社会基盤工学科
報告日 2015 年 4 月 2 日

1. 対象年度の共同研究成果全体についての概評

本センターは、研究対象地域を東北アジアに絞って人文・社会・自然科学の枠を超えた学際的な研究を行っているため、成果報告会で紹介された研究内容也多岐にわたっている。その内容は豊富で興味のあるものばかりであったが、評価者とは専門が異なるため、当該分野における各研究のレベルは評価できなかった。当該研究分野の中での位置づけや、当該地域あるいは他地域における同様な研究の到達レベルなどを紹介していただければ、相対的な評価ができたのではないかと思う。

本センターは、同じような研究をターゲットとしている富山大学極東地域研究センターや島根県立大学北東アジア地域研究センターとの国内連携を進めており、高く評価される。一方で、共同研究の一つの柱である「震災セッション」の共同研究発表を聴いていると、同じ東北大学内にある災害科学国際研究所との連携はあまり活発ではないようである。学内の他部局との更なる連携が、今後期待される。

2. 対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

それぞれの共同研究が、多くの出版物と WEB により、研究成果・資料を積極的に公開している点は高く評価できる。その中でも特に高く評価できる点を以下に列挙する（共同研究題目は一部省略した）。

伝統的モンゴル語辞書の研究：日本人のみならずモンゴル人研究者にとっても有用な伝統的モンゴル語辞書を編纂しインターネット上で公開している点が高く評価できる。

典籍文化遺産の研究：対象年度のみ研究成果ではないが、「東アジア出版文化資料画像データベース」の作成は貴重な資料の公開という点で評価できる。

近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究：本年度、3 回の研究会を国内で行い、モンゴルで国際シンポジウムを開催するなどひじょうに活発な研究活動を行っている点は高く評価できる。

華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究：中国南東部から海外へ出稼ぎに出た中国人が金を稼ぎ故郷を支えるというこれまでの華人像とは異なり、文化人類学的な切り口での研究で興味深い。

現代中国社会の変容とその研究視座の変遷：同じタイトルで外部資金を獲得し、学会における分科会発表を行い、研究成果を着実に取りまとめ（平成 27 年度前半に出版予定）ている点は評価できる。

震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進：本研究グループが開発した地中レーダによる遺跡調査および津波被災地域の搜索活動は、本研究センターが主として行なっている基礎的研究とは異なり、社会貢献が大きく、その点で評価できる。

東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用：災害によって失われた民族誌情報という取り扱いの難しい題材について、みやしんぶんデータベースというユニークな切り口で研究を行っている点、国内で 4 回の会議を開催するとともにニュージーランドで国際会議を開催した点など、活発な研究活動を行っており評価できる。

中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性の把握：地球温暖化、越境大気汚染といった喫緊の課題に、文系・理系の枠を超えて取り組んでいる点が本センターらしい取組方法で評価できる。当該年度は初年度であり、実質的な成果はよくわからなかったが、今後の研究成果が期待される。

3. 対象年度共同研究成果の中で改善を要すると思われる点

研究対象地域を限る地域研究は、とかく個別的な研究になりがちである。各研究発表は、その研究対象地域におけるユニークかつ独創的なものが多かったが、一方で、研究結果の一般化・普遍化にまで踏み込んでも面白いのではないかと感じた。

共同研究発表では、センター内の様々な分野の研究者が協力するのみならず、学外の専門家も加えて、学際的な研究がなされており、当該研究センターの利点を生かした多くの特徴ある研究がなされている。一方、多くはないが、同じ分野の研究者だけで組織された「共同研究」も散見され、さらなる学際研究の発展が望まれる。

4. その他／備考

特になし

2014（平成26）年度
東北アジア研究センター共同研究 研究成果モニター報告

評価者 氏名 村上 信明
所属 創価大学文学部
報告日 2015年6月30日

1. 対象年度の共同研究成果全体についての概評

具体的な研究課題を掲げ、個別研究の成果を基礎としながら、研究者間の連携や意見交換を通じて専門性の枠組みを越えた研究活動が展開されており、良質な共同研究が行われているという印象を受けた。共同研究の意義は、各研究者の専門性を活かして共通の課題を解決することにあるだけではなく、研究者間の交流や連携を促進することにより個々の研究者が刺激や啓発を受け、それぞれの個別研究の深化につながるという点にもある（当然、このことは共通の課題の解決にも裨益するはずである）。複合的要素をもつ課題に対しては、個々の研究者がその課題に向き合い、各自の関心・視点・手法に基づいて研究を進め、意見交換を通じて相互に啓発しながら多様な見解を出し合っていく必要があるが、東北アジア研究センターの共同研究の多くはこのことに成功していると思われる。

2. 対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

- (1) 共同研究の枠が外部機関の研究者（特に若手）にも開かれ、彼らを代表者とする共同研究が実施され、着実に成果が出ている点が評価できる。そのなかで、三浦哲也氏を代表者とする「家・空間における食実践に関する文化人類学的研究—社会関係を開閉するという視座から」は、昨年度まで行われていた別の共同研究の成果に基づき立案されたとのことで、東北アジア研究センターの共同研究事業の継続性が活かされた好例といえる。また渡辺尚志氏を研究代表者とする「日本と韓国における村落の歴史と景観」は、共同研究ならではの「比較」による分析と、歴史学・民俗学・建築学の専門家による学際的研究を行い、著書や論文によりその成果の公表を進めており、共同研究として理想的なものの一つといえる。風戸真理氏を代表者とする「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」も、人類学・歴史学・地域研究などの多角的視点からモンゴル高原の畜産物の物流システムを解明する斬新な試みで、文献研究とフィールドワークの成果を結びつけて地域像を描き出すことに成功している。
- (2) 岡洋樹氏を研究代表者とする「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」は、歴史学を中心とする共同研究として大きな成果をあげることが期待される。1990年代からモンゴル語・満洲語文献の閲覧環境が飛躍的に改善し、近世・近代における内陸アジア遊牧民に関する研究の水準が劇的に高まった。特に近年では、モンゴル国及び中国（特に内モンゴル出身）による研究が活発である。こうした環境下で、モンゴル・中国・ロシアの学術機関との共催で国際シンポジウムを開催し、最新の研究成果の共有を促進したことの意義は大きい。

3. 共同研究に関して改善を要すると思われる点

- (1) 一人の研究者が複数の共同研究の代表者をしていたり、代表者でなくても複数の共同研究に参画している場合があるが、このことが個人研究のための時間や独創性を低減させ

ることにつながっていないかという点が懸念される。共同研究を実施するには、協力者との連携やシンポジウムの運営などに多大な労力と時間を費やす必要があり、その分だけ個人研究の時間とエネルギーは目減りすることになる。また共同研究にて役割分担を決めた際には、研究者個人の主体性や独創性が発揮しにくくなることも懸念される。これらの懸念がたんなる杞憂であれば良いが、もし多少なりとも当たっているようならばぜひ改善してほしい。

- (2) プロジェクトユニット研究の支援を受けるという形で実施されている共同研究については、その成果がプロジェクトユニット研究の中にどのように位置づけられるのかという点への言及がほしい。そのほうが、共同研究の成果とその意義がより明確になると思われる。

(B) 過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧

- ・中国・モンゴルにおける精神文化と環境の相互作用に関する研究

(1996年度～1997年度、代表者：瀬川昌久)

- ・近代化過程における東北アジア諸地域の変容の諸問題

(1996年度～1998年度、代表者：吉田忠)

- ・東北アジア地域における歴史・文化的背景および経済・技術的変遷からみた環境問題

(1996年度～1999年度、代表者：宮本和明)

- ・日本における北方交流史料の調査と分析

(1996年度～1999年度、代表者：入間田宣夫)

- ・東北アジアにおける交易拠点の比較研究

(1997年度～1999年度、代表者：山田勝芳)

- ・東北アジア研究のためのデータベース構築とシベリア・東北大学衛星ネットワーク利用についての研究

(1997年度～2001年度、代表者：佐藤源之)

- ・東北アジアにおける関帝信仰の歴史的現在的研究

(1997年度～1999年度、代表者：山田勝芳)

- ・東アジア出版文化史を通して見る社会変容の研究

(1997年度～1999年度、代表者：磯部彰)

- ・東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象

(1997年度～1999年度、代表者：成澤勝)

- ・モンゴルの草原に関する総合研究

(1999年度～2000年度、代表者：岡洋樹)

- ・文化のディスプレイと伝統の再編

(1999年度～2000年度、代表者：瀬川昌久)

- ・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
(1999年度～2001年度、代表者：成澤勝)
- ・ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際
的研究
(2000年度～2005年度、代表者：山田勝芳)
- ・中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果
(2000年度～2002年度、代表者：谷口宏充)
- ・東北アジアにおける民族移動と文化の変遷
(2000年度～2001年度、代表者：徳田昌則)
- ・東アジア出版文化の研究
(2000年度～2004年度、代表者：磯部 彰)
- ・日露・日ソ関係に関する史的研究
(2000年度～2002年度、代表者：平川新)
- ・東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備
(2001年度～2003年度、代表者：宮本和明)
- ・東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究
(2001年度～2002年度、代表者：柳田賢二)
- ・北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究
(2001年度～2005年度、代表者：岡洋樹)
- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
(2001年度～2003年度、代表者：菊地永佑)
- ・ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究
(2001年度～2002年度、代表者：高倉浩樹)
- ・図們江沿流居民生活誌の通時的共時的研究
(2002年度～2004年度、代表者：上野稔弘)

- ・海南島の地方文化に関する文化人類学的研究

(2002年度～2004年度、代表者：瀬川昌久)

- ・現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我

(2002年度～2004年度、代表者：成澤勝)

- ・図們江沿流域居民生活誌の通時的共時的研究

(2002年度～2005年度、代表者：上野稔弘)

- ・モンゴル語資料の文献学的研究

(2003年度～2005年度、代表者：栗林均)

- ・白頭山東部における10世紀巨大噴火と遼・高麗王朝への歴史的影響

(2004年度～2005年度、代表者：谷口宏充)

- ・江戸東京博物館における東アジア文化展企画研究

(2005年度～2006年度、代表者：磯部彰)

- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究

(2001年度～2006年度、代表者：菊地永祐)

- ・前近代における日露交流資料の研究

(2000年度～2006年度、代表者：平川新)

- ・東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究

(2005年度～2007年度、代表：岡洋樹)

- ・東アジア出版文化の総合研究

(2005年度～2007年度、代表：磯部彰)

- ・近未来の宮城県沖地震に備えた歴史資料保存のための調査研究事業

(2005年度～2007年度、代表：平川新)

- ・東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方

(2005年度～2007年度、代表：山田勝芳)

- ・ 東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究

(2005年度～2007年度、代表：工藤純一)

- ・ 東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究

(2005年度～2007年度、代表：岡洋樹)

- ・ 旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究

(2006年度～2008年度・高倉浩樹)

- ・ 数理地理モデルによる東北アジア地域の土地利用形態の比較分析

(2006年度～2008年度・奥村誠)

- ・ 白頭山の火山危機に関する日中韓3ヶ国共同研究

(2007年度～2009年度・谷口宏充)

- ・ 湖沼沿岸生態系植物網の解析的研究

(2008年度～2010年度・鹿野秀一)

- ・ 西シベリア塩性湖チャニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析

(2007年度～2009年度・鹿野秀一)

- ・ 旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究

(2007年度～2009年度・岡洋樹)

- ・ 二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望

(2007年度～2010年度・寺山恭輔)

- ・ 北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究

(2007年度～2011年度・岡洋樹)

- ・ 客家研究の総括と展望

(2010年度～2011年度・瀬川昌久)

- ・ 地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査

(2010年度～2011年度・瀬川昌久：移民ユニット)

- ・ 仙台藩重臣遠藤家文書の調査研究

(2010年度～2011年度・平川新：歴史資料ユニット)

- ・ 大籠村首藤家文書の調査研究

(2010年度～2011年度・平川新：歴史資料ユニット)

- ・ 東アジア近世社会における出版文化の意義

(2010年度～2012年度・磯部彰：東アジア出版文化ユニット)

- ・ 展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探求

(2010年度～2011年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット)

- ・ 氷融洪水とその社会的反応からみる極北圏地域社会の比較研究

(2010年度～2012年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット)

- ・ 北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究

(2007年度～2011年度・岡洋樹)

- ・ 客家研究の総括と展望

(2010年度～2011年度・瀬川昌久)

- ・ 地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査

(2010年度～2011年度・瀬川昌久：移民ユニット)

- ・ 展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探求

(2010年度～2011年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット)

- ・ 東日本大震災で被災した三陸沿岸被災資料の保全と研究

(2011年度～2012年度・平川新：歴史資料ユニット)

- ・ 仙台市沿岸津波被災地の歴史・文化・景観の記録化

(2011年度～2012年度・平川新：歴史資料ユニット)

- ・ 東北アジア民族文字・言語情報処理研究

(2011年度・栗林均・東北アジア民族文字：言語情報処理研究ユニット)

- ・東アジア近世社会における出版文化の意義

(2010年度～2012年度・磯部 彰)

- ・東日本大震災の被災地における民俗文化の復興をめぐる地方行政とその支援にかかわる方法論の探求

(2011年度～2012年度・高倉浩樹)

- ・協働による展示実践を通じた人類学方法論の探求

(2012年度・高倉浩樹)

- ・スターリン、蒋介石と中国新疆

(2012年度・寺山恭輔)

- ・森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット

(2011年度～2013年度・工藤純一)

- ・シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット

(2009年度～2013年度・高倉浩樹)

- ・氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究

(2010年度～2013年度・高倉浩樹)

- ・東北アジアにおけるジオパークの可能性の研究ユニット

(2014年度～2016年度・石渡 明)

(3) 研究紹介発表

東北アジア研究センターではセンター教員の研究を相互に理解し関連情報を交換するための「東北アジア研究談話会」を行っている。毎月1回1人ずつ（持ち時間20分）、センター全体会議（構成員は教授、准教授、助教、助手、研究員など）の直後に開催し、コーヒー・お茶を飲みながらフランクな会としてセンター内研究交流・親睦を深めるとともに、共同研究等の企画着想の機会として提供している。発表は、センター教員（客員教員を含む）による各自の研究紹介である。また、3月24日には、2014年度の共同研究及び個人研究の報告するための「東北アジア研究センター研究成果報告会」を開催した（持ち時間15分）。以下に「東北アジア研究談話会」および「東北アジア研究センター研究成果報告会」の講演者、タイトルのリストを示す。

東北アジア研究談話会

2014年4月28日 プロゾロヴァ ラリサ（千葉研究室）客員教授

Biodiversity of the Russian Far East and the challenge of its conservation

2014年5月26日 サムピルドンドヴ チョローン ハルアドゥタン（岡研究室）

客員教授

17世紀の露蒙関係に関する研究—ロシア所蔵のアーカイヴ資料による

2014年6月30日 クリニチ ナタリア（寺山研究室）客員教授

1920-30年代ソ連極東諸都市の日常文化史

2014年7月28日 高橋一徳 助教

土壌物性と地雷検知センサ性能

2014年9月29日 及川高 教育研究支援者

陸前高田の「動く七夕」 —震災後における現状と課題—

2014年10月27日 コッホ マガリー（佐藤研究室）

フルブライト米国人招聘講師・研究員

Multisensor Investigation of Arid Regions with Implications for Groundwater Exploration

2014年11月25日 チェルノルツカヤ エレーナ（寺山研究室）客員教授

The policy of forced migrations in the Soviet Far East in the 1930s: motives, results, contradictions

2014年12月22日 金賢貞 助教

韓国における植民地建築物の資源化と植民地景観の創出—全羅北道群山市を事例に— (Colonial Architecture as Resource and Making a Colonial Landscape

in Contemporary Korea: the Case of Gunsan City in North Jeolla Province)

2015年1月26日 海斯琴高娃（ハイ セチンゴアー）教育研究支援者

モンゴル人作家インジャンナシの文学作品における語彙研究—近代語彙の視点
から見た 19 世紀のモンゴル語—

2015年2月23日 コンドラーシン ヴィクトル（寺山研究室）客員教授

Viewpoint to the history of Russia of the XX century through the history of
the peasantry and the history of agriculture

2015年3月23日 チェン ツイーニン（佐藤研究室）客員教授

An Antenna: a piece of metal but highly complex task

東北アジア研究センター2014年度研究報告会

片平北門会館2階エスパス

10:10~11:30 ユニット事業報告（司会：千葉聡）

- | | | |
|-----|-------------------------------|------|
| U-1 | 東北アジア言語文化遺産研究ユニット | 栗林均 |
| U-2 | 21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット | 岡洋樹 |
| U-3 | 出版文化資料データベース研究ユニット | 磯部彰 |
| U-4 | 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット | 瀬川昌久 |
| U-5 | 20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット | 寺山恭輔 |
| U-6 | 減災をめざした電波科学研究ユニット | 佐藤源之 |
| U-7 | 災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット | 高倉浩樹 |
| U-8 | 東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット | |

明日香壽川

11:40~12:10 個人発表（ポスターセッション）

- P-1 Polarimetric UWB SAR for Subsurface Imaging of Building Structures and Soil
Moisture Estimation by Pi-SAR-L2 and GPR

コヤマ クリスチャン

- P-2 江戸時代の松島と旅行者 高橋陽一
- P-3 非破壊検査用合成開口レーダの研究 飯塚泰
- P-4 蔵王山・丸山沢噴気地熱地帯の噴気温測定と温泉水化学分析

後藤章夫・松中哲也（筑波大学）・渡邊隆広・土屋範芳（環境科学研究科）

- P-5 御嶽山噴火後の金属探知機による行方不明者捜索活動のための火山灰及び土壌磁気
特性評価 高橋一徳

- P-6 湖沼沿岸生態系食物網の解析的研究 鹿野秀一

- P-7 天文五行占書の伝本調査概況とテキスト問題について 佐々木 聡

13:00~18:00 共同研究発表

<文化交流セッション> 座長：瀬川昌久

- 1 伝統的モンゴル語辞書の研究 栗林 均
- 2 聖書翻訳を通して見るモンゴル宗教文化交流史 滝澤克彦（長崎大学）
- 3 典籍文化遺産の研究 磯部 彰

<歴史セッション> 座長：岡 洋樹

- 4 日本列島の文化交渉史 ―経済と外交 荒武賢一郎
- 5 江戸時代から現代に通じる東北の歴史 荒武賢一郎
- 6 日本と韓国における村落の歴史と景観 渡辺尚志（一橋大学）
- 7 新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策 寺山恭輔

<社会と民族誌セッション> 座長：柳田賢二

- 8 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究 岡 洋樹
- 9 華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究
―華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて

川口幸大（文学研究科）

- 10 現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通じた検証 瀬川昌久
- 11 家・空間における食実践に関する文化人類学的研究―社会関係を開閉するという視座から

三浦哲也（育英短期大学）

<震災セッション> 座長：平野直人

- 12 震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進 佐藤源之
- 13 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用 高倉浩樹・及川 高
- 14 東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究

木村敏明（文学研究科）

<政治経済セッション> 座長：塩谷昌史

- 15 畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション 風戸真理（北星学園大学）
- 16 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究 岡 洋樹
- 17 中国における石炭消費削減策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性 明日香壽川
- 18 PM2.5 を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略に関する研究 石井 敦

(4) 学術協定

(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化

本センターは、主として東北アジア諸国の研究教育機関との研究交流を行うためのネットワーク構築を進めてきた。このためセンターは、大学間学術交流協定や部局間学術協定を国内外の研究教育機関と締結し、東北アジア地域研究を遂行するための国際的な環境づくりを行っている。これまでの締結機関及び締結年月日は表に記した通りである。

締結年月日	相手国機関
1992. 8. 10	★ロシア連邦 ロシア科学アカデミー・シベリア支部
1998. 11. 9	☆タイ アジア工科大学院
1999. 1. 12	☆アメリカ アラスカ大学
2000. 8. 21	★モンゴル モンゴル科学アカデミー
2000. 10. 2	◆モンゴル モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	★中国 吉林大学
2001. 6. 25	◆中国 広東省民族研究所
2001. 11. 16	★モンゴル モンゴル科学技術大学
2002. 10. 1	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所
2003. 7. 4	★ロシア連邦 ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4. 1	◆中国 内蒙古師範大学蒙古学学院
2008. 4. 25	◆韓国 高麗大学校中国学研究所
2008. 4. 25	◆韓国 高麗大学校日本研究センター
2008. 9. 22	◆中国 内蒙古大学蒙古学学院
2009. 8. 21	★イタリア フィレンツェ大学
2009. 8. 25	☆イラン テヘラン大学
2009. 9. 30	◆ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所
2011. 9. 28	◆中国 内蒙古師範大学旅游学院
2013. 3. 1	☆ドイツ ドイツ航空宇宙センター
2014. 2. 25	◆中国 中央民族大学蒙古語文学系

◆部局間協定 ★センターが世話部局となった大学間協定 ☆センターが協力部局となった大学間協定

(B) 共同ラボによる国際的研究支援

ロシア・ノボシビルスクのアカデムゴロドク内で 10 年間に亘り活動してきた東北大学リエゾンオフィス（日本館）は、ロシア連邦法改正の影響により平成 20 年からロシア科学アカデミーシベリア支部（以下 SB RAS）との共同運営体制となった。SB

RAS エキシビジョンセンター内に設置された共同ラボには、ロシア人非常勤スタッフが配属され、東北アジア研究センター海外連携室および東北大学ロシア交流推進室と連携して機能している。なお、共同ラボと同じオフィス内に東北大学ロシア代表事務所シベリア支部を開設するため、平成 22 年 9 月には東北大学井上明久総長がノボシビルスクを訪問している。これにより今後は東北大学と SB RAS の交流にとどまらず、日露の高等教育機関間の交流拠点として更なる活動が期待されることとなった。

共同ラボを通じた活動としては訪問講座「日本とアジア」などが挙げられる。センターが主体となりノボシビルスク国立大学東洋学部との合意のもと、平成 20 年度から五年間実施されている。最終年度となる本年度は 11 月 29 日、ワークヨップが行われた。参加者および講義テーマは以下である：

報告 1：エレナ・ヴォイティシェク（ノボシビルスク国立大学教授）

「シベリアにおける日露文化交流」

報告 2：長岡 龍作（東北大学大学院文学研究科教授）

「日本における日本美術史研究の現状」

報告 3：ヴォルコフ・パーヴェル（ノボシビルスク国立大学准教授）

「現代の実験考古学と民族学の発展の見通し」

報告 4：阿子島 香（東北大学大学院文学研究科教授）

「現代日本考古学の展望：方法論的な特色および社会的な背景」

報告 5：シモノヴァ・エレナ（ノボシビルスク国立大学講師）

「マスラオぶりとタオヤメぶり：日本文化におけるジェンダーステレオタイプの影響」

報告 6：エヴゲニヤ・フロロヴァ（ノボシビルスク国立大学助教授）

「通過儀礼と幼稚化する現代社会：日本とロシア」

報告 7：窪俊一（東北大学大学院情報科学研究科准教授）

「日本におけるマンガ研究の現状」

報告 8：ポダルコ・ピョートル氏（青山学院大学教授）

「現代日本のロシア人ディアスポラと『露日関係問題』」

報告 9：高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター教授）・及川高（東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者）

「東日本大震災後の無形文化遺産調査と日本研究」

千葉 正樹（尚絅学院大学教授）

コメント「日本史研究の立場から」

佐藤 勢紀子（東北大学大学院国際文化研究科教授）

コメント「日本文学研究の立場から」

日本研究は、文字通り国際的な学術研究領域としてある。欧米・アジア諸国の中でも、ロシアは日本への関心が伝統的に高い国のひとつである。本ワークショップでは、ロシア・ノボシビルスク大学と、東北大学等仙台の日本研究者が、両国における日本研究・理解の動向と特色を議論しながら、今後の研究・教育交流の可能性について議論を行った。

(5) 研究成果公開

(A) 既刊の刊行物

・『東北アジア研究』東北アジア研究センターが主催する東北アジア地域研究のための学術雑誌。第1号(1997)～第19号(2014)

<第19号>目次

〔論文〕

- 老親扶養にみる中国朝鮮族家族の現在—国外移住に伴う変化を中心に
李華
- 清代外モンゴルにおけるトシェート・ハン部、サイン・ノヤン部間の牧地紛争処理—
乾隆41(1776)年から道光27(1847)年にかけての境界画定の経緯—チヨウル
モンゴル
堀内香里
- 清代後期ハルハ・モンゴルの旗内行政統治における印務処の機能について
堀内香里
- 1890年代後半の清国造幣問題をめぐる「日英商業同盟」への試み—1899年の香港
上海銀行・横浜正金銀行による連名状を中心に—
奚伶
- 荻生徂徠の「天」—「天に法る」をめぐって—
陳曉傑
- 石碑のある風景—近世の旅行者と松島—
高橋陽一

〔書評〕

- 書評：塩谷昌史著『ロシア綿業発展の契機 —ロシア更紗とアジア商人—』
知泉書館、2014年2月、252頁
高田和夫
- 書評：金賢貞『「創られた伝統」と生きる—地方社会のアイデンティティー—』
青弓社、2013年、277頁
中野紀和
- 書評：川口幸大『東南中国における伝統のポリティクス —珠江デルタ村落社会の
死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織—』風響社、2013年
小林宏至
- 書評：山田仁史、永山ゆかり、藤原潤子編『水・雪・氷のフォークロア—北の人々の
伝承世界—』勉誠出版、2014年、34頁
直野洋子
- 書評：高橋美貴『近世・近代の水産資源と生業—保全と繁殖の時代—』吉川弘文館、
2013年12月、305頁
木下光生
- 書評：武居奈緒子『大規模呉服商の流通革新と進化—三井越後屋における商品仕入体
制の変遷—』千倉書房、2014年3月、216頁
下向井紀彦
- 書評：満園勇『日本型大衆消費社会への胎動—戦前期日本の通信販売と月賦販売—』東

- 書評: Lucien J. Frary and Mara Kozelsky, *Russian-Ottoman Borderlands: The Eastern Question Reconsidered*, Madison, The University of Wisconsin Press, 2014. 363p
矢口啓朗
- Е.Н.Чернолуцкая, Принудительные миграции на советском Дальнем Востоке в 1920-1950-е гг., Владивосток: Дальнаука. 2011. 512с. 寺山恭輔
- Н.Г.Кулинич, Повседневная культура горожан советского Дальнего Востока в 1920-1930-е годы, Хабаровск: Издательство Тихоокеанского государственного университета, 2010. 375с. 寺山恭輔

・『東北アジア研究シリーズ（和文）』

1. 平川新編「シンポジウム 変動するアジアと地域研究の課題」（2001）
2. 成澤勝編「公開シンポジウム 21 世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割」（2001）
3. 朝 克著、丸山宏／上野稔弘編訳「共同研究 ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証 研究集会発表再構成 ツングースの民族と言語」（2002）
4. 岡洋樹／高倉浩樹編「東北アジア地域論の可能性 歴史学・言語学・人類学・政治経済学からの視座（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2002）
5. 岡洋樹／高倉浩樹／上野稔弘編「東北アジアにおける民族と政治（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2003）
6. 瀬川昌久編「『中国研究』の可能性と課題（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2005）
7. 寺山恭輔編「開国以前の日露関係（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2006）
8. 明日香壽川編「地域協力から見えてくる地球温暖化」（2007）
9. 高倉浩樹編「地域分析と技術移転の接点『はまる』『みる』『うごかす』視点と地域理解」（2007）
10. 岡洋樹編「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」— モンゴルと華南の視座から—」（2009）
11. 塩谷昌史編「帝国の貿易 18 ～ 19 世紀におけるユーラシアの流通とキャフタ」（2009）

・『東北アジア研究シリーズ（英文）』

1. 吉田忠／岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相」（1998）
2. 寺山恭輔編「ロシアと日本 — 歴史研究 —」（1998）

3. 岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相Ⅱ」(1998)
4. 寺山恭輔「高温超伝導：新たな物質とその物性」(1999)
5. 工藤純一／山田勝芳編「地球変化に関する国際ワークショップ：ノアから見たシベリア」(2001)
6. 高倉浩樹編「ヤクーチアにおける民俗生態学的実践と文化の伝統」(2003)
7. 岡洋樹編「モンゴル 歴史と民族の諸問題」(2004)
8. 宮本和明編「東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備」(2005)
9. 岡洋樹／オーホノイ・バトサイハン編「1911 年モンゴル民族革命の前提条件と国際情勢」(モンゴル語) (2006)
10. Ch. ダシダワー／岡洋樹編「モンゴル史研究の新動向、当面する課題 (17～20 世紀初頭) (モンゴル語) (2009)
11. フロリアン・ステムラー／高倉浩樹編「食べるだけでなく、共に暮らすに適するもの — 北方ユーラシアとアフリカにおける遊動民と動物」(2010)

・『東北アジア研究センター叢書』

1. 山田勝芳編「東北アジアにおける交易拠点の比較研究」(2001)
2. 田中継根編訳「レザーノフ編『露日辞書・露日会話帳』」(2001)
3. 成澤勝編「環中華の儀礼と芸能 — 朝鮮を軸に —」(2001)
4. 栗林均／精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引 (2001)
5. K. Litasov, H. Taniguchi, Mantle Evolution beneath the Baikal Rift (2002)
6. 岡洋樹編「モンゴル研究論集 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告Ⅰ」(2002)
7. 宮本和明「東アジア 3 国における自動車保有・利用の実態と社会意識の調査研究 — 経済成長・自動車利用と環境の調和をめざして—」(2002)
8. 瀬川昌久編「文化のディスプレイ」(2003)
9. 磯部彰編「東北大学所蔵 豊後佐伯藩『以呂波分書目』の研究」(2003)
10. 栗林均編『華夷訳語 (甲種本)』モンゴル語全単語・語尾索引 (2003)
11. 鄭永振著, 成澤勝編「古ツングース諸族墳墓の比較研究」(2003)
12. A.A. キリチェンコ編「シベリア抑留死亡者名簿」(2003)
13. 黒田卓／高倉浩樹／塩谷昌史編「中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像」(2003)
14. 磯部彰編「明治・大正期における根岸町子規庵の風景」(2003)
15. 平川新監修『ロシア史料にみる 18~19 世紀の日露関係』第一集 (2004)
16. 谷口宏充編「中国東北部白頭山 10 世紀巨大噴火とその歴史効果」(2004)
17. ニコライ・ツェレンピロフ編、ツィムジト・ワンチコワ監修
「ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所モンゴル語写本・版本 MI コレクション注釈付目録」(2004)
18. S. G. Catane, H. Taniguchi, A. Goto, A. P. Givero and A. A. Mandanas, Explosive Volcanism in the Philippines. (2005)

19. 磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵閩齋堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料 (上)」(2006)
20. 栗林均／「呼日勒巴特爾編『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』モンゴル語配列対照語彙」(2006)
21. S. V. Rasskazov and H. Taniguchi, Magmatic Response to the Late Phanerozoic Plate Subduction beneath East Asia (2006)
22. 山田勝芳／工藤純一編「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」(2006)
23. 磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵閩齋堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料 (下)」(2006)
24. N. Tserempilov, “ANOTATED CATALOGUE of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs MII of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences”, (2006)
25. 瀬川昌久編「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」(2007)
26. 平川新監修「ロシア史料にみる 18 ～ 19 世紀の日露関係 第 2 集」(2007)
27. 岡洋樹編「モンゴルの環境と変容する社会」(2007)
28. L. Kondrashov and J.Kudoh, “Monitoring of Vegetation Fires in Northeast Asia” (2008)
29. 磯部彰編「費守齋刊『新刻京本全像演義三国志伝』の研究と資料」(2008)
30. 栗林均／呼日勒巴特爾編『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』満洲語配列対照語彙 (2008)
31. 平川新監修「ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係 第 3 集」(2008)
32. 寺山恭輔「1930 年代ソ連の対モンゴル政策—満洲事変からノモンハンへ—」(2009)
33. 栗林均編「『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙」(2009)
34. 李仁子／金谷美和編「自己言及的民族誌の可能性」(2009)
35. 工藤純一「東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究 報告書」(2009)
36. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18～19 世紀 日露関係 第 4 集」(2009)
37. 栗林均編「『蒙文総彙』—モンゴル語ローマ字転写配列—」(2010)
38. 佐藤大介編「18～19 世紀仙台藩の災害と社会 別所万右衛門記録」(2010)
39. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18～19 世紀の 日露関係 第 5 集」(2010)
40. 磯部彰編「清初刊教派系宝卷二種の原典と解題—『普覆週流五十三参宝卷』と『姚秦三蔵西天取清解論』—」(2010)

41. 谷口宏充編「白頭山火山とその周辺地域の地球科学」(2010)
 42. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題」(上)
(2011)
 43. 瀧澤克彦「ノマド化する宗教 浮遊する共同性 現代東北アジアにおける
『救い』の位相」(2011)
 44. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題」(下)
(2011)
 45. 岡洋樹編「歴史の再定義 一旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と
学術・教育一」(2011)
 46. 栗林均編「『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引(附満洲文語索引)」(2011)
 47. 栗林均編「『元朝秘史』漢語傍訳索引」(2011)
 48. 栗林均編「『保安語詞彙』蒙古文語索引」(2012)
 49. 磯部彰編著「清朝宮廷演劇文化の世界」(2012)
 50. 高橋陽一編著「『江戸時代の温泉と交流-陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家
文書の世界-』(2013)
 51. 栗林 均編『土族語詞彙』蒙古文語索引 (2013)
 52. 栗林 均・斯欽巴図編 『蒙文倒綱-モンゴル語ローマ字転写配列-』(2014)
 53. 友田昌宏、菊地優子、高橋盛編著 『岩出山伊達家の戊辰戦争一吾妻家文書
「奉宿若御用留」を読む一』(2014)
 54. 磯部 彰 「上山市立図書館蔵 上山藩明新館文庫目録と研究」(2014)
 55. 栗林均、斯欽巴図編「『初学指南』の研究ー18世紀の口語モンゴル語ー」(2015)
- ・『東北アジア アラカルト』
- 第1号 徳永昌弘／徳田昌則編「ノヴォシビルスクは今」(1999)
 - 第2号 寺山恭輔編訳「シベリアの過去と未来」(1999)
 - 第3号 徳永昌弘／徳田昌則編「エリツィン時代のロシアとその後：日露関係の展
望」(2000)
 - 第4号 伊賀上菜穂編「新世紀の東北アジア ― 日中露三国をめぐる国際関係の
歴史と将来―」(2001)
 - 第5号 キム・レチュン講演、柳田賢二編「老子とトルストイ」(2001)
 - 第6号 寺山恭輔・塩谷昌史編「東北アジアの共生とユートピア」(2002)
 - 第7号 東北アジア研究センター開設5周年記念特刊「新しい地域研究を求めて
― 東北アジア研究センターの現在と明日への展望―」(2002)
 - 第8号 平川新／A. A. キリチェンコ「日本とロシア ― その歴史を振り返る―」
(2003)
 - 第9号 吉田忠／磯部彰「東アジアの本とさし絵」(2004)

- 第 10 号 山田勝芳編『東北アジア』“Northeast Asia”の現在・未来を考える
— 日本における『東北アジア』関係機関の集い — (2004)
- 第 11 号 磯部彰「市民フォーラム 2003 明治大正期の根岸町子規庵界限とその後」
(2004)
- 第 12 号 徳田由佳子編「シベリア通信 2000 年 — 2004 年」(2004)
- 第 13 号 山田勝芳編「人口・労働問題から見た東北アジアと東南アジア —
ASEAN+3 の行方を人口・労働問題から見る—」(2004)
- 第 14 号 徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2001 年—2004 年」(2005)
- 第 15 号 磯部彰編「東北アジア研究センター共同研究『東アジア出版文化の総合研
究』研究成果報告『東アジア出版文化の研究』に係る研究成果等の社会公
表 (2006)
- 第 16 号 セルゲイ・パプコフ／寺山恭輔／畠山禎「三人の大統領とソ連・ロシア：ペレ
ストロイカ、ソ連崩壊、再興」(2006)
- 第 17 号 磯部彰編「東シナ海近世現代出版文化研究（「東アジア出版文化の総合研
究」報告書Ⅱ）」(2007)
- 第 18 号 山田勝芳編「松本健一「アジア主義と大東亜戦争—北一輝・大川周明・石原
莞爾・中野正剛—（東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方研究
会 講演会記録）」(2007)
- 第 19 号 工藤純一編「東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部学術交流協定
締結 15 周年記念シンポジウム報告書」(2008)
- 第 20 号 斎藤由佳／前田ひろみ翻訳、寺山恭輔編集「ロシアの北太平洋進出と日本
—『ロシア領アメリカの歴史』より—」(2009)
- 第 21 号 徳田由佳子編「シベリア通信 2 2004 年～2008 年」(2009)
- 第 22 号 徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2 2004 年～2008 年」(2009)
- 第 23 号 寺山恭輔編「ロシア極東の形成 — N.I. ドゥビーニナ著『プリアムール
総督』三部作より—」(2011)
- 第 24 号 千葉真弓／徳田由佳子／高倉浩樹編「トナカイ！トナカイ!!トナカイ!!!」
研究成果を市民に還元する自主展示の試み」(2010)
- ・『東北アジア研究センター報告』
- 第 1 号 高倉浩樹「日本人のみたトナカイ遊牧民 シベリア民俗写真を現地に戻して
展示する試み」(2011)
- 第 2 号 チョローン・ダシダワー、チンゲルト、岡洋樹編「モンゴル史研究と史料」
(モンゴル文 (2011))
- 第 3 号 平川新／佐藤大介編「歴史遺産を未来へ」(2011)
- 第 4 号 平川新編「よみがえる町の記憶—通町・堤町・北山界限の歴史—」(2011)

- 第 5 号 高倉浩樹編「東日本大震災で被災した宮城県沿岸部における民俗文化財調査
(2011 年度報告集)」(2012)
- 第 6 号 栗林均編「蒙文倒綱 ― 資料編・原本影印 ― (2012)
- 第 7 号 佐藤源之・高倉浩樹編「連携する研究所 (2012)
- 第 8 号 菊谷竜太・滝澤克彦「身体的実践としてのシャマニズム (2013)
- 第 9 号 高倉浩樹・滝澤克彦編『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査
(2012 年度報告集)』(2013)
- 第 10 号 荒武賢一郎 地域の歴史を学ぶ -宮城県大崎市の文化遺産- (2013)
- 第 11 号 佐々木聡『開元占經』閣本の資料と解説 (2013)
- 第 12 号 栗林均 孝経 -モンゴル語古訳本- (2014)
- 第 13 号 サンプルドンドヴ・チョローン、胡日查、岡洋樹編 清朝とモンゴル人 (2014)
- 第 14 号 栗林均編 蒙漢字典―資料編・原本影印― (2014)
- 第 15 号 高橋陽一、佐藤大介、小関悠一郎編 よみがえる江戸時代の村田
―山田家文書からのメッセージ― (2014)
- 第 16 号 李仁子、瀬川昌久 (編) 伊藤亜人、安鍾秀、李仁子 (著) ヴェールの向こう側
から ―北朝鮮民衆の文化人類学的分析 (2015)
- 第 17 号 栗林均、海蘭 編『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究 (2015)

・『東北アジア研究センター ニュースレター』 第 1 号 (1999) ～ 第 64 号 (2014)

年 4 回、本研究センターの活動状況や諸情報を採録した「東北アジア研究センター
ニュースレター CNEAS」を出版している。学内外の機関等に配布のほか、本セン
ターの活動に協力いただく個人に配布している。2014 年度は以下のとおり発行した。

第 61 号／2014 年 6 月 26 日発行

- ・ 巻頭言「社会貢献と研究」
- ・ 最近のシンポジウム等
- ・ 受賞
- ・ 最近の研究会
- ・ 著書紹介
- ・ 客員・新任紹介
- ・ 活動風景
- ・ 編集後記

第 62 号／2014 年 10 月 31 日発行

- ・ 巻頭言「地域研究の課題としての「境」」
- ・ 東北アジア学術交流懇話会 公開講演会
- ・ 日本研究と国際交流
- ・ センター内共同研究、プロジェクト・ユニット研究会

- ・ センター関連出版物
- ・ 客員教授紹介
- ・ 受賞
- ・ 新任紹介
- ・ 活動風景
- ・ 編集後記

第 63 号／2014 年 12 月 24 日発行

- ・ 巻頭言 東北アジア地域研究における文化の双方向的理解
- ・ 国際シンポジウム「Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment」
- ・ 平成 26 年度 みやぎ県民大学の開催
- ・ 御嶽山噴火に伴う行方不明者捜索活動への協力
- ・ 公開講演会「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」
- ・ 2014 年度交通史学会シンポジウム「東北の名所―松島・塩釜のあゆみ―」
- ・ 公開シンポジウム「宮城発・自由民権運動再考」
- ・ 著書紹介
- ・ 客員紹介／新任紹介／研究員紹介
- ・ 活動風景
- ・ 編集後記

第 64 号／2015 年 3 月 27 日発行

- ・ 巻頭言 東北アジア研究の課題としての「越境」と「共生」
- ・ 最近の講演会・研究会等
- ・ センター関連出版物(1)
- ・ 客員教授紹介
- ・ 受賞
- ・ センター関連出版物(2)
- ・ 活動風景
- ・ 編集後記

・ 英文ニューズレター『The Bulletin CNEAS vol.2』 2015 年 2 月発行

年 1 回、海外の東北アジア研究者および関連研究機関との交流を促進するため、本研究センターの活動状況や諸情報を採録した。特に、センターでの客員教授、客員研究員との連携を継続・発展させる重要な目的がある。

- ・ Focus : What's Happening to Japanese Colonial Architecture in Postcolonial

South Korea? : Interpretational Shift from the Remnants of Japanese Colonialism into Korean Cultural Heritage

- ・ Recent Events : Association for Northeast Asia Studies Regular Open Lecture: Current Situations of Neighboring Russia
 - ・ Recent Events : Open Lecture “Looking Back on the History of Murata: Messages from the Edo Period”
 - ・ Recent Events : Tohoku University Katahira Festival
 - ・ Recent Events : Open Lecture: Message from a World Heritage Site: Power of the History of Hiraizumi and the Iwami Ginzan Silvermine
 - ・ Recent Events : Field Report Meetings for the “Comparative Studies of Damaged Local Communities after the Great East Japan Earthquake and Tsunami, and Applied Ethnographic Informatics”
 - ・ Recent Events : Center for Northeast Asian Studies Symposium: “From behind the Veils—A Cultural Anthropological Analysis of the North Korean Populace”
 - ・ Awards
 - ・ New Staffs and Visiting Scholars
 - ・ Publications
 - ・ Letters : Long-term cooperation between the Center for Northeast Asian Studies of Tohoku University (Sendai, Japan) and Institute of Systematic and Ecology of Animals of SB RAS (Novosibirsk, Russia): Food web studies in Western Siberia freshwater ecosystems. (Dr. Natalia Yurlova, Leading Scientist, Institute of Systematics and Ecology of Animals, SB RAS, Russia, Novosibirsk)
 - ・ Letters : Human-animal relations in pastoralist societies: comparative research from the Arctic (Professor Florian Stammler, Arctic Centre, University of Lapland, Finland)
 - ・ Editorial
-
- ・ 東北アジア学術読本（東北大学出版会刊）
 1. 高倉浩樹・曾我亨『シベリアとアフリカの遊牧民 — 極北と砂漠で家畜とともに暮らす — （2011 年）
 2. 石渡明・磯崎行雄『東北アジア 大地のつながり（2011 年）
 3. 奥村誠・藤原潤子・植田今日子・神谷大介著 『途絶する交通、孤立する地域』（2013 年）

4. 高倉浩樹・山口未花子（編）『食と儀礼をめぐる地球の旅：先住民文化からみたシベリアとアメリカ』（2014年）

・東北アジア研究専書

1. 瀬川昌久『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂刊、2011年
2. 高倉浩樹『極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂刊、2011年
3. 川口幸大・瀬川昌久『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂刊、2013年
4. 金賢貞『「創られた伝統」と生きる—地方社会のアイデンティティー—』（株）青弓社、2013年
5. 山口未花子『ヘラジカの贈り物：北方狩猟民カスカと動物の自然誌』（株）春風社、2014年
6. 塩谷昌史『ロシア綿業発展の契機—ロシア更紗とアジア商人—』（株）知泉書館、2014
7. 高倉浩樹（編）『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話』昭和堂、2015年
8. 荒武賢一郎『屎尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市—』清文堂、2015年
9. 滝澤克彦『越境する宗教—モンゴルの福音派—ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』新泉社、2015年
10. 寺山恭輔『スターリンと新疆：1931-1949年』社会評論社、2013年

・東北アジア学術交流懇話会ニューズレター「うしとら」

第61号／2014年6月30日発行

- ・ 論点：典籍文化と東北アジア（磯部彰）
- ・ 東北アジア通信：「ヴェールの向こう側から—北朝鮮民衆の文化人類学的分析」東北アジア研究センターシンポジウム（瀬川昌久）
- ・ 東北アジア研究センターとの出会い（ポロビンカ・マリア）
- ・ 会員の広場：負の歴史遺産と観光（金賢貞）
- ・ 編集後記

第62号／2014年9月20日発行

- ・ 論点：東北アジアの遊牧民（岡洋樹）
- ・ 東北アジア通信：「PM2.5問題は東北アジアにおける緊張緩和のきっかけとなるか？—越境大気汚染の現状と課題—」東北アジア学術交流懇話会定期公開講演会（岡本哲明）
- ・ 会員の広場：秋田の力強くそして哀しいオニたち ふるさと東北のもつ底力と慈しみ（阿部克人：由利本荘市文化交流館カダーレ）
- ・ 編集後記

第 63号／2014 年 12 月 20日発行

- ・ 論点：国境地域から考える北東アジアの地域主義（佐渡友哲：日本大学法学部）
- ・ 東北アジア通信：ロシア・ノボシビルスク国立大学での「日本アジア講座」（岡洋樹）
- ・ 東北アジア通信：モンゴルの草原でひたすら馬乳酒を飲んだ旅（高倉浩樹）
- ・ 会員の広場：民俗学と「当たり前」（金賢貞）
- ・ 編集後記

第 64号／2015 年 3 月 20日発行

- ・ 論点：現代中国社会と「宗族」（瀬川昌久）
- ・ 東北アジア通信：中国辺疆民族の一次史料を求めて ―所蔵機関訪問雑記（上野稔弘）
- ・ 東北アジア通信：モンゴルの草原でひたすら馬乳酒を飲んだ旅（高倉浩樹）
- ・ 会員の広場：通いつめた国（真殿達：麗澤大学経済学研究科）
- ・ 編集後記

(B) 2014 年度に実施された公開講演、共同研究会等

2014 年 5 月 30 日（金）

東北アジア学術交流懇話会 平成 26 年公開講演会

「PM2.5 問題は東北アジアにおける緊張緩和のきっかけとなるか？―越境大気汚染の現状と課題―」

日時：2014 年 5 月 30 日（金）

◆ 講演会 15：00～17：00

◆ 総 会 17：10～17：40

会場：東北大学 東京分室

講演：

「日本における大気汚染の現状と未来：越境大気汚染はどの程度問題か？」

講師：永島 達也氏（独立行政法人 国立環境研究所地域環境研究センター大気環境モデリング研究室 主任研究員）

「越境大気汚染における科学と政治」

講師：明日香 壽川氏（東北大学東北アジア研究センター教授/東北大学環境科学研究科教授）

2014 年 6 月 14 日（土）

東北アジア研究センター共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」

平成 26 年度第 1 回研究会

日時：平成 26 年 6 月 14 日(土) 13:30～18:00

会場：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟 4 階会議室(436)

講演：サンピルドンドヴ・チョローン（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）

“XVII зууны Оросын эзэн хаан Монгол ноёны харилцаа: Лувсангийн “самуун”- ы учирт (17 世紀におけるロシア皇帝とモンゴル王族の関係：ロヴサンの「乱」に関して)”

報告1：上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）

「20世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」

報告2：小沼孝博（東北学院大学文学部）

「清末ホヴド地区における政治と移住：1838年のカザフ侵入事件とその影響」

報告3：水盛涼一（東北大学大学院文学研究科）

「嗜好と査定：清朝末期のアヘン吸引と官僚管理」

2014年6月16日（月）～20日（金）

THE UNIVERSITY OF CHICAGO 2014 Reading Kuzushiji Workshop

日時：平成26年6月16日（月）～20日（金）

会場：アメリカ合衆国 シカゴ大学歴史学部

講師：荒武 賢一朗（東北大学東北アジア研究センター准教授）

主催：シカゴ大学東アジア研究所、歴史学部

企画協力：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

2014年7月5日（土）13：30～16：30

公開講演会「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」

日時：2014年7月5日（土）13時30分～16時30分

会場：川崎町山村開発センター3階ホール

講演：「笹谷街道沿線の戦国志～砂金氏の動向を中心に～」

菅野正道（仙台市史編さん室 室長）

「江戸時代の青根温泉～湯守佐藤仁右衛門家文書の古文書から～」

高橋陽一（東北大学東北アジア研究センター 助教）

2014年7月5日（土）14：00～17：30

共同研究；「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」

第2回研究会

日時：2014年7月5日（土）14：00～17：30

会場：東北大学 川内キャンパス

東北アジア研究センター・大会議室（4階 436室）

プログラム1 14：00～15：50

ブレインストーミング

「みやしんぶんデータベースの活用と展開」

話題提供；高倉浩樹、山口実花子、滝澤克彦、及川高

プログラム2 16：00～17：30

ブリギッテ・シテーガ（ケンブリッジ大学）

“The ethnographer in the hinanjo -Yamada-machi, Iwate 2011”

（避難所の民族誌家：2011年岩手県山田町）

2014年8月2日（土）13：00～

共同研究；「＜華人の移動とその「故郷」＞についての民族誌的研究—華僑華人研究の新たなパ

ラダイムにむけて>」研究会

日時：2014年8月2日（土）13：00～

会場：東京大学駒場キャンパス 18号館 4階 コラボレーションルーム 3

プログラム

趣旨説明 (13:00～13:10)

川口幸大（東北大学）

発表 1 (13:10～14:10)

李華（延辺大学 人文社会科学学院）

「朝鮮族の移住者たちにとっての『僑郷』—延辺朝鮮族自治州の事例から(仮)」

発表 2 (14:20～15:20)

河合洋尚（国立民族学博物館）・阿部朋恒（雲南大学）

「雲南省における『僑郷』景観の創出—紅河県を事例として(仮)」

発表 3 (15:20～16:20)

陳碧（玉林師範大学）、通訳：兼城糸絵（鹿児島大学）

《“侨乡”再认识：一个情感的视角——基于马来西亚广西籍华人吕先生的侨乡活动分析(仮)》

（「感情という視点からみる『僑郷』の再認識—マレーシアの広西籍華人・呂氏の僑郷での活動に関する分析をもとに」）

コメント (16:30～16:45)

瀬川昌久（東北大学）

総合討論 (16:45～17:30)

2014年9月5日 9：00～18：00

Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment

（ユーラシアの遊牧 —歴史・文化・環境—）

日時：2014年9月5日 9：00～18：00

会場：モンゴル科学アカデミー会議室（モンゴル国ウランバートル市）

発表者：

- ・ S. Chuluun (Institute of History, MAS.), “The “Oirad” ayimaG lead by QutuG: Original Habitat, Titles, Recovery”
- ・ Oka Hiroki (CNEAS.TU), “Rethinking the Historical Reality of Borderline in Qing era Mongolia: the Case of “Willow Wall” as the Eastern Border of “the Outer Mongols”
- ・ E. Jigmeddorj (Institute of History, MAS), “Some Problems of the Study on the Birch Documents of Qalq-a”
- ・ O. Oyunjargal (National University of Mongolia), ““TosGon” of the Qing Era Qalq-a Mongolia”
- ・ Colmongerel (Kobe University), “Nomadic Situations of Yekešabi Judging from Pasture Conflicts: A Case in Central Right Last Banner of Tusiyetu Qan Ayimay in Outer Mongolia during the Qing Period”
- ・ Horiuchi Kaori (Tohoku University), “Border Line and Nomadic Pastoralism in Qing dynasty: Examining the Cases of “nutug” between Khalkh and Barga”
- ・ L. Altanzaya (Mongolian State University of Education), “On the Pastureland of the Shavinar of IlaGuGsan QutuGtu of Qalq-a JasaGtu qaGan ayimaG”

- Marianna Monge-Baiyrovna Kharunova (Tuvan Institute for the Study of Humanities Republic of Tyva), “Social Changes in Traditional Tuvan Society in Connection with the Passage of Tuvans to Settled Way of Life (1944-1961)”
- B. Batsuren (Institute of History, MAS), “Problems of the History of Inner Asian Nomads”
- Borisov Andrian Afanasyevich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN), SB RAS), “Ulus as the universal form of economical, social and political organization of Turkic and Mongolian Peoples”
- Qurca (Inner Mongolian Normal University), “The Nomadic Pastoralism Managed by the Inner Mongolian Buddhist Churches in the Qing Times”
- Qau, Zhiceng (Inner Mongolian Normal University), “The Tourist Business in the Pastoral Region and the Development of the Region”
- Yang Bayar (Inner Mongolian Normal University), “Migrating Tourism viewed from Nomadic Pastoralism”
- B. Natsagdorj (Institute of History, MAS), “The Uriyangqai of Kovsgol: From Reindeer Nomadic Pastoralist to Pastoralist”
- D. Erdenebaatar (National University of Mongolia), “Archaeological Study on the Culture of the Bronze and the Iron Age of Mongolia”
- Vasilyev Valeriy Egorovich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “Scythian-Siberian roots of graves with horse on the territory of Yakutia (by modern ethnographical dates)”
- S. Soronzonbold (University of Culture and Arts), “The Musical Score of Mongolian Nomads”
- B. Baatarkhuu (Institute of History, MAS), “The Dwellings of Central Asian Nomads: Tradition and Transformation”
- Antonov Egor Petrovich (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “Language construction in Yakutia and Buryatia in a context of a revitalization of a political pantyurkizm and a panmonologizm in the 1920th”
- Nasun-Oljei (Inner Mongolian Normal University), “The Mongolian State Rituals Based on the Nomadic Culture”
- Kazato Mari (Hokusei Gakuen University Junior College), “Variability of seizures of Ger, Mongolian dwelling through life stages”
- M. Urgamal (Institute of Botany, MAS), “The Vegetation of Mongolia and Its Traditional Understandings of Nomadic Peoples”
- Ignatyeva Vanda Borisovna (Institute for Humanities Research and Indigenous Studies of the North (IHRISN) of the SB RAS), “North horse-breeding in the context of the global climate change”
- Borjigin Burensain (University of Shiga), “The Nature views of Nomadic Pastoralists in the conception of "Gajar-un sudal"”
- Takakura Hiroki (CNEAS.TU), “Arctic adaptation reconsidered: Horse-cattle pastoralism in Siberia as exception or legitimate adaptation”
- Elena Samrina (Khakas Research Institute of Language, Literature and History), “Ecological conditionality of life activity of nomads traditional cultures (based on the Khakass - Minusinsk region)”

- ・ Siye Yungmei (Inner Mongolian Normal University), “The Recovery of Traditional Nomadic Pastoralism in the Agriculturalist Mongolian: The Case of Four Nomadic qosiGus of Kōlūnbuyir”
- ・ Mungkebayar (Inner Mongolian Normal University), “Study on the Ethnic Pastoral Economy”

2014年9月20日(土) 13:30~17:30

2014年度交通史学会シンポジウム「東北の名所—松島・塩釜のあゆみ—」

日時：9月20日(土) 13:30~17:30

会場：東北大学川内北キャンパスB200教室

報告：「中世の松島—雄島海底板碑群の紹介を中心に—」

七海 雅人(東北学院大学文学部教授)

「近世の松島と旅行者—名所雄島の石碑—」

高橋 陽一(東北大学東北アジア研究センター助教)

「宮城電気鉄道(仙石線)の敷設と沿線地域」

徳竹 剛(福島大学行政政策学類准教授)

「戦前・戦後の工業化構想と塩釜—港湾を中心に—」

安達 宏昭(東北大学文学部教授)

2014年9月25日、10月2日、10月16日、10月30日

みやぎ県民大学(大学開放講座)「江戸時代の宮城県を知ろう—仙台藩の歴史と文化—」

伊達藩から始まる宮城の江戸時代には、さまざまな出来事がありました。この講座では、医療や文化、そして社会について歴史資料を読み解きながら、地域史研究の専門家が講義をおこないます。

対 象： 18歳以上の県民

会 場： 利府町生涯学習センター

募集人数：50名(応募者多数の場合、抽選)

開講日時：平成26年9月25日(木)、10月2日(木)、16日(木)、30日(木)

いずれも10:00~12:00

9月25日(木) 10:00~12:00

荒武賢一朗講師(東北大学東北アジア研究センター准教授)

「武士と百姓・町民の関係—身分制度とは何か—」

10月2日(木) 10:00~12:00

張基善講師(芦東山記念館学芸調査員)

「江戸時代の医療と社会」

10月16日(木) 10:00~12:00

澁谷悠子講師(宮城県公文書館専門調査員)

「仙台藩の蝦夷地警備と死者供養」

10月30日(木) 10:00~12:00

櫻井和人講師(白石歴史資料調査会事務局長)

「片倉小十郎の城下町・白石の歴史」

2014年10月11日(土)~12日(日)

共同研究;「家・空間における食実践に関する文化人類学的研究—社会関係を開閉するという視座から」平成26年度第1回研究会

日時:10月11日(土)~12日(日)

会場:東北大学東京分室(11日)、東京工業大学田町キャンパス(12日)

内容:

瀬川昌久(東北大学):

「死者への供食、死者との供食—供物からみた関係性の維持と断絶に関する一考察」

櫻田涼子(育英短期大学):

「年餅とオープンハウス—マレーシア華人社会における正月菓子の準備と分配」

益田岳(京都大学):

「イバンはなぜ酒を作り続けているか—開き/閉じる食実践からみる自家醸造酒の使いみち」

参加者全員:昨年度までの報告内容の紹介

総合討論

2014年10月26日(日) 11:00~17:00

公開シンポジウム「宮城発・自由民権運動再考」

日時:10月26日(日) 11:00~17:00

会場:東北大学片平キャンパスさくらホール

主催:東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学部門

報告:

「宮城県の自由民権運動研究—その成果と課題—」

千葉 昌弘(北里大学元教授)

「日本憲法史上における五日市憲法の意義」

新井 勝紘(専修大学文学部教授)

「五日市学芸講談会と千葉卓三郎」

松崎 稔(町田市立自由民権資料館学芸員)

「自由民権運動から初期社会主義へ—その接続の諸相」

後藤 彰信(宮城県農業高等学校教諭)

2014年11月3日(月・祝日) 14:00~16:00

白石市図書館創立100周年記念講演会「「商人の町」白石と江戸時代」

日時:11月3日(月・祝日) 14:00~16:00

会場:白石市図書館2階閲覧室

定員:入場無料、申し込み不要。当日先着順80名。

講演①：荒武 賢一郎氏（東北大学東北アジア研究センター准教授）

「江戸時代の白石と商人の活動」

②：清水 翔太郎氏（東北大学大学院文学研究科博士後期課程）

「江戸時代白石の商業―渡辺家文書の調査から―」

③：岡 慎太郎氏（東北大学大学院文学研究科博士前期課程）

「渡辺屋儀蔵の商人ネットワーク」

主催：白石市教育委員会、白石古文書の会

後援：東北大学東北アジア研究センター、白石歴史資料調査会

2014年11月29日（土）13：00～18：00

日露ワークショップ「日本文化を教えるⅡ：ロシアと日本の日本研究者の対話」

日時：2014年11月29日（土） 13：00～18：00 入場無料 参加自由

場所：東北大学附属図書館 1F 多目的室 仙台市青葉区川内 27-1

主催：東北大学ロシア交流推進室

共催：ノボシビルスク国立大学

東北大学大学院文学研究科・大学院国際文化研究科・東北アジア研究センター

日本研究は、文字通り国際的な学術研究領域としてある。欧米・アジア諸国の中でも、ロシアは日本への関心が伝統的に高い国のひとつである。このワークショップでは、ロシア・ノボシビルスク大学と、東北大学等仙台の日本研究者が、両国における日本研究・理解の動向と特色を議論しながら、今後の研究・教育交流の可能性について考える。

●プレゼンテーション

エレナ・ヴォイティシエク氏（ノボシビルスク国立大学教授）

長岡龍作氏（東北大学大学院文学研究科教授）

ヴォルコフ・パーヴェル氏（ノボシビルスク国立大学准教授）

阿子島香氏（東北大学大学院文学研究科教授）

シモノヴァ・エレナ氏（ノボシビルスク国立大学講師）

エヴゲニヤ・フロロヴァ氏（ノボシビルスク国立大学助教授）

窪俊一氏（東北大学大学院情報科学研究科准教授）

ポダルコ・ピョートル氏（青山学院大学教授）

高倉浩樹氏（東北大学東北アジア研究センター教授）

及川高氏（同教育研究支援者）

●コメンテーター

千葉正樹氏（尚絅学院大学教授）

佐藤勢紀子氏（東北大学大学院国際文化研究科教授）

●ファシリテーター

岡洋樹氏（東北大学東北アジア研究センター長）

2014年11月30日

上廣部門主催「講座：地域の歴史を学ぶ ◎岩出山 III 城―その知られざる歴史―」

日時：2014年11月30日

会場：大崎市岩出山公民館（スコーレハウス）

講演：①菅野正道（仙台市史編さん室長）

「中世の城から近世の城へ」

②佐藤公保（米沢市教育委員会教育管理部文化課文化財担当）

「米沢館山城―伊達と上杉の足跡が残る城」

③菊地優子（元岩出山町史編さん専門員）

「岩出山城―城と町の変遷―」

2014年12月6日（土）14：30～17：00

東北アジア研究センター公開講演会

「東北アジアの自然誌」-地球・自然のダイナミクス-

日時：2014年12月6日(土) 14：30～17：00

場所：TKPガーデンシティ仙台（AER オフィス棟 30 階ホール C）

講演：

◆「東北アジア地域の地殻変動と太平洋」

平野 直人（東北アジア研究センター准教授）

◆「東北アジア地域の生物とその起源」

千葉 聡（東北アジア研究センター教授）

極東ロシアから日本、中国に至る東北アジアには、非常に魅力的な自然が残されています。活発なマグマ活動を展開する火山群、帯状につながる島々、森林や湿地、草原、あるいは砂漠に覆われた広大な平野など、その自然は多彩な姿を見せています。そこには高い山脈もあれば大河もあり、また琵琶湖やバイカル湖のような巨大な湖もあります。こうした多様な環境は、世界的に見て、極めて豊かで貴重な生物を育んできました。

今回の公演では、まず日本を中心に、東北アジアの地質がどのように形成されてきたかを探り、太古の時代からの地殻変動の謎に迫ります。次に、この東北アジア地域に息づく生物たちの多様さと特徴を紹介し、その多様性の起源を探ります。

2014年12月7日（日）13：30～18：00

東北アジア研究センター共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」

平成 26 年度第 2 回研究会

日時：2014年12月7日（日）13：30～18：00

場所：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟 4 階会議室(436 号室)

講演：鈴木 仁麗（明治大学）「満洲国のモンゴル統治―国際環境と「内政」の課題―」

報告 1： バトツェンゲル・ナツァグドルジ（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）

“Хонгоройн хиргисийн харьяаллын тухай товч өгүүлэх нь（ホンゴロイ・キルギスの所属に関して）”

報告2：包 呼和木其爾（東北大学環境科学研究科）「清代内モンゴル・ハラチン地域における盗賊問題と地域秩序：盗賊バイリング、メイレセンゲの捕縛令を事例に」

報告3：矢口 啓朗（東北大学大学院文学研究）「1830年代のシリア危機におけるオスマン帝国に対するロシアの関与」

2014年12月14日（日）

東北アジア研究センター共同研究

「家・空間における食実践に関する文化人類学的研究—社会関係を開閉するという視座から」
平成26年度第2回研究会（成果出版にむけた打ち合わせ）

日時：2014年12月14日(日)

会場：東北大学東北アジア研究センター第二セミナー室

内容：主旨説明：三浦哲也(育英短期大学)

出版企画書の案について：櫻田涼子(育英短期大学)

総合討論

2015年1月31日（土）13：00～14：30

21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット特別講演会

日時：2015年1月31日（土）13：00～14：30

会場：東北大学東北アジア研究センター4階会議室

要旨：

私は軍隊に入るまでは、上智大学の学生として哲学にあこがれていた。しかし、工兵の予備士官学校を終了して満州部隊に配属され、敗戦後シベリアへ連行され、そこで約4年8ヶ月（23歳から28歳まで）を過ごした間に、しだいに観念的から具体的なものへ関心がうつるようになり、ロシア語を独学で学び、帰国後シベリアの歴史や民族学の研究を目指すに至った。まず思いついたのが、江戸時代の漂流民や間宮林蔵が残した著作をとりあげ、彼らの観察と他の諸外国人の観察記録を比較検討することであった。この結果が、大阪大学に提出した博士論文『北東アジア民族学史の研究』である。その前後に私は『シベリアの歴史』『シベリアに憑かれた人々』などを書き、何冊かのシベリア関係の本を翻訳した。やがて、大阪の民族学博物館で若い研究者佐々木史郎氏に出会い、シベリア研究を彼にゆずり、自分は中央アジア研究に転じ、今日に至っている。以上みられるように、私の生涯の仕事はシベリア抑留から始まったと言える。

※なお、この講演会は「日本におけるシベリア地域の研究会設立準備のための学術集会」の公開部分として行われます。

2015 年 2 月 14 日 (土) 10:30~17:30

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム

「東アジアの世界遺産と文化資源」

日時：2015 年 2 月 14 日 (土) 10:30~17:30

会場：東北大学片平さくらホール 2 階

シンポジウムの趣旨：

このシンポジウムでは、日本、韓国、中国、台湾など東アジア諸地域の世界文化遺産についての専門研究者を招き、各国政府の戦略の相違や文化的背景の違いなどを比較しつつ、東アジアにおける文化の資源化の動向とその社会的インパクトについて学際的に考察する。

発表者

姜東辰（韓国慶星大学校都市工学科教授、歴史環境保全・都市設計）

三浦正幸（広島大学文学研究科教授、古建築学・文化財学）

波多野想（琉球大学観光産業科学部准教授、観光と文化遺産・建築史・文化的景観研究）

太田秀春（鹿児島国際大学国際文化学部准教授、日本史・朝鮮史）

高山陽子（亜細亜大学国際関係学部准教授、観光人類学）

コメンテーター

戴田貫（関西大学文学部教授・大阪都市遺産研究センター長、日本近世史・都市遺産研究）

稲村務（琉球大学法文学部教授、文化人類学・社会人類学・資源人類学・比較民俗学）

羽生冬佳（立教大学観光学部准教授、観光計画・地域計画）

大塚直樹（亜細亜大学国際関係学部講師、人文地理学・ベトナム地域研究・観光研究）

司会

瀬川昌久（東北大学東北アジア研究センター教授、文化人類学）

2015 年 2 月 15 日 (日)・2 月 10 日(火)~3 月 15 日(日)

書道博物館との共同企画展

「中村不折一僕の歩いた道― 〈後編〉森鷗外、夏目漱石たちとの交流」における
東北大学所蔵資料の展示、並びに、ギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」

◆企画展「中村不折一僕の歩いた道―」

〈後編〉「森鷗外、夏目漱石たちとの交流」

東北大学所蔵夏目漱石・中村不折関連資料展示期間

平成 27 年 2 月 10 日(火)~平成 27 年 3 月 15 日(日)

会場：台東区立書道博物館（東京都台東区根岸 2-10-4）

◆ギャラリートーク「漱石との交流・漱石門下の人々」

東北大学学術資源研究公開センター史料館 曾根原理先生

2 月 15 日(日) ①10:00~、②13:30~

会場：台東区立書道博物館（東京都台東区根岸 2-10-4）

2015 年 2 月 19 日 (木) 12:30~18:30

平成 26 年度公募型共同研究

「日本と韓国における村落の歴史と景観」の研究会

日時：2015 年 2 月 19 日 (木) 12:30~18:30

会場：一橋大学東キャンパス マーキュリータワー3508 室

【研究報告】

12:30-12:40 研究代表者挨拶 (渡辺尚志)

12:40-13:30 報告 1: 朴 賛弼 (法政大学)

「韓国伝統住居における煖房方式オンドルの温熱環境」

13:30-14:20 報告 2: 金 賢貞 (東北大学東北アジア研究センター)

「韓国の植民地期開発地域における景観の資源化—全羅北道群山市を事例に—」

14:20-15:10 報告 3: 森 隆男 (関西大学)

「住まいにおける縁の発生・消滅の背景」

15:30-16:20 報告 4: 荒武賢一朗 (東北大学東北アジア研究センター)

「近世村落における「経済」の論理と肥料」

16:20-17:10 報告 5: 渡辺 尚志 (一橋大学)

「山の利用からみた日本の村の近世・近代」

17:10-18:00 報告 6: 竹原 万雄 (東北芸術工科大学)

「明治前期村落の感染症対策—明治 15(1882)年、宮城県牡鹿郡のコレラ流行を事例として—」

18:00-18:30 総合討論

2015 年 2 月 28 日 (土) 13:00~17:30

シンポジウム「ソ連とモンゴルから見た「ノモンハン事件」(1939 年)」

日時：2015 年 2 月 28 日 (土) 13:00~17:30

会場：東北大学東京分室

主催者 (司会)：麻田雅文 (東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者)

報告者：

① 「2009 年以降のモンゴルのハルハ河・ノモンハン戦争研究について」

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学人間文化学部国際学科准教授)

② 「1939 年以降ソ連ザバイカル戦線における対日戦備の実態—モンゴル・ノモンハン事件戦跡の現地調査から—」

岡崎久弥 (虎頭要塞日本側研究センター代表)

③ 「ソ連から見たノモンハン事件—軍事的視点を中心に—」

花田智之 (防衛研究所戦史研究センター主任研究官)

討論者：

① 富田武 (成蹊大学名誉教授、同アジア太平洋研究センター客員研究員)

② 戸部良一 (帝京大学教授)

2015年3月2日（月）～7日（土）

ドイツ・ベルリン自由大学「日本ードイツくずし字ワークショップ」、国際シンポジウム

日時：2015年3月2日（月）～7日（土）

会場：ドイツ ベルリン自由大学日本学研究所 Hittorfstr. 18 14195 Berlin

3月2日～6日：日本ードイツくずし字ワークショップ

「19世紀日本のくずし字を読むー「日記」や「書状」を中心にー」

講師：荒武 賢一郎（東北大学東北アジア研究センター准教授）

3月7日＝国際シンポジウム

「くずし字の学習と日本文化の理解・研究」

主催：ベルリン自由大学日本学研究所

企画協力：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

2015年3月5日（木）14：30～18：00

東北アジア研究センター共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」

平成26年度第3回研究会

日時：2015年3月5日（木）14：30～18：00

会場：東北大学川内北キャンパス 川北合同研究棟4階会議室(436号室)

【内容】

講演： 白玉双（内蒙古師範大学歴史文化学院）「中国における清代内モンゴル地域史の諸問題」

報告1： 麻田雅文（東北大学東北アジア研究センター）「奉ソ協定（1924年）の再考ー張作霖とソ連の「盟約」」

報告2： 佐藤憲行（復旦大学中国歴史地理研究所）「復旦大学中国歴史地理研究所の研究概況について」

2015年3月7日（土）10：15～18：00

公募共同研究

「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」シンポジウム

日時 2015年3月7日（土） 10:15～18:00

場所 東北大学川北合同研究棟 1階ラウンジ

番組

1. 尾崎孝宏「内モンゴルにおける牧畜戦略に対する物流の規定性」

コメンテーター：小沼孝博

2. 富田敬大「移行経済下の都市周辺地域における牧畜経営の実態とその特徴」

コメンテーター：杉本敦

3. 風戸真理「モンゴル国における羊毛製品流通の変化にみる文化の動態」

コメンテーター：塩谷昌史

4. 中村篤志「清朝治下モンゴルにおける人とモノの移動」

コメンテーター：尾崎孝宏

5. 総合コメント：岡洋樹・塩谷哲史・高倉浩樹

2015年3月8日（日）10：00～18：00

東北アジア研究センター・共同研究

「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」

シンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」

日時：平成27年3月8日（日）10:00-18:00

場所：東北大学東京分室（東京都千代田区丸の内1丁目7番12号サピアタワー10階）

内容：

・趣旨説明（10:00-10:20）：岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター教授）

・セッション1：越境の様態（10:20-11:40）

報告1：今村弘子（富山大学極東地域研究センター教授）「中朝の経済関係と中朝辺境の変遷」

報告2：雲和広（一橋大学経済研究所教授）「ロシア極東の人口動態とその経済学的展望」

報告3：松野周治（立命館大学経済学部教授）「中国の経済発展と東北アジアの越境—リージョナリズムとグローバリズム」

討論

・セッション2：移りゆく人々（13:00-14:20）

報告4：サヴェリエフ・イゴリ（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）「移民政策決定過程におけるロシア政府と総督府の役割—沿アムール地方の東アジア移民受入政策を事例に（1884～1916年）」

報告5：中村篤志（山形大学人文学部准教授）「遊牧と移住のあいだ—20世紀前半内モンゴル・フルンボイル社会の動態から」

報告6：ポダルコ・ピョートル（青山学院大学国際政治経済学部教授）「露中関係からみる白系ロシア人」

討論

・セッション3：共生の歴史的経験（14:30-16:20）

報告7：白玉双（内蒙古師範大学蒙古歴史文化学院副教授）「内地移民北上与蒙古社会变革—以清代喀喇沁地区为中心」

報告8：柳澤明（早稲田大学文学学術院教授）「「八旗」と「民族」の交差—清代旗人のアイデンティティ複合」

報告9：井上治（鳥根県立大学総合政策学部教授）「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」

報告10：佐藤憲行（復旦大学中国歴史地理研究所副教授）「清朝の「蒙漢通婚禁止例」とその歴史的意義」

討論

・セッション4：変動と越境の構図（16:30-17:50）

報告11： 岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター教授）「モンゴルにおける清朝統治の変動の歴史的意味—人の移動を中心に」

報告12： 堀江典生（富山大学極東地域研究センター教授）「中露国境地域の中国人—越境の構図の変容」

総括討論

2015年3月14日（土）～18日（水）10:00～20:00

国連防災世界会議 パブリック・フォーラム

無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学

日程：2015年3月14日（土）～18日（水）10:00～20:00

ブース：東北大学 川内北キャンパス A102 講義室 211

※ 期間中ポスターを展示します

趣旨：地域防災力の総合的強化への寄与を目的とする無形文化遺産の継承支援・調査活動について報告する。東日本大震災後の津波被災地の無形民俗文化財調査の成果に触れながら、地域防災的観点から無形文化遺産調査の役割と可能性を提示する。また文化人類学・民俗学分野による震災対応時の望ましい方法について触れながら、研究者・博物館・地域行政に関わる国内外の関係者と協働と知見の共有を図る。

2015年3月15日（日）15:15～16:45

国連防災世界会議 パブリック・フォーラム

電波科学による防災・減災と地方自治体との連携（会議）

日時：2015年3月15日（日）15:15～16:45

会場：仙台市民会館 会議室1

主催：東北大学 東北アジア研究センター

後援：東北森林管理局

趣旨：本フォーラムではレーダーで得られた防災・減災のための情報を地方自治体に提供する仕組みについて東北大学が実践してきた事例を通じて、地方自治体の皆様と情報伝達がどうあるべきかについて考察します。

2015年3月16日（月）10:30～13:00

国連防災世界会議 パブリック・フォーラム

電波科学による防災・減災と地方自治体との連携（講演会）

日時：2015年3月16日（月）10:30～13:00

会場：東北大学 東北アジア研究センター大会議室

主催：東北大学 東北アジア研究センター

後援：次世代安心・安全 ICT フォーラム

趣旨：国連防災世界会議（仙台）の開催に合わせ、電波科学を利用した減災・防災技術、安全・安心のための技術開発を紹介します。装置の開発、利用に関する講演会に加え、各種レーダー

装置の実機動作をご覧ください。展示及び実機デモ、ラボツアーのみの参加も可能です。

2015年3月21日(土) 13:00~17:00

東北アジア研究センター公募型共同研究

「共同研究「聖書翻訳を通して見るモンゴル宗教文化交流史」公開研究会

日時：2015年3月21日(土) 13:00~17:00

会場：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟4階大会議室(436号室)

内容：

研究会概要・活動報告

・滝澤克彦(長崎大学)

研究報告

・荒井幸康(亜細亜大学)「カルムイクに対する正教の活動における翻訳活動」

・滝澤克彦(長崎大学)「モンゴル国における聖書翻訳間の影響関係」

・バイカル(桜美林大学)「内モンゴル宣教における聖書翻訳」(仮)

・芝山豊(清泉女学院大学)「平山政十とモンゴルのカトリック」

コメント：岡洋樹(東北大学)

2015年3月24日(火) 10:00~18:00

東北アジア研究センター2014年度研究成果報告会

日時：3月24日(火) 10:00~18:00

会場：東北大学片平北門会館

●ユニット報告

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 1 東北アジア言語文化遺産研究ユニット | 栗林 均 |
| 2 21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット | 岡 洋樹 |
| 3 出版文化資料データベース研究ユニット | 磯部 彰 |
| 4 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット | 瀬川昌久 |
| 5 20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット | 寺山恭輔 |
| 6 減災をめざした電波科学研究ユニット | 佐藤源之 |
| 7 災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット | 高倉浩樹 |
| 8 東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット | 明日香壽川 |

●共同研究発表

<文化交流セッション>

- | | |
|-------------------------|------------|
| 1 伝統的モンゴル語辞書の研究 | 栗林 均 |
| 2 聖書翻訳を通して見るモンゴル宗教文化交流史 | 滝澤克彦(長崎大学) |
| 3 典籍文化遺産の研究 | 磯部 彰 |

<歴史セッション>

- | | |
|----------------------------|------------|
| 4 日本列島の文化交渉史 ―経済と外交 | 荒武賢一朗 |
| 5 江戸時代から現代に通じる東北の歴史 | 荒武賢一朗 |
| 6 日本と韓国における村落の歴史と景観 | 渡辺尚志(一橋大学) |
| 7 新疆、満州をめぐる20世紀前半のソ連、中国の政策 | 寺山恭輔 |

<社会と民族誌セッション>

- 8 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究

岡 洋樹

- 9 華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究

—華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて

川口幸大（文学研究科）

- 10 現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—「宗族」を通じた検証

瀬川昌久

- 11 家・空間における食実践に関する文化人類学的研究—社会関係を開閉するという視座から

三浦哲也（育英短期大学）

<震災セッション>

- 12 震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進

佐藤源之

- 13 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用

高倉浩樹・及川 高

- 14 東日本大震災被災地域における宗教活動と社会的多様性に関する調査研究

木村敏明（文学研究科）

<政治経済セッション>

- 15 畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション 風戸真理（北星学園大学）

- 16 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究 岡 洋樹

- 17 中国における石炭消費削減策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性 明日香壽川

- 18 PM2.5 を中心とした東アジアにおける越境大気汚染に対処するための外交戦略に関する研究 石井 敦

(C)センターが作成し公開中または公開予定のデータベース

データベース名	公開方法
* 東北大学ノア画像データベース ・ シベリア画像データベース ・ モンゴル画像データベース ・ 日本画像データベース ・ 東アジア出版文化研究資料画像データベース ・ みやしんぶんデータベース	東北大学東北アジア研究センターHP (http://asiadb.cneas.tohoku.ac.jp/)

教員の研究活動
(2014)

寺山 恭輔 TERAYAMA Kyosuke 教授

生年月日 / 1963 年 07 月 18 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

京都大学・文学部・現代史学科 1987 年卒業

出身大学院

京都大学・文学研究科・西洋史（現代史学）博士課程 1993 年単位取得満期退学

取得学位

博士（文学）京都大学 1996 年

略歴

1992 年～1995 年 サンクトペテルブルグ大学歴史学部 研究員
 1995 年～1996 年 九州大学大学院比較社会文化研究科 助手
 1996 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 1999 年～1999 年 英国バーミンガム大学ロシア東欧研究センター 客員研究員
 2007 年～2013 年 東北大学東北アジア研究センター 准教授（職階名変更による）
 2013 年～ 東北大学東北アジア研究センター 教授

研究経歴

1992 年～現在 スターリン体制下のソ連
 2000 年～2010 年 18～19 世紀の日本人漂流民と日露関係
 2002 年～2004 年 ロシアにおける中国学、モンゴル学の歩みと史料収集
 2002 年～2006 年 ソ連における日本人抑留者問題
 2003 年～現在 プーチン体制下の新生ロシア
 2008 年～現在 ソ連における検閲
 2009 年～現在 ソ連における民族問題
 2011 年—2015 年 スターリンと新疆：1931-1949 年

所属学会

ロシア史研究会 1992 年～現在
 西洋史学会 1996 年～現在

近現代東北アジア地域史研究会 2005 年～現在

専門分野

ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史、地域研究

研究課題

- ・スターリンの対新疆政策 1931 - 1949
- ・スターリン時代の動員政策
- ・スターリン時代の対極東政策
- ・1930 年代のソ連
- ・日露・日ソ関係史
- ・ソ連時代の検閲
- ・戦間期ソ連社会の軍事化に関する研究

研究キーワード

スターリン体制 日ソ関係 ソ連政治史 動員 極東

報道

言論統制で体制維持：旧ソ連スターリニズム統治下の検閲制度（出演・執筆 新聞 河北新報）2014 年 5 月

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

東北大学リベラルアーツサロン（講演会・セミナー）2014 年 4 月～2014 年 4 月

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

男女共同参画委員会 2013 年 4 月～2015 年 3 月

学術情報整備検討委員会 2014 年 3 月～現在

学位授与数（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

修士 2 人

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

歴史学 2005 年～現在

（大学院教育）

ユーラシア文化史特論 2000 年～現在

ユーラシア文化史研究演習 2000 年～現在

(他大学)

京都大学大学院文学研究科現代史学特殊講義 2014 年～2014 年

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Политические и повседневные аспекты сталинизма: новые факты и интерпретации
[Российско-японский симпозиум]

(2014 年 12 月 22 日～2014 年 12 月 22 日, ロシア, モスクワ) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1930 年代を中心とするソ連の対モンゴル、新疆政策の類似点と相違点 [近現代東北アジア地域史研究会大会]

(2014 年 12 月 6 日～2014 年 12 月 6 日, 大津) 口頭 (一般)

国際会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Российско-японский симпозиум (2014 年 12 月 22 日～2014 年 12 月 22 日, ロシア, モスクワ) [主催] オーガナイザー

国内会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ロシア極東研究会 (2014 年 7 月 26 日～2014 年 7 月 26 日, 仙台) [主催] オーガナイザー

その他の競争的資金獲得実績 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

JFE 財団アジア歴史研究助成 2015 年 1 月～2015 年 12 月 [二十世紀前半の極東アジア諸国による交通政策と社会変動]

著書 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Политические и социальные аспекты истории сталинизма. Новые факты и интерпретации. [РОССПЭН, (2015)3 月] С. А. Папков, К. Тэраяма ред.

2) スターリンと新疆:1931—1949 年, 638p. [社会評論社, (2015)3 月] 寺山恭輔

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Советская политика по развитию сети железных дорог на Дальнем Востоке в 1930-е гг.: военизация, политотделы, строительство вторых путей. [С. Папков, К. Тэраяма ед., Политические и социальные аспекты истории сталинизма. Новые факты и интерпретации, (2015), 50-85] ТЭРАЯМА КИОСУКЭ 「査読無」

総説・解説記事（2014年4月～2015年3月）

- 1) 書評 E. Н. Чернолуцкая, Принудительные миграции на советском Дальнем Востоке в 1920-1950-е гг., Владивосток: Дальнаука.2011. 512 с.. [東北アジア研究, (19), (2015), 219-226] 寺山恭輔
- 2) 書評 Н. Г. Кулинич, Повседневная культура горожан советского Дальнего Востока в 1920-1930-е годы, Хабаровск: Издательство Тихоокеанского государственного университета, 2010. 375 с.. [東北アジア研究, (19), (2015), 227-237] 寺山恭輔

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

ほぼ一年を通じてロシアからナタリア・クリニチ（ハバロフスク）、エレナ・チェルノルツカヤ（ウラジオストック）、ヴィクトル・コンドラーシン（ペンザ）の3人を客員教授としてお招きし、それぞれの先生方と有意義な意見交換をすることができた。ソ連極東史を専門とするクリニチ先生、チェルノルツカヤ先生の主著を『東北アジア研究』19号で紹介したが、これは今後予定しているソ連極東地域史に関するモノグラフの準備作業の一環である。先生方には折に触れて大学院生の質問に答え、相談にも気軽に応じるなど、教育面でも大きな貢献をしていただいた。

ロシア科学アカデミーシベリア支部ロシア史研究所のパプコフ博士（東北アジア研究センターの前客員教授）の協力を得て、2014年12月、ロシアの研究者とスターリン体制に関する研究会をモスクワで開催した（日本からは立石洋子氏も参加）。研究会の成果『スターリニズム史の政治的・社会的側面。新しい事実と解釈』は2015年3月、ロシアの人文系大手出版社ロススペン社より、スターリニズム研究シリーズの一冊として刊行した。クリニチ、チェルノルツカヤ両先生も寄稿された。パプコフ氏とロシアで刊行する三冊目のロシア語による共編著となる本書は、プロジェクト研究経費により賄われ、東北大学のロゴタイプをつけてロシアで刊行されたおそらく最初の出版物であることを付言しておく。本書に掲載した拙論「1930年代極東における鉄道網発展に関するソ連の政策：軍事化、政治部、複線建設」は、今日のロシアで必ずしも大きな関心が向けられているとは思われない動員、とりわけ鉄道政策とスターリン体制の関係に注目したものである。極東における軍事的脅威の存在が、動員態勢の整備、特にシベリア鉄道の輸送力向上を促し、収容所労働の拡大にもつながったという観点から、当時のスターリン体制に与えた衝撃の強さを明らかにした。これも近い将来予定している動員関連のモノグラフの主要なコンセプトを提示したものである。2015年1月より始まったJFE財団の「アジア歴史研究助成」による共同研究「二十世紀前半の極東アジア諸国による交通政策と社会変動」における研究と連動して、研究を進めているところである。

プロジェクトユニット研究の成果として、ソ連の対新疆政策についてのモノグラフ『ス

ターリンと新疆：1931－1949年』を構想し、一年間修正、校正を行った結果、最終的に2015年3月末に社会評論社から刊行できた。その内容を要約すると以下の通りである。「1931年の満洲事変から1949年の中華人民共和国の成立に至るまでの約20年にわたるソ連の対新疆政策は、これまで一次史料に基づいた研究はほとんど存在しなかった。漢族が多数を占める中国にあって、圧倒的多数を占めるムスリムのウイグルのほか少数民族も多い新疆では、中国本土から隔絶されていたため、隣接する中央アジア諸国やロシア・ソ連とも歴史的・経済的に深い関係を有していた。特に満洲事変と翌年の満洲国設立後、モンゴル、新疆への日本の進出を懸念するようになったスターリン指導部は新疆内の反乱鎮圧のために何度か赤軍を派遣して地方政府を助けた。本書ではスターリンが独裁的な権力を確立して以降、主要な対外政策決定の舞台であったソ連共産党中央委員会政治局における諸決定を跡付けているが、中国に対する軍事的干渉という微妙な問題をはらんでいるためか、史料へのアクセスが制限されている諸決定も多いことが判明した。そのため一次史料に基づいた完璧な解明は将来的な課題として残されることになった。それでもモスクワに存在する軍、政府、経済等の諸史料館の史料も広範に使用し、新疆に対するソ連の関与の実態、特徴を可能な限り明らかにした」。

高倉 浩樹 TAKAKURA Hiroki 教授

生年月日 / 1968 年 07 月 20 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

上智大学・文学部・史学科 1992 年卒業

出身大学院

東京都立大学・社会科学研究科修士課程 1994 年修了

東京都立大学・社会科学研究科・社会人類学博士課程 1998 年単位取得満期退学

取得学位

学士（史学）上智大学 1992 年

修士（社会人類学）東京都立大学 1994 年

博士（社会人類学）東京都立大学 1999 年

略歴

1997 年～1998 年 日本学術振興会 特別研究員（DC2）
 1998 年～2000 年 東京都立大学人文学部 助手
 2000 年～2012 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授／准教授
 2002 年～現在 東北大学文学部 非常勤講師
 2002 年～2003 年 東北大学大学院文学研究科 非常勤講師
 2003 年～2012 年 東北大学大学院環境科学研究科（協力講座） 助教授／准教授
 2003 年～2004 年 ケンブリッジ大学スコット極地研究所 客員研究員
 2004 年～2008 年 国立民族学博物館先端人類科学研究部 客員助教授／客員准教授
 2004 年～2006 年 国立民族学博物館先端人類科学研究部 客員助教授
 2006 年～2008 年 国立民族学博物館 特別客員教員（助教授／准教授）
 2009 年～現在 北海道立北方民族博物館 研究協力員
 2012 年～2013 年 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 フェロー
 2013 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授
 2013 年～現在 東北大学大学院環境科学研究科（協力講座） 教授

研究経歴

2003 年～2006 年 ロシア民族学史と民族誌知識人：ネイティブ人類学概念をめぐって

- 2006 年～2008 年 シベリア先住民のマイノリティ ビジネスと社会経済分析
2007 年～2010 年 シベリア先住民の歴史認識と文化的アイデンティティの位相
2007 年～2013 年 地球気候変動と北極圏大河川流域住民の生態適応
2008 年～現在 民族誌映像の展示実践と地域社会との連携
2010 年～2013 年 応用映像人類学と人類学写真史の探求
2011 年～現在 東日本大震災に関わる災害人類学研究とその応用実践

所属学会

日本文化人類学会, 国際極北社会科学学会, 日本民俗学会, 生態人類学会

学会活動

International Arctic Science Committee 国際北極科学委員会社会人間作業部会日本
委員 2013 年～現在

専門分野

文化人類学 (含民族学・民俗学)、地域研究

研究課題

- ・シベリアを中心とする比較先住民研究
- ・地球気候変動と北極圏大河川流域住民の生態適応
- ・人類学調査方法と映像媒体
- ・東日本大震災に関わる被災した無形の民俗文化財に関わる人類学的研究

研究キーワード

シベリア, ロシア, 生態人類学, 先住民と国家関係論、災害人類学、応用映像人類学
生業, 気候変動, 災害, 映像人類学, シベリア, 北極圏, 北日本

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・公共人類学・人類学の社会貢献 (出演 執筆 テレビ 放送大学) 2014 年 4 月
- ・キャンパス発 無形文化財震災後の歩み (出演 執筆 新聞 読売新聞 (宮城県版))
2014 年 10 月
- ・トナカイのひみつ (資料提供 雑誌 『幼稚園』 2014 年 12 月号 (小学館))
2014 年 11 月
- ・再生 せんだい ひと模様 地区復興への大きな力に 「みやしんぶん」 プロジェク
ト代表 高倉浩樹さん (出演 執筆 新聞 河北新報 (夕刊)) 2014 年 12 月

・Jam the world, Hear to Heart (出演 執筆 その他 J-WAVE (FMラジオ))
2015 年 1 月

学外の社会活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

国際北極科学委員会 (IASC) 人間社会作業部会 (SHWG) 日本委員 2013 年 4 月—現在

Verlag der Kulturstiftung Sibirien | SEC Publications Member of Editorial Board of Studies in Social and Cultural Anthropology 2011 年 04 月～現在

大同生命地域研究賞選考委員会大同生命地域研究賞推薦委員 2013 年 04 月～現在
北海道大学スラブ ユーラシア研究センター共同利用 共同研究拠点運営委員会委員 2014 年 04 月～2016 年 03 月

Северо-Восточный гуманитарный вестник

(ИГИ и ПМНС, СО РАН) Foreign member 2014 年 4 月～現在

日本学術会議第 23-24 期連携会員 (地域研究) 2014 年 10 月～2020 年 9 月

学内活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ロシア交流推進室室員 2009 年 12 月～現在

学位授与数 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

修士 2 人

担当授業科目 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(全学教育)

文化人類学 2014 年～2014 年

(学部教育)

文化人類学各論 2002 年～現在

文化人類学各論 2013 年～現在

(大学院教育)

文化人類学特論 (東北大学文学研究科) 2002 年～現在

地域環境 社会システム学 세미나～2003 年～現在

地域環境 社会システム学修士研修 2003 年～現在

博士インタベンシブ研修 2003 年～現在

地域環境 社会システム学研修 2003 年～現在

地域環境 社会システム学博士研修 2003 年～現在

東北アジア歴史人類学 2005 年～現在

文化人類学特論 2010 年～ 現在

宗教学実習 2013 年～ 現在

Advanced Environment Studies 2014 年～ 2016 年

東北アジア比較社会組織論 2014 年～ 2015 年

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

・ The interaction of permafrost dynamics with the arctic adaptation in Siberia: some thoughts on the historical possibilism and the environmental constraints [ASSW 2014 Workshop on Permafrost Dynamics and Indigenous Land Use]

(2014 年 4 月 6 日～ 2014 年 4 月 7 日, フィンランド, Helsinki) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)

・ Horses as objects of carnivorous pastoralism. Multiple usage of species as an ecological adaptation in Siberia. [University of Aberdeen, Department of Anthropology Seminar] (2014 年 4 月 24 日～ 2014 年 4 月 24 日, イギリス, アバディーン) 口頭 (招待 特別)

・ Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects [International Union of Anthropology and Ethnological Sciences Inter-congress 2014] (2014 年 5 月 14 日～ 2014 年 5 月 18 日, 日本国, 千葉) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)

・ Arctic adaptation reconsidered: Horse-cattle pastoralism in Siberia as exception or legitimate adaptation [Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment] (2014 年 9 月 4 日～ 2014 年 9 月 6 日, モンゴル, Ulaanbaatar) 口頭 (一般)

・ Applied disaster anthropology: lessons learnt from the Tohoku Earthquake [Tohoku/Chirstchurch: Reflections on the Socio-cultural Impacts of the Quakes]

(2014 年 10 月 30 日～ 2014 年 10 月 31 日, ニュージーランド, クライストチャーチ) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)

・ The Intangible Cultural Heritage Survey after 3.11 Tohoku Earthquake and the role anthropology [The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia, SPECIAL SESSION “The Role of Religious Culture and Social-Human Sciences after Disaster”] (2014 年 11 月 19 日～ 2014 年 11 月 20 日, インドネシア, Yogyakarta) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・被災後の無形民俗文化財調査から学んだこと [現代民俗学会第 24 回研究会「何ができて、何ができないのかー『無形民俗文化財が被災すること』からつかみとる課題」](2014 年 7 月 26 日～2014 年 7 月 26 日) シンポジウム ワークショップ パネル(指名)
- ・震災後の緊急無形文化遺産調査と防災調査体制構築へ [公開フォーラム「文化遺産の人類学」](2014 年 11 月 8 日～2014 年 11 月 8 日, 大坂) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)
- ・コメント [第九回 無形民俗文化財研究協議会「地域アイデンティティと民俗芸能」](2014 年 12 月 5 日～2014 年 12 月 5 日) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)

国際会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ASSW 2014 Workshop on Permafrost Dynamics and Indigenous Land Use
(2014 年 4 月 6 日～2014 年 4 月 7 日, フィンランド, Helsinki) [運営] Convenor

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- (挑戦的) 萌芽研究 2013 年 4 月～2016 年 3 月
- [東日本大震災後の民俗文化にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築]
- 研究成果公開促進費「学術図書」2013 年 4 月 — 2015 年 3 月
- [Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia]

著書 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- 1) 食と儀礼をめぐる地球の旅:先住民文化からみたシベリアとアメリカ (執筆担当部分)
まえがき、終章、編者としては全体. [東北大学出版会, (2014)10 月]
高倉浩樹、山口未花子
- 2) 展示する人類学ー日本と異文化をつなぐ対話. [昭和堂, (2015)1 月]
高倉浩樹 (編)
- 3) Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Microadaptation in Siberia. [Melbourne:Trans pacific Press,(2015)1 月]
Hiroki Takakura

研究論文（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- 1) 調査写真 画像から展示をつくるー現地と母国の市民をつなぐ応用映像人類学. [分
藤大翼ほか編『フィールド映像術』古今書院, (2015), 126-141]

高倉浩樹（査読無）

- 2) 序 展示する人類学 [高倉浩樹編『展示する人類学』昭和堂, (2015), 1-20]

高倉浩樹（査読有）

- 3) 写真資料をめぐる対話 [高倉浩樹編『展示する人類学』昭和堂, (2015), 203-232]

高倉浩樹（査読有）

- 4) 恵みの洪水が災いの水にかかわるとき [シベリア 温暖化する極北の水環境と社会（檜
山哲哉 藤原潤子編、京都大学学術出版会）, (2015), 173-222]

高倉浩樹（査読有）

総説・解説記事（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- 1) 書評：稲村哲也著『遊牧 移牧 定牧』[週間読書人, 3045, (2014), 4-4]

高倉浩樹

- 2) 国際機関と先住民 [丸善世界民族百科事典（国立民族学博物館編）, (2014)]

高倉浩樹

- 3) 先住民社会と都市部における持続可能な社会システム構築 [北極環境研究コンソーシ
アム北極環境研究の長期構想, (2014), 87-88]

高倉浩樹（査読有）

- 4) 宮城県津波被災地における無形民俗文化財調査 [昭和堂 SEEDer：地球環境情報から
考える地球の未来, 11, (2014), 82-82]

高倉浩樹

- 5) モンゴルの草原でひらすら馬乳酒を飲んだ旅 [東北アジア学術交流懇話会ニュースレ
ターうしとら, (63), (2014), 3-4]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度の研究活動は主に（１）震災復興に関わる無形民俗文化財調査と（２）気
候変動のシベリア地域社会における影響に関わる学際的研究、（３）応用映像人類学で
あった。全体を通していえるのは、それぞれの研究活動が国際化していること、また成
果がさまざまなかたちで発信されたということである。

（１）については「災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究ユニット」の運営も
含めて行い、兼務教員の木村敏明先生とともに共同研究を二件立ち上げるなどして組織
的な体制を整えた。これらについては高倉代表及び分担者の科研費による外部予算も確
保した。被災地での調査研究は従来の宮城県沿岸部の無形民俗文化財の担い手が農家で

あることから、農業調査をおこなった。この成果は2015年3月の生態人類学会で発表した。また福島県での予備調査も行い、相馬市・二本松市・いわき市における予備調査もおこなった。この成果の一部は、2015年5月の日本文化人類学会の分科会のなかで報告する予定である。

被災地調査の成果については、これを国際的に発信し、関係する研究者とのネットワークを構築するため、5月に日本で行われた国際人類科学民族科学連合中間会議で発表したほか、9月にニュージーランドのカンタベリー大学、11月にインドネシアのガジャマダ大学で国際ワークショップ（共同主宰）及び国際会議（参加）で報告した。さらに2015年3月の国連防災会議では東北大学として展示企画を行い、震災時の緊急復興期における人類学調査とコミュニティのレジリエンス強化の可能性について発表した。なおこれらの成果の一部については、2014年度の国際人類科学民族科学連合の本会議（イギリス）でも発表した。その成果出版物企画者（IUAES-ASA Book）からの指命を受けて、論文を執筆し、現在査読中である。またニュージーランドのワークショップの結果、共同論文集を作成することが定まり、現在論文を執筆している。

（2）については、2013年度までにおこなってきた「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」の成果が様々な形で発展するかたちで実施した。特に国際的な研究活動に展開した点が特筆できる。4月にフィンランドでおこなわれた国際北極科学サミット週間（ASSW）で「永久凍土の動態と先住民の土地利用ワークショップ」をドイツ人類学者 O.Habec 教授とともに主宰し報告した。この会議には国際永久凍土学会（IPA）からの助成をうけて実現した。また同じ4月には、イギリス・アバディーン大学の人類学科から特別講演の招聘をうけてサハ人の馬牧畜に関わる民族誌についての講演を行った。またサハ人の民族史と極北適応について英語の単著（Trans Pacific Press）を刊行した。またレナ川の洪水に対する温暖化の影響と住民の適応については、京都大学学術出版会から刊行された論文集に分担執筆した。さらにより広い文脈でのシベリア人類学の可能性について啓蒙的な一般書を東北大学出版会から刊行した。

シベリアと気候変動の研究は、北極研究としての一面も持っている。これに関連しては国立極地研究所を中心とする日本の北極環境研究コンソーシアムへ積極的に関わっており、同コンソーシアムが刊行した「北極研究の長期構想」報告書において、人間社会への影響部分について分担執筆した。なおシベリア研究に関しては今後あたらな展望を開くために2015年2月にサハリンで研究打ち合わせを行い、今後調査する見通しをえた。

（3）については2012年度に修了した共同研究「展示実践を通した北方人類学における社会還元の可能性の探究」の成果が、論文集として刊行された（昭和堂、編著）。これは博物館学、映像人類学、アウトリーチに関わる画期的な研究書である。また日本で映像人類学を牽引する研究者らが編んだ『フィールド映像術』から指命を受け、分担執筆した。また9月にはモンゴルで短期の調査を行いその成果を民族誌映画（15分）と

して編集した。加えて、この領域に関しては文学部開講の学部3年向け授業のなかで扱い、映像と展示に関する講義を踏まえて、2015年1月には東北大学図書館で学生による展示実践を行うという教育成果も得た。

塩谷 昌史 SHIOTANI Masachika 助教

生年月日 / 1968 年 07 月 03 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

滋賀大学・経済学部・経済学科 1993 年卒業

出身大学院

大阪市立大学・経済学研究科・経済政策博士課程 1999 年単位取得満期退学

取得学位

経済学博士（大阪市立大学、2013 年 3 月）

略歴

1999 年～2006 年 東北大学助手

2007 年～現在 東北大学助教

研究経歴

比較経済体制学会（第 45 回全国大会、山口大学教育学部）で、「帝政ロシアにおける統治構造の卓越性と限界について—統治手段としての統計の観点から」という題で研究報告を行う（2014 年 6 月 8 日）

所属学会

社会経済史学会、土地制度史学会、American Association for the Advancement of Slavic Studies、比較経済体制学会、経営史学会

学会活動

比較経済体制学会 ICCEES 世界大会支援チーム メンバー 2014 年～現在

専門分野

経済史

研究課題

・帝政ロシアの統治構造—情報収集 管理の観点から

研究キーワード

ロシア経済

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

「ウクライナ危機問題」『東北大学新聞』(2014 年 11 月 18 日)

学外の社会活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

日本学術振興会 特別研究員審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員 (2013 年 8 月 1 日～2014 年 7 月 31 日)

地域研究コンソーシアム運営委員

学内活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ロシア交流推進室・室員

担当授業科目 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(全学教育)

基礎ゼミ 国際関係の中のロシア 2014 年～2014 年

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ロシア更紗とアジア商人 [糸布衣の循環史研究会 シリーズ第 1 回]

(2014 年 7 月 26 日～2014 年 7 月 26 日, 東京都町田市) 口頭 (招待 特別)

国際会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

The Third Social Science and Humanities Forum between Japan and Russia

(2015 年 3 月 5 日～2015 年 3 月 5 日, 日本国, 仙台) [主催] 全体のコーディネーター

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(挑戦的) 萌芽研究 2014 年 4 月～2016 年 3 月

[帝政ロシアの統治構造—情報収集 管理の観点から—]

総説・解説記事 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 地域から研究する産業 企業—フィールドワークとディシプリン. [地域研究コンソーシアム JCAS Collaboration Series, 11, (2015), 1-52]

川上桃子 塩谷昌史 柳澤雅之

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

科学研究費に採択された課題「帝政ロシアの統治構造—情報収集・管理の観点から—」の探求に関する、今後のフレームワークを創り上げた。従来、経済学の領域では、統計は独立した分野と考えられ、それが国家の統治技術と密接であるとの認識は重要視されなかった。統計を制度としてみた場合、国家が様々の国内の情報を収集し、それを体系的なデータにまとめ上げる。その過程において、国家は多くの官僚と膨大な時間・資金を投入する。なぜそのような努力を国家が払うかと言えば、それは国内統治のために他ならない。近代的な統計制度は18世紀末～19世紀初頭にヨーロッパで形成される。それは、国民国家の台頭時期に重なる。国内の様々な動きを掌握し、国家の統治機構で国民を掌握する制度の一つが、近代統計制度である。

ロシアの統計制度は、1810年代に始まる。その端緒は警察機構にある。ロシアで統計制度は、警察機構を中心に形成される。1830年代に警察機構はロシア内務省に編入され、統計制度の整備がロシア内務省を中心に行われる。通常、統計制度は人口統計から始まるが、その後、死因分析に移り、病気や伝染病等の情報収集にも拡大される。人口統計は、国税や徴兵制度との関係で重要だが、19世紀半ば以降、いかにその人口を健全な状態に維持するかが、ヨーロッパ諸国の関心事項になる。1850年のロンドン万博を機にヨーロッパで国際統計会議が組織され、以後、定期的にヨーロッパ各地で開催される。当初、各国は公衆衛生に着目し、公衆衛生を維持・改善するために、どのような統計を整備するかについて、各国の官僚が議論を行った。ロシアの統計専門家も、この国際会議に参加しヨーロッパの動向を把握した。

日本の近代統計制度は、明治期以降に始まる。その始まりは、戸籍制度の導入に伴う人口統計制度の確立である。江戸時代にも寺を中心に宗門改帳等で地域の人口がある程度把握されたが、藩により形式が異なり、フォーマットが全国的に共通化されることはなかった。ロシアと同様、日本でも統計制度は内務省を中心に発展する。戦前において内務省は、官僚機構の中で最も影響力のある官庁であり、各県の知事は内務省から派遣されたため、東京から各県に統計制度を普及させることが容易であった。しかも内務省は警察機構を傘下に置いていたので、実際の執行力も持っていた。日本の近代統計制度が軌道に乗るのは、1910年前後と考えられる。19世紀前半に欧米先進国では全国民に対する国税調査を定期的に実施するようになるが、日本で第1回国勢調査が行われるのは1911年になる。

経済学では統計データを利用するのは当然であるが、その制度の変遷を国家の統治機構と関連させて考察することは稀である。統計制度の歴史は、科学史や政治史で若干触れられることはあっても、主要な研究課題にはならない。これまで私は主に帝政ロシアの経済統計を利用して研究を行ってきたが、その統計制度の整備状況に感銘を受けた。なぜこれほどまでに見事な統計制度を整備したかを考えれば、国民を統治（支配）する

ための基礎資料になるためである。統治手段としての統計制度に着目する経済史家は皆無に近いが、これは国民国家形成期の重要な課題であると同時に、国際比較が可能な分野になる。19世紀におけるロシア内務省における統計制度の整備を詳細に検討した後、日本の内務省の統計制度を調べ、その相違と相似について考察する予定である。

栗林 均 KURIBAYASHI Hitoshi 教授

生年月日 / 1951 年 05 月 16 日

東北アジア研究センター基礎研究モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・モンゴル語学 1975 年卒業

出身大学院

一橋大学・社会学研究科・社会学博士課程 1982 年単位取得満期退学

取得学位

文学修士東京外国語大学

略歴

1982 年～1983 年 一橋大学助手
 1984 年～1987 年 日本学術振興会奨励研究員
 1990 年～1993 年 日本大学講師
 1993 年～1999 年 日本大学助教授
 1999 年～ 東北大学教授

所属学会

日本言語学会、日本音声学会、日本モンゴル学会、満族史研究会

専門分野

モンゴル語学、モンゴル文献学

研究課題

- ・モンゴル系諸言語の研究
- ・モンゴル語文献学の研究

研究キーワード

モンゴル語、文献学

学外の社会活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

日本モンゴル学会副会長
（財団法人）日本モンゴル協会理事

学内活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

貴重図書等委員会委員

学位授与数（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

博士 1（副査）、修士 2（主査）

担当授業科目（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

内陸アジア文献研究

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

内蒙古大学蒙古学院講演 2014 年 9 月

著書（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

- 1) 「蒙漢字典」—資料編 原本影印— [東北大学東北アジア研究センター, (2014)11 月]
栗林均
- 2) 「満文原檔」所収モンゴル語文書の研究 [東北大学東北アジア研究センター, (2015)2 月]
栗林均、海蘭（カイラン）
- 3) 「初学指南」の研究—18 世紀の口語モンゴル語— [東北大学東北アジア研究センター, (2015)2 月]
栗林均、斯欽巴図（スチンバト）

研究論文（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

「《初学指南》与《三合语录》中以满文字母书写的蒙古语的特征」《中国蒙古学》第 42 卷、2014 年第 6 期、43-56 頁。

栗林均、斯欽巴图。査読無

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1. 著書『蒙漢字典 —資料編 原本影印—』。 [東北大学東北アジア研究センター, (2014)11 月] (東北アジア研究センター報告第 14 号) について：

『蒙漢字典』は、民国 17 (1928) 年に北京の蒙文書社から刊行されたモンゴル語と

漢語の対訳辞典である。活字版印刷で、上下2冊の線装本の体裁をとっている。辞書本文256丁(512頁)、巻頭に目録、勘誤表、蒙文十二字頭が付されている。

本字典は、内容的には清朝時代の『欽定蒙文彙書』(1891)を継承しながら、形態的には近代的な活版印刷によっており、モンゴル語辞書の歴史においていわば近世と近代の橋渡しとなった辞書として位置付けることができる。

『蒙漢字典』が現代において希少な文献となっていることと、同字典の内容が貴重な資料的価値を有することから、これを影印として公刊し、研究者の便宜に供した。本センターの「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動の一環として公刊された。

2. 著書『「満文原檔」所収モンゴル語文書の研究』[栗林均、海蘭(カイラン)編著、東北大学東北アジア研究センター, (2015)2月](東北アジア研究センター報告第17号)について:

『満文原檔』は、2005年に台湾の國立故宮博物院から刊行された清太祖、太宗時代(17世紀前半)の檔案(政府公文書)の写真版資料集である。そこに収録されている大量の檔案は、主に満洲語で記されているが、モンゴルとの交渉文書など、モンゴル語の文書も散在している。

本書は『満文原檔』全10冊の中からモンゴル語文書全47件を抜き出し、それらの影印と見開きの形でモンゴル語のローマ字転写と日本語訳を付し、さらに巻末にモンゴル語の全単語索引、名詞語尾索引、動詞の語尾索引を収めている。

巻頭には『「満文原檔」におけるモンゴル語文書について』と題する解題、さらに「「文書」のモンゴル文字の字形について」「「文書」における表記のゆれについて」と題するモンゴル語の表記に関する論考を収録している。

プロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動成果のひとつとして公刊された。

3. 著書『初学指南の研究—18世紀の口語モンゴル語—』[栗林均、斯欽巴図(スチンバト)編著)東北大学東北アジア研究センター, (2015)2月](東北アジア研究センター叢書第55号)について:

『初学指南』は、清朝の乾隆甲寅(1794)年に富俊によって出版されたモンゴル語の会話学習書である。本文は満洲語の口語学習書『一百条』の満洲語をモンゴル語に訳したものであるが、そのモンゴル語はすべて満洲文字で表記されるという独特の体裁をもっている。本文は満洲文字表記のモンゴル語と白話体漢文の対訳で『一百条』の100話に2話を加えて全102話から成る。

モンゴル語の文献資料の多くは「モンゴル文語」という書き言葉で書かれており、モンゴル語の口語を記録した資料は極めて少ない。『初学指南』は、満洲文字によって18世紀の口語モンゴル語を記録した極めて貴重な資料である。本書は、この文献

の満洲文字表記モンゴル語の全文をローマ字転写して、漢文を翻刻し、日本語の訳文を付けたもので、巻末にモンゴル語の全単語・全語尾の索引を付している。

プロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動成果のひとつとして公刊された。

岡 洋樹 OKA Hiroki 教授

生年月日／1959 年 07 月 21 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

早稲田大学・文学部・東洋史学科 1984 年卒業

出身大学院

早稲田大学・文学研究科・史学（東洋史）博士課程 1991 年単位取得満期退学

取得学位

修士（文学）早稲田大学 1986 年

博士（文学）早稲田大学 2005 年

略歴

1990 年～1992 年 早稲田大学文学部 助手
 1992 年～1993 年 群馬大学教育学部 非常勤講師
 1992 年～1996 年 早稲田大学第二文学部 非常勤講師
 1993 年～1996 年 日本学術振興会 特別研究員（PD）
 1996 年～1996 年 日本国外務省研修所 講師
 1996 年～1996 年 日本大学法学部 非常勤講師
 1996 年～1996 年 東京外国語大学 非常勤講師
 1996 年～2006 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 1997 年～現在 東北大学大学院国際文化研究科 助教授
 2000 年～2001 年 東北学院大学文学部 非常勤講師
 2005 年～2008 年 尚絅学院大学総合人間科学部 非常勤講師
 2006 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

研究経歴

1997 年～1999 年 「比丁冊」をつうじて見た清代モンゴルの盟旗制度の実態に関する研究
 1997 年～2000 年 モンゴルにおける交易拠点の研究
 1997 年～2000 年 モンゴルにおける関帝信仰の研究
 1999 年～2001 年 清代公文書史料による内モンゴル旗社会の研究

- 2001 年～ 2002 年 戦間期モンゴルの政治・社会システムの研究
2002 年～ 2005 年 モンゴルにおける環境変動と遊牧社会の研究
2007 年～ 2009 年 モンゴルにおける歴史記述に関する研究
2011 年～現在 東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在の研究

所属学会

史学会、内陸アジア史学会、東方学会、日本モンゴル学会、早稲田大学東洋史懇話会、東北大学国際文化学会、満族史研究会

学会活動

内陸アジア史学会理事、日本モンゴル学会理事、早稲田大学東洋史懇話会理事

専門分野

東洋史・モンゴル史

研究課題

- ・清代モンゴルの行政制度
- ・前近代モンゴルの社会構造の研究
- ・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
- ・モンゴルにおける歴史的環境変動と遊牧社会の研究
- ・モンゴルにおける歴史認識と学術・教育動向の研究
- ・戦間期モンゴルの政治・社会システムの改編
- ・東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在の研究
- ・モンゴルにおける交易拠点の比較研究

研究キーワード

モンゴル、清朝、社会構造

学外の社会活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

日本モンゴル協会評議員

学内活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

東北アジア研究センター長、教育研究評議会評議員、部局長連絡会議、研究所センター

長会議、入学試験審議会、文系部局長連絡協議会、基金企画推進室員、キャンパス将来計画委員会、片平まつり実行委員会委員、国際高等教育機構運営審議会委員、東北大学出版会評議員、川内キャンパス整備委員会、川内北キャンパス協議会、川北合同研究棟管理委員会委員、「東北大学サイエンスカフェ」WG 委員、リーディングプログラム推進機構運営会議委員、コラボレーション・オフィス運営委員会委員長

学位授与数（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

博士 1 人

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

歴史学 2010 年～現在

モンゴル語 I 2002 年～現在

（大学院教育：環境科学研究科）

内陸アジア地域史論 2003 年～現在

内陸アジア文献研究 2003 年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

Чингийн ү Үеийн Монгол дахь хилийн түүхэн бодит байдлыг дахин шинжих нь.[Евроазийн Нүүдлийн Аж Ахуй: Түүх, Соёл, Хүрээлэх орчин.](2014 年 9 月 5 日～2014 年 9 月 5 日, モンゴル, Ulaanbaatar) 口頭（招待 特別）

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

「モンゴルにおける清朝統治の変動の歴史的意味—一人の移動を中心に」[越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化](2015 年 3 月 8 日～2015 年 3 月 8 日, 東京) 口頭（招待 特別）

国際会議主催・運営（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

International Symposium “Eurasian Nomadic Pastoralism: History, Culture, Environment”. 2014 年 9 月 5 日（金）9:00～18:00、モンゴル科学アカデミー会議室、

ウランバートル、モンゴル国（モンゴル科学アカデミー歴史研究所、内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所、東北大学東北アジア研究センター共催）

国内会議主催・運営（2014年4月～2015年3月）

越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化（2015年3月8日～2015年3月8日，東京、東北大学東京分室）[主催]

その他研究活動（2014年4月～2015年3月）

「清代蒙古史的諸問題」海外知名学者民大講壇、中国中央民族大学蒙古語文学系、2014年9月22～26日

「在日游牧人歴史研究特点」2014年9月22日、中央民族大学文華楼西区802教室

「満清時期的蒙古在蒙古史上的地位」2014年9月23日、文華楼西区802教室

「満清時期蒙古歴史中是否有政治史」2014年9月24日、文華楼西区805教室

「満清時期是否封閉控制過蒙古人呢」2014年9月25日、文華楼西区802教室

「満清時期的蒙古歴史的連続性」2014年9月26日、文華楼西区802教室

受賞・その他特記事項（2014年4月～2015年3月）

モンゴル科学アカデミー歴史研究所名誉博士（2014年3月21日付）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014年4月～2015年3月）

基盤研究(A) 2011年4月～2015年3月[東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的 現在的研究]

著書（2014年4月～2015年3月）

1) Чин Улс ба Монголчууд. Монгол улсын ШУА-ийн Түүхийн Хүрээлэн, БНХАУ-ын Өвөр Монголын Багшийн Их Сургуулийн Аялал Жуулчлалын Дээд Сургууль, Японы Тохокү Их Сургуулийн Зүүнхойт Ази Судлалын Төв хамтран зохион байгуулсан эрдэм шинжилгээний бага хурал. Улаанбаатар, Монгол улс, 2012 оны 9 сарын 7. Эмхэтгэсэн Сампилдондовын Чулуун, Хурц, Ока Хироки, CNEAS Reports 13, Sendai, 2014.

研究論文（2014年4月～2015年3月）

1) Манжийн үеийн хамжлагын үүслийн тухай. Чин Улс ба Монголчууд. Монгол улсын ШУА-ийн Түүхийн Хүрээлэн, БНХАУ-ын Өвөр Монголын Багшийн Их Сургуулийн Аялал

Жуулчлалын Дээд Сургууль, Японы Тохокү Их Сургуулийн Зүүнхөйт Ази Судлалын Төв хамтран зохион байгуулсан эрдэм шинжилгээний бага хурал. Улаанбаатар, Монгол улс, 2012 оны 9 сарын 7. Эмхэтгэсэн Сампилдондовын Чулуун, Хурц, Ока Хироки, CNEAS Reports 13, Sendai, 2014. 15-29 тал. (査読無)

2) cing ulus-un Uy-e-yin mongGulcud-un qosiGu damjiGsan Uile ajillaG-a. Tnrgi-yin tedkUgsen-U dOci, tabiGad on-u qulaGai-yin kereg-Un jiSiyen deger-e sinjilekU ni. Dumdadu ulus-un mongGul sudulul 中国蒙古学. 42 duyar boti, 2014 on-u 6 duyar quyucaй-a, No.256, 2014, pp.32-42. (査読無)

3) Сэцэн хааны үеийн Монгол дахь хоёр чуулганы тухай; Сэцэн хааны 6-р оны Шарилжтайн чуулган ба 8-р оны Шонхорын чуулган. 烏雲畢力格主編『满蒙档案与蒙古史研究』中国人民大学国学院西域歴史語言研究所編、上海、上海古籍出版社、2014 年、pp.19-58 (査読無)

総説・解説記事 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

「東北アジアの遊牧民」『東北アジア学術交流懇話会ニューズレター うしとら』第 62 号、2014 年 9 月 30 日、1 頁

「地域研究の課題としての「境」」『東北大学東北アジア研究センター・ニューズレター』第 62 号、2014 年 10 月 31 日、1 頁

「東北アジア研究の課題 としての「越境」と「共生」」『東北大学東北アジア研究センター・ニューズレター』第 62 号、2015 年 3 月 27 日、1 頁

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、2012 年 9 月 5 日にモンゴル国ウランバートル市で開催したモンゴル科学アカデミー歴史研究所、内モンゴル師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所・東北大学東北アジア研究センター共催の国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」の報告論文集を編集刊行した。

2014 年 9 月 5 日、モンゴル国ウランバートル市でモンゴル科学アカデミー歴史研究所、内モンゴル師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所・東北大学東北アジア研究センター共催の国際シンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」を開催した。これにより、モンゴル研究に関わって国際的研究交流の実績を上げた。

科学研究費補助金基盤研究 (A) 「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」(平成 23 - 26 年度) の最終年度の国際シンポジウムを開催した。

モンゴルでの国際シンポジウム報告論文集では、清代モンゴル史の問題について、従来

の見解とは大きく異なる理解を提示した。一つは清代の王公タイジに分与された専属の属民である随丁について、モンゴルのヌクル（満洲語のグチュ）に該当するとする理解を提示した他、9月のウランバートルでのシンポジウム、3月の東京での科研費によるシンポジウムでは、清代モンゴル人の流動性について事例的な検討と法制面での検討から、従来常識とされてきた「封禁政策」の存在に疑問を呈した。

また9月の中国中央民族大学での招待講演「海外知名学者民大講壇」で、清代モンゴル史の再検討を要する問題について中国の学生・教員と意見交換を行うことができたのは収穫であった。

柳田 賢二 YANAGIDA Kenji 准教授

生年月日 / 1960 年 08 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・ロシア語学科 1983 年 卒業

出身大学院

東京大学・人文科学研究科・露語露文学専攻博士課程 1989 年 単位取得満期退学

取得学位

文学修士 東京大学 1986 年

略歴

1989 年～1992 年 東海大学文学部非常勤講師
 1990 年～1992 年 静岡大学教養部非常勤講師
 1992 年～1993 年 東北大学教養部講師
 1993 年～1995 年 東北大学言語文化部講師
 1995 年～1997 年 東北大学言語文化部助教授
 1997 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター助教授
 2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター准教授（注：法改正による職名変更）

研究経歴

2001 年～2002 年 科研費（基盤研究（C）（2））「旧ソ連高麗人の民族文化の継承と変遷に関する研究」研究代表者
 2005 年～2006 年 科研費（基盤研究（C））「現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究」研究代表者
 2007～2009 年 科研費補助金（基盤研究（C））「現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語の地位に関する比較研究」研究代表者
 2013 年～現在 科研費学術研究基金助成金（基盤研究（C））「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」研究代表者

所属学会

日本ロシア文学会、朝鮮学会

学会活動

日本ロシア文学会 東北支部事務局 2003 年～現在

日本ロシア文学会 日本ロシア文学会 2014 年（第 64 回）大会実行委員 2013 年～
2014 年

専門分野

言語学, ロシア語学, 社会言語学, 言語接触論

研究課題

- ・現代ロシア語の音韻論的研究
- ・中央アジア多言語社会における言語接触に関する研究

研究キーワード

言語接触、中央アジア、ロシア語、クレオール、音韻論、音声学、朝鮮語

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

総務委員 2013 年 4 月～2015 年 3 月

広報情報委員長 2013 年 4 月～2015 年 3 月

評価データ委員長 2013 年 4 月～2015 年 3 月

全学広報連絡員 2013 年 4 月～2015 年 3 月

ロシア交流推進室員 2014 年 3 月～現在

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

基礎ロシア語 2014 年 4 月～2014 年 9 月

展開ロシア語 I 2014 年 4 月～2014 年 9 月

展開ロシア語 III 2014 年 4 月～2014 年 9 月

基礎ロシア語 II 2014 年 10 月～2015 年 3 月

展開ロシア語 II 2014 年 10 月～2015 年 3 月

展開ロシア語 IV 2014 年 10 月～2015 年 3 月

（大学院教育）

地域環境 社会システム学セミナー 2003 年 4 月～現在

言語システム論（隔年開講） 2014 年 4 月～2014 年 9 月

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

ウズベキスタンにおけるロシア人のディアスポラ化とそのロシア語の特徴について [日本ロシア文学会東北支部 2014 年度研究発表会] (2014 年 7 月 5 日～2014 年 7 月 5 日, 山形) 口頭（一般）

その他研究活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語に関するフィールドワーク（フィールドワーク）2007 年～現在
- ・現代中央アジア諸国におけるロシア語単一話者のロシア語に関するフィールドワーク（フィールドワーク）2013 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

基盤研究 (C) 2013 年 4 月～現在

[現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

平成 26 年度も前年度に引き続き、平成 25～27 年度科研費（学術研究基金助成金）（基盤研究 (C)）「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」によるウズベキスタンでの現地研究に従事した。まず平成 26 年 7 月 5 日、山形大学で開催された日本ロシア文学会東北支部 2014 年度研究発表会において前年までの現地調査において知り得た同国の民族間共用語（リングァフランカ）としての口語ロシア語の特徴について口頭発表を行った。現在の東北地方の大学にはレベルの高いロシア語ロシア文学研究者が揃っているため、この場では以後の現地研究を計画するにあたり有用な助言を得ることができた。

平成 26 年度中の同科研費でのウズベキスタン現地研究における成果は主にロシア語の音韻面にかかわるものであったので、ここにはその内容を略述する。9 月には同国のサマルカンドにおいて比較的若い世代の学校教師 3 名のほか専門学校の学生 1 名という計 4 名の同市在住ロシア語話者へのインタビューを行い、対露感情やロシアへの移住の意向の有無のほか、同地のロシア人自身が自覚している方言的特徴やこれまでにロシアのロシア人から「訛り」として指摘された音韻論レベルでの特徴等について尋ねた。その結果、同地では標準ロシア語で無声そり舌摩擦音 [s̺] としての実現しか許容されず口蓋化のあり得ない /s/ を半口蓋化した無声前部硬口蓋摩擦音の [ʃ] として実現することが常態となっていて学校の英語教師ですらその非規範性に気付かない段階に至っている

ことや、また、シンタクス面においても、ロシアでは到底許容されない語順を含む文が同地のロシア人の会話語では許容されている事実を確認することができた。

また12月にも同国での現地調査を行い、首都タシケントにおいて3名の現地生まれロシア語単一話者のインフォーマントに会い、主に音韻面に関する聞き取り調査を行った。その結果、特に若年層においては上出のそり舌摩擦音音素 /s/ が半口蓋化前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] として実現されるのが常態となっているため口蓋化前部硬口蓋摩擦音音素 /ʃ/ との区別が曖昧となり、柳田がそり舌摩擦音音素 /s/ を含む語を含む短い例文を意図的に完全に口蓋化した前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] を用いて発音してもそれが誤りだと考えないという事実を確認して録音することができた。また、こうした現象がウズベク語との言語接触に由来する可能性を示唆するいくつかの現象も観察できた。

上出の無声そり舌摩擦音音素 / / を含む語を含む短い例文を完全に口蓋化した無声前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] を用いて発音してもそれが誤りだと考えないという事実は、標準ロシア語でロシア字の «ш», «щ» にそれぞれ対応し、語頭および母音間で [s], [ʃʃ] として実現される硬子音音素 /s/ と軟子音音素 /ʃ/ の対立が曖昧化ないし無くなりつつあることを示す重要な現象である。現に、12月にタシケントでインタビューをした専門学校生のインフォーマントは自然会話においても書かれた例文の読みにおいても «Прошу прощения» 「ちょっと失礼します」という慣用句における «ш» を、それが母音間にあるにもかかわらず、一貫して短い口蓋化した無声前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] として発音しており、他方、同人は、無声そり舌摩擦音 [s] で発音されるべき母音間の «ш» を完全に口蓋化した [ʃ] で発音した例文の読みに対しても「正しい」と評価した。これは、このインフォーマントにとってロシア語の音素 /s/ と /ʃ/ の区別がなくなりつつあることを示す事実である。1980年に同市で生まれたインフォーマントがこの «Прошу прощения» の «щ» を一貫して長い [ʃʃ] で発音していることと考え合わせると、これはごく最近になって顕著になったこの地方のロシア語の変化だと思えるべきであろう。

標準ロシア語では /s/ と /ʃ/ の実現は母音間および語頭という中和の起こらない位置において硬 / 軟 (= 非口蓋化 / 口蓋化) だけではなく「長さ」においても異なるが、このことが今日までロシア語音韻論において /s/ と /ʃ/ が硬 / 軟のペアを成す子音音素であることに疑念を抱く根拠となってきた。ウズベキスタンのロシア語においてこの2つの音素における硬 / 軟の区別が曖昧になると長さにおいても変化が表れて両者ともに短い [ʃ] として実現されるようになったという事実は、かかる変化が発生する前のロシア語においてはこの2つの音素とは確かに硬 / 軟のペアを成すものであったという解釈が正しいことを示すと考えられる。

磯部 彰 ISOBE Akira 教授

生年月日 / 1950 年 08 月 07 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京学芸大学・教育学部・中等教員養成課程社会科 1973 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・中国学博士課程 1981 年単位取得退学

取得学位

文学博士（東北大学）1991 年

文学修士（東北大学）

略歴

1981 年～1984 年 富山大学人文学部専任講師
 1982 年～1984 年 福井大学教育学部（非常勤）
 1984 年～1993 年 富山大学人文学部助教授
 1987 年 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（非常勤）
 1993 年～1996 年 富山大学人文学部教授
 1994 年 東北大学文学部（非常勤）
 1996 年 信州大学人文学部（非常勤）
 1996 年～現在 東北大学東北アジア研究センター教授
 2001 年 琉球大学法文学部（非常勤）
 2010 年～現在 早稲田大学演劇博物館招聘研究員

研究経歴

1975 年～現在 西遊記の成立とその東アジアにおける展開の研究
 1977 年～1978 年 三春藩秋田家文書の研究
 1981 年～1986 年 大聖寺藩の漢学と漢籍の研究
 1985 年～現在 中国の宗教文学と地域文化に関する研究
 1987 年～1990 年 中国地方劇の成立と現況についての研究
 1993 年～現在 富山藩の漢学の研究
 1996 年～2014 年 上山藩藩校明新館の研究

1997 年～2003 年	朝鮮版『文選』の版本研究
1998 年～現在	東アジア出版文化の研究
2000 年～現在	明代宝巻に関する研究
2002 年～2005 年	明治大正文学者芸術家関係資料の研究・編集
2007 年～2010 年	東アジア出版文化国際研究拠点形成
2008 年～2013 年	清朝宮廷演劇文化の研究
2011 年～現在	米沢藩及び広島藩旧蔵漢籍漢学の研究
2013 年～現在	東アジア出版文化研究資料画像データベース
2013 年～現在	出版文化資料データベース研究
2013 年～現在	典籍文化遺産の研究

所属学会

日本中国学会、東方学会、日本道教学会、密教図像学会、東北中国学会

学会活動

日本道教学会	理事 2003 年～現在
東方学会	評議員 2005 年～2011 年，学術委員 2012 年～現在

専門分野

近世中国の演劇と小説、東アジアの出版文化、日本伝存漢籍及び漢学研究

研究課題

- ・西遊記の東アジア展開研究
- ・米沢藩及び広島藩旧蔵漢籍漢学の研究
- ・東アジア出版文化の研究
- ・明代教派系宝巻の物語摂取の研究
- ・明代閩南の出版と日本慶長元和の文化形成
- ・東アジア出版文化国際研究拠点形成事業
- ・清朝宮廷演劇文化の研究
- ・東アジア出版文化研究資料画像データベース
- ・出版文化資料データベース研究
- ・典籍文化遺産の研究

研究キーワード

東アジア、出版文化、中国小説、藩学、儒仏道三教、西遊記、清朝内府演劇、戦国大名

蔵書、明刊本

学外の社会活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

東アジア出版文化の展示会 2000 年 12 月～現在

東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所連携講演会（講演会・セミナー）
2007 年 6 月～現在

「浅野文庫の和書と漢籍」（講演会・セミナー）（「浅野文庫の漢籍」広島市立中央図書館
講演会、広島市立中央図書館） 2015 年 2 月 28 日

中村不折一僕の歩いた道―〈後編〉「森鷗外、夏目漱石たちとの交流」（展覧会）（台東
区立書道博物館との共同企画、東北大学所蔵夏目漱石及び中村不折関連資料の展示、
台東区立書道博物館） 2015 年 2 月 10 日～ 3 月 15 日

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

中国社会科学院中国古代小説研究編集委員会 編委 2004 年 9 月～現在

高麗大学校中国学研究所編集委員 2008 年 5 月～現在

中国・東北師範大学文学院古籍整理研究所 編委 2012 年 12 月～現在

早稲田大学演劇博物館 招聘研究員 2010 年 6 月～現在

担当授業科目（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

（大学院教育）

比較文化史学課題研究

ユーラシア文化史特論Ⅲ・Ⅳ

ユーラシア文化史研究演習Ⅲ・Ⅳ

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

1) 「《升平宝筏》諸版本系統之研究」.[清代戏曲与宫廷文化学术研讨会, 中国北京市
中国人民大学, 2014 年 11 月 3 日] 口頭（招待）

その他研究活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

富山藩・上山藩・広島藩・米沢藩漢字・漢籍及び藩学校の資料調査と研究（その他）
1982 年～現在

東アジア出版文化の調査研究（その他） 1999 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

基盤研究(C) 2013 年 4 月～現在

〔明清教派系宝卷盛衰の研究―武神と母神信仰をめぐって―〕

研究成果公開促進費（データベース）（研究成果データベース）（重点） 2013 年 4 月～
2015 年 3 月 〔東アジア出版文化研究資料画像データベース〕

その他の競争的資金獲得実績（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門・研究ユニット 2013 年 4 月～現在
〔出版文化資料データベース研究ユニット〕
東北アジア研究センター・共同研究 2014 年～現在
〔典籍文化遺産の研究〕

著書（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

1) 上山市立図書館蔵上山藩明新館文庫目録と研究〔東北アジア研究センター叢書第
54 号, 東北アジア研究センター, (2014)11 月〕磯部彰（編著）

総説・解説記事（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

1) （エッセイ）戦国大名家の宋版本蒐集―名門武家のたしなみ―。〔『歴史書通信』第
213 号, 歴史書懇話会, (2014)5 月, 2-3〕磯部彰

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

東アジア出版文化方面の研究では、研究ユニットの共同研究を進め、戦国大名家の典籍蒐集で譜代大名であった上山松平家の蔵書研究を進めた。今日残る明新館文庫は、上山藩 3 万石の藩校旧蔵書であるが、その特徴は、明刊本は少なく、清刊本と和刻本が主体的構成を成し、散帙もあつてか、子部や集部の書籍が相対的に少ないことである。また、藩校蔵書以前、藩主の個人物であったことを窺わせる蔵書印もあり、藩内での蔵書の移動があつた点が浮かび上がった。上山藩に善本は少ないのは、大坂加番と呼ばれる出張時に、金策のために売却したこともあつたという伝聞を裏付ける蔵書構成である点にも気付いた。

上山藩の蔵書研究とは別に、典籍文化形成の基本である漢籍や絵巻、絵画などの原本を広く公開する取り組みは、センター研究ユニットを拠点として科研費研究成果公開促進費データベース（研究成果データベース・重点）平成 25 年度「出版文化資料データベース研究ユニット」によって、データベース作成を中心に進めた。平成 25 年度科研費研究成果公開促進費データベース（研究成果データベース・重点・2 年間）「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の補助金により、東アジア出版文化に関連する典籍文化財を資料画像の形で広く公開し、東アジア出版文化の研究拠点としての位置づけを着実なものとしつつある。公開データは更に拡大し、絵画資料から明刊本正史、清末民

国石印本小説・戯曲コレクションなど多彩なジャンルを含む。

個人研究では、平成 26 年度科研費基盤研究 (C) により、西大乘教の教派系宝卷が北京・山東省方面の地域文化と深い関係があることが五種の明刊宝卷によって明らかになりつつある。同時に、宝卷の主人公の孟姜女が唯一神格ではないことから、その宝卷が教派系宝卷でありながらも故事系宝卷の体裁をとらないことから、教派系宝卷と故事系宝卷両系統が既に明代にあった点が判明した。

瀬川 昌久 SEGAWA Masahisa 教授

生年月日 / 1957 年 09 月 10 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・教養学部・教養学科・文化人類学 1981 年卒業

出身大学院

東京大学・社会学研究科・文化人類学修士課程 1983 年修了

東京大学・社会学研究科・文化人類学博士課程 1986 年中退

取得学位

教養学士東京大学 1981 年

社会学修士東京大学 1983 年

学術博士東京大学 1989 年

略歴

1986 年～1989 年 国立民族学博物館助手

1989 年～1993 年 東北大学教養部助教授

1993 年～1996 年 東北大学文学部助教授

1993 年～1996 年 東北大学大学院国際文化研究科助教授

1996 年～現在 東北大学東北アジア研究センター教授

1996 年～2003 年 東北大学大学院国際文化研究科教授

2003 年～現在 東北大学大学院環境科学研究科教授

2007 年～2009 年 東北大学東北アジア研究センター長

研究経歴

1983 年以来、香港、中国広東省、福建省、海南省を中心としたフィールドワーク調査を行い、文化人類学的な中国社会研究に関する多数の学術論文・著書を発表してきた。現在は、東北アジア研究センタープロジェクト研究部門「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」を代表者として立ち上げ、共同研究等を実施している。

所属学会

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）

学会活動

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）評議員（1994 ～ 1995、2002 ～ 2003、2006 ～ 2010、2014 ～ 現在）

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）理事（1994 ～ 1995、2002 ～ 2003、2006 ～ 2009、2014 ～ 現在）

専門分野

文化人類学

研究課題

- ・ 宗族組織の人類学的研究
- ・ 華南漢族のエスニシティー
- ・ 中国の「民族」の文化人類学的研究

研究キーワード

親族、エスニシティー、華南、地方文化

オープンキャンパス・研究所公開等（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

リベラルアーツサロン（企画）2009 年 10 月～現在

学内活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

コラボレーションオフィス運営委員会（文系所部局連携）2009 年 4 月～現在

東北大学リベラルアーツサロン企画運営 2009 年 10 月～現在

東北アジア研究センター総務委員 2013 年 4 月～現在

学務審議会委員 2014 年 4 月～現在

学位授与数（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

論文博士 1 人

担当授業科目（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

（大学院教育）

東北アジア民族誌 2014 年～ 2014 年

東北アジア地域社会論 環境社会人類学セミナー 2014 年～ 2015 年

（他大学）

東北文化学園大学（文化人類学）2014 年～ 2014 年

岩手大学人文社会科学部（文化人類学）2014 年～ 2014 年

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

2014 年 5 月 18 日、分科会「宗族研究展望—古典的研究対象の現在を再考する」趣旨説明、
日本文化人類学会第 48 回研究大会、幕張メッセ（千葉市）。

その他研究活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

- 1) 東北アジア研究センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—『宗族』を通じた検証」の実施。
- 2) 平成 26 年度東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「東アジアの世界遺産と文化資源」の企画・実施。（開催日時：2015 年 2 月 14 日（土）10:30～17:30、会場：東北大学片平さくらホール）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

基盤研究 (C) 2012 年 4 月～ 2016 年 3 月

〔現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証〕

著書（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

- 1) ヴェールの向こう側から—北朝鮮民衆の文化人類学的分析（執筆担当部分）全体の企画と編集、趣旨説明、あとがき〔東北大学東北アジア研究センター, (2015)2 月〕
瀬川昌久、李仁子（編）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は、代表者を務める基盤研究 (C)「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証」ならびに同タイトルの東北アジア研究センター共同研究の成果を日本文化人類学会第 48 回研究大会において分科会を組んで発表するとともに、成果論文集の編集を行った。宗族の研究が、かつての人類学のメイン・トピックであった親族研究の延長線上に位置づけられるべきものであることは確かであるが、そこには現在までの人類学的な親族や家族についての理解を根底から問い直すことにつながる要素が含まれている。それは、宗族のもつ国家や地域社会の公的領域と個人とをつなぐ重要な役割であり、ともすると今日、個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とされがちな親族関係が、それを超出する役割を発揮し得ることを示すものに他ならない。確かに、現代社会においては生産や消費の経済活動ばかりでなく、人と人の絆についての理解やそれに付随する行動倫理さえもが、集団のレベルから個人のレベルへと個体化さ

れる傾向が著しく、宗族のもつ集団的、公共的側面などは純粹に過去の事象であるとみなされてきた。しかしながら、1990年代以降に生じた宗族の再生現象は、中国社会において宗族のもつこの種の社会的構成員力が未だ失われていないことを示している。再生された宗族は、単なる老人たちのノスタルジーに発した私的な儀礼空間ではない。いかに小規模なものであろうと、族譜を編み祠堂を再建して祭祀を執り行うことにより宗族の再生が試みられる際には、単なる個人事業や一家庭の中で完結する事業として行われるのではなく、系譜に連なる「関係者」との調整・交渉のプロセスが含まれ、そのように相対的に個人を超越した事業として行われることによって初めて、「～氏家門」「～氏宗族」を名乗る営為としての意義付けを得ることができる。近代社会の支配的パラダイムは、親族関係を私的で社会的に局所的な関係であるとし、公共的な社会領域からは排除されるべきものとみなしてきた。その結果人類学の内部でも、親族関係の研究は人々の「親密圏」へと退縮する歴史を辿ってきたと言えよう。しかし、現代中国における宗族再生の事例からは、宗族のもつ歴史的・正統性生成のための強力なツールとしての性格が、個々の親族集団内部に止まらず地域社会に広く共有され実践されていることが示されており、地方政府レベルでもそれを無視できなかつたり、むしろそれを積極的に活用しようとする場合さえあることが明らかとなった。ここにおいて、宗族が体现する親族関係とその理念は、中国社会においては単に個人の私的領域に封じ込められるようなものではなく、国家社会や地域社会の公共的領域と個人とをつなぐ役割を果たす潜在力をもった存在であることが示唆されている。ともすると今日、親族関係は個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とみなされがちであるが、宗族には明らかにそれには収まりきれない、それを超出する性格が認められる。このように、宗族は社会統合やナショナリズムとも結びつく要素を帯びており、故に国家統治や市場での利益追求の観点に立つ人々にとってもその資源的価値が認識されつつある。このことは、中華民族の歴史を喧伝する出版物や愛国教育基地としての歴史的文物の指定などにも表れており、またそれは「儒教思想」の称揚、家族倫理の復権などといった中国国内における最近の社会現象とも深く連動しているものと考えられる。一見したところ、宗族は前近代的な社会的構築物であり、既に社会的機能の上でも、また学術的関心の対象としても、時代遅れの遺物のように見なされがちである。しかし、そのように断じるのは極めて大きな錯誤であり、宗族こそは現代中国社会、ひいては現代の人類社会をより深く理解するための重要な手がかりなのである。それぞれの社会がたどる近代化のプロセスは、それぞれ固有の軌跡を示しており、決して単一のプロセスに帰することはできない。東アジアの親族・家族理念や諸社会規範は現代社会の諸変化の中で変容しつつあるが、逆にそれらを客体化し、文化資源化することにより、公共の領域へと引き戻そうとする動きも存在しはじめている。すなわち、そこに見出されるのは単純に親族・家族の絆がプライベートでドメスティックな領域へと断片化され退縮させられて行くだけの一方向的な過程で

はない。その分析は、欧米社会のみを唯一のモデルとしては語ることはできない人類の「近代」の方向性を解明し予見する上で、極めて重要な手がかりであると考えられる。少なくともその文化人類学的な意義に限定して考えても、親族関係の研究を「親密圏」の呪縛から解き放ち、潜在的機能の多様性や、そこに仮託される文化的意味の多様性についてより深い認識に到達するためには、中国の宗族という題材が貢献し得る点は非常に大きいと言わなければならない。

明日香 壽川 ASUKA Jusen 教授

生年月日 / 1959 年 10 月 26 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・農学部・農芸化学 1984 年その他

出身大学院

東京大学・工学系研究科・先端学際工学博士課程 1996 年単位取得満期退学

取得学位

農学修士東京大学 1986 年

経営学修士欧州経営大学院 1990 年

学術博士東京大学 2000 年

略歴

- 1987 年～1988 年 スイス実験外科医学研究所 研究員
- 1990 年～1992 年 ファルマシア・バイオシステムズ(株)日本支社 企画管理部経営企画課プロジェクトマネージャー
- 1996 年～1997 年 電力中央研究所 経済社会研究所 研究員
- 1997 年～2004 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
- 2000 年～2004 年 東北大学文学研究科 助教授
- 2002 年～2003 年 京都大学経済研究所 客員助教授
- 2003 年～2004 年 東北大学環境科学研究科 助教授
- 2004 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授
- 2004 年～現在 東北大学文学研究科 教授
- 2004 年～現在 東北大学環境科学研究科 教授
- 2011 年～2013 年 (財)地球環境戦略研究機関 気候変動グループ ディレクター

所属学会

環境経済・政策学会, 環境社会学会, 国際アジア共同体学会, 計画行政学会, 国際開発学会, アジア政経学会

学会活動

環境経済・政策学会 理事 2005 年～2013 年
中国環境問題研究会 共同代表 2006 年～現在
国際アジア共同体学会 理事 2010 年～現在

専門分野

環境エネルギー安全保障, 環境エネルギー政策, アジアの環境問題

研究課題

- ・アジアの環境問題に関する研究
- ・環境安全保障システムの構築に関する研究
- ・地球温暖化政策の政治経済学的分析

研究キーワード

国際エネルギー環境協力, 地球温暖化問題, 温暖化対策の国際枠組み、排出量取引, クリーン開発メカニズム, 環境 ODA, 炭素制約下における企業の国際競争力、中国の環境エネルギー問題、越境大気汚染

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

Climate Policy 学術誌査読 2000 年 01 月～現在
エネルギー 資源学会誌学術誌査読 2000 年 01 月～現在
Environmental Economics and Policy Studies 学術誌査読 2003 年 01 月～現在

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

環境省中央環境審議会専門委員
地球環境センター JCM 支援委員会 委員

学位授与数（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

博士 2 人

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

科学技術とエネルギー（学部）
地球温暖化論（大学院）
環境科学政策論（大学院）

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・中国における原子力発電 [日本科学者会議国際シンポジウム「移行：原子力から再生可能エネルギーへ」] (2014 年 3 月 27 日～2014 年 3 月 28 日, 日本国, 横浜) 口頭 (一般)
- ・北東アジアのエネルギーと環境 [NEASE-Net 第 9 回フォーラム：北東アジア共同体の形成を目指して] (2014 年 9 月 27 日～2014 年 9 月 28 日, 日本国, 大阪) 口頭 (招待 特別)
- ・Future of energy demand and supply system in cities[Energy-safe Cities] (2014 年 10 月 28 日～2014 年 10 月 28 日, 中国, 北京) 口頭 (招待 特別)
- ・日本の再生可能エネルギー政策 [韓国経済学会連合会議] (2015 年 2 月 24 日～2015 年 2 月 24 日, 韓国, ソウル) シンポジウム ワークショップ パネル (公募)
- ・Outcome of research on co-benefit[Bridging Atmospheric Science and Policy in Asia] (2015 年 3 月 10 日～2015 年 3 月 11 日, 日本国, 東京) 口頭 (招待 特別)
- ・COP21 パリ会議と中国 日本 [国連防災世界会議パブリックフォーラム：気候変動対策と防災に関するシンポジウム] (2015 年 3 月 17 日～2015 年 3 月 17 日, 日本国, 仙台) 口頭 (招待 特別)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・日本の「公平」なカーボン バジエットおよび温室効果ガス排出削減目標 [環境経済政策学会] (2014 年 9 月 13 日～2014 年 9 月 14 日, 日本) 口頭 (一般)
- ・中国利大気汚染の現状と課題 [日本華人教授会第 11 回年次国際シンポジウム] (2014 年 11 月 1 日～2014 年 11 月 1 日, 東京) 口頭 (招待 特別)
- ・地球温暖化問題と原子力発電 [日中韓技術者交流会] (2014 年 12 月 6 日～2014 年 12 月 6 日, 東京) 口頭 (招待 特別)

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

基盤研究 (C) 2013 年 4 月～2015 年 3 月

[経済モデル分析を中心とした炭素制約が国際競争力に与える影響の学際的分析]

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- 1) 温暖化対策に原発は必要ない . [前衛 , (910), (2014)] (査読なし)

明日香壽川

- 2) 福島原発事故後の温暖化問題を考える . [人権と部落問題 , (2014)] (査読なし)

明日香壽川

- 3) カーボン バジエット アプローチに基づく日本の中長期的な温室効果ガス排出経路 .

[IGES Working Paper,(2014-02), (2014)] (査読なし)

明日香壽川, 倉持壮, Hanna Fekete, 田村堅太郎, Niklas Höhne

4) エネルギー政策と温暖化政策における絶望と希望:「地球にやさしい」ではなくて「正義」のために . [Energy Democracy, (2014)] (査読なし)

明日香壽川

5) 国民一人当たりコーヒー数杯分のコスト負担で日本のエネルギー システムを変えられる . [環境ビジネス ,(冬), (2015)] (査読なし)

明日香壽川

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、昨年に引き続き中国の環境問題、特に大気汚染問題が社会的にクローズ・アップされ、関連して講演をしたり、雑誌などへ寄稿したりした。また、日本および世界における原発問題、地球温暖化問題、エネルギー問題を巡る現状と課題に関して様々なメディアを通して積極的に発言した。

上野 稔弘 UENO Toshihiro 准教授

生年月日／ 1965 年 9 月 11 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

筑波大学・比較文化学類・比較・地域文化学 1988 年卒業

出身大学院

筑波大学・歴史・人類学研究科・東洋史博士課程 1997 年単位取得満期退学

取得学位

文学士筑波大学 1988 年

文学修士筑波大学 1990 年

略歴

1997 年～ 1998 年 千葉大学非常勤講師

1997 年～ 2001 年 文部省（文部科学省）初等中等教育局 教科書調査官心得

1998 年～ 2001 年 東京女学館短期大学非常勤講師

2001 年～ 2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授（職階名変更による）

研究経歴

2014 年 9 月～ 国立民族学博物館共同研究員

所属学会

日本現代中国学会、歴史人類学会、アジア政経学会、社会文化史学会、東アジア地域研究学会

学会活動

地域研究コンソーシアム運営委員会 運営委員（研究企画部会）2010 年～現在

専門分野

中国現代史、地域研究、文化人類学（含民族学・民俗学）

研究課題

- ・ 中国現代史における民族問題
- ・ 公文書活用による中国民族問題研究

研究キーワード

中国、民族、民族問題、少数民族、民族政策、民族関係、民族史

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

外国語委員会中国語・朝鮮語部会委員 2001 年 4 月～現在

外国語委員会学習環境専門部会委員 2001 年 4 月～現在

外国語委員会中国語・朝鮮語部会長 2006 年 4 月～現在

学位授与数（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（副査）修士 青山 定住牧畜民の家畜飼育技術と生業多様化に関わる人類学的研究—
内モンゴル・ホルチン左翼後旗の事例から 2015 年 03 月

（副査）論文博士 稲村務 祖先と資源の民族誌—中国雲南省を中心とするハニ＝アカ
族の歴史 2015 年 03 月

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

基礎中国語Ⅰ 2002 年～現在

基礎中国語Ⅱ 2002 年～現在

展開中国語Ⅰ 2003 年～現在

展開中国語Ⅱ 2003 年～現在

（大学院教育）

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

2014 年 6 月 14 日 「20 世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉——1944・47 年の北
塔山事件とモンゴル独立承認交渉——」東北アジア研究センター共同研究「近世・近代
における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成 26 年度第
1 回研究会（仙台）

2014 年 8 月 4 日 「『第二代民族政策』の提起から読み解く中国民族問題の現状」霞山
会中国学術研究大会（東京）

その他研究活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

- ・台湾における民国期民族政策文献の検索・収集（フィールドワーク）2003 年～現在
- ・米国研究機関等所蔵の中国民国期民族政策文献の検索・収集（フィールドワーク）
2008 年～現在
- ・英国諸機関所蔵の中国边疆民族問題関係資料の検索収集（フィールドワーク）
2010 年～現在

総説・解説記事（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

2015 年 3 月 「中国边疆民族史研究の一次史料を求めて―所蔵機関訪問雑記」『東北アジア学術交流懇話会ニューズレター うしとら』第 64 号

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は申請していた科研費が採択されなかったため、非常に限られた研究資金の元でここ数年来継続的に進めている海外における中国边疆民族問題に関する一次史料の検索・収集および収集した史料データの整理・分析を進めた。平成 26 年 10 月には米国スタンフォード大学フーヴァ研究所を訪問し、『蒋介石日記』の閲覧を行ったほか、人類学者陳永齡の盛世才統治期新疆に関する回顧録の閲覧・撮影を行った。『蒋介石日記』の閲覧はここ数年継続的に行っており、民国期の边疆民族問題に対する蒋介石の認識と対応をたどる上で重要な情報が含まれている。筆写しか認められないため作業の進捗は遅いが、データベースの充実を着実に進めている。同時に、近年『蒋介石日記』を利用した論著が出現していることからその出典を確認し、筆写時の誤記に由来すると思われる引用の誤りが散見されることを確認した。平成 27 年 3 月には英国立公文書館を訪問し、英国政府の外交文書の中国边疆関係部分を閲覧した。英国立公文書館の外交文書は 1930 年代中期以前の文書については分類が不十分なため Web 検索が役立たないために現地で確認せざるを得なかったが、今回の作業を通して中国边疆問題に関する英国公文書の分類状況の解明を進めるとともに、この時期の新疆・チベット関係の文書を多く含む大英図書館蔵の旧インド省文書との比較検証の可能性を開くことができた。平成 26 年度はこうした史料の収集・分析の成果の一端を研究会での口頭発表として公表した。また新疆では大規模暴動が起こるなど、边疆民族問題は今日においても依然深刻であるが、霞山会の研究発表においては近年中国の理論界において出現した「第二代民族政策」論を取り上げ、中国民族問題の歴史的遠因とともに 1990 年代以降の市場経済体制への移行が民族政策にもたらした変化について報告した。これらの公開発表を通じて自身の研究が単なる歴史的事例研究に留まるものではなく、今日的問題の検証に重要な視角を提供するものとして有意義であることを示すことができた。

石井 敦 ISHII Atsushi 准教授

生年月日 / 1974 年 09 月 25 日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

出身学校

東京工業大学・工学部・機械科学科 1997 年卒業

出身大学院

筑波大学・社会工学研究科・都市・環境システム専攻博士課程 2001 年中退

取得学位

経済学修士（経済学）筑波大学 1999 年

略歴

2001 年～2004 年 独立行政法人国立環境研究所 アシスタントフェロー

2004 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

研究経歴

1997 年～現在 地球温暖化対策のための国際交渉についての研究に従事

1997 年～2001 年 温室効果ガス削減のための国際協力プロジェクトについての研究に従事

2000 年～現在 国際環境レジームの科学アセスメントについての研究に従事

2003 年～現在 捕鯨の国際管理の問題に関する研究に従事

2004 年～現在 炭素隔離技術に関する政策研究に従事

2005 年～現在 地球温暖化に関連する政策的相互連関に関する研究に従事

2008 年～現在 地球温暖化の科学に関するマスメディアの研究に従事

2011 年～現在 国際漁業資源ガバナンスについての研究に従事

2013 年～現在 東アジアの越境大気汚染についての研究に従事

2015 年～現在 ジオエンジニアリングについての研究に従事

所属学会

環境経済・政策学会, 国際関係論学会, 日本国際政治学会, 環境科学会, 科学社会学会

学会活動

環境経済・政策学会 理事 2012 年－ 現在

日本国際政治学会環境分科会責任者 分科会責任者 2013 年－ 現在

専門分野

政治学、科学社会学・科学技術史、環境影響評価・環境政策、国際関係論

研究課題

- ・国際環境レジームの科学アセスメントに関する研究
- ・日本の捕鯨外交と国際捕鯨管理の問題に関する研究
- ・炭素隔離技術に関する技術アセスメントと関連政策に関する研究
- ・フューチャーアースに関連したトランスディシプリナリティ（超分野的研究）に基づいた研究に従事
- ・マグロの国際政治学に関する研究に従事
- ・東アジアの越境大気汚染問題を対象とした外交に関する研究に従事

研究キーワード

国際環境問題、科学アセスメント、科学技術社会学、外交科学、炭素隔離技術、国際漁業資源ガバナンス、トランスディシプリナリティ、ジオエンジニアリング

報道（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

- ・感情論廃し広く議論を（出演 執筆 新聞 共同通信配信）2014 年 4 月
- ・鯨の街「食文化失う」 調査捕鯨中止命令、対象外も不安（出演 執筆 新聞 朝日新聞）2014 年 4 月
- ・調査捕鯨の今後は（出演 執筆 新聞 北海道新聞）2014 年 5 月
- ・日本捕鯨窘境（出演 執筆 新聞 財新）2014 年 5 月
- ・Japanese Whaling: The Saga Continues（出演 執筆 雑誌 The Diplomat）2014 年 8 月

学内活動（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

東北アジア研究センター編集出版委員会 2004 年 10 月～現在

東北大学東北アジア研究センター ハラスメント等相談員 2005 年 4 月～現在

北東アジア研究交流ネットワーク委員会 2006 年 4 月～現在

研究推進委員会 2014 年 4 月～現在

担当授業科目 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

(全学教育)

科学技術とエネルギー 2014 年～ 2015 年

(大学院教育)

地域環境 社会システム学修士セミナー 2005 年～現在

地域環境 社会システム学修士研修 2005 年～現在

地域環境 社会システム学博士セミナー 2006 年～現在

地域環境 社会システム学博士研修 2013 年～ 2014 年

地域環境 社会システム学修士セミナー 2014 年～ 2015 年

地域環境 社会システム学博士研修 2014 年～ 2015 年

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- ・ From Cosmopolitan Ideal to Nationalistic Calculus: Discursive Change of Japanese Media Framing on the Kyoto and Copenhagen Climate Conferences[XVIII ISA World Congress of Sociology] (2014 年 7 月 13 日～ 2014 年 7 月 19 日, 日本国, 横浜) 口頭 (一般)
- ・ Evaluating regime effectiveness of tuna-Regional Fisheries Management Organizations[Fourth Global International Studies Conference] (2014 年 8 月 6 日～ 2014 年 8 月 9 日, ドイツ, Frankfurt) シンポジウム ワークショップ パネル (指名)
- ・ Evaluating regime effectiveness of tuna-Regional Fisheries Management Organizations[International Studies Association's 56th Annual Convention] (2015 年 2 月 18 日～ 2015 年 2 月 21 日, アメリカ合衆国, ニューオーリンズ) シンポジウム ワークショップ パネル (公募)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- ・ 日本の越境大気汚染外交と科学：臨界負荷量研究を事例に [環境経済 政策学会 2014 年大会] (2014 年 9 月 13 日～ 2014 年 9 月 14 日, 東京) 口頭 (一般)
- ・ 日本の環境外交と科学—臨界負荷量研究を事例に [科学社会学会第 3 回年次大会] (2014 年 9 月 27 日～ 2014 年 9 月 28 日, 東京) 口頭 (一般)

その他研究活動 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- ・ オラフ シュラム シュトツケ著 『国際レジームを分解する——評価と比較のための新たなアプローチ』 (書評) 2014 年～ 2014 年
- ・ 中西部太平洋マグロ類委員会 北小委員会 (フィールドワーク) 2014 年～ 2014 年
- ・ 国際捕鯨委員会 (フィールドワーク) 2014 年～ 2014 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

基盤研究 (A) 2011 年 4 月～2016 年 3 月

〔レジームコンプレックスとしての国際漁業資源管理：意思決定要因と有効性分析〕

基盤研究 (C) 2013 年 4 月～2016 年 3 月

〔炭素隔離技術のデモンストレーションプロジェクト：マスメディアと意思決定要因分析〕

その他の競争的資金獲得実績（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

気候工学（ジオエンジニアリング）のガバナンス構築に向けた総合研究の可能性調査

2015 年 2 月～2015 年 7 月

〔気候工学（ジオエンジニアリング）のガバナンス構築に向けた総合研究の可能性調査〕

研究論文（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

1) Reconstruction of the boundary between climate science and politics: The IPCC in the Japanese mass media, 1988-2007. [Public Understanding of Science, (2014)]

Asayama Shinichiro, Atsushi Ishii（査読有）

2) CCS のメディア表象とガバナンス—日本の新聞報道のフレーミングと政策的含意—
〔社会技術研究論文集, 11, (2014), 127-137〕

朝山慎一郎, 石井敦（査読有）

3) Path-dependence and Paradigm-shift: How Cetacean Scientists Learned to Develop Management Procedures that Survived the Controversial Whaling Regime. [The Review of Policy Research, 31 (4), (2014), 257-280]

Atsushi Ishii, Ayako Okubo（査読有）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

環境問題では、社会が当該問題についてどのように認識するかが非常に重要である。その社会的認識を大きく左右するのがマスメディアであるが、日本で環境メディア研究はほとんど行われてこなかった。筆者は、共同研究者の朝山慎一郎氏とともに、当該分野で研究を行い、日本における主要な全国紙の主なフレーミングやその要因について分析を行った。これらの研究成果はすべて査読付き論文で発表され、とりわけその中の一本は、Public Understanding of Science（2013 年のインパクトファクターは 1.932、科学史・科学哲学部門の論文誌ランキング 42 誌中 3 位；コミュニケーション部門の論文誌ランキング 74 誌中 7 位）に掲載された。これらの研究は、日本における環境問題の認識をマスメディアがどのように、そしてなぜ構築するのか、に関する知見を提供する

ことで、日本の環境メディア研究の本格的な発展につながる先駆的成果を上げたといっても過言ではない。

また、The Review of Policy Research に掲載された論文は、近年、主張されている科学技術社会学と国際関係論を融合させたほうが、科学の国際政治における役割や効果、実態がよりよく理解できるようになる、という文脈にそった成果であり、同主張をさらに裏付けるものである。

千葉 聡 CHIBA Satoshi 教授

生年月／1960年9月24日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

出身学校

東京大学・理学部・地学科 1986 年卒業

出身大学院

東京大学・理学研究科・地質学博士課程 1991 年その他。

略歴

1991 年～1999 年 静岡大学理学部

1999 年～2013 年 東北大学大学院生命科学研究科

2013 年～現在 東北アジア研究センター 教授

研究経歴

1985 年～2014 年 島嶼陸産貝類の進化生物学的研究

1990 年～2013 年 種多様性の長期的変動に関する理論的研究

1991 年～2014 年 軟体動物の遺伝学的、生態学的研究

2000 年～2014 年 東北アジア地域の生物進化史・生物地理研究

2006 年～2014 年 生物多様性保全手法の開発に関わる研究

所属学会

日本生態学会，日本古生物学会，個体群生態学会，Society for the study of evolution, American Society of Naturalist, 日本進化学会

学会活動

日本生態学会東北地区会地区委員

Population Ecology（個体群生態学会）編集委員

Paleontological Research（日本古生物学会）編集委員

専門分野

進化生態学、集団遺伝学、古生物学

研究課題

- ・ 東北アジア地域の生物進化史・生物地理学
- ・ 生物多様性保全手法の開発
- ・ 貝類をモデルとした進化研究
- ・ 種多様性の時空間パターンの形成機構
- ・ 島の生物群集の進化と保全に関する研究
- ・ 外来種の侵入と定着機構の解明
- ・ ホスト-パラサイト系の動態

研究キーワード

進化、多様性、種分化、軟体動物、外来種

報道

- ・ National Geographic "Love Hurts: What Happens When Snails Stab Their Mates"
(出演 執筆 新聞 National Geographic) 2015 年 3 月
- ・ The Economist, "Till death us do part" (出演 執筆 新聞 The Economist)
2015 年 3 月

学外の社会活動 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- ・ 宮城一高理数系講演会 (講演会 セミナー) 2014 年 11 月～ 2014 年 11 月
- ・ 東北アジア研究センター公開講演会 (講演会 セミナー) 2014 年 12 月～ 2014 年 12 月

行政機関・企業・NPO 等参加 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- 環境省 (国) 小笠原世界遺産候補地科学委員会 委員 2006 年 11 月～現在
- (国) プラナリア対策 陸産貝類保全検討会委員 2009 年 4 月～現在
- (国) 小笠原諸島ネズミ類対策検討会委員 2009 年 4 月～現在
- (国) 小笠原諸島修復事業検討委員会委員 2010 年 4 月～現在
- (地方公共団体) 父島ノヤギ排除検討委員会委員 2010 年 4 月～現在
- (国) 小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会アドバイザー 2011 年 4 月～現在
- (地方公共団体) 父島外来植物対策委員会委員 2012 年 4 月～現在
- (国) 小笠原諸島科学委員会委員 2013 年 4 月～現在
- (国) 小笠原諸島生態系保全アクションプラン改定 WG 委員 2013 年 4 月～現在
- (国) 新たな外来種の侵入 拡散防止 WG 委員 2013 年 4 月～現在
- (国) グリーンアノール対策 WG 委員 2013 年 4 月～現在
- (国) 国内希少野生動植物種・新規指定検討会委員 2014 年 4 月～ 2015 年 3 月

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・生命科学研究科入試委員会委員 2013 年 4 月～現在
- ・入試委員会委員 2014 年 4 月～現在
- ・研究教育基盤技術センター運営専門委員会委員 2014 年 10 月～現在
- ・学術資源研究公開センター運営専門委員会委員 2014 年 4 月～現在

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

（学部教育）

群集生態学 2001 年～現在

動物生態学実習 2001 年～現在

生物学演習 2010 年～現在

短期留学生受入プログラム講義 2010 年～現在

（大学院教育）

保全生物学特論

生態学合同講義

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・ Conference Mollusks of the Eastern Asia and Adjacent Seas
(2014 年 10 月 6 日～2014 年 10 月 6 日, ロシア) 口頭 (一般)
- ・ New Zealand Ecological Society
(2014 年 11 月 24 日～2014 年 11 月 24 日, ニュージーランド, Palmerstone North) 口頭 (招待 特別)

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

基盤研究 (B) 2012 年 4 月～2015 年 3 月 [過去で未来を守る]

その他の競争的資金獲得実績（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・環境研究総合推進費 2014 年 4 月～2017 年 3 月
[小笠原諸島の自然再生における絶滅危惧種の域内域外統合的保全手法の開発 ((4) 絶滅危惧陸産貝類の域内 域外保全および再導入手法の開発]

研究論文（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- 1) Phylogeny of the land snails *Bradybaena* and *Phaeohelix* (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. [Journal of Molluscan Studies, 80, (2014), 177-183]

- Hirano, T., Kameda, Y., Chiba, S. 査読有
- 2) Common effect of the mucus transferred during mating in two dart-shooting snail species from different families.. [Journal of Experimental Biology, 217, (2014), 1150-1153]
- Kimura, K., Chiba, S. Koene, J. 査読有
- 3) Assortative mating with respect to size in the simultaneously hermaphroditic land snail *Bradybaena pellucida*.. [Acta Ethologica, (2014), DOI:10.1007/s10211-014-0211-7] Kimura, K., Hirano, T., Chiba, S. 査読有
- 4) Divergence in the shell morphology of the land snail genus *Aegista* (Pulmonata: Bradybaenidae) under phylogenetic constraints.. [Biological Journal of the Linnean Society, 114, (2015), 229-241]
- Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. Chiba, S. 査読有
- 5) A new species of *Helicostyla* from the Patnanungan Island, Philippines.. [The Asian International Journal of Life Sciences, 24:, (2015), 37-49.]
- de Chavez, E.R.C., Fontanilla, I.K.C., Batomalaque, G., Chiba, S. 査読有
- 6) Evidence of introgressive hybridization between the morphologically divergent land snails *Ainohelix* and *Ezohelix*. [Biological Journal of the Linnean Society, (2015), DOI: 10.1111/bij.12466]
- Morii, Y., Yokoyama, J., Kawata, M., Davison, A., Chiba, S. 査読有
- 7) The direct cost of traumatic secretion transfer in hermaphroditic land snails: individuals stabbed with a love dart decrease lifetime fecundity. [Proceedings of the Royal Society of London B, 282, (2015)]
- Kimura, K., & Chiba, S. 査読有

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

東北アジア地域はほぼ同緯度の地域で比較すると、世界的にみて最も種多様性の高い地域とされる。この高い生物多様性はさまざまな生態系サービスを通して、東北アジア地域の文化、社会に大きく寄与していると考えられるが、その多様性の実態は日本を除くと歴史的な経緯もあって依然として未知の点が多い。一方、世界で最も著しく生物多様性が損なわれつつある地域のひとつでもあり、好ましい生態系の維持、生物資源の確保という点からも、本地域の生物多様性の実態を把握し、その保全のための対策を検討することは、緊急の課題である。そこで本年度は、本年度は、その多様性の高さから、東北アジアの生物相を特徴づける生物群であるにもかかわらず、特に未知な点が多い、陸域、陸水域の貝類をモデルとして、東北アジア地域の生物多様性の現況解明を行うとともに、その成立過程、さらにその多様性をもたらした要因について明らかにした。こ

これらの成果は、東北アジアの生物多様性の実態を把握するだけでなく、その特異性、価値や機能を明らかにすることで、その保全につなげるうえで重要な成果である。上記の情報に基づき、環境省による日本産非海産貝類の希少種選定に貢献した。さらにより直接的な保全研究として、絶滅危惧種の系統保存技術の開発や、在来生態系に影響を及ぼす外来生物の影響緩和のための手法開発を行った。

以下がその成果の詳細である。

1. 陸貝をモデルとした東北アジア生物多様性形成過程の研究

オナジマイマイ科は、東北アジア地域で著しく多様化を遂げた、東北アジアを代表する陸貝群である。このグループについて、核とミトコンドリアの遺伝子解析により、分子系統解析を行い、その進化史を解明した。その結果、従来の形態形質に基づく多様性の評価は、遺伝的ないし系統的な多様性を全く反映していないことが判明し、その再評価を行った。特に従来別属とされたほど分類上大きく異なる種間で交雑が認められ、陸貝類で種多様性を検出する従来の方法は不適切であることが示された。また樹上性、地上性などの生態的分化がその多様化に強く関わったことが示された。分子系統に基づく、東北アジアの系統は、台湾、日本、朝鮮半島の系統と、中国内陸、極東ロシアの系統に二分され、それぞれ独立に中国南部に起源し北上したことが示された。これらの成果は3編の海外学術誌に公表したほか、軟体動物に関する国際会議（ロシア・ウラジオストク）にて報告した。

2. 淡水貝類をモデルとした東北アジア生物多様性形成過程の研究

東北アジアの淡水貝類の現況および成立過程を、ヒラマキガイ類をモデルとし、分子系統学の手法を用いて解明した。その結果、日本のグループは、中国、朝鮮半島、極東ロシアから独立に繰り返し侵入が起きることで形成されたことが示された。また世界各地の資料のデータと比較した結果、バイカルからウスリーに至る地域は、本グループの特に古い系統が認められ、本地域を起源として、ユーラシア地域一帯に拡散した可能性が示された。本成果は日本貝類学会にて報告したほか、中心となって研究を進めた研究室大学院生が国際学会（韓国・光州）にて報告した。

3. 多様性をもたらす生態学的機構

上記のオナジマイマイ科の著しく高い多様性は、互いに恋矢を刺すという繁殖行動に起因するという仮説を調べるため、生理学的、行動学的な実験を行った。その結果、雌雄同体のオナジマイマイ科では、恋矢を刺す性質と関係したオス機能と、それにダメージを受けるメス機能の利害の対立が生じ、軍拡競走的に両者の共進化が駆動され、繁殖行動やそれに関係した形質が多様化し、さらに種の多様化がもたらされることが示された。これは繁殖には雌雄の利益の対立があり、それが多様化の駆動力を示す事例である。この研究成果は、3編の海外学術誌に公表したほか、英国エコノミスト誌、米国 National Geographic 誌など、海外の多くの主要メディアに取り上げられた。

4. 外来種の影響評価と希少種の保全

琉球列島や小笠原を中心に、外来ウズムシ類の侵入状況やその影響評価を行うとともに、その侵入を早期に発見、検出する技術を開発した。また希少種陸貝の人工繁殖技術の開発を行った。これらの成果は、小笠原における環境省および東京都の外来種対策や希少種保全対策立案に直接貢献し、事業化された。また国内の貝類の現況調査をもとに、環境省国内希少野生動物種（貝類）の選定に貢献した。

鹿野 秀一 SHIKANO Shuichi 准教授

生年月日 / 1954 年 01 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

出身学校

東北大学・理学部・生物学 1977 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・生物学博士課程 1982 年修了

取得学位

理学博士東北大学 1982 年

略歴

1982 年～1986 年 東北大学理学部 教務系技官

1986 年～1995 年 東北大学理学部 助手

1995 年～1997 年 東北大学大学院理学研究科 助手

1997 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

所属学会

日本生態学会、日本微生物生態学会、日本陸水学会

専門分野

微生物生態、環境動態解析、分子系統解析

研究課題

- ・マイクロコズムにおける環境変化に対する相互作用の影響
- ・細菌群集の系統的多様性
- ・湖沼の環境と食物網

研究キーワード

群集、生態系、環境、湖沼、湿地

行政機関・企業・NPO 等参加 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(地方公共団体) 宮城県 伊豆沼 内沼自然再生協議会 委員 2008 年 4 月～現在

学内活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

環境・安全委員会安全管理専門委員会・危険物質総合管理システム専門部会委員

学位授与数 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

修士 1 人

担当授業科目 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(学部教育)

生物学演習 I 2004 年～現在

環境生物学 2005 年～現在

動物生態学実習 2001 年～現在

生物学へのアプローチ II 2002 年～現在

(大学院)

生態学合同講義 2008 年～現在

(その他)

Evolution and Ecology 2000 年～現在

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

・吸虫類寄生虫のセルカリア幼生が湿原食物網内で果たす役割：水生動物による摂食量の評価 [第 61 回日本生態学会大会]

(2014 年 3 月 14 日～2014 年 3 月 17 日, 広島) 口頭 (一般)

・炭素 窒素安定同位体比からみた宮城県伊豆沼のブルーギルの食性 [第 61 回日本生態学会大会]

(2014 年 3 月 14 日～2014 年 3 月 17 日, 広島) ポスター (一般)

・炭素 窒素安定同位体比を用いた浅い富栄養湖伊豆沼における魚類群集の餌資源推定 [日本陸水学会第 79 回大会]

(2014 年 9 月 10 日～2014 年 9 月 13 日, つくば市) ポスター (一般)

・中禅寺湖のサケ科魚類 3 種における放射性セシウム 137 濃度 - 原発事故 1 年後の汚染状況 - [平成 26 年度日本水産学会秋季大会]

(2014 年 9 月 20 日～2014 年 9 月 22 日, 福岡) 口頭 (一般)

・伊豆沼におけるブルーギルの食性 [第 9 回伊豆沼 内沼研究集会]

(2015 年 2 月 21 日～2015 年 2 月 21 日, 栗原市) 口頭 (一般)

- ・伊豆沼におけるメタン食物連鎖 [第 9 回伊豆沼 内沼研究集会]
(2015 年 2 月 21 日～2015 年 2 月 21 日, 栗原市) 口頭 (一般)

その他研究活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集の調査 (フィールドワーク)
2001 年～現在
- ・宮城県 伊豆沼における環境と食物網解析 (フィールドワーク) 2006 年～現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

基盤研究 (C) 2013 年 4 月～2016 年 3 月
[浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響]

その他の競争的資金獲得実績 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

二国間交流事業 共同研究 2012 年 4 月～2014 年 3 月
[西シベリアの河口域生態系における食物網内の吸虫類寄生虫の摂食リンク]

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Ontogenetic changes in the trophic position of a freshwater Unionidae mussel.
[Fundamental Applied
Limnology, 184, (2014), 341-349]
N Yasuno, K Shindo, Y Takagi, G Kanaya, S Shikano, Y Fujimoto, T Shimada, E
Kikuch (査読有り)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

宮城県北部平地に位置する伊豆沼において、動物プランクトンや魚類の炭素安定同位体比の値が経年的に低下する傾向が見られ、このことは低い炭素安定同位体比の値をもつメタンが食物網の基点するメタン食物連鎖の寄与が増していることを示している。また、近年夏期のハス群落の面積が拡大し湖面の約 70% も覆い尽くされるようになり、ハス群落内での水中の酸素濃度の低下も観察されることから、ハス群落拡大によるメタン生成が増加していることが考えられる。そこで、昨年度に引き続き本年度も、科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響」 (平成 25 年度～27 年度) の経費を用いて、伊豆沼におけるハス群落内外のメタン濃度測定 of 定期的な調査を継続し、これに加えてメタン食物連鎖の起点となるメタン酸化細菌の群集組成の解析も行った。メタンは堆積物中だけでなく、湖水中においても検出され、水中のメタン濃度はハス群落内の方が群落外より有意に高かった。メタン酸

化細菌群集組成は、堆積物中ではハス群落内外ともに季節を通して変化がみられなかったが、水中においてはハスの生育時期にバス群落内外で差がみられた。ハス群落の拡大は、水中におけるメタン量を増加させるだけでなく、メタン酸化細菌群集の組成に影響を与え、伊豆沼の食物網におけるメタン食物連鎖の寄与にも影響していることが示唆された。

また、伊豆沼においては、炭素・窒素安定同位体比の解析を行うことにより、侵入種のブルーギルとコイ科在来魚類および二枚貝のカラスガイのエサ資源解析を行った。ブルーギルは、動物プランクトン、付着藻類、付着ユスリカ、水生昆虫幼虫などをエサとして利用していたが、それぞれのエサへの依存度は、春には水生昆虫幼虫、秋から冬にかけては付着藻類や付着ユスリカが高いことが示された。さらに、同所的に生息する在来魚類のうちタモロコは、ブルーギルの食性と異なるようにその食性が経年的に変化したことから、ブルーギルとのエサの重複を避けるようなシフトが起きた可能性が示唆された。また、カラスガイの安定同位体比の分析から、殻長の小さい貝は主に植物プランクトンを食べているが、殻長が 14 cm 以上の大きい貝は動物プランクトンを食べるように栄養段階が変化することが判明し、その内容は Fundam. Appl Limnol. 誌 (2014) に掲載された。

日本学術振興会・二国間交流事業（ロシアとの共同研究）「西シベリア河口域生態系における食物網内の寄生虫類の摂食リンク」（平成 24 年度～平成 25 年度）の経費を用いて、西シベリア・チャニー湖においてロシア科学アカデミーシベリア支部・動物分類学生態学研究所の研究者と共同研究を行ってきたが、今年度はそれらの結果のデータ解析を行い、研究結果をまとめた。具体的には、巻き貝に寄生する吸虫類からセルカリア幼生が放出される速度について温度条件や光条件を変えた実験結果と、放出されたセルカリア幼生が動物プランクトン、水生動物、貧毛類などの動物によって捕食される摂食速度を実験的に求め、これらの結果を炭素量換算することにより、食物網内での吸虫類幼生を介したリンクの見積もりができた。これまでの研究活動で得た知見を盛り込んで、食物網に寄生関係を組み込むことに関し、平成 27 年度～平成 28 年度日本学術振興会・二国間交流事業（ロシアとの共同研究）「西シベリアにおける寄生虫を組み込んだ湿地食物網の栄養構造」の研究計画調書を作成して応募したところ、採択を得た。2015 年度はこの委託経費を用いてロシアにおいて湿地食物網に寄生虫を組み込んだ栄養構造を解明する調査研究を行う予定である。

石渡 明 ISHIWATARI Akira 教授

生年月日 / 1953 年 04 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

横浜国立大学教育学部地学科 1975 年卒業

出身大学院

金沢大学大学院理学研究科地学専攻修士課程 1978 年修了

東京大学大学院理学系研究科地質学専攻博士課程 1981 年修了

取得学位

理学博士東京大学 1981 年

略歴

1981 年～1982 年 東京都立明正高等学校教諭

1982 年～1985 年 キュリー夫妻（パリ第 6）大学構造地質学会客員主任助手

1986 年～1988 年 金沢大学理学部助手

1988 年～1992 年 金沢大学理学部講師

1992 年～2003 年 金沢大学理学部助教授

2003 年～2008 年 金沢大学理学部教授

2008 年～2014 年 東北大学東北アジア研究センター教授

研究経歴

1973 年～2014 年 日本、アルプス、ロシア極東のオフィオライトの地質学と岩石学

所属学会

日本地質学会、日本鉱物科学会、日本地球惑星科学連合、日本火山学会、東京地学協会、地学団体研究会、地学教育学会、米国地質学会、米国地球物理連合

学会活動

日本鉱物科学会 1986 年～2014 年, 学会誌「岩石鉱物科学」編集委員 1995 年～2014 年, 評議員 1995 年～2014 年, 「Journal of Mineralogical and Petrological Sciences」編集委員 2009 年～2014 年

日本地質学会 1975 年～2014 年，地質学雑誌編集委員 1999 年～2003 年，評議員 2002 年～2008 年，執行理事 2009 年～2014 年，評議員会議長 2004 年～2006 年，英文学術誌「Island Arc」編集委員長 2004 年～2007 年，同誌編集顧問 2008 年～2014 年，会長 2012 年～2014 年

地学団体研究会 1978 年～2014 年，全国運営委員 1989～1992，北陸支部長 2006～2008 年

Geological Society of America 2001 年～2014 年 「GSA Bulletin」編集委員 2006 年～2008 年

日本地球惑星科学連合 理事・代議員 2009 年～2014 年，2013 年大会実行委員長

専門分野

岩石・鉱物・鉱床学、地質学、地球宇宙化学

研究課題

- ・造山帯のオフィオライトの地質学的研究
- ・中部・東北日本の第三紀島弧火山岩によるマントル・プローブ
- ・アジア北東端のオフィオライトと随伴岩類：北極圏東部の岩石、構造、広域地質対比

研究キーワード

地質学、岩石学、地球化学、火山岩、深成岩、変成岩、オフィオライト、造山帯、緑色岩

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

Integrated Ocean Drilling Program 理事 2011 年 06 月～2014 年

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員
(2014 年 5 月～2014 年)

文部科学省科学技術・学術審議会専門委員（海洋開発分科会）
(2013 年 4 月～2014 年)

担当授業科目（2013 年 4 月～2014 年 3 月）

（全学教育）

セミナーⅡ 2008 年～2014 年

地球物質科学 2008 年～2014 年

(学部教育)

地球の科学 2008 年～2014 年

セミナー I 2008 年～2014 年

火山物理化学 2008 年～2014 年

岩石学実習 II 2010 年～2014 年

(大学院教育)

変成岩特論 I 2008 年～2014 年

セミナー 2008 年～2014 年

課題研究 2008 年～2014 年

変成岩特論 II 2008 年～2014 年

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Plume-type ophiolites, large igneous provinces, and geology of the Earth-like planets[International Workshop on: Ophiolites, Mantle Processes and Related Ore Deposits]

(2014 年 4 月 14 日～2014 年 4 月 15 日, 中国, 中国北京) 口頭 (招待 特別)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

・宮城県岩沼市に見られる玄武岩質安山岩溶岩流の内部分化過程：分結脈から柱状節理へ
[日本地球惑星科学連合 2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)

・ロシア極東、ウスチペラヤ オフィオライトの 2 つのタイプのウェブステライト：その
起源と意義 [日本地球惑星科学連合 2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)

・岩中の板状節理の形成メカニズムに関する野外地質学的考察 [日本地球惑星科学連合
2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)

・御齋所変成岩中に露出する超苦鉄質岩の岩石学：御齋所変成岩は沈み込み帯域オフィ
オライトか？ [日本地球惑星科学連合 2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) ポスター (一般)

総説・解説記事 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 日本地質学会初代会長神保小虎小伝. [日本地質学会日本地質学会 News, 17 (4),
(2014), 12-13]

2) 石渡明・荒井章司・山本伸次 (2014) 国際オフィオライト・マントル過程・関連鉱床

研究ワークショップ報告。日本地質学会 News, 17(5), 7-7.

3) 石渡明 (2014) 新 IODP (International Ocean Discovery Program) の運営体制について。J-DESC NEWS, Vol. 7, 1-2.

4) Ichiyama, Y., Ishiwatari, A. (2014) Accreted oceanic plateaus in Japan. LIP Of The Month. (Aug. 2014). IAVCEI LIPs Commission.

受賞・その他特記事項 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

米国地質学会 (Geological Society of America) フェロー (特別会員) 2014 年 6 月 12 日

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Jurassic plume-origin ophiolites in Japan: accreted fragments of oceanic plateaus. [Contributions to Mineralogy and Petrology, 168,(2014), 1019, DOI: 10.1007/s00410-014-1019-1]

Yuji ICHIYAMA, Akira ISHIWATARI, Jun-Ichi KIMURA, Ryoko SENDA, Tsuyoshi MIYAMOTO

2) Ferropicrite from the Lalibela area in the Ethiopian large igneous province. [Journal of Mineralogical and Petrological Sciences, 109, (8), 191-207]

Minyahl Teferi DESTA, Dereje AYALEW, Akira ISHIWATARI, Shoji ARAI.

Akihiro TAMURA

3) 宮城県北部, 石越安山岩の地質・岩石学的特徴とマグマプロセス. [岩石鉱物科学, 印刷中]

佐藤景, 石渡明

(2014 年 9 月離職)

平野 直人 HIRANO Naoto 准教授

生年月日 / 1973 年 08 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

山形大学理学部地球科学科 1996 年卒業

出身大学院

筑波大学大学院博士課程地球科学研究科 2001 年修了

取得学位

博士（理学）

略歴

2001 年～2002 年 東京大学海洋研究所
 2002 年～2004 年 東京大学地震研究所
 2002 年～2006 年 東京工業大学理学部・理工学研究科
 2006 年～2007 年 カリフォルニア大学スクリプス海洋研究所
 2007 年～2008 年 東京大学理学部地殻化学実験施設
 2008 年～2008 年 金沢大学フロンティアサイエンス機構
 2008 年～現在 東北大学東北アジア研究センター

研究経歴

1995 年～2002 年 マリアナ海溝に沈み込む海山の年代層序
 1996 年～2003 年 房総半島南部嶺岡帯玄武岩類による第三紀プレート配置の復元
 2000 年～現在 環伊豆衝突帯のオフィオライト岩類によるプレート配置の復元
 2001 年～現在 新種の火山・プチスポットの成因
 2002 年～現在 西太平洋プレート上の海山群の年代学

所属学会

日本鉱物科学会、日本地球化学会、日本地質学会

学会活動

日本地球化学会 広報委員 2012 年～現在

日本地球化学会 広報委員 2014 年～現在

日本地質学会 代議員（地方支部区）2014 年～現在

専門分野

地球宇宙化学、岩石・鉱物・鉱床学、地質学、固体地球惑星物理学

研究課題

- ・太平洋プレート上の新種の火山・プチスポット海底火山
- ・新種の火山から放出される地球の炭素循環
- ・沈み込むプレートの変形と火山発生
- ・根室帯白亜紀前弧火成活動の成因解明

研究キーワード

火山・プレート・玄武岩・海山・太平洋

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

海洋と地球の学校（講演会 セミナー）2014 年 9 月～2014 年 9 月

東北アジア研究センター公開講演会（公開講座）2014 年 12 月～2014 年 12 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

J-DESC IODP 部会執行部執行委員 2013 年 04 月～2015 年 05 月

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（全学教育）

地球物質科学 2014 年～2014 年

（学部教育）

野外調査演習 2009 年～現在

野外調査演習 2010 年～現在

同位体地球科学 2014 年～2014 年

地球と物質のダイナミックス 2014 年～2014 年

地球の科学 2014 年～2014 年

夏期フィールドセミナー 2014 年～2014 年

（大学院教育）

固体地球化学 岩石学特論 I 2014 年～2014 年

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Petit-spot and geology in NW Pacific[2014 Annual Meeting, Geological Society of America]

(2014 年 10 月 19 日～2014 年 10 月 22 日, カナダ, Vancouver) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

・ プチスポットの配列と海洋プレートの変形構造 [日本地球惑星科学連合 2014 年大会]
(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 千葉) 口頭 (一般)

・ 北西太平洋のアウトラーイズ手前で活動したプチスポット初生マグマの最終平衡温度
圧力条件 [2014 年度日本地球化学会年会](2014 年 9 月～2014 年 9 月, 富山) 口頭 (一般)

その他の競争的資金獲得実績 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

東レ科学技術研究助成 2012 年 4 月～2015 年 3 月

[新種の火山から放出される二酸化炭素と地球の炭素循環]

補助金、受託 共同研究費、寄附金以外の研究費 2014 年 6 月～2015 年 5 月

[海洋と地球の学校—大学生 大学院生のための地学研究普及活動]

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Petit-spot and geology in NW Pacific. [Geological Society of America Abstracts with Programs, 46 (6), (2014), 657-657]

Naoto HIRANO, Masao NAKANISHI, Shiki MACHIDA, Junji YAMAMOTO, Teruaki ISHII

2) Melt-rich lithosphere-asthenosphere boundary inferred from petit-spot volcanoes. [Geology, 42 (11), (2014), 967-970]

Junji Yamamoto, Jun Korenaga, Naoto Hirano, Hiroyuki Kagi

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

沈み込む太平洋プレート上で発見されたプチスポット火山の発見 (Hirano et al., 2006, Science) によって地球の新型火山の提唱がなされ、その後世界各地で続々とプチスポットの発見がなされ、その世界的普遍性が注目されている (Hirano et al., 2013; Valentine & Hirano, 2010; Uenzelmann-Neben et al., 2012 など)。これまで確認された三陸沖のプチスポット火山は、日本海溝軸部 (Site A) と東経 150 度周辺海域 (Site B) であるが、それら海域を離れると火山が存在しない。このことは、世界的には普遍であっても局所的にはどこにでもあるとは言えず、プチスポット発生の原因が局所的なプレート構造にも起因している可能性を示唆する。また、Site A の南方、福島沖 (Site C)

(Hirano et al., 2008) では 80 以上のプチスポット火山が太平洋プレートの変形構造に沿うように配列しており、これら変形構造とプチスポット火山の活動時期との関連を調べるため、本年度 4 月に平野が首席研究員となり航海が施行された（海洋研究開発機構 JAMSTEC 研究船よこすか・YK14-05 航海）。航海では全 9 潜航のうち、8 潜航で 10 のプチスポット火山が確認された。得られた溶岩試料のマンガンクラストの厚さや、急冷ガラス部のパラゴナイト変質厚から類推される各火山の噴出年代は若いものから数百万年以上さかのぼる古いものまで存在し、調査した 10 の火山の地理的分布にも傾向が見られた。これら得られた噴出岩の年代測定を行うため、京都大学理学部、京都大学原子炉実験所、京都フィッシュントラック、東京大学地殻化学実験施設との共同研究を進めた。本研究は、地球惑星科学連合大会（5 月千葉）および米国地質学会（10 月バンクーバー）において講演を行った。米国地質学会では、現地で議論を交わしたマイアミ大学の Yildirim Dilek 教授との共同研究の話が進み、2015 年度 5 月、東北大学に招聘するにまで話が進んでいる。実りある学会発表となった。

地球上の新型火山・プチスポット海底火山 (Hirano et al., 2006, Science) が海底で放出する二酸化炭素 (CO₂) 量を見積もり、その成果が Geology に掲載されたのは昨年であった (Okumura & Hirano, 2013)。本航海でも CO₂ が原因である高い発泡度の溶岩が採取され、高濃度の CO₂ が含有されている特異なマグマである事が確認された。現在溶岩中の CO₂ 濃度の分析を進め、起源マントルの化学組成の分析も進めている。また、海洋研究開発機構および京都大学との共同研究により、溶岩の水と CO₂ 成分を付加した溶岩の溶融実験（複数飽和相実験）を行ない、高濃度の炭素を考慮したプチスポットマグマの生成条件を求める実験を積み重ねた。これによって地球全体（マントル～プレート～海洋～大気）の炭素循環が明らかになることが期待される。本課題の重要事項として、マグマの起源となったアセノスフェア状態を知る必要がある。今年度はマグマの中に含まれる捕獲鉱物の温度圧力計の結果から、アセノスフェアの深さ（およそ 100km）まで外挿した温度により、アセノスフェアの溶融状態を見積もった。本研究は、いままで直接データが無かった沈み込むプレートの温度圧力構造を報告した重要なものとして、国際学術誌 Geology から論文が報告された (Yamamoto et al., 2014)。

本年度行った同位体地球科学や地球物質科学など各種講義において、基本理論の講義内容に付け加える具体例として、これら最新研究を紹介し、聴講学生の興味を引き出すよう努めている。また、全国の大学生・大学院生を対象とした「海洋と地球の学校」や、一般向けの「東北アジア研究センター公開講演会」において講演も行い、海洋底の最新研究をアピールした。

後藤 章夫 GOTO Akio 助教

生年月日 / 1966 年 06 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

北海道大学・理学部・地球物理 1990 年卒業

出身大学院

北海道大学・理学研究科・地球物理学博士課程 1997 年修了

取得学位

博士（理学）北海道大学

略歴

1999 年～2006 年 東北大学東北アジア研究センター 助手

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教（職階名変更による）

研究経歴

1990 年～現在 マグマレオロジーの実験的研究

1999 年～現在 爆発的火山噴火の実験的研究

2003 年～現在 火山無人探査システムの開発

2006 年～現在 爆発的火山噴火の観測

所属学会

日本火山学会、日本鉱物科学会、日本地球惑星科学連合、American Geophysical Union

専門分野

火山学

研究課題

マグマのレオロジー

火山爆発

研究キーワード

マグマ、レオロジー、火山、爆発

担当授業科目 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(全学教育)

自然科学総合実験 2004 年～現在

(学部教育)

夏期フィールドセミナー 1999 年～現在

地球惑星物質科学実習 V 2007 年～現在

野外調査演習 2012 年～現在

フィールドセミナー I 2012 年～現在

(その他)

Dynamics of the Earth 2013 年～現在

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Study on monitoring of volcanic activity using $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ ratios in crater lake and hot spring at Zao volcano[AMS-13]

(2014 年 8 月 24 日～2014 年 8 月 29 日, フランス, Aix en Provence) ポスター (一般)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・圧電ブザーとノートパソコンを用いた地震波探査教材の開発 [日本地球惑星科学連合 2014 年大会] (2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)
- ・水準測量より明らかにした東北地方太平洋沖地震による鳴子地域の上下地殻変動 [日本地球惑星科学連合 2014 年大会] (2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)
- ・蔵王山熱水系における $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ を用いた火山活動モニタリングの試み [日本地球惑星科学連合 2014 年大会] (2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) その他
- ・蔵王火山御釜湖沼および丸山沢噴気地熱地帯温泉水の地球化学分析 [日本第四紀学会 2014 年大会] (2014 年 9 月 5 日～2014 年 9 月 9 日) ポスター (一般)
- ・蔵王山火山湖および温泉における $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ 比の分布 [日本陸水学会第 79 回大会] (2014 年 9 月 10 日～2014 年 9 月 13 日) ポスター (一般)
- ・蔵王山 丸山沢噴気地熱地帯の噴気温度測定と温泉水化学分析 [日本火山学会秋季大会] (2014 年 11 月 2 日～2014 年 11 月 4 日) ポスター (一般)
- ・ヨウ素同位体比を用いた蔵王山火山活動のモニタリング研究 [日本質量分析学会 2014 年度同位体比部会] (2014 年 11 月 26 日～2014 年 11 月 28 日) ポスター (一般)

- ・蔵王山における火山活動とヨウ素同位体比の変動 [第 17 回 AMS シンポジウム]
(2015 年 3 月 2 日～2015 年 3 月 3 日) ポスター (一般)
- ・蔵王山火口湖ヨウ素同位体比の経時変化と火山活動に関する研究 [第 16 回「環境放射能」研究会] (2015 年 3 月 9 日～2015 年 3 月 11 日) ポスター (一般)

その他の競争的資金獲得実績 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

共同研究費 2014 年 4 月～2015 年 3 月 [溶岩流試料の室内実験による粘性係数測定と、野外観測値との比較に基づく、溶岩流流動機構の解明 ―その 2―]

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Wideband acoustic records of explosive volcanic eruptions at Stromboli: New insights on the explosive process and the acoustic source. [Geophysical Research Letters, 41 (11), (2014), 3851-3857] (査読あり)

A. Goto, M. Ripepe and G. Lacanna

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は前年度に引き続き、雲仙普賢岳平成溶岩の粘性係数測定と、蔵王火山の活動状況調査を行った。

雲仙普賢岳平成溶岩ロープの粘性係数は、観測から 1010 ～ 1010.5 Pa s と求められている。これに対し、石基ガラス組成のメルトの粘性係数は、実測で 800°C のとき 1012.5 Pa s と観測値より高い。水による粘性低下を考慮しても、結晶による粘性増加はそれを上回り、観測された低い粘性係数を説明できない (Goto, 1999)。前年度の実験で、溶岩試料の粘性係数は確かに観測値より高いことが確かめられ、溶岩ロープはニュートン流動以外のメカニズムで移動していたことが強く示唆された。しかしながら、同じ岩塊からの試料では結果に再現性があるにもかかわらず、全岩組成や岩石組織がほぼ同じ二つの岩塊で実験値が異なることや、粘性係数が時間に対して増加し、特に低応力では 10 時間までのランタイム内で一定値に収束しないなど、当初予想しなかった新たな問題が現れた。そこで 2014 年度は同じ普賢岳の溶岩ながら、空隙率などが異なる複数の岩塊で粘性係数を測定した。

いずれの試料でも、試験力 (圧縮力) を段階的に上げながらと下げながらの測定で、それぞれ時間に対して粘性係数の増加と低下が見られた。試験力変化に対しては上げ下げいずれでも短時間での弾性的変形が見られ、また試験力を下げた場合 (特に 1.8×10^5 Pa 以下の低い試験力) は数時間の測定中、縮みに転じない場合があるなど、粘弾性的挙動が見られた。しかし空隙率の高いパン皮状火山弾では、初めに 2mm 圧縮し、変形を保持した状態で応力緩和させてから試験力を段階的に変えたところ、粘性係数の時間

変化は極端に小さくなり、特に試験力を下げる実験では低い試験力でも速やかに伸びから縮み（粘性流動）に転じた。このことから、試験力を上げた時の時間に対する縮み速度の鈍化には、空隙の塑性的な圧密が含まれていると考えられる。

爆発的噴火で放出された緻密な火山弾は、どの試験力においてもほかの試料より粘性係数が低かった。890°Cの試験では、圧縮力を加えているにも関わらず、試料が縮みから伸びに転じる現象が観察された。実験後の試料には局所的な膨らみが見られ、CT画像よりそれが内部の発泡で生じていることがわかった。これらのことから、この試料は水を多く含むことでその粘性係数が他に比べて低かったことと、時間に対する粘性増加の一部は脱水で起こっていたことが推定される。

蔵王火山では、山頂火口湖の御釜と、噴気活動が見られる山腹の丸山沢噴気地熱地帯の調査を行った。また、噴火シナリオ作成ワーキンググループに加わり、過去の活動について文献調査をもとに評価した。

御釜では水温調査のほか、水の化学分析を行った。熱的な異常は見られない一方で、筑波大・松中哲也博士が中心となり行っているヨウ素同位体比（ $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ 比）の測定では、地震活動の活発化に伴って $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ 比が低下することが示された。現時点では検証の段階だが、 $^{129}\text{I}/^{127}\text{I}$ 比は地下深部からの流体供給で低下すると考えられることから、この変化が蔵王火山の活動と関係している可能性が示唆される。

丸山沢では、噴気温度の上昇は見られない一方で、全体としては噴気の勢いが徐々に増し、活動が活発化しているように見える。1939年～1943年の活動では、御釜でガス噴出や熱活動の活発化が見られるとともに、丸山沢でも噴気の増大が起こり、蔵王で最新となる1940年噴火もここで起こったとされる。また、1966年の活動活発化も丸山沢が中心で、地震発生や噴気活動の増大が見られた。これらのことから、次に噴火が起こるとした場合、御釜ではなく丸山沢である可能性も否定できない。

なお、1940年の噴火は2月に起こったとする説と4月に起こったとする説の二つがある。文献調査を行ったところ、丸山沢から500mほど離れた振子沢に、強いガスを放出する直径2mほどの火口状の地形が1940年の春に存在したという報告が見つかった。この地点では1939年秋に強い噴気があったという記述はあるものの、火口地形は報告されていない。このことから、1940年の噴火（恐らく小規模な水蒸気爆発）は2月と4月の2回あり、そのうち一方が振子沢で発生していた可能性がある。丸山沢ではこの時、高濃度の温泉の夥しい湧出が起こり、同様のことは1966年の活発化でも見られた。丸山沢同様、ここでも噴火が起こる可能性を考慮すべきであると考えられる。

宮本 毅 MIYAMOTO Tsuyoshi 助教

生年月日 / 1970 年 07 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

東北大学・理学部・地学科地学第二 1993 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・地学博士課程 1997 年中退

取得学位

博士（理学）東北大学 2012 年

略歴

1997 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助手

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

所属学会

日本火山学会、日本鉱物科学会、日本地質学会

専門分野

火成岩岩石学、自然災害科学、火山地質学

研究課題

- ・霧島火山群の地質学的・岩石学的研究
- ・白頭山巨大噴火の火山学的研究
- ・中国・白頭山における火山伝承に関する研究
- ・白頭山の噴火年代に関する研究
- ・火山灰土壌中から小規模噴火の痕跡を読む試み

研究キーワード

火成岩岩石学、火山地質

担当授業科目 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

(学部教育)

野外調査演習 1997 年～現在

地学実験 2007 年～現在

地球惑星物質科学実習 I 2007 年～現在

地殻岩石学実習 I 2007 年～現在

地殻岩石学実習 II 2013 年～現在

岩石学実習 II 2013 年～現在

夏期フィールドセミナー 2014 年

(全学教育)

自然科学総合実験 2004 年～現在

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

マグマ水蒸気噴火を生じない珪長質火砕噴火は外来水がなかったことを意味するか

[日本火山学会] (2014 年 11 月 2 日 福岡大学) 口頭 (一般)

その他の競争的資金獲得実績 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

受託研究 (2015 年 1 月～ 3 月)

[蔵王町ジオガイド養成のための蔵王地域地質の基礎資料の作成]

研究論文 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

1) Jurassic plume-origin ophiolites in Japan: accreted fragments of oceanic plateaus.

[Contributions to Mineralogy and Petrology, 168, (2014)] (査読有)

Yuji Ichiyama, Akira Ishiwatari, Jun-Ichi Kimura, Ryoko Senda, Tsuyoshi Miyamoto

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は、宮城県内の南三陸と蔵王の 2 つのジオパークの実現にむけて、それぞれの推進のための活動を行った。科研費の分担者として参加した南三陸ジオパーク(仮)は、宮城県沿岸地域を対象とするジオパーク構想である。今年度は主に松島湾周辺域についてのジオサイト設定とジオツアーの企画案作りを担当した。このジオサイト選定にあたり、松島湾周辺域に分布する中新世の地層群について地質調査を行ったが、その結果としてこれまで給源不明とされてきた松島湾域の火山性堆積物が現在の松島湾を中心としたカルデラ火山からもたらされた可能性を指摘し、行政区をこえた松島湾岸地域の地質的なつながりについて言及を行った。市町村での連携が必要とされるジオ

パークの推進において、松島湾地域を一体とした地質的な共通性を提供することができた。一方で、受託研究として参加した蔵王ジオパークでは、ジオパーク認定後の活動の主力となるジオガイド養成を主眼とした。中期中新世以降の東北日本を中心とした日本列島の形成史について、これまで公表されている文献を基にまとめ作業を行い、ガイド養成のための資料の作成を行った。蔵王地域の日本列島形成に対しての位置づけを明確にすることができ、ガイド養成に活用されるものを提供することができたと考えられる。

これまで数年来にわたって大学院生とともに研究を行ってきた十和田火山の平安噴火についてまとめ作業を開始した。これまでの成果として、平安噴火の活動推移と噴火前の火口域の状況復元から、十和田湖の活動では、湖水が潤沢にある状況でマグマ噴火を行った可能性が高いことが判明した。これは従来、地質情報から過去の地形等を復元する際に、マグマ噴火＝陸域（水がない）とされてきたが、この仮定が必ずしも妥当ではないことを示すものである。

工藤 純一 KUDOH Jun-ichi 教授

生年月日 / 1955 年 12 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門環境情報科学研究分野

出身学校

秋田大学・鉱山学部・金属材料 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・金属工学博士課程 1987 年修了

取得学位

工学修士秋田大学 1982 年

工学博士東北大学 1987 年

略歴

1986 年～1987 年 東北大学選鉱製錬研究所 助手

1991 年～1996 年 東北大学大型計算機センター 助手

1996 年～2001 年 東北大学大型計算機センター 助教授

2001 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

所属学会

電子情報通信学会、情報処理学会、IEEE、画像電子学会、日本アレルギー学会

学会活動

IEEE TGARS 論文誌査読員 2004 年～現在

専門分野

情報システム学（画像処理）、環境動態解析

研究課題

- ・森林火災から発生する二酸化炭素削減研究
- ・シベリア画像データベースシステムの構築
- ・東アジア地域の大気汚染解析
- ・シベリア森林火災検出システムの構築

- ・リアルタイムシベリア環境モニタリングシステム
- ・1メートル級の衛星画像処理
- ・衛星画像を用いた黄砂の抽出
- ・大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想
- ・越境大気汚染衛星画像データベース

研究キーワード

ノア、MODIS、NPP、画像処理、リモートセンシング、シベリア、森林火災、二酸化炭素削減

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

NPO 法人シベリア研究所（N P O） 理事長 2006 年 2 月～2014 年 9 月

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

学友会茶道部部長 2003 年 4 月～現在

評価分析室員 2004 年 4 月～現在

ロシア交流推進室室員 2009 年 11 月～現在

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（大学院教育）

コンピュータアーキテクチャ特論 1996 年～2015 年

画像理解学 2001 年～現在

情報基礎科学ゼミナール 2001 年～現在

情報基礎科学研修 A 2001 年～現在

情報基礎科学 B 2001 年～現在

博士基盤研修 2001 年～現在

博士専門研修 A 2001 年～現在

博士専門研修 B 2001 年～現在

博士ゼミナール 2001 年～現在

広域情報処理論 2013 年～現在

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・越境大気汚染モニタリングのための情報共有システム [日本リモートセンシング学会 第 56 回学術講演会] (2014 年 5 月 15 日～2014 年 5 月 17 日, つくば市) 口頭 (一般)
- ・衛星画像を用いた越境大気汚染物質と黄砂の観測—2014 年冬季観測結果— [第 21 回

大気環境学会北海道東北支部学術集会](2014 年 11 月 14 日～ 2014 年 11 月 14 日, 仙台市) 口頭 (一般)

国際会議主催・運営 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

- ・東北大学・モスクワ大学数学ジョイントセミナー (2015 年 2 月 17～19 日, モスクワ大学)
- ・東北大学・モスクワ大学 I T ジョイントセミナー (2015 年 3 月 5～6 日, 東北大学大学院情報科学研究科)

その他研究活動 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

森林火災の管理による CO2 排出量取引構想 (フィールドワーク) 2009 年～現在
森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット (フィールドワーク) 2011 年～現在

研究論文 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

1) 越境大気汚染モニタリングのための情報共有システム . [日本リモートセンシング学会第 56 回学術講演会論文集 , (2014), (2014), 71-72] 「査読有」

永谷泉, 工藤純一, 柳澤文孝

2) Monitoring results of 2013 and 2014 transboundary Asian dust events in Japan using MODIS dust indices.[Proceedings of the 35th Asian Conference Remote Sensing, (2014)] 「査読有」

I.Nagatani and J. Kudoh

3) 衛星画像を用いた越境大気汚染物質と黄砂の観測—2014 年冬季観測結果—. [第 21 回大気環境学会北海道東北支部学術集会講演要旨集 , (2014.11), (2014), 28-29] 「査読有」

永谷泉, 柳澤文孝, 工藤純一

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

- ・これまでの越境大気汚染モニタリングの研究活動で得られた成果を平成 27 年度科学研究費助成事業 (研究成果公開促進費) データベースに申請したところ、採択を得た。
- ・ロシア学術交流の活動については、世界展開力事業 (ロシア) 申請書の作成を支援し、採択を得た。また、この事業によりモスクワ大学で数学ジョイントセミナー、および、本学で I T ジョイントセミナーを開催しその主催運営にあたった。さらに、第 5 回日露学長会議準備の支援をはじめ、本学とモスクワ大学間の交流の窓口役を果たした。平成 27 年度はこれまでの活動成果が大きな実を結ぶものと期待している。

佐藤 源之 SATO Motoyuki 教授

生年月日 / 1957 年 12 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

東北大学・工学部・通信工学 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学系研究科・情報工学専攻博士課程 1985 年修了

取得学位

工学博士東北大学 1985 年

略歴

1985 年～1989 年 東北大学 助手（工学部）
 1988 年～1989 年 ドイツ連邦国立地球科学資源研究所
 1989 年～1990 年 東北大学 講師（工学部）
 1990 年～1997 年 東北大学 助教授（工学部）
 1997 年～現在 東北大学 教授（東北アジア研究センター）
 2008 年～2011 年 東北大学 ディスティングイッシュト・プロフェッサー
 2009 年～2013 年 東北大学 東北アジア研究センター センター長

研究経歴

1985 年～1990 年地熱開発のための地下計測技術
 1990 年～現在地中レーダ (GPR) の開発
 1997 年～現在合成開口レーダ (SAR) の応用
 2000 年～現在地表設置型レーダ (GB-SAR) による防災 減災技術
 2002 年～現在人道的対人地雷検知除去技術に関する研究と現場応用
 2005 年～現在バイスタティックレーダに関する研究
 2008 年～現在 3DGPR（3 次元地中レーダシステム）を用いた遺跡調査
 2012 年～現在アレイ型 GPR による震災復興のための社会貢献

所属学会

電子情報通信学会, The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE),

物理探査学会，日本地熱学会，資源・素材学会，Society of Exploration Geophysicists(SEG), European Association of Geoscientists & Engineers(EAGE), Applied Computational Electromagnetic Society, 日本文化財探査学会，石油検層学会 (SPWLA)

学会活動

物理探査学会 理事 2003 年～現在

石油検層学会 (SPWLA) 理事 (日本支部) 2003 年～現在

IEEE Geoscience and Remote Sensing Society AdCom member 2006 年～2014 年

電子情報通信学会 電磁界理論研究会 副委員長 2013 年～現在

IEEE Sendai Chapter 副会長 2014 年～2016 年

専門分野

電磁波応用計測、リモートセンシング、地下計測工学

研究課題

- ・ボアホールレーダ
- ・地中レーダ
- ・リモートセンシング
- ・人道的地雷検知除去
- ・合成開口レーダ
- ・地上設置型合成開口レーダ (GB-SAR)
- ・環境計測と防災 減災技術

研究キーワード

地中レーダ，地下計測，リモートセンシング，人道的地雷検知

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

- ・携帯電話の地中無線 (出演 執筆 テレビ フジテレビめざましテレビ) 2014 年 6 月
- ・蒲生海岸搜索活動 (出演 執筆 新聞 産経新聞) 2014 年 8 月
- ・震災の不明者遺跡調査用レーダーで搜索 (出演 執筆 テレビ NHK) 2014 年 9 月
- ・震災不明者地中レーダーで搜索 (出演 執筆 テレビ NHK) 2014 年 10 月
- ・御嶽山噴火 捜査に最新の金属探知機 (出演 執筆 テレビ NHK など) 2014 年 10 月
- ・石垣をレーダー探査 (出演 執筆 新聞 陸奥日報、東奥日報など) 2014 年 10 月
- ・キャンパス発 (出演 執筆 新聞 読売新聞) 2014 年 11 月

- ・行方不明者の一斉捜索（出演 執筆 テレビ）2015 年 2 月
- ・震災から 4 年（出演 執筆 テレビ）2015 年 3 月
- ・震災から 4 年（出演 執筆 新聞 河北新報など）2015 年 3 月

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・金属鉱業事業団 鉱物資源探査に係る研究会委員（その他）1995 年 2 月～現在
- ・電子情報通信学会電磁界理論研究会専門委員（その他）1996 年 10 月～現在
- ・Editorial Board, The International Journal of Subsurface Sensors and Applications（その他）1999 年 7 月～現在
- ・物理探査学会（その他）2004 年 5 月～現在
- ・出前授業（小中高との連携）2008 年 12 月～現在
- ・佐藤屋プロジェクト（大河原町）（その他）2012 年 4 月～現在
- ・夢ナビライブ（公開講座）2012 年 7 月～現在
- ・留学生の研究室見学（仙台高専）（小中高との連携）2014 年 5 月～2014 年 5 月
- ・危機管理産業展 2014（展示会）2014 年 10 月～2014 年 10 月
- ・JST さくらサイエンスプラン「カンボジアの農村と地雷問題」（講演会 セミナー）2014 年 11 月～2014 年 11 月
- ・東北大学イノベーションフェア 2014.Dec（展示会）2014 年 12 月～2014 年 12 月
- ・第 19 回「震災対策技術展」横浜（展示会）2015 年 2 月～2015 年 2 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・宮城県（地方公共団体）自然環境保全審議会 委員 2000 年 10 月～2014 年 9 月
- ・（独）石油天然ガス 金属鉱物資源機構（その他）金属資源探査技術開発研究会 委員 2005 年 4 月～現在
- ・環境省（国）国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会 委員 2006 年 5 月～現在
- ・（財）原子力環境整備促進 資金管理センター（その他）地層処分モニタリングシステム検討委員会 委員 2006 年 6 月～現在

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

学友会陸上競技部部長 2004 年 4 月～現在

学位授与数（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

学士 1 人

担当授業科目（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

（学部教育）

電磁気学 I 1991 年～現在

機械知能 航空研修 I 2004 年～現在

機械知能 航空研修 II 2004 年～現在

卒業研究 2004 年～現在

電磁気学 II 2005 年～現在

（大学院教育）

環境リモートセンシング学 2002 年～現在

地球環境計測学特論 2003 年～現在

地球システム エネルギー学修士セミナー 2003 年～現在

地球システム エネルギー学修士研修 2003 年～現在

修士インターンシップ 2003 年～現在

地球システム エネルギー学概論 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地球システム エネルギー学博士セミナー 2003 年～現在

地球システム エネルギー学博士研修 2003 年～現在

（他大学）

石巻専修大学（電磁波工学）1998 年～ 2014 年

物理探査解析法 2014 年～ 2014 年

（その他）

6th International Summer School on Radar/SAR 2014 2014 年～ 2014 年

地中レーダー技術 2014 年～ 2014 年

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

・電波科学による防災 減災への取り組み [災害 危機管理 ICT シンポジウム 2014]

(2015 年 2 月 6 日～ 2015 年 2 月 6 日) 口頭 (招待 特別)

・偏波レーダ技術とリモートセンシングへの応用 [資源素材学会 総合全国大会]

(2015 年 3 月 28 日～ 2015 年 3 月 28 日, 千葉) 口頭 (招待 特別)

国際会議主催・運営（2014 年 4 月～ 2015 年 3 月）

国連防災世界会議 パブリック フォーラム 電波科学による防災 減災と地方自治体との連携 (2015 年 3 月 15 日～ 2015 年 3 月 15 日, 仙台) [主催] 主催

国内会議主催・運営（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

電波科学と安全 安心

（2015 年 3 月 16 日～2015 年 3 月 16 日，仙台）[主催] 主催

その他研究活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- ・地中レーダによるウランバートルの地下水計測（フィールドワーク）1990 年～現在
- ・東北アジアにおける電磁波地下計測（フィールドワーク）1997 年～現在
- ・カンボジアにおける地雷除去活動（フィールドワーク）2009 年～現在
- ・GB-SAR による宮城県栗原市地滑りモニタリング（フィールドワーク）2011 年～現在
- ・アレイ型地中レーダ「やくも」による津波被災者搜索活動（フィールドワーク）2014 年～現在

受賞・その他特記事項（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

2014 Frank Frischknecht Leadership Award(SEG) 受賞（2014 年 10 月）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

基盤研究 (A) 2014 年 4 月～2019 年 3 月

[圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダ イメージングの効率化]

その他の競争的資金獲得実績（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

高度通信 放送研究開発委託開発 2012 年 7 月～現在

[建造物非破壊検査診断技術の研究開発]

高度通信 放送研究開発委託開発 2012 年 8 月～現在

[高度通信 放送研究開発委託開発]

高度通信 放送研究開発委託研究 2012 年 9 月～2016 年 3 月

[電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発]

堤防及び河川構造物（コンクリートまたは鋼構造）の点検 診断の高度化技術
研究開発 2013 年 4 月～2016 年 3 月

[堤防及び河川構造物の総合的な点検 診断技術の実用化に関する研究開発]

S I P（戦略的イノベーション創造プログラム）2014 年 12 月～2019 年 3 月

[地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング]

研究論文（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

- 1) Influence of heterogeneous soils and clutter on the performance of ground-

penetrating radar for landmine detection. [IEEE Trans. Geoscience and Remote Sensing, (2014)]

K. Takahashi, J. Igel, H. Preetz, and M. Sato (査読有)

2) 偏波 GB-SAR によるコンクリート壁内部損傷の非破壊センシングのための基礎実験 . [電気学会論文誌 A, 134(4), (2014), 166-172]

高橋一徳 , 岡村菜花 , 佐藤源之 (査読有)

3) Electromagnetic wave propagation through dense material and its in-situ evaluation methodologies. [Proc. Workshop on Wireless Monitoring Program, (2014)]
M. Sato (査読無)

4) 近距離ポーラリメトリック UWB-SAR による木造構造物の非破壊検査 . [信学技報 , (2014), 79-84]

飯塚泰 , コヤマクリスチャン , 高橋一徳 , 佐藤源之 (査読無)

5) Polarimetric near-range UWB SAR imaging for non-destructive testing of wooden walls. [電磁界理論研究会、EMT-14-82, (2014)]

Christian N. Koyama, Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato (査読無)

6) 電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 (25 年度成果) . [物理探査学会第 130 回 (平成 26 年度春季) 学術講演会 , (2014)]

佐藤源之、高橋一徳、クリスチャンコヤマ (査読無)

7) Polarimetric coherence optimization and its application for manmade target extraction in PolSAR data. [IEICE

Transactions on Electronics, E97-C (6), (2014), 566-574]

Shun-Ping Xiao, Si-Wei Chen, Yu-Liang Chang, Yong-Zhen Li and Motoyuki Sato (査読有)

8) 3D Ground Penetrating Radar to Detect Tree Roots and Estimate Root Biomass in the Field. [Remote Sensing, (2014)]

Shiping Zhu, Chunlin Huang, Yi Su and Motoyuki Sato (査読有)

9) Pi-SAR2 square-flight imaging of tsunami affected areas in Japan – surface parameter estimation by multiaspect super high-resolution PolSAR data. [Proc. EUSAR 2014, (2014), 724-727]

C. N. Koyama, H. Liu, M. and M. Sato (査読有)

10) Lessons learned from the deployment of dual sensor ALIS for humanitarian demining in Cambodia.

[UNMAS/GICHD Technology Workshop, Pretoria, South Africa, (2014)]

Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato (査読無)

- 11) Performance of demining sensors and soil properties. [UNMAS/GICHD Technology Workshop、 Pretoria, South Africa, (2014)]
Kazunori Takahashi, Holger Preetz, Jan Igel (査読無)
- 12) Near range radar and its application to near surface geophysics and disaster mitigation, ICEEG (invited talk).
[Proceedings of the 6th International Conference on Environmental and Engineering Geophysics, (2014)]
Motoyuki Sato (査読有)
- 13) High-resolution imaging of damaged wooden structures for building inspection by polarimetric radar. [Proc.GPR2014, (2014)]
H. Liu, C.N. Koyama, K. Takahashi and M. Sato (査読有)
- 14) Archaeological survey by GPR for recovery from 3.11 Great Earthquake and Tsunami in East Japan. [Proc.GPR2014, (2014)]
M.Sato, H. Liu, T.Komagino and K. Takahashi (査読有)
- 15) Optimization of Data Sampling and Image Reconstruction by GPR. [Proc. GPR2014, (2014)]
L. Yi, K. Takahashi, and M. Sato (査読有)
- 16) Archaeological survey by GPR for recovery from 3.11 Great Earthquake and tsunami in East Japan. [GPR2014,(2014), 25-30]
Motoyuki Sato, Hai Liu, Tomohiro Komagino, Kazunori Takahashi (査読有)
- 17) Modeling and Interpretation of Scattering Mechanisms in Polarimetric SAR: Advances and Perspectives. [IEEE Signal Processing Magazine, 31 (4), (2014), 79-89]
Si-Wei Chen, Yong-Zhen Li, Xue-Song Wang, Shun-Ping Xiao and Motoyuki Sato (査読有)
- 18) Optimization of data sampling and imaging reconstruction by GPR. [GPR2014, (2014), 634-637]
Li Yi, Motoyuki Sato, Kazunori Takahashi (査読有)
- 19) Fundamental study on NDT of building wall structure by radar. [Proc. of 7th European Workshop on Structural Health Monitoring, (2014)]
M. Sato, H. Liu, C. Koyama, and K. Takahashi (査読有)
- 20) Estimation of soil moisture and debris pile volume from Pi-SAR2(X) and Pi-SAR-L2 square-flight data. [Proc.IGARSS 2014, (2014), 1516-1519]
C. N. Koyama and M. Sato (査読有)
- 21) Investigation on near range SAR for inspecting of inner structure of buildings. [Proc. IGARSS 2014, (2014),2601-2604]

- M. Sato, H. Liu, K. Takahashi, and C. Koyama (査読有)
- 22) Investigation on near range SAR for inspecting inner structure of buildings. [IGARSS2014, (2014), 2601-2604]
- Motoyuki Sato, Kazunori Takahashi, Hai Liu, Christian N. Koyama (査読有)
- 23) Uniform polarimetric matrix rotation theory and its applications. [IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 52 (8), (2014), 4756-4770]
- Si-Wei Chen, Xue-Song Wang and Motoyuki Sato (査読有)
- 24) Array GPR “Yakumo” and Its Application to Archaeological Survey and Environmental Studies. [Proc.URSI General Assembly, (2014)]
- Motoyuki Sato (査読有)
- 25) Natural Disaster Damage Evaluation Using Fully Polarimetric Techniques with Spaceborne SAR Data. [Proc.URSI General Assembly, (2014)]
- Si-Wei Chen¹, Yong-Zhen Li¹, Xue-Song Wang¹, Motoyuki Sato (査読有)
- 26) データ分割による地表面設置型合成開口レーダ大気補正のための CS 検知法 . [信学技報 , (2014), 25-30]
- 高橋一徳、松本正芳、佐藤源之 (査読無)
- 27) Detection and mapping of UXOs by electromagnetic induction sensor and self-tracking total station.[FastTimes, 19 (3), (2014), 14-18]
- Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato (査読有)
- 28) 地雷検知レーダの性能と不均質土壌特性 . [エレクトロニクス講演論文集 C-1-16, 16, (2014)]
- 高橋一徳、ヤンイーゲル、ホルガーブレッツ (査読無)
- 29) Polarimetric UWB SAR for subsurface imaging of building structures. [Proc. of Asian Pacific Microwave Conference, (2014), 1025-1027]
- C. N. Koyama, K. Takahashi, Y. Iitsuka, and M. Sato (査読有)
- 30) Displacement measurement and monitoring with Ground-Based SAR; case study at Aratozawa. [Proc. of Asian Pacific Microwave Conference, (2014), 1022-1024]
- Lilong Zou, Kazunori Takahashi Motoyuki SATO (査読有)
- 31) スパースアレーを用いた近距離 SAR のイメージングの基礎検討 . [信学技報 , (2014), 101-106]
- 飯塚泰 , コヤマクリスチャン , 高橋一徳 , 佐藤源之 (査読無)
- 32) Advanced Borehole Radar for Hydrogeology. [AUG Fall meeting, (2014)]
- M. Sato (査読有)
- 33) Effective GPR Data Acquisition and Imaging. [AUG Fall meeting, (2014)]
- M.Sato (査読有)

34) Soil moisture measurements by Ground Penetrating Radar in Dry Areas. [Proc. of 2014 Workshop on ALRC Cooperative Research, (2014), 69-72]

M. Sato, C. Koyama, S. Kuroda, K. Takahashi, and H. Fujimaki (査読無)

35) 金属探知機における土壌磁気的特性の影響. [EMT-15-58、電子情報通信学会電磁界理論研究会、, (2015),299-303]

高橋一徳 (査読無)

36) Ground-penetrating radar for landmine detection. [Mine Action Seminar, Ankara, Turkey, (2015)]

Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato (査読無)

37) 瑞巖寺境内遺跡 瑞巖寺参道再生工事に伴う確認調査報告書 付章 レーダー探査. [松島町文化財調査報告書 第6集, (2015), 21-24] (査読有)

総説・解説記事 (2014 年 4 月～ 2015 年 3 月)

1) 震災復興を推進するアレイ型地中レーダ「やくも」による遺跡計測. [日本非開削技術協会 No-Dig Today, 88,(2014), 19-24]

佐藤源之

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は科研費を中心とする地雷除去活動の展開、NICT 受託研究による被災木造建造物の非破壊検査技術、地中レーダによる震災復興の促進という 3 つの研究を主軸に、数多くの研究を推進した。これ以外にも、GB-SAR による地滑りモニタリング、衛星・航空機 SAR の利用など多角的な研究を合わせて行ってきた。

(被災木造建造物の非破壊検査技術)

社会インフラの老朽化と、そのための検査技術に対する要求は急激な高まりを見せている。こうした問題を解決するためにレーダ技術を利用するための研究が続けている。木造建造部に限らず、コンクリート構造物などへの適用をめざしている。

(震災復興のための地中レーダー (GPR) の利用)

地雷除去活動の展開、と被災木造建造物の非破壊検査技術などはレーダ装置の開発と利用手法に関する研究であるのに対して、地中レーダによる震災復興の促進は被災地を中心とした遺跡調査を実施する実践的な研究活動である。この研究は、将来的に東北アジア研究センターが文化財の保護ならびに活用を軸とした研究を展開することを期待し、また私自身がこうした研究を推進するために進めた事業である。まず、総長裁量経費を

獲得し、遺跡調査推進のための活動費とした。また、センター制度であるプロジェクト研究ユニットとして「減災をめざした電波科学研究ユニット」を新たに組織し、奈良文化財研究所などとの連携を強めると共に、宮城県文化財保護課などを通じた被災地での活動を展開した。こうした活動は、すべてセンター外の資金を獲得して行い、センター経費は全く使用していない。

以下に、本活動に関する平成 26 年度の出張実績を掲げる。震災復興に直接関わらない遺跡調査についても、技術開発の観点から有用と判断した場合、積極的に協力している。

2014

- 4 月 30 日 瑞巖寺参道津被災地域遺跡計測現地打ち合わせ
- 5 月 14 日 南相馬市教育委員会 遺跡調査現地打ち合わせ
- 5 月 15 日 瑞巖寺参道 GPR 遺跡計測
- 6 月 10-11 日 岩手県二戸町九戸城址 GPR 計測
- 8 月 6 日 南蒲生津波被災者 GPR 搜索打ち合わせ
- 8 月 10-11 日 南蒲生津波被災者 GPR 搜索
- 9 月 10-11 日 釜石市片岸海岸津波被災者 GPR 搜索
- 10 月 1 日 福島県警津波被災者搜索現地打ち合わせ
- 10 月 11 日 相馬市原釜海岸津波被災者 GPR 搜索
- 10 月 23-24 日 弘前城 GPR 計測
- 11 月 11 日 新地町大戸浜津波被災者 GPR 搜索
- 12 月 11 日 名取市閑上津波被災者 GPR 搜索

2015 年

- 2 月 11 日 福島県浪江町 津波被災者 GPR 搜索
- 3 月 11 日 石巻市、宮古市、浪江町などでの搜索

加えて平成 26 年度は宮城県、福島県、岩手県の各県警と協力した津波被災地域の搜索活動を実施した。これまでの警察やボランティアによる砂浜搜索は砂浜表面を目視で搜索するにとどまっていたが、地中レーダ (GPR) を使用することで、深さ 50cm から 1m 程度に、津波によって堆積した遺留物が非常に多く残っていることが確認でき、今後の搜索の可能性を広げられることを実証した。

震災復興に直接関わらない遺跡調査についても、技術開発の観点から有用と判断した場合、積極的に協力している。

本ユニットでは、こうした活動を、大学が地方自治体に対して技術指導を行う体制に移行していきたいと考えており、そのために「特別プロジェクト経費」を大学に対して概算要求している。

さらにこうした活動を広く周知するために、国連防災世界会議パブリック・フォーラム「電波科学による防災・減災と地方自治体との連携」を企画した。

東北大学における電波技術の防災・減災への利用

佐藤源之（東北大学東北アジア研究センター教授）

平成 20 年岩手・宮城内陸地震と栗原市の対応

佐藤 喜久男（栗原市総務部次長兼危機管理監）

荒砥沢崩落地における東北森林管理局の取組み

飯島 康夫（東北森林管理局宮城北部森林管理署宮城山地災害復旧対策室室長）

東日本大震災と宮城県における遺跡調査

佐久間 光平（宮城県教育庁文化財保護課技術副参事兼技術補佐）

東日本大震災における行方不明者の搜索活動

渡邊嘉則（福島県警察本部警備部警備監）

（レーダーによる地滑りモニタリング）

東北大学は栗原市と連携協力協定を締結し、GB-SAR による地滑り計測手法の有効性を検証する目的で、荒砥沢地区をモデルケースとしたリアルタイム連続モニタリングシステムを 2011 年 11 月に設置し、2012 年 6 月より、現在に至るまで連続計測を開始している。社会実装の実例として、国内でも長期的な GB-SAR の利用例はなく、自治体との連携という点でも極めてユニークな研究であると考えている。

（人道的地雷除去活動）

2009 年以来、引き続き地中レーダー装置（ALIS）を利用した地雷除去はカンボジア地雷除去センター（CMAC）に 2 台の ALIS を貸与し、6 人のチームでカンボジア実地雷原における活動を継続している。本活動は、在カンボジア日本大使館、JICA などとも連携しながら、政府開発援助（ODA）プログラムとして日本からの支援が行えることを目標としている。

（東北アジアの環境計測）

ロシア科学アカデミー研究者や、モンゴル科学技術大学研究者らと共に、モンゴル、シベリア地域の衛星による広域環境計測と、現場検証試験を融合する研究の準備を進めている。このために 2014 年 8 月、モンゴルの草原地域の土壌計測実験を実施した。また 2014 年 4 月、ロシア科学アカデミーより 3 名の研究者が訪問し、2 週間滞在しレーダ技術による土壌水分計測を主軸とした共同研究を推進した。

高橋 一徳 TAKAHASHI Kazunori 助教

生年月日／ 1978 年 11 月 30 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

山形大学・工学部・機械システム工学科 2001 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科修士課程 2003 年修了

東北大学・環境科学研究科博士課程 2006 年修了

取得学位

修士（工学）東北大学 2003 年

博士（学術）東北大学 2006 年

略歴

2006 年～2006 年 東北大学東北アジア研究センター 助手

2007 年～2009 年 ドイツ連邦材料試験研究所 学術研究員

2009 年～2011 年 ライプニッツ応用地球物理学研究所 学術研究員

2011 年～2013 年 東北大学大学院理学研究科 助教

2013 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

研究経歴

2006 年～2006 年 地中レーダと金属探知機を合わせた地雷探知機の開発

2007 年～2009 年 超音波探傷による非破壊検査の信頼性解析に関する研究

2009 年～現在 土壌特性が地中レーダに及ぼす影響に関する研究

所属学会

IEEE, Society of Exploration Geophysicists, 電子情報通信学会, 物理探査学会

学会活動

電気学会電磁界理論技術委員会 委員 2014 年～現在

電子情報通信学会電磁会理論研究専門委員会 幹事補佐 2014 年～現在

専門分野

電磁波計測

研究課題

土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用

研究キーワード

電磁波計測、環境計測、レーダ

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

平成 26 年 10 月 16 日「最新金属探知機 搜索に 4 台投入」(朝日新聞)

平成 26 年 10 月 16 日 読売新聞

平成 26 年 10 月 16 日「東北大 金属探知機を貸与 搜索用で県警に最新 4 台」(中日新聞)

平成 26 年 10 月 16 日「最新の探知機導入へ 東北大研究室県警に貸与」(信濃毎日新聞)

平成 26 年 10 月 17 日「金属探知機 4 台を東北大が貸し出し」(信濃毎日新聞)

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Lessons learned from the deployment of dual sensor ALIS for humanitarian demining in Cambodia[UNMAS/GICHD Mine Action Technology Workshop]

(2014 年 6 月 18 日～2014 年 6 月 20 日, 南アフリカ, Pretoria) 口頭 (一般)

Performance of demining sensors and soil properties[UNMAS/GICHD Mine Action Technology Workshop]

(2014 年 6 月 18 日～2014 年 6 月 20 日, 南アフリカ, Pretoria) 口頭 (一般)

Archaeological survey by GPR for recovery from 3.11 Great Earthquake and tsunami in East Japan[15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014]

(2014 年 6 月 30 日～2014 年 7 月 4 日, ベルギー, Brussels) 口頭 (一般)

High-resolution imaging of damaged wooden structures for building inspection by polarimetric radar[15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014]

(2014 年 6 月 30 日～2014 年 7 月 4 日, ベルギー, Brussels) 口頭 (一般)

Optimization of data sampling and imaging reconstruction by GPR[15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014]

(2014 年 6 月 30 日～2014 年 7 月 4 日, ベルギー, Brussels) 口頭 (一般)

Fundamental study on NDT of building wall structure by radar[7th European Workshop on Structural Health Monitoring]

(2014 年 7 月 8 日～2014 年 7 月 11 日, フランス, Nantes) 口頭 (一般)

Investigation on near range SAR for inspecting inner structure of buildings[IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium]

(2014 年 7 月 13 日～2014 年 7 月 18 日, カナダ, Quebec) 口頭 (一般)

Displacement measurement and monitoring with ground-based SAR; case study at Aratozawa[Asia-Pacific Microwave Conference]

(2014 年 11 月 4 日～2014 年 11 月 7 日, 日本国, 仙台) 口頭 (一般)

Polarimetric UWB SAR for subsurface imaging of building structures[Asia-Pacific Microwave Conference]

(2014 年 11 月 4 日～2014 年 11 月 7 日, 日本国, 仙台) 口頭 (一般)

Displacement estimation and monitoring from ground-based SAR amplitude components[Asia-Pacific Microwave Conference]

(2014 年 11 月 4 日～2014 年 11 月 7 日, 日本国, 仙台) ポスター (一般)

Ground-penetrating radar for landmine detection[Mine Action Seminar]

(2015 年 2 月 5 日～2015 年 2 月 6 日, トルコ, Ankara) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

Polarimetric near-range UWB SAR imaging for non-destructive testing of wooden walls[電子情報通信学会電磁界理論研究会]

(2014 年 5 月 24 日～2014 年 5 月 24 日, 東京) 口頭 (一般)

電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 (25 年度成果) [物理探査学会第 130 回 (平成 26 年度春季) 学術講演会]

(2014 年 5 月 28 日～2014 年 5 月 30 日, 東京) 口頭 (一般)

データ分割による地表面設置型合成開口レーダ大気補正のための CS 検知法 [電子情報通信学会アンテナ・伝播研究会]

(2014 年 8 月 28 日～2014 年 8 月 29 日, 新潟) 口頭 (招待・特別)

地雷検知レーダの性能と不均質土壌特性 [電子情報通信学会ソサイエティ大会]

(2014 年 9 月 23 日～2014 年 9 月 26 日, 徳島) 口頭 (一般)

スパースアレーを用いた近距離 SAR のイメージングの基礎検討 [電磁界理論シンポジウム]

(2014 年 11 月 20 日～2014 年 11 月 22 日, 草津) 口頭 (一般)

金属探知機における土壌磁気的特性の影響 [電子情報通信学会電磁界理論研究会]

(2015 年 1 月 29 日～2015 年 1 月 30 日, 大阪) 口頭 (一般)

受賞・その他特記事項（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

研究奨励賞 2014 年 [みやぎ産業科学振興基金]

トーキン財団奨励賞 2015 年 [公益財団法人トーキン科学技術振興財団]

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

基盤研究 (C) 2012 年 4 月～2015 年 3 月

[土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用]

研究論文（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

1) 偏波 GB-SAR によるコンクリート壁内部損傷の非破壊センシングのための基礎実験 .

[電気学会論文誌 A, 134(4), (2014), 166-172] (査読有)

高橋一徳, 岡村菜花, 佐藤源之

2) 電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 (25 年度成果) . [物理探査

学会第 130 回 (平成 26 年度春季) 学術講演会論文集, (2014)] (査読有)

佐藤源之、高橋一徳、クリスチャンコヤマ

3) Polarimetric near-range UWB SAR imaging for non-destructive testing of wooden walls. [電気学会研究会資料, (2014)] (査読無)

Christian N. Koyama, Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato

4) Influence of heterogeneous soils and clutter on the performance of ground-penetrating radar for landmine detection. [IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 52 (6), (2014), 3464-3472] (査読有)

Kazunori Takahashi, Jan Igel, Holger Preetz, Motoyuki Sato

5) Archaeological survey by GPR for recovery from 3.11 Great Earthquake and tsunami in East Japan. [Proc.15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014, (2014), 25-30] (査読有)

Motoyuki Sato, Hai Liu, Tomohiro Komagino, Kazunori Takahashi

6) High-resolution imaging of damaged wooden structures for building inspection by polarimetric radar. [Proc.15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014, (2014), 438-443] (査読有)

Hai Liu, Christian N. Koyama, K. Takahashi, M. Sato

7) Optimization of data sampling and imaging reconstruction by GPR. [Proc. 15th International Conference on Ground Penetrating Radar 2014, (2014), 634-637] (査読有)

Li Yi, Motoyuki Sato, Kazunori Takahashi

8) Fundamental study on NDT of building wall structure by radar. [Proc. 7th

European Workshop on Structural Health Monitoring, (2014), 1817-1824] (査読有)

Motoyuki Sato, Hai Liu, Christian N. Koyama, Kazunori Takahashi

9) Investigation on near range SAR for inspecting inner structure of buildings. [Proc. IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, (2014), 2601-2604] (査読有)

Motoyuki Sato, Kazunori Takahashi, Hai Liu, Christian N. Koyama

10) データ分割による地表面設置型合成開口レーダ大気補正のための CS 検知法 . [信学技報 , (2014), 25-30] (査読無)

高橋一徳、松本正芳、佐藤源之

11) Detection and mapping of UXOs by electromagnetic induction sensor and self-tracking total station. [Fast Times, 19 (3), (2014), 14-18] (査読有)

K. Takahashi, M. Sato

12) 地雷検知レーダの性能と不均質土壌特性 . [電子情報通信学会ソサエティ大会エレクトロニクス講演論文集 ,(2014), 16] (査読無)

高橋一徳、ヤンイーゲル、ホルガーブレーツ

13) Displacement measurement and monitoring with ground-based SAR; case study at Aratozawa. [Proc. Asia-Pacific Microwave Conference, (2014), 1022-1024] (査読有)

Lilong Zou, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato

14) Polarimetric UWB SAR for subsurface imaging of building structures. [Proc. Asia-Pacific Microwave Conference, (2014), 1025-1027] (査読有)

Christian N. Koyama, Kazunori Takahashi, Yasushi Iitsuka, Motoyuki Sato

15) Displacement estimation and monitoring from ground-based SAR amplitude components. [Proc. Asia-Pacific Microwave Conference, (2014), 1327-1329] (査読有)

Lilong Zou, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato

16) スパースアレーを用いた近距離 SAR のイメージングの基礎検討 . [電気学会研究会資料 , (2014), 101-106] (査読無)

飯塚泰、コヤマクリスチャン、高橋一徳、佐藤源之

17) Groundwater-level monitoring for hydraulic characterization of an unconfined aquifer by common mid-point measurements using GPR. [Journal of Environmental and Engineering Geophysics, 19, (2014), 259-268] (査読有)

H. Liu, X. Xie, J. Cui, K. Takahashi, M. Sato

18) 金属探知機における土壌磁気的特性の影響 . [電気学会研究会資料 , (2015), 299-303] (査読有)

高橋一徳

19) Sensitivity analysis of soil heterogeneity for ground-penetrating radar

measurements by means of a simple modeling. [Radio Science, 50 (2), (2015), 79-86] (査読有)

K. Takahashi, J. Igel, H. Preetz, M. Sato

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

科学研究費補助金研究課題「土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用」において、土壌不均質度より電波の散乱量を推定する手法の開発をおこなっている。これまで、ある土壌で数ヶ月間にわたる地中レーダ計測および TDR 法による土壌誘電率分布の計測を繰り返し実施して取得したデータを用いて本手法の実証を行った。その誘電率測定結果と実際の地中レーダ計測で観測された電波の散乱量を比較することで、本推定手法が有効であることを実証した。本年度は、本手法を用いて様々な誘電率空間分布における電波の散乱量を計算し、散乱強度と誘電率の変動量および空間的な変動周期との関係についての考察を行った。この不均質土壌による電波散乱量推定手法を用いることで、地中レーダの性能を評価・推定することが可能である。したがって、実際の地雷除去作業を開始する前に探知機の性能を把握する際に非常に有効である。さらに、作業の安全性を確保しつつ効率を向上させるために最適な除去手法を選択する際の指標としても用いることができる。

今年度においては、国連地雷対策サービス局およびジュネーブ人道的地雷除去センターが主催する地雷除去技術に関する国際会議、また対人地雷禁止条約（オタワ条約）第3回検討会議に参加し、これまでの研究成果を発表するとともに、現在の状況についての調査を行った。本研究で研究をおこなっている装置性能の事前評価法は、地雷除去作業など危険を伴う作業には欠かせない手順であり、今後本手法のさらなる実証を進めるとともに、地雷除去機関や国連の関連機関等へ本研究の成果についての周知を引き続き行う。

上記の研究を遂行していく中で、地雷除去手法として最もよく用いられている金属探知機に関する研究も行ってきた。9月に噴火した御嶽山では多数の行方不明者の捜索のため、警察が金属探知機を用いた捜索活動を実施した。そこで、これまでの研究を通して得た知見を生かし、長野県警に金属探知機を貸与するとともにその使用方法などの指導を行った。このような災害対策活動についての警察等への協力をこれからも継続し、研究成果の社会還元へ努める。

荒武 賢一郎 ARATAKE Kenichiro 准教授

生年月日／1972 年 12 月 21 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料科学研究部門

出身学校

花園大学・文学部・史学科 1995 年卒業

出身大学院

関西大学・文学研究科・史学専攻博士課程 2004 年修了

取得学位

博士（文学）関西大学 2004 年

略歴

1996 年～2006 年 大阪市史料調査会 調査員

2006 年～2009 年 独立行政法人日本学術振興会 特別研究員

2010 年～2012 年 関西大学文化交渉学教育研究拠点 助教

2012 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

研究経歴

2014 年～現在 近世・近代日本の屎尿流通

2014 年～現在 近世・近代日本の商家経営

所属学会

近世史フォーラム，大阪歴史学会，宮城歴史科学研究会，日本史研究会，明治維新史学会，社会経済史学会，市場史研究会

学会活動

近世史フォーラム 代表委員 2012 年－現在

宮城歴史科学研究会 研究委員 2012 年－現在

歴史学フォーラム実行委員会 委員 2014 年－現在

専門分野

日本史 日本経済史 古文書学

研究課題

- ・2012～継続中 近世日本の商業と交流
- ・2014～継続中 近世・近代日本における尿尿流通の基礎的考察

研究キーワード

日本近世史、近代史、経済史、古文書学

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

白石市図書館 100 周年を記念 荒武氏ら講演 (出演 執筆 新聞 河北新報) 2014 年 11 月

学外の社会活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

岩出山古文書読む会平成 26 年度定期総会記念講話 (講演会 セミナー) 2014 年 4 月
 白石市図書館貴重書庫整理作業アドバイザー 2014 年 4 月～2015 年 3 月
 利府町公民館平成 26 年度歴史教室 (公開講座) 2014 年 7 月
 利府町公民館平成 26 年度歴史教室 (公開講座) 2014 年 9 月
 平成 26 年度みやぎ県民大学 大学開放講座 (講演会 セミナー) 2014 年 9 月
 多賀城史遊館ボランティアガイド研修会 (講演会 セミナー) 2014 年 10 月～2015 年 2 月
 白石市図書館 100 周年記念講演会 (講演会 セミナー) 2014 年 11 月～2014 年 11 月

学内活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

東北アジア研究編集主任 2013 年 4 月～2015 年 3 月

担当授業科目 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

(学部教育)

古文書学 2013 年～現在

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

商人の日記から社会を読む―地域史と「日本史」をつなぐ―[シカゴ大学東アジア研究所主催国際シンポジウム]
 (2014 年 6 月 20 日, アメリカ合衆国, シカゴ) 口頭 (基調)
 「井上淡水日記」からみた近世大坂商人の世界 [ベルリン自由大学国際シンポジウム「くずし字の学習と日本文化の理解 研究」]
 (2015 年 3 月 7 日, ドイツ, ベルリン) 口頭 (一般)

Regional Societies Domain Finances in Early Modern Japan[Workshop “Public Goods Provision in the Early Modern Economy”]

(2015 年 3 月 21 日, 日本国, 東京) 口頭 (一般)

国内会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

歴史学フォーラム 2014

(2014 年 10 月 25 日, 大阪) [主催] 実行委員

著書 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 日本史学のフロンティア 1—歴史の時空を問い直す— (執筆担当部分) 序章 6 頁 s 10 頁 . [法政大学出版局, (2015)1 月]

荒武賢一郎, 太田光俊, 木下光生

2) 尿尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市— (執筆担当部分) 全文 (326 頁) . [清文堂出版, (2015)1 月]

荒武賢一郎

3) 日本史学のフロンティア 2—列島の社会を問い直す— (執筆担当部分) 第 4 章 (商人と権力が交差する都市—近世後期の大坂を事例として—) 143 頁 s 177 頁 . [法政大学出版局, (2015)2 月]

荒武賢一郎, 太田光俊, 木下光生

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

荒武賢一郎「地域が誇る「特産品」の創出—近世出羽国「大山酒」を事例として—」(『近世史サマーフォーラム 2013 の記録』近世史サマーフォーラム 2013 実行委員会、2014 年 8 月、執筆担当部分 34 – 40 頁、査読無)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

第一は、これまでの研究成果をまとめた『尿尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市—』(東北アジア研究専書、清文堂出版、2015 年 1 月刊) の出版である。日本および中国・朝鮮半島では古来より人糞尿(尿尿=しにょう)を田畑の肥料として活用することが広くおこなわれてきた。日本列島では中世以降、都市人口の増大にともない、排泄物の処理と都市近郊農業の成長によって、尿尿が積極的に利用されていた。本書では江戸時代に 40 万人規模の都市であった大坂とその周辺農村の尿尿流通を取り上げ、農村と都市の取引構造や組織の形成、そして具体的な売買の実態を解き明かしている。また、明治時代に移行するなかで尿尿の肥料的活用は次第に減少するが、それには伝染病の流行や西洋式の衛生観念が登場するなど、多くの社会的背景が重なっていたことに注

目した。環境史研究はさまざまな専門家が集い、議論をしているが、当該研究で深めようとするのは都市の社会環境史であり、当時の人々はどのような意識のもと、「清潔」を目指していたのかという基本的な疑問について考察を深めている。このような17世紀から19世紀における日本の屎尿問題について具体的な実証ができる歴史資料は極めて少なく、本書の大坂地域における成果は全国各地にも援用でき、さらには東北アジア地域の比較研究にも大きな貢献ができるものと考えている。

第二は、平成25年度からの継続として、近世日本における大名家財政と地域社会をテーマにした研究を挙げておきたい。これは研究分担者を務める科学研究費補助金基盤研究(B)「近世・近代移行期における公共財供給と『地域社会』—比較史の視点から—」(研究代表者：谷本雅之東京大学大学院経済学研究科教授)で取り組む課題でもあり、江戸時代における大名家の財政史を解明し、その支出の内容や地域社会への還元について論じるものである。従来の財政史は税収や財源の管理について集中的な分析がおこなわれてきたが、本研究では一般庶民から徴収された税や諸負担がどのように使用され、社会的に還元されていったのかという過程を調査している。大名家財政については仙台藩(現宮城県)・松代藩(現長野県)・土佐藩(現高知県)などの古文書から、支出費目・金額を詳しく確認する作業を実施し、その流れにおいて18世紀から19世紀の日本では領主が領民に対してどのような公共財を提供しているのかを明らかにしていきたいと考えている。ただし現在までのところ、領主が地域社会に財政的還元をする事例はほとんどみられず、資金的な再分配はおこなわれていないとの結論に近づいている。これらの成果は、2015年3月に開催された国際ワークショップで口頭発表を実施し、今後も国内外の学会などで成果を公表する予定である。

第三としては、数年来にわたり知識を深めてきた宮城県の地域史研究に関する成果である。日常的に資料調査や社会人向けの講座を実施している県下各地の分析結果を公表する準備を進めている。そのひとつには、東北アジア研究センター共同研究「江戸時代から現代に通じる東北の歴史」の研究代表者として執筆者8名による論文集をまとめていくことと、そのなかで自身の論考「近世仙台における武士と百姓」について詳しく内容を精査することにある。とりわけ仙台藩の武士人口は他地域に比べて多いことがすでに指摘されているが、彼ら武士たちの生活実態や、それに対する地域社会の反応などを地域の古文書に依拠しながら復元することに努めていきたい。これら一連の作業は、東北アジア研究センターで取り組む歴史資料保全活動や歴史を通じた社会貢献とも軌を一にしたものであり、「保全から研究へ」という意識で検討していきたい。

上記の研究とともに、日本の古文書研究を通じた国際的ネットワークの構築に力を注いだことも紹介しておきたい。今年度は、平成26年6月にアメリカ・シカゴ大学、そして27年3月にドイツ・ベルリン自由大学と、それぞれ1週間の日程で古文書解読のワークショップ講師を務めた。これは歴史学のみならず、文学・美術・言語・宗教・思想な

ど日本の人文科学を専攻する海外の研究者および学生向けの企画であり、資料解読のノウハウを教授することを目的としている。このワークショップを契機に、参加者各自の研究成果を公表するシンポジウムがおこなわれ、活発な学術交流へつながっていくことを期待して、今後も自身の研究を高める努力を続けていきたい。

高橋 陽一 TAKAHASHI Yohichi 助教

生年月日／1977 年 8 月 19 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料科学研究部門

出身学校

東北大学・文学部・人文社会学科・日本史専攻 2001 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・歴史科学専攻日本史専攻分野博士課程 2009 年修了

取得学位

博士（文学）東北大学 2009 年

略歴

2008 年～2009 年 東北大学東北アジア研究センター防災科学研究拠点グループ リサーチアシスタント

2009 年～2010 年 東北大学百年史編纂室 教育研究支援者

2009 年～2012 年 東北大学大学院文学研究科 専門研究員

2010 年～2012 年 岩沼市史編纂室 市史編纂専門員

2012 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

2013 年～現在 東北学院大学 非常勤講師

研究経歴

2000 年～現在 日本近世史の研究に従事

2011 年～現在 歴史資料保全についての研究に従事

所属学会

東北史学会，歴史学研究会，日本史研究会，宮城歴史科学研究会，交通史学会，地方史研究協議会，関東近世史研究会，日本温泉地域学会

学会活動

宮城歴史科学研究会 事務 2012 年～現在

専門分野

日本近世史

研究課題

- ・ 日本近世旅行史の研究
- ・ 藩領社会史の研究
- ・ 歴史資料保全と地域行政

研究キーワード

日本近世史・旅・仙台藩・温泉・風景・歴史資料保全

学外の社会活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

古文書を読む会（公開講座）2012 年 4 月～現在

上廣歴史資料学研究部門古文書講座（公開講座）2013 年 5 月～現在

村田町古文書講座（公開講座）2014 年 8 月～2014 年 10 月

はじめての「くずし字」―江戸時代の仙台を読む（公開講座）2015 年 1 月～2015 年 1 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク会員として、古文書をはじめとする文化財の保全活動に従事している。

2003 年 8 月～現在

学内活動（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

広報情報委員会 2012 年 4 月～現在

担当授業科目（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

（他大学）

生活文化史 2013 年～現在

国内会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

江戸時代の青根温泉―湯守佐藤仁右衛門家の古文書から―[公開講演会 川崎のほこり―ふるさとの歴史と文化―]

(2014 年 7 月 5 日～2014 年 7 月 5 日, 宮城県柴田郡川崎町) 口頭 (一般)

近世の松島と旅行者―名所雄島の石碑―[交通史学会 2014 年度シンポジウム 東北の名所―松島 塩釜のあゆみ―]

(2014 年 9 月 20 日～2014 年 9 月 20 日, 宮城県仙台市) 口頭 (一般)

江戸時代の旅のまなざし—西から東へ、東から西へ—[宮城野学講座]

(2014 年 10 月 11 日～2014 年 10 月 11 日, 宮城県仙台市) 口頭 (一般)

近世の温泉と交流—仙台藩領の温泉を事例に—[慶應義塾大学近世近代交流研究会]

(2015 年 3 月 7 日～2015 年 3 月 7 日, 東京都港区) 口頭 (一般)

国内会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

公開講演会 川崎のほこり—ふるさとの歴史と文化—

(2014 年 7 月 5 日～2014 年 7 月 5 日, 宮城県柴田郡川崎町) [主催] 全体統括および発表

2014 年度交通史学会シンポジウム 東北の名所—松島 塩釜のあゆみ—

(2014 年 9 月 20 日～2014 年 9 月 20 日, 宮城県仙台市) [主催] 全体統括および発表

2014 年度公開シンポジウム 宮城発自由民権運動再考

(2014 年 10 月 26 日～2014 年 10 月 26 日, 宮城県仙台市) [主催] 運営補助

講座：地域の歴史を学ぶ◎岩出山Ⅲ 城—その知られざる歴史—

(2014 年 11 月 30 日～2014 年 11 月 30 日, 宮城県大崎市) [主催] 運営補助

その他研究活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

〈書評〉 籠橋俊光著『近世藩領の地域社会と行政 (書評) 2014 年～2014 年

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

若手研究 (B) 2014 年 4 月～2017 年 3 月

[日本近世における旅の歴史的特質の解明]

著書 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 湯けむり復興計画 江戸時代の飢饉を乗り越える. [蕃山房, (2014)7 月]

高橋陽一

2) よみがえる江戸時代の村田—山田家文書からのメッセージ. [東北大学東北アジア研究センター, (2014)11 月]

高橋陽一、佐藤大介、小関悠一郎

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 一八世紀の検見制度改革と藩領社会—仙台藩を事例に—. [『歴史』, (122), (2014), 51-77]

高橋陽一 査読有

2) 旅先地域と客引き—近世後期の上野国吾妻郡草津村を事例に—.[『交通史研究』,(83), (2014), 48-68]

高橋陽一 査読有

3) 石碑のある風景—近世の旅行者と松島—. [『東北アジア研究』,(19), (2015), 123-147]

高橋陽一 査読有

4) 近世後期における災害と資源利用—飢饉と温泉—. [『日本史学のフロンティア 2』(法政大学出版局), (2015), 249-277]

高橋陽一 査読有

5) 天保飢饉における村の負担—仙台藩領村落を事例に—. [江戸時代の政治と地域社会 第1巻 藩政と幕末政局, (2015), 95-122]

高橋陽一 査読有

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014年度の研究成果は、歴史資料保全活動に関する編著書と科研費等を活用した論文に分けられる。

前者では、東日本大震災を経た今日、人々の心の復興に寄与するため、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークによって企画された「よみがえるふるさとの歴史」シリーズの第4巻『湯けむり復興計画 江戸時代の飢饉を乗り越える』を上梓した。仙台藩領内の温泉を事例に、江戸時代最大の災害であった飢饉からの復興事業として温泉を活用しようと試みる人々の動きを描き出している。また、『よみがえる江戸時代の村田—山田家文書からのメッセージ』（東北アジア研究センター報告15号）は、2013年に宮城県村田町で開催した上廣歴史資料学研究部門主催の講演会の記録である。同家では、震災後の資料レスキュー活動によって、従来知られていなかった古文書が確認された。講演会では、日本近世史の専門家により、古文書の解説から山田家や村田町の新たな歴史が明らかになった。講演会の記録に古文書の解説文や目録も付け加えた本書は、歴史資料保全活動の成果を示す方法の1つとしても重要な意味を持っている。

科研費を活用した研究では、近世における松島旅行者の動向を分析した「石碑のある風景—近世の旅行者と松島—」を発表した。従来活用されてこなかった知識人の紀行文を素材に、移り変わる風景に対して違和感を覚える旅行者の心性に迫り、近世の旅の新たな特質を明らかにしようと試みた。一方、ここ数年継続してきた仙台藩領の地域社会に関する研究では、「一八世紀の検見制度改革と藩領社会—仙台藩を事例に—」「天保飢饉における村の負担—仙台藩領村落を事例に—」の2編を発表した。前者は年貢決定過程に百姓が具体的に関与していたことを明らかにし、新たな領主・領民関係像を構築する手掛かりを得た。後者はこれまで解明されてこなかった天保飢饉時における村の年貢負担の実態を分析し、米納が不可能な状況下でも貨幣納年貢が継続されていたことから、

食糧の確保など、飢饉を乗り越える上で貨幣が重要な存在であることを指摘した。藩領社会史・飢饉史研究において新知見を示す成果であり、仙台藩の地域社会研究としても有意義な成果である。

このほか、「旅先地域と客引き―近世後期の上野国吾妻郡草津村を事例に―」は旅行者に対して宿屋が行う客引き行為とその取り締まりの動向分析から旅先地域の運営の特質を浮かび上がらせ、「近世後期における災害と資源利用―飢饉と温泉―」は飢饉時における温泉利用の意義を資源利用史の観点を踏まえて明らかにしている。この2編は、博士論文に盛り込んだ論稿をもとにしたものである。

友田 昌宏 TOMODA Masahiro 助教

生年月日／ 1977 年 3 月 20 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

早稲田大学・教育学部・社会科地理歴史専修 1999 年卒業

出身大学院

中央大学・文学研究科・日本史専攻博士課程 2008 年修了

取得学位

(史学) 中央大学 2008 年

略歴

2008 年～ 2012 年 中央大学文学部 兼任講師

2009 年～ 2012 年 早稲田大学大学史資料センター 非常勤嘱託

2009 年～現在 中央大学政策文化総合研究所 客員研究員

2012 年～ 2013 年 町田市立自由民権資料館 嘱託 (学芸担当)

2013 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

所属学会

史学会、明治維新史学会、東アジア近代史学会、中央史学会、国史学会

学会活動

東アジア近代史学会 理事 2012 年～現在

専門分野

日本近代政治史

研究課題

- ・ 宮島誠一郎の研究
- ・ 近代日本におけるアジア主義の展開
- ・ 敗者にとっての明治維新

研究キーワード

戊辰戦争・「白河以北一山百文」・宮島誠一郎

報道 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

NHK ファミリーヒストリー「伊達みきお～伊達の名に誓った覚悟とは～」出演

学外の社会活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

「岩出山古文書を読む会」中級講座 (公開講座) 2014 年 1 月～現在

上廣歴史資料科学研究部門古文書講座 (公開講座) 2014 年 5 月～現在

公開シンポジウム「宮城発・自由民権運動再考」(公開講座) 2014 年 10 月～2014 年 10 月

講座：地域の歴史を学ぶ ◎岩出山Ⅲ 城—その知られざる歴史— (公開講座) 2014 年 11 月～2014 年 11 月

山形県立博物館平成 26 年度古文書歴史講座 (公開講座) 2015 年 2 月～2015 年 2 月

行政機関・企業・NPO 等参加 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク (NPO) 災害科学国際研究所歴史資料保存分野研究室にて行われている被災資料の保全活動に週 2 日参加。

2013 年 10 月～現在

学内活動 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

研究推進委員会 2014 年 4 月～現在

国際会議主催・運営 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

上廣文化フォーラム「旅人はなぜ行くのか—東北を見つめた人々—」

(2014 年 2 月 9 日～2014 年 2 月 9 日, 宮城県仙台市) [主催]

著書 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 岩出山伊達家の戊辰戦争—吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む—。[東北アジア研究センター, (2014)11 月]

友田昌宏、菊地優子、高橋盛

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) 維新変革期における草莽と藩—大野兄弟と米沢藩—。[国史学, (213), (2014), 67-99]

友田昌宏 (査読有り)

総説・解説記事（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

「米沢藩士・宮島誠一郎にとっての戊辰戦争」（『米沢有為会会誌』復刊 64 号、2014 年 10 月）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は以下の成果を得た。

- 1) 「維新変革期における草莽と藩一大野兄弟と米沢藩一」（『国史学』第 213 号、2014 年 6 月）

本稿は 2013 年 6 月に『日本歴史』誌上（第 781 号）に掲載された「幕末期における草莽と諸藩一大野俊次郎とその周辺一」の続編とも言うべきものである。

主人公である大野俊次郎・俊三郎兄弟は、新発田藩領である越後国蒲原郡諏訪山の名主で、著名な儒者でもあった大野敬吉（耻堂）の子として生まれた。兄の俊次郎は維新後、誠と名を改め新政府に出仕して長野県令となるが、一方、弟の俊三郎は慶応 4 年（1868）の戊辰戦争において米沢藩によって暗殺される。

本稿では、まず弟俊三郎がいかなる意図をもって米沢藩に身を投じたのかを探り、大野兄弟の立場を越後の草莽層の勢力図のなかで把握した。当時、越後には、①領主（会津藩）の苛政から逃れようとする一派、②薩長に与し越後の治安を乱そうとする長谷川鉄之進・松山一郎らに対抗しようとする一派が存在し、双方とも米沢藩への仕官を望んでいたが、俊三郎はこの両派を糾合しつつ、後者の立場に立って米沢藩に身を投じたのである。このような俊三郎の行動は兄俊次郎の思想に影響をうけてのものと考えられる。やがて、戦局の推移とともに両派の方向性の違いは明らかとなる。先の両派の内、①の立場に立つ一派は、会津藩に与した米沢藩に見切りをつけ、奥羽越列藩同盟への参加に消極的な新発田藩を支持する。一方、俊三郎は新発田藩の探索方を務めつつも、②の立場から米沢藩に加担する姿勢を堅持しつづけ、去就の定まらない新発田藩を警戒するよう米沢藩によびかけた。

その俊三郎が米沢藩によって暗殺されたのはなぜか、弟の暗殺をめぐって兄俊次郎と旧米沢藩主従との間にはいかなるやり取りが交わされたのか、それらを探ることを通じて暗殺の真相に迫るというのが、本稿に課されたもう一つの課題である。俊三郎は慶応 4 年 8 月 16 日に御中之間年寄木滑要人の命により須藤兵八郎らによって暗殺された。須藤は兄俊次郎と江戸の伊庭道場の同門の間柄であった。米沢藩が俊三郎を暗殺したのは、すでに越後戦線から撤退して専守防衛に転じ、剩え降伏まで議論に上っているさなかに、俊三郎が越後への再出兵を主張したからだと考えられる。事が明らかになったのは、須藤が明治 4 年に俊次郎に自分が下手人であることを打ち明けたことによる。ここから、旧米沢藩・上杉家と俊次郎とのやりとりがはじまった。俊次郎は事件の真相を追及せんとしたが、これに対して、須藤・古藤政徳（上杉家家令）・宮島誠一郎（左院三等議官）ら上杉の旧臣たちは、主家に類を及ぼすまいとして真相を糊塗し続けた。その

結果、戊辰戦争時の藩主上杉齊憲から俵次郎に謝罪状が提出され和解が成立したものの、事件の真相は最後まで曖昧に付されたままであった。冷徹な眼で情勢を見極め、新政府に仕官の道を得た俵次郎も、俵三郎の暗殺について言えば弟の遺恨を完全に晴らすことができなかったという意味において、俵三郎同様、動乱期の藩に翻弄された草莽も一人にすぎなかった。そして、かかる大野兄弟の姿は、揺れ動く当該期の米沢藩を背後から浮かび上がらせるものであり、彼等は藩の振れ幅に倍して、時代の波濤にもまれることとなったと言えよう。

2) 友田昌宏・菊地優子・高橋盛編著『岩出山伊達家の戊辰戦争一吾妻家文書「奉宿若御用留」を読む一』（東北アジア研究センター、2014年11月）

本書は、慶応4年の記録「奉宿若御用留」を翻刻し、これに解説を付して東北アジア研究センター叢書として出版したものである。「奉宿若御用留」は仙台藩の一家岩出山伊達家に代々家老として仕える吾妻家に残された文書のなかの1つで、表題にある「奉宿若」とは奉行（家老）・宿老・若年寄を指す。史料にはこれら仙台藩の重役から岩出山伊達家に下された達、さらには同家から本藩への伺などが書き記されており、戊辰戦争当時の仙台藩や岩出山伊達家の動向を詳細に知ることができ、きわめて興味深い内容である。

今回刊行した史料は、友田が担当する岩出山古文書を読む会の中級講座のテキストとして使用したものであり、史料の翻刻にあたっては、古文書を読む会の現会長菊地優子氏、前会長で現在顧問を務められる高橋盛氏をはじめ、同会の会員の方々から多大なる御協力を賜った。その意味で、本叢書は部門の活動の大きな柱をなす、地域連携事業の成果の一端と言うこともできる。吾妻家文書にはこのほか岩出山伊達家の北海道開拓移住関係の史料も数多く含まれており、今後これらも同じくセンターの叢書として刊行していきたい。

金 賢貞 KIM HYEON JEONG 助教

生年月日 / 1976 年 7 月 14 日

東北アジア研究センター研究支援部門学術交流分野

出身学校

韓国・同徳女子大学校・日語日文学科 2000 年卒業

出身大学院

日本・筑波大学・人文社会科学研究科・歴史・人類学専攻修士課程（5 年一貫制）2004 年修了

日本・筑波大学・人文社会科学研究科・歴史・人類学専攻博士課程（5 年一貫制）2007 年修了

取得学位

学士（文学）同徳女子大学校 2000 年

修士（文学）筑波大学 2004 年

博士（文学）筑波大学 2007 年

略歴

2012 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

研究経歴

2008 年 韓国文化財庁研究プロジェクト「韓国重要無形文化財の管理改善及び拡大について」共同研究員

2008 ～ 2009 年 韓国研究財団 優秀研究支援研究（基礎研究・課題番号 B00810）「Study for Mechanism of Intangible Properties Protection Policy in Japan: Focused on Corresponding to UNESCO's World Intangible Heritage Policy」責任研究員

2009 年 韓国文化財庁研究プロジェクト「韓国の無形遺産における代表目録の分類体系並びに基礎資料の研究」共同研究員

2009 ～ 2012 年 韓国研究財団 博士後国内研修研究（課題番号 B00029）「Study for Aging and Ordinary Life Arena of the Aged in Contemporary Japanese Society: Focused on 'Social Participation' and 'inter-generational Communication'」

2010 年 韓国 文化財保護財団 アジア・太平洋無形文化遺産センター 研究プロジェクト「アジア・太平洋無形文化遺産センターの中長期情報化戦略計画（I S P）の樹

立」共同研究員

2008～2010年 「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究（課題番号 20320133）」（平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究 B））研究協力者

2009～2011年 「『伝承・習い事』文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究（課題番号 21330178）」（平成 21 年度～平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究 B））研究協力者

2010～2012年 「文化遺産ガバナンスと社会関係資本の構築と実践に関する民俗学的研究（課題番号 22・00007）」（平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）研究分担者

所属学会

日本民俗学会

専門分野

文化人類学・民俗学、特に祝祭・儀礼文化論、地域社会論、文化政策・制度論

研究課題

- ・韓国社会における負の近代遺産政策と地域社会
- ・韓国におけるナショナリズムと土着文化
- ・自然災害と地域社会の再編

研究キーワード

韓国、地域社会、近代遺産（植民地遺産）、文化政策、ナショナリズム、ダークツーリズム、自然災害

まちづくり， 文化遺産（財）， 市民参加， 祭り，ナショナリズム， ツーリズム， 日韓比較研究

国際会議 発表・講演（2014 年 4 月～2015 年 3 月）

Making Modern History Museums: Colonial Architecture as Heritage and Resource in Contemporary Korea[The 7th Kyujanggak International Symposium on Korean Studies]

（2014 年 8 月 21 日－2014 年 8 月 22 日，韓国，ソウル市）シンポジウム ワークショップ
パネル（公募）

負の歴史遺産とダークツーリズム—韓国群山 (Gunsan) 市の日本植民地期建築物の保存と資源化を事例に—[作为记忆之场的东亚]

(2014 年 8 月 30 日－2014 年 8 月 31 日, 中国, 上海市) 口頭 (一般)

研究論文 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

1) Making Korean Modern Museums: Japanese Colonial Buildings as Heritage and Resource. [ACTA KOREANA, 17 (2), (2014), 583-607] (査読有)

Kim Hyeon-Jeong

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度には、文部科学省科学研究費助成事業研究活動スタート支援「現代韓国のまちづくりにおける負の遺産とガバナンスに関する調査研究」(課題番号: 24820006、研究期間: 2012～2013) の成果として、現代韓国社会における日本植民地時代の建築物や景観を文化資源として保存・活用する観光まちづくりの実践を全羅北道群山市を事例に明らかにした。この成果は、2014 年 8 月 21 日に韓国国立ソウル大学校奎章閣韓国学研究院が主催した The 7th Kyujanggak International Symposium on Korean Studies “East Asian Print Culture and Archives: Formation and Dissemination of knowledge” で “Making Modern History Museums: Colonial Architecture as Heritage and Resource in Contemporary Korea” と題した口頭発表、また、同年同月 30 日には中国華東師範大学で開催された国際シンポジウム「作为记忆之场的东亚」(「記憶の場としての東アジア」) で「負の歴史遺産とダークツーリズム—韓国群山 (Gunsan) 市の日本植民地期建築物の保存と資源化を事例に—」と題した口頭発表を通して公開された。さらに、Thomson Reuters Arts and Humanities Citation Index (A&HCI) に登録されているレフェリー付き国際学術雑誌 Acta Koreana に “Making Korean Modern Museums: Japanese Colonial Buildings as Heritage and Resource” と題した英字論文を掲載した。以上の研究は、現代韓国社会における反日ナショナリズムの現状を理解するうえで極めて示唆的な論点を提示しただけでなく、韓国の地方社会におけるまちづくり、特に観光産業の振興を中心軸に据えた観光まちづくりがどのような主体の参加や協力・協働をもって行われているのかという問題を探るうえで重要な事例研究として海外の韓国学研究者たちから高く評価された。

前田 しほ MAEDA Shiho 助教

生年月日 1976 年 4 月 19 日

東北アジア研究センター研究支援部門

出身大学院

北海道大学・文学研究科博士課程 2006 年修了

取得学位

博士（文学）北海道大学 2006 年

略歴

2002 年～2009 年 室蘭工業大学工学部 非常勤講師
 2006 年～2006 年 札幌大学外国語学部 非常勤講師
 2007 年～2011 年 北海道大学大学院文学研究員 専門研究員
 2008 年～2009 年 伊達赤十字看護専門学校 非常勤講師
 2008 年～2009 年 総合シンクタンク（社）北海道総合研究調査会 臨時職員
 2009 年～2009 年 北海道大学スラブ研究センター 非常勤研究員
 2009 年～2010 年 ロシア国立人文大学 研究生
 2010 年～2014 年 北海道大学スラブ研究センター 学術研究員
 2014 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 特任助教

所属学会

日本ロシア文学会, ASEES

専門分野

ロシア文学 文化

研究課題

旧ソ連・社会主義圏の戦争記憶・戦争文学、現代ロシア文学・文化における女性イメージ

研究キーワード

戦争 記憶 ジェンダー セクシュアリティ カルチュラル・スタディーズ 文学 ソ
 ヴィエト ロシア 表象

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

О возможности русской женской литературы[ПОЛИФОНИЯ, Международной Литературный фестиваль] (2014 年 6 月 5 – 8 日カザフスタンアルマトウイ) 国際文学フェア 公開講演会 (招待)

The Image of Nurses of the Great Patriotic War in Soviet Popular Literature and Visual Media[The 6d East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 2014 “Peace Building in East Asia & the Expansion of Eurasian Cooperation: Dynamics and Tasks”] 2014 年 6 月 27 – 28 日韓国ソウルシンポジウム ワークショップ パネル (公募)

Images of Nationalities and Gender strategies: War Monuments and Memorials in Russia[The 46th Annual

Convention ASEEES "25 Years After the Fall of the Berlin Wall: Historical Legacies and New Beginnings"]

(2014 年 11 月 20 日 – 2014 年 11 月 23 日, アメリカ合衆国, サンアントニオ) シンポジウム ワークショップ パネル (公募)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

後期ソヴィエトにおける独ソ戦記念碑の表象と機能 [2014 年度日本ロシア文学会研究発表会]

(2014 年 11 月 5 日 – 2014 年 11 月 6 日, 山形市) 口頭 (一般)

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

若手研究 (B) 2012 年 4 月 – 2015 年 3 月

[20 世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2014 年度は科研費若手研究 (B) 「20 世紀後半ロシア文化における戦争の記憶表象についてのジェンダー研究」の最終年度であった。第二次大戦の勝者であるソ連は、冷戦構造の一方の覇者として、戦争の記憶・表象を国民統制の道具として利用してきた。ゆえに戦争を描く文学・映画・演劇は、公式文化の王道として展開したが、その一方で抑圧されたトラウマ的記憶をすくい上げ、検閲と闘う歴史をもつ。本研究は、女性表象と女性作家の創作活動に焦点をあて、ジェンダー論的な観点からアプローチすることで、葛藤や軋轢が内在し、ゆえに神話化と脱神話化の力学が複雑に変容するロシア (語圏) の戦争表象の一端を明らかにすることを目的とした。戦争記憶は現代ロシアや旧ソ連諸国において、ナショナル・アイデンティティの根幹として重要なファクターであるにもかかわらず、我が国のロシア文学・文化研究では倦厭され、ほとんど手つかずの分野である。

そこで、第二次大戦の独ソ戦に関する文学・映画・新聞・プロパガンダポスター、戦争記念碑の調査、資料収集を行った。戦争記念碑や博物館の展示など現地調査をし、データベースを作成、これを分析して戦争記憶のステレオタイプの抽出を行った。フィールドワークは、国際会議等への参加も利用して、ウズベキスタン・ブハラ、タシケントとカザフスタン・アルマトイ（2014年6月）、ソウル（2014年月）、アメリカ・サンアントニオのアラモ砦（2014年11月）、台湾・台北市と金門島（2015年3月）で行った。過去のロシア調査と合わせることで、幅広い視野を養い、ロシアやソ連特有の特徴を洗い出すことができた。独立後、旧ソ連の各地で、戦争記憶の独自性が進む現象が見られるが、ロシア国内でも多様性が見られる。フィールドワークの成果と先行研究を照らし合わせ、地域性を加味しながら、歴史的に戦争記憶がどのように変化してきたのか、全体像を把握することに努めた。

これと並行して、文芸作品に見られるオルタナティブな記憶の表現についても分析と考察を重ねた。研究開始当初は、プロパガンダと文芸の世界は対立関係にあると考えていた。確かにそのような一面はあるものの、メディアを超えて幅広く分析すると、一種の共犯関係がみえてきた。特に、ジェンダーの観点からはこれが顕著である。女性を劣位に置く形で、理想の女性像を提示し、現実の女性の国民化に働きかける点では共犯関係にある。男性作家の作品はこの点に無自覚であり、「男らしさ」の創造のため、女性は他者化される。例えば、兵士は勇敢に闘い、亡くなっても、看護婦の恋人は戦後独身を貫き、遺児を立派に育てる。このような戦後量産されたこの種の物語の特徴は、第一に、闘う女＝女性戦闘員は描かれない。第二に、男が死ぬが、女は生き残り、英雄を悼む。第三に、女は恋人としても（魅力的な脚線美）妻としても（貞淑）、母としても（子を育てあげる）男性にとって都合の良いイメージに溢れる。その点で、イ・グレーコワ『未亡人たちの船』やスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』など女性の作家は、ソ連の近代的家父長制にメスをいれる。グレーコワのヒロインは、看護婦として従軍したにも関わらず、野戦病院で恋におち、妊娠して銃後に送り返される。アレクシエーヴィチも性的・生理的なことを含む、女性兵士の戦地体験を生々しく伝えた。

また男性作家の創作においても、1970年代後半以降徐々に、セクシュアリティの「余剰」が目立ってくる。女性作家のように自覚的ではないが、ソヴィエトの文化コードの揺らぎが「余剰」としてテキストに反映しているのではないかと考えている。そもそも文学・映画には、比較的作家の自由な想像の余地が残されており、「男らしさ」の追求において女性イメージは重要な役割を果たしているのである。

それに加え、メディアと女性イメージの社会的機能を分析・考察した。研究対象をテキスト＝閉鎖的な独立した空間として扱うのではなく、連続した社会的文化的なコンテキストにおいて見直し、特定のイメージがジャンルを超えて社会的文化的にいかに構築さ

れているか明らかにすることを心がけた。例えば、戦前・戦中のプロパガンダポスターは、女性の労働力を市場・戦場に引き出すために、非対称的なジェンダー構造を内蔵しながらも、見た目の「平等」を訴えるイメージが主流である。これに対し、戦後の記念碑では、女性は亡くなった兵士を悼む母として視覚化され、母性が強調される。このように、女性のイメージを分析することによって、国民化の方向性が時代によって異なること、またメディアの社会的機能と時代性が明確に見えてきた。

町 澄秋 MACHI Sumiaki 助教

生年月日 1982 年 11 月 5 日

東北アジア研究センター研究支援部門

出身学校

金沢大学・理学部・地球学科 2006 年卒業

出身大学院

金沢大学・自然科学研究科修士課程 2008 年修了

金沢大学・自然科学研究科博士課程 2012 年修了

取得学位

(理学) 金沢大学 2012 年

略歴

2012 年～2014 年 金沢大学自然科学研究科 博士研究員

2014 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 特任助教

研究経歴

2005 年 04 月～2012 年 03 月 飛騨外縁帯, 小滝地域の超苦鉄質岩の岩石学的研究

2007 年 07 月～継続中 ロシア極東ウスチベラヤ・オフィオライト: かんらん岩の溶融作用・交代作用・蛇紋岩化

2013 年 12 月～継続中 東太平洋海膨ヘスディープから得られた斑れい岩類の岩石学

所属学会

日本地質学会

専門分野

岩石・鉱物・鉱床学, 地質学

研究課題

- ・オフィオライトの地質学的研究
- ・マントルかんらん岩の岩石学的研究
- ・高速拡大海嶺下の火成作用

研究キーワード

岩石学, 地質学, オフィオライト

国際会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

“Chromitite” in Iherzolite-dominant Ophiolite: A Case Study in the Ust'-Belaya Ophiolite, Far East Russia [Asia Oceania Geosciences Society, 2014]

(2014 年 7 月 28 日～2014 年 8 月 1 日, Sapporo) ポスター (一般)

Petrological characteristics of Opx-bearing primitive gabbros from the East Pacific Rise and the Oman ophiolite. [Asia Oceania Geosciences Society, 2014]

(2014 年 7 月 28 日～2014 年 8 月 1 日, Sapporo) ポスター (一般)

国内会議 発表・講演 (2014 年 4 月～2015 年 3 月)

ロシア極東, ウスチベラヤ, オフィオライトの 2 つのタイプのウェブステライト; その起源と意義 [日本地球惑星科学連合 2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)

IODP Exp. 345 成果: 海洋底から初めて層状はんれい岩採取に成功. [日本地球惑星科学連合 2014 年大会]

(2014 年 4 月 28 日～2014 年 5 月 2 日, 横浜) 口頭 (一般)

東太平洋中央海嶺ヘスディープ海盆で見つかった Multitextured 層状斑れい岩の岩石学的特徴 [日本鉱物科学会 2014 年年会]

(熊本, 2014 年 9 月～2014 年 9 月) ポスター (一般)

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は, これまでに引き続きロシア極東ウスチベラヤ・オフィオライトに産する超マフィック岩類と統合国際深海掘削計画 (IODP) 345 次航海で東太平洋海膨ヘスディープから得られた斑れい岩類の岩石学的な研究を行い, 国内会議・国際会議で成果の報告を行った。ウスチベラヤ・オフィオライトのマントルかんらん岩の一部には, 一般的なオフィオライトのものと異なり, 大陸下マントルのかんらん岩に類似しているものが存在する。一方, それに伴って産する輝岩類の一種であるウェブステライトには Cr に富むものと Cr に著しく乏しいものが存在する。特に後者は大陸下マントル由来のかんらん岩に伴ってしばしば報告されており, ウスチベラヤ・オフィオライトのマントルの少なくとも一部が, 大陸下マントルに由来するという考えをさらに支持する結果が得られた。この結果は, 横浜で行われた日本地球惑星連合 2014 年大会で報告した (口頭発表)。また, 一般的にオフィオライトのモホ遷移帯 (下部地殻～上部マントル境界) には, ク

ロムスピネルという鉱物が濃集したクロミタイトという岩石がしばしば産する。ウスチベラヤ・オフィオライトのクロミタイトは、世界に例を見ない特異な化学組成 (Cr に非常に乏しい, $\text{Cr}/[\text{Cr}+\text{Al}] = 0.1$) を示すことを発見し、その結果を札幌で行われた国際学会 Asia Oceania Geosciences Society 2014 で報告した (ポスター発表)。今後の研究課題としては、これらの特異な岩石の成因を明らかにし、地質学的な意義を考察することである。IODP 345 次航海では、世界で初めて高速拡大海嶺で形成された下部地殻相当の斑れい岩類が採取された (Gillis et al., 2013 Nature)。本航海に参加し、得られた試料を用いて、高速拡大海嶺で下部地殻でのマグマプロセスに関する研究を航海に参加した他大学の研究者と共同で行っている。特に、非常に未分化な化学組成を示すトロクトライトの成因と初生斑れい岩中にみられる斜方輝石の成因について検討を行っている。これら成果の一部は、共同研究者によって国内の学会で報告された。

URA 業務では 2015 年 12 月に開催される東北アジア研究センター 20 周年記念シンポジウムに向けて、学内外での多岐にわたる調整・連絡などの準備を進めている。

専属教員以外の研究者の研究活動
(2014)

及川高 OIKAWA Takashi 教育研究支援者

研究論文

- 1) 及川高, 近代奄美における親族と墓の変容—民俗の変容からみた民衆史の試み—, 『沖縄文化研究』, 沖縄文化研究所, 40 号, pp.227-273, 査読有。
- 2) 及川高, 神女の回心はいかに語られたか—近代沖縄における村落祭祀の解体と力の転位—, 『オンラインジャーナル Contact Zone (<http://www.anth.jinkan.kyoto-u.ac.jp/contactzone.html>)』, 京都大学人間・環境学研究科, 6 号, pp.97-122, 査読有。

口頭発表

- 1) 及川高, この先への葛藤—2014 年陸前高田の「動く七夕」—, 日本民俗学会 (第 66 回学術大会), 2014 年 10 月 12 日, 口頭発表。
- 2) 高倉浩樹・及川高, 東日本大震災後の無形文化遺産調査と日本研究, 日露ワークショップ「日本文化を教えるⅡ：ロシアと日本の日本研究者の対話」, 東北大学ロシア交流支援室主催, 2014 年 11 月 30 日, 口頭発表。
- 3) 及川高, 原発事故後における昆虫を利用した食文化の実態に関する研究, 地球環境学レポジトリ事業予備研究報告会, 地球環境学研究所, 2015 年 2 月 9 日, 口頭発表。
- 4) 高倉浩樹・及川高, 無形民俗文化遺産に対する防災人類学・民俗学, 国連防災世界会議, 宮城県仙台市, 2015 年 3 月 14-18 日, ポスター発表。
- 5) 及川高, ユタの母親—現代沖縄における宗教的職能の継承と血縁, 奥州乃疾風, 東北大学, 2015 年 3 月 19 日, 口頭発表。

麻田 雅文 ASDA Masafumi 教育研究支援者

著書

- 1) 『満蒙 日露中の「最前線」』(単著) 2014, 320 ページ, 講談社

研究論文

- 1) スターリンの戦後極東戦略と鉄道、1944-1950 年—中国東北・北朝鮮・サハリンを事例に—, 2014, 『日本植民地研究』, 第 26 号, 2-17 (査読付き)

口頭発表

- 1) 斯大林的战后远东战略与铁路 (1944-1950 年):以中国东北、北朝鮮, 薩哈林为事例, 2014 年 11 月 2 日, 北京, 中国, 国际关系史工作坊 (第 2 期) 招待講演
- 2) 張作霖とソ連の『同盟』? —ソ連側史料からみた奉ソ協定 (1924 年) —, 2014 年 12 月 7 日, 立命館大学, 第 24 回近現代東北アジア地域史研究会大会, 招待講演
- 3) 中国長春鉄道の返還をめぐる中ソ関係、1949-1953 年, 2014 年 10 月 21 日, 防衛大学校, 2014 年度アジア政経学会東日本大会, 招待講演
- 4) ソ連側から見た奉ソ紛争、1929 年—ソ連邦初の対外戦争—, 2014 年 6 月 21 日, 麗澤大学, 第 19 回東アジア近代史学会研究大会

モンゴル・中央アジア研究分野

ハイ セチンゴアー (海 斯琴高娃) 教育研究支援者

研究論文

- 1) ハイ・セチンゴアー 「モンゴル人作家インジャンナシの生活環境に見る「近代」—19 世紀末の内モンゴル東部における社会情勢の変動を通して—」 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要 23 号, pp 21-38, 2014

口頭発表

- 2) ハイ・セチンゴアー 「「近代」因素, 家庭環境与尹湛納希的創作思路」(インジャンナシの作品に見る「近代」の要素及び彼の家庭環境と思考) 国際シンポジウム: 中国・喀喇沁文化论坛暨纪念札奇斯钦诞辰 100 周年学术研讨会 (中国・ハラチン文化フォーラム及びジャグジセチンの誕生 100 周年の記念における学術研究討論会)、内モンゴル自治区赤峰市喀喇沁 (ハラチン) 旗、2014 年 8 月 22 日~25 日

ツォグバダラフ ガンツェツェグ TSOGBADRAKH Gantsetseg 教育研究支援者

該当なし

佐藤 憲行 SATO Noriyuki 専門研究員

研究論文

- 1) SATO Noriyuki, Khureenii khotjilt ba damnuuchingiin uusel, uil yavc, pp.65-69. B. Punsaldulam (ed.), International conference dedicated to 375th anniversary of the capital city Ulaanbaatar “The capital city of Mongolia… From Nomads to Sedentary”, Organizer: Governor’s office of the Capital City; Municipal Archives Authority ; Institute of History, the Mongolian Academy of Sciences (MAS), Ulaanbaatar, 2014 (モンゴル語)

学術発表

- 1) SATO Noriyuki, Khureenii khotjilt ba damnuuchingiin uusel, uil yavc: International conference dedicated to 375th anniversary of the capital city Ulaanbaatar “The capital city of Mongolia… From Nomads to Sedentary”, Ulaanbaatar, Organizer : Governor’s office of the Capital City; Municipal Archives Authority ; Institute of History, the Mongolian Academy of Sciences (MAS) (モンゴル語)

中国研究分野

稲澤 努 INAZAWA Tsutomu 教育研究支援者

研究論文

- 1) 稲澤努, 「東方地中海における水上居民—広東東部の水上居民モンゴル族祖先伝承を中心に」, 野村伸一編, 『東アジア海域文化の生成と展開——〈東方地中海〉としての理解』 669 – 697 頁, 査読無。

学会発表

- 1) 稲澤努, 「後改革開放」時期的小城市寺廟：以広東省汕尾為例, 「宗教与文化」国際学術交流研討会, 南京大学(中国), 2014年4月26日, 口頭発表。
- 2) 稲澤努, 現代中国の「漁民」と宗族—広東省東部汕尾の事例から, 日本文化人類学会第48回研究大会, 幕張メッセ国際会議場(千葉市), 2014年5月17日, 口頭発表。
- 3) 稲澤努, 現代華南の族群範疇與姓氏—以廣東省梅州市麥姓為例, 第3届国際台湾客家研究国際研討会, 国立交通大学客家研究院(台湾), 2014年11月8日, 口頭発表。

- 4) 稲澤努, 中国地方小都市における祭祀空間とその変遷—広島県広島を事例として, 空間史学研究会, 東北大学文学研究科, 2015 年 1 月 15 日, 口頭発表

岡本 哲明 OKAMOTO Tetsuaki 教育研究支援者

口頭発表

- 1) 岡本哲明, 越境大気汚染の条約形成に必要な科学的知見の類型, STS Network Japan 夏の学校, 2014 年 9 月 5 日, 愛知, 名古屋大学東山キャンパス, 口頭発表
- 2) 岡本哲明, 越境大気汚染の大気環境管理枠組み形成に資する科学アセスメントの必要条件, 環境経済・政策学会 2014 年大会, 2014 年 9 月 13 日, 東京, 法政大学多摩キャンパス, 口頭発表
- 3) 岡本哲明, 越境大気汚染問題の必要条件と問題対処のための国際枠組み形成の関係, 科学社会学会 第 3 回年次大会, 2014 年 9 月 27 日, 東京, 東京大学本郷キャンパス, 口頭発表
- 4) 岡本哲明, 東北アジアにおける大気環境管理枠組み形成の停滞要因 —越境大気汚染の科学評価の観点から—, 日本国際政治学会 2014 年度年次大会, 2014 年 11 月 15 日, 福岡, 福岡国際会議場, 口頭発表

盧 向春 LU Xiangchun 教育研究支援者・産学官連携研究員

研究論文

- 1) 『「潜在能力アプローチ」による地域交通システムの評価』(共著) 盧向春 『尚絅学院大学 紀要』, 第 67 号, pp.55-71, 2014 年 7 月 査読有

李善姫 LEE Sunhee 専門研究員

研究論文

- 1) 李善姫 「仲介型国際結婚と変容する家族関係【私的領域の見えない移民の実態】」、中川正春、宮島喬、石原進、鈴木江理子、藤巻秀樹、別冊環②『なぜ今、移民問題か』、藤原書店、311～315、2014、無
- 2) 李善姫 「東日本大震災と東北の移住女性たち——共生への希望と課題——」、仙台白百合女子大学『カトリック研究所論集』9 巻、2015、95～122、無

- 3) 李善姫 「3.11 から 4 年、移住女性の現状と問われる日本のジェンダー平等」、『We Learn』 739 巻、2015、6 ～ 9、無
- 4) 佐竹眞明・金愛慶・近藤敦・賽漢卓娜・李善姫・津田友里香・馬兪貞（共著）「多文化家族への支援に向けて一概要と調査報告」『名古屋学院大学論集（社会科学編）』 51 - 4、49 ～ 84、無

口頭発表

- 1) 李善姫、「移住女性の震災経験から問う日本の課題—なぜジェンダー平等と多様性は減災につながるのか」、日本学術会議公開シンポジウム『減災の科学を豊かに—多様性・ジェンダーの視点から—』、日本学術会議講堂（東京都）、2014 年 7 月 20 日、招待報告
- 2) Sunhee Lee and Saihanjuna（共同）“Mobility of Chinese and Korean Marriage Migrants in Japan Rural Areas”、第 18 回 ISA World Congress of Sociology、横浜国際平和会議場（神奈川県）、2014 年 7 月 17、研究発表
- 3) Sunhee Lee “Reconsidering Communities and the Mobility of Marriage Migrant Women in Rural Areas of Japan”、IUAES 2014 with JASCA、幕張メッセ（千葉県）、2014 年 5 月 16 日、研究発表

佐々木 聡 SASAKI Satoshi 専門研究員

研究論文

- 1) 佐々木聡，《礼緯含文嘉・精魅篇》的辟邪思想与鬼神観，『復旦学報（社会科学版）』，2014 年第 5 期，2014 年 9 月 25 日，pp.10-18，査読有
- 2) 佐々木聡，伝世術数文献と敦煌占書—天文五行占書をめぐる二つの系譜—，『敦煌学国際学術研究会予稿集』，2015 年 1 月，pp.321-335，査読無

学会発表

- 1) 佐々木聡，中国の怪異と社会通念，研究フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」，国立民族学博物館，2014 年 10 月 12 日，口頭発表
- 2) 佐々木聡，伝世術数文献と敦煌占書—天文五行占書をめぐる二つの系譜—，敦煌学国際学術研究会・京都 2015，京都大学，2015 年 1 月 29 日，口頭発表
- 3) 佐々木聡，災異と怪異をめぐるアプローチの再検討，東アジア怪異学会第 97 回定例研究会，園田学園女子大学，2015 年 3 月 7 日，口頭発表

研究論文

- 1) 『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから—』 220p、2014年8月1日、東北大学出版会、仙台

地域生態系研究分野

木村 一輝 KIMURA Kazuki 研究支援者・産学官連携研究員

研究論文（査読有り）

- 1) Kimura, K., & Chiba, S. (2015) The direct cost of traumatic secretion transfer in hermaphroditic land snails - individuals stabbed with a love dart decrease lifetime fecundity. *Proceedings of the Royal Society of London B* 282: 20143063.
- 2) Kimura, K., Hirano, T. & Chiba, S. (in press) Assortative mating with respect to size in the simultaneously hermaphroditic land snail *Bradybaena pellucida*. *Acta Ethologica*
- 3) Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S. (2015) Divergence in the shell morphology of the land snail genus *Aegista* (Pulmonata: Bradybaenidae) under phylogenetic constraints. *Biological Journal of the Linnean Society* 114: 229-241.
- 4) Kimura, K., Chiba, S. & Koene, J.M. (2014) Common effect of the mucus transferred during mating in two dart-shooting snail species from different families. *The Journal of Experimental Biology* 217: 1150-1153.

研究論文（査読無し）

- 1) Kimura, K. (2015) Interference effect of the alien land snail *Macrochlamys* sp. on the native land snail *Bekkochlamys perfragilis*. *Research Bulletin of Environmental Education Center, Miyagi University of Education* 17: 59-61.

学会発表

- 1) 木村一貴、千葉聡「カタツムリの外傷的交尾：恋矢で刺されるコストと体サイズ」日本生態学会 2015 年大会、鹿児島、2015 年 3 月 21 日、ポスター

飯塚 泰 IITSUKA Yasushi 産学官連携研究員

研究論文

- 1) 飯塚泰, コヤマクリスチャン, 高橋一徳, 佐藤源之, スパースアレーを用いた近距離 SAR のイメージングの基礎検討, 電気学会研究会資料, EMT-14-142, 101-106, 査読無

コヤマ クリスチャン ナオヒデ 産学官連携研究員

研究論文

- 1) M. Sato, H. Liu, K. Takahashi, and C. Koyama, Investigation on near range SAR for inspecting of inner structure of buildings, Proc. of IGARSS 2014, Jul. 13-18, Quebec, Canada, pp. 2601-2604, 2014. (査読有)
- 2) C. N. Koyama, K. Takahashi, Y. Iitsuka, and M. Sato, "Polarimetric UWB SAR for subsurface imaging of building structures," Proc. of APMC 2014, Nov. 4-7, Sendai, Japan, pp. 1025-1027, 2014. (査読有)
- 3) H. Liu, C. N. Koyama, K. Takahashi, and M. Sato, "High-resolution imaging of damaged wooden structures for building inspection by polarimetric radar," Proc. of GPR 2014, Jun. 24-29, Brussels, Belgium, pp. 438-443, 2014. (査読有)
- 4) M. Sato, H. Liu, C. Koyama, and K. Takahashi, "Fundamental study on NDT of building wall structure by radar," Proc. of 7th European Workshop on Structural Health Monitoring, July 8-11, Nantes, France, pp. 1817-1823, 2014. (査読有)
- 5) W. Korres, T. Reichenau, P. Fiener, C. N. Koyama, H. Bogen, T. Cornelissen, R. Baatz, M. Herbst, B. Diekkruuger, H. Vereecken, and K. Schneider, "Spatio-temporal soil moisture patterns – A meta-analysis using plot to catchment scale data," Journal of Hydrology, Vol 520, pp. 326-341, 2014. (査読有)

学会発表

- 1) C. N. Koyama, M. Sato, S. Kuroda, K. Takahashi, and H. Fujimaki, Soil Moisture Measurements by Ground Penetrating Radar in Dry Areas," 平成 26 年度乾燥地研究センター共同研究発表会, Dec. 7th, Tottori, Japan, 2014, 口頭発表
- 2) C. N. Koyama, K. Takahashi, Y. Iitsuka, and M. Sato, Polarimetric UWB SAR

- for subsurface imaging of building structures, Asian Pacific Microwave Conference 2014, Nov. 7th, Sendai, Japan, 2014, 口頭発表
- 3) C. N. Koyama, H. Liu, K. Takahashi, and M. Sato, “近距離ポーラリメトリック UWB-SAR による木造建造物の非破壊検査,” IEICE Electromagnetic Theory Technical Meeting, May 24th, Tokyo, Japan, 2014, 口頭発表
 - 4) C. N. Koyama, H. Liu, and M. Sato, “Pi-SAR2 square-flight imaging of tsunami affected areas in Japan – surface parameter estimation by multi-aspect super high-resolution PolSAR data,” EUSAR 2014, June 3rd, Berlin, Germany, 2014, 口頭発表
 - 5) C. N. Koyama and M. Sato, “Estimation of soil moisture and debris pile volume from Pi-SAR2(X) and Pi-SAR-L2 square-flight data,” Int. Geoscience and Remote Sensing Symposium 2014, Jul. 15th, Quebec, Canada, 2014, 口頭発表

東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL / 022-795-6009 FAX / 022-795-6010

センター長・岡 洋樹

編集担当・評価データ委員会

平野直人(委員長)、佐藤源之、
鹿野秀一、上野稔弘

2015 年 8 月 31 日発行

無断転載を禁ずる

